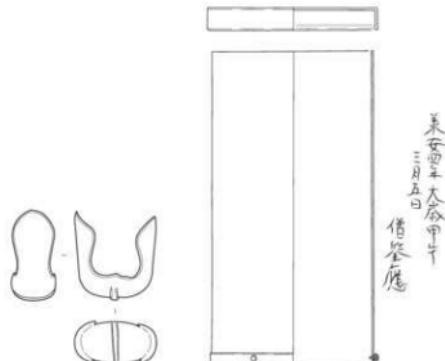


静岡県 富士市

# 富士市内遺跡発掘調査報告書

—平成29年度—



2019年3月

富士市教育委員会



# 例　言

- 1 本書は、富士市教育委員会が平成29年度に富士市内において実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。ただし、一部には平成29年度以前に調査された調査成果の報告も含んでいる。
- 2 調査は、富士市教育委員会教育長を主体者として実施し、実務は市民部文化振興課職員がこれにあたった。調査の一部は『国宝重要文化財等保存整備費補助金』及び『静岡県文化財保存費補助金』を得て実施した。調査体制、担当者は第1章第1節に譲る。
- 3 本書の執筆は、第1章第1節・第3章・第4章第2節5・第3節は佐藤祐樹（市民部文化振興課 主査）、第1章第2節～4節・第2章・第4章第1節・第2節1～4は若林美希（市民部文化振興課 発掘調査員）が担当し、編集は佐藤による。第5章は菱田哲郎（京都府立大学 教授）によるシンポジウム記念講演、池谷初恵（伊豆の国市 文化財調査員）、藤村翔（富士山かぐや姫ミュージアム）、佐藤の執筆による資料報告を収録した。
- 4 本書の作成にあたり、多くの皆様からの御指導、御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

池谷初恵 大谷宏治 河合 修 菊池吉修 小崎 晋 鈴木一有 田村隆太郎 菱田哲郎  
堀内秀樹 前嶋秀張 (五十音順、敬称略)
- 5 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会（富士市埋蔵文化財調査室）で保管している。今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定でいる。

## 凡　例

- 1 本書で示す座標は、平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系（平成14年4月施行）を使用している。  
調査では、国土地理院による都市再生街区基本調査成果を用いた。
- 2 挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。
- 3 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。  

縄文土器・弥生土器・土師器	[ ]	須恵器	[ ]	灰釉陶器・陶器	[ ]
---------------	-----	-----	-----	---------	-----
- 4 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 5 遺構・遺物とともに、法量の（ ）は残存値、〔 〕は推定値である。また、土器の残存率は図示中の残存率を示した。

# 目 次

例 言

凡 例

目 次

第1章 平成29年度の調査	
第1節 調査体制と調査概要	1
第2節 平成29年度の発掘調査報告	5
第3節 工事立会の報告	40
第4節 埋蔵文化財包蔵地の内容変更	45
写真図版	47
第2章 東平遺跡第87地区の調査	63
第3章 中吉原宿遺跡第11地区の調査	
第1節 中吉原宿遺跡の概要	67
第2節 調査経緯と経過	69
第3節 調査成果	71
第4章 一色D-第35号墳の調査	
第1節 調査の概要	87
第2節 調査の成果	95
第3節 総括	102
第5章 資料報告	
第1節 6・7世紀の手工業生産と地域の編成	
—地域開発と豪族の交通— (菱田 哲郎)	109
第2節 国指定史跡浅間古墳の再検討 (佐藤 祐樹)	127
第3節 医王寺経塚出土資料とその意義	
—12世紀後半における富士山信仰の一様相— (藤村 翔)	133
第4節 富士市内出土の中世陶磁器の様相 (池谷 初恵)	144
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1章 平成29年度の調査	
第1節 調査体制と調査概要	
第1回 重機駆引の様子	4
第2回 発掘調査の様子	4
第3回 平成29年度調査地の位置と地形区分	4
第2節 平成29年度の発掘調査報告	
第4回 東平道跡第86地区 位置図	5
第5回 東平道跡第86地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第6回 東平道跡第19地区 位置図	6
第7回 東平道跡第19地区	6
トレンチ配置図	
第8回 東平道跡第19地区	6
セクション図	
第9回 東平道跡第19地区	7
トレンチ配置図・セクション図	
第10回 東平道跡 第19地区2次調査 出土遺物	7
第11回 北奈4古墳群第1地区 位置図	8
第12回 北奈4古墳群第1地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第13回 四川道跡第3地区 位置図	8
第14回 四川道跡第3地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第15回 東平道跡第88地区 位置図	9
第16回 東平道跡第88地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第17回 天間沢道跡第46地区 位置図	10
第18回 天間沢道跡第46地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第19回 中古原宿跡第12地区 位置図	10
第20回 中古原宿跡第12地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第21回 沖田道跡第157地区調査点 位置図	11
第22回 沖田道跡第157次調査地点	
トレンチ配置図・セクション図	
第23回 天間沢道跡第47地区 位置図	11
第24回 天間沢道跡第47地区	12
トレンチ配置図	
第25回 天間沢道跡第47地区	12
トレンチ配置図・セクション図	
第26回 富士塚道跡第1地区 位置図	13
第27回 富士塚道跡第1地区	13
出土遺物実測図	
第28回 富塚道跡第1地区	
トレンチ配置図・エレベーション図	
第29回 富士塚道跡第1地区	14
トレンチ平面図・セクション図	
第30回 富塚道跡第1地区	15
縦横辺幅分布状況図	
第31回 東平道跡第89地区 位置図	16
第32回 東平道跡第89地区	17
トレンチ配置図・セクション図	
第33回 天間沢道跡第48地区 位置図	17
第34回 天間沢道跡第48地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第35回 天間沢道跡第49地区 位置図	18
第36回 天間沢道跡第49地区	
トレンチ配置図・平面図・セクション図	
第37回 東平道跡第90地区 位置図	19
第38回 東平道跡第90地区	20
トレンチ配置図	
第39回 東平道跡第90地区	20
トレンチ平面図・セクション図	
第40回 吉添道跡第2地区 位置図	20
第41回 吉添道跡第2地区	21
トレンチ配置図・セクション図	
第42回 富士岡1古墳群第17地区 位置図	21
第43回 富士岡1古墳群第17地区	
トレンチ配置図・セクション図	
トレンチ平面図・セクション図	22
宇東川道跡X地区 位置図	22
宇東川道跡X地区	22
トレンチ配置図	
宇東川道跡X地区	23
セクション図	
東平道跡第91地区 位置図	23
東平道跡第91地区	23
トレンチ配置図	
出土遺物実測図	23
東平道跡第91地区	24
トレンチ平面図・セクション図	
宇東川道跡Y地区 位置図	24
出土遺物実測図	24
宇東川道跡Y地区	24
トレンチ配置図	
トレンチ平面図・セクション図	25
得母寺宿跡第4地区 位置図	25
得母寺宿跡第4地区	
トレンチ配置図	
トレンチ平面図・セクション図	26
瀧川1古墳群第2地区 位置図	26
瀧川1古墳群第2地区	
出土遺物実測図	26
瀧川1古墳群第2地区	
トレンチ配置図	
一色9古墳群第1地区 位置図	27
一色9古墳群第1地区	
トレンチ配置図	
セクション図	28
東平道跡第92地区 位置図	29
東平道跡第92地区	
トレンチ配置図・セクション図	
東平道跡第93地区 位置図	29
東平道跡第93地区	
トレンチ配置図	
東平道跡第93地区	30
トレンチ平面図・セクション図	
土手内・中原2古墳群第15地区 位置図	30
土手内・中原2古墳群第15地区	
トレンチ配置図	
土手内・中原2古墳群第15地区	30
セクション図	
土手内・中原2古墳群第15地区	31
トレンチ配置図	
向山道跡第3地区 位置図	31
向山道跡第3地区	
トレンチ配置図	
セクション図	31
向山道跡第4地区 位置図	32
向山道跡第4地区	
トレンチ配置図	
向山道跡第4地区	32
セクション図	
向山道跡第4地区	32
トレンチ配置図	
向山道跡第2地区 位置図	33
向山道跡第2地区	
トレンチ配置図	
井倉道跡第2地区	33
井倉道跡第2地区	
トレンチ配置図	
久保道跡第6地区 位置図	34
久保道跡第6地区	
トレンチ配置図	
國久保道跡第6地区	34
セクション図	
國久保道跡第6地区	34
トレンチ配置図	
國久保道跡第6地区	34
セクション図	
國久保道跡第6地区	34
トレンチ配置図	
國久保道跡第5地区 位置図	34
國久保道跡第5地区	
トレンチ配置図	
國久保道跡第5地区	34
セクション図	
國久保道跡第20地区 位置図	35
國久保道跡第20地区	
トレンチ配置図	
國久保道跡第20地区	35
セクション図	
國久保道跡第20地区	35
トレンチ配置図	
國久保道跡第43地区 位置図	36
國久保道跡第43地区	
トレンチ配置図	
國久保道跡第43地区	36
セクション図	
國久保道跡第43地区	36
トレンチ配置図	
國久保道跡第43地区	37
セクション図	
國久保道跡第43地区	37
トレンチ配置図	
東平道跡第94地区 位置図	37
東平道跡第94地区	
トレンチ配置図	
東平道跡第94地区	37
セクション図	
東平道跡第94地区	37
トレンチ平面図	
東平道跡第94地区	38
セクション図	
東平道跡第94地区	38
出土遺物実測図	
東平道跡第94地区	38
トレンチ配置図	
瀧川4古墳群第2地区 位置図	39

第92図 関川4古墳群第2地区			
トレンチ配図・セクション図	39	第136図 確認調査トレンチ 平面図・検出遺構図	89
第3節 工事立会の報告		第137図 周辺の古墳分布図 1	90
第93図 天間沢跡第48地区工事立会 対象範囲配図	40	第138図 周辺の古墳分布図 2	91
第94図 天間沢跡第48地区工事立会 平面図・セクション図	41	第2節 調査の成果	
第95図 天間沢跡第48地区工事立会 出土遺物実測図1	41	第139図 本調査区 全体図・セクション図	96
第96図 天間沢跡第48地区工事立会 出土遺物実測図2	42	第140図 石室 展開図(第1次床面)	97
第97図 天間沢跡第48地区工事立会 出土遺物実測図3	43	第141図 石室 平面図・断面図(第2次床面)	98
第98図 天間沢跡第49地区工事立会 出土遺物実測図	44	第142図 石棺 平面図・断面図・推定復元図・展開図	99
第4節 墓葬文化財包蔵地の内容変更		第143図 石室墓底石・基底石群大刀・墓坑 平面図・断面図	99
第99図 宇東川遺跡の範囲変更	45	第144図 石室 遺物出土状況図	100
第100図 中析・中ノ坪遺跡の範囲変更	46	第145図 出土遺物実測図	101
第2章 東平遺跡第87地区の調査		第3節 純鋏	
第101図 東平遺跡第87地区の位置図	63	第146図 駒河国出土鉄金具実測図集成 1	103
第102図 確認調査トレンチおよび本調査区配図	63	第147図 駒河国出土鉄金具実測図集成 2	104
第103図 確認調査セクション平面図・セクション図	65	第148図 富士市内出土方頭大刀の類例	106
第104図 本調査区全体図	65	第149図 富士市内出土唐装刀子の類例	106
第105図 土坑・ピット 平面図・セクション図	66	第5章 資料報告	
第3章 中古原宿遺跡第11地区的調査		第1節 6・7世紀の手工業生産と地域の編成(菱田)	
第1節 中古原宿遺跡の概要		第150図 5・6世紀の手工業拠点と王墓	109
第106図 中古原宿遺跡 調査履歴図	67	第151図 大県遺跡とその沿長	110
第107図 古原宿の変遷図	68	第152図 鉄津と織ぐらみた鍛冶工房	110
第108図 中古原宿遺跡第5地区 出土遺物	68	第153図 五条鶴居古墳出土鞘治具	111
第2節 調査経緯と経過		第154図 輪の復元図	111
第109図 確認調査トレンチおよび本調査区配図	70	第155図 陶邑豪族群の成立	111
第110図 確認調査セクション図	70	第156図 5世紀後半から6世紀前半の須恵器地方窯	112
第3節 調査成果		第157図 曽我遺跡の玉材料の原产地	113
第111図 確認調査2トレンチ 遺物出土状況図	71	第158図 牡塙遺跡の発見	113
第112図 確認調査トレンチ 遺物出土状況図	72	第159図 鐵塙の変化	113
第113図 本調査区全体図	73	第160図 斎原北邊跡の馬廻跡	114
第114図 1工区 SX2007	74	第161図 久宝之遺跡の海岸施設および「シガラミ」	114
第115図 2工区 SX2009	74	第162図 手工業生産地と王宮機能地	115
第116図 3工区 SX2010・SX2011	75	第163図 陶邑豪族群の分布と社寺	116
第117図 3工区 遺物出土状況図	75	第164図 湖西豪族群と大神神社	117
第118図 4工区 SX2008・Pg2002・Pg2003	76	第165図 三島地域の古墳分布	118
第119図 5工区	76	第166図 安威川と用水路	119
第120図 6工区	76	第167図 南塙古墳群実測図(1:120)	119
第121図 7工区 SX2005	77	第168図 耳環古墳石室実測図(1:400)	119
第122図 7工区 遺物出土状況	77	第169図 三島地域の古墳編年	119
第123図 8工区 SX2003・SX2004・SX2006	77	第170図 妙見山麓の古墳群と寺所墓跡	120
第124図 8工区 遺物出土状況	78	第171図 妙見山麓の集落の消長	121
第125図 9工区 SX2001	79	第172図 東山古墳群遺跡	121
第126図 10工区 SK2002	79	第173図 安坂・城ヶ原遺跡出土の草と復原図	121
第127図 10工区 遺物出土状況	80	第174図 平城京左京二条坊五坪二条大路	121
第128図 出土遺物実測図 1	81	墳状遺構(北)出土木簡	122
第129図 出土遺物実測図 2	82	第175図 量衡寺寺額圖	122
第130図 出土遺物実測図 3	83	第176図 多賀寺の化度	122
第131図 出土遺物実測図 4	84	第177図 東海地方の主要な須恵器生産地	123
第132図 本調査区以外遺物接合図	85	第178図 墓王椿柄山古墳鉄劍	125
第133図 中古原宿遺跡復元図	86	第179図 富士郡の古代地図	126
第4章 一色・第35分塊の調査		第2節 国別定史継続古墳の再検討(佐藤)	
第1節 調査の概要		第180図 東駒川・伊豆における前期古墳	127
第134図 調査地区位置図	87	第181図 浅間古墳・量測図・エレベーション図	128
第135図 確認調査トレンチおよび本調査区配図	88	第182図 浅間古墳 エレベーション図	129
		第183図 浅間古墳 墓丘復元図	130
		第184図 浅間古墳の築造全図	131

## 挿表目次

第3節 医王寺跡出土資料とその意義（藤村）	
第185図 医王寺跡 位置図	
第186図 医王寺跡遺構（本堂上段の丘陵上、南から）	
第187図 医王寺跡出土 継縫・土器	
第188図 医王寺跡出土 和鏡 1	
第189図 医王寺跡出土 和鏡 2	
第190図 猿塚から富士山を望む（南から）	
第191図 猿塚から医王寺・田浮島ヶ原、伊豆平島を望む（北から）	
第192図 富士山周辺地域における信仰関連遺跡の分布（12～13世紀）	
第4節 富士市内出土の中世陶磁器の種類（池谷）	
第193図 今井五輪塔群・鎌研 4号墳・破魔射闘道跡 出土陶磁器実測図	
第194図 三新田遺跡 出土陶磁器実測図	
第195図 東平遺跡 3地区 出土陶磁器実測図	
第196図 東平遺跡 28地区 出土陶磁器実測図	
第197図 三日市廃寺跡（東平遺跡 16地区） 出土陶磁器実測図	
第198図 口田遺跡 出土陶磁器実測図	
第199図 中原遺跡 出土陶磁器実測図	
第200図 深間林遺跡 出土陶磁器実測図	
第201図 袋田 出土陶磁器実測図	
第202図 武上遺跡 出土陶磁器実測図	
第203図 北松野船塗遺跡 出土陶磁器実測図	
第204図 遺跡位置図	
133 第1章 平成29年度の調査	
133 第1節 調査体制と調査概要	
133 第1表 平成29年度発掘調査一覧表	3
135 第2節 平成29年度の発掘調査報告	
137 第2表 東平遺跡 第19地区2次調査 出土遺物観察表	7
138 第3表 富士宮遺跡第1地区 出土遺物観察表	13
139 第4表 東平遺跡第11地区 出土遺物観察表	23
139 第5表 宇多川遺跡Y地区 出土遺物観察表	24
139 第6表 滝川1古墳群第2地区 出土遺物観察表	26
139 第7表 東平遺跡第94地区 出土遺物観察表	38
141 第3節 工事立会の報告	
146 第8表 天間沢遺跡第48地区工事立会 出土遺物観察表	43
147 第9表 天間沢遺跡第49地区工事立会 出土遺物観察表	44
145 第2章 東平遺跡第87地区の調査	
146 第10表 土坑・ピット・遺構概要一覧表	66
147 第3章 中古原宿遺跡第11地区的調査	
148 第1節 中古原宿遺跡の概要	
148 第11表 中古原宿遺跡・調査履歴一覧表	67
149 第12表 出土遺物組成表	85
149 第4章 一色D-35号墳の調査	
149 第1節 調査の概要	
150 第13表 伝法古墳群一覧表	92
151 第3節 組括	
151 第14表 駿河国出土鉢全員一覧表	105
151 第5章 資料報告	
155 第1節 6-7世紀の手工業生産と地域の編成（菱田）	
155 第15表 陶色窯跡群の地区別基數	116
155 第16表 「天平十二年名品都輸相帳」にみえる新居郷の住民	117
155 第17表 駿豆の領憲器窯跡の消長	123
155 第18表 豊後の武具武器の登録	125
155 第4節 富士市内出土の中世陶磁器の種類（池谷）	
155 第19表 貿易関係出土状況	152
155 第20表 濱戸美濃出土状況（志戸呂・初山含む）	152
155 第21表 東海系陶器出土状況（常滑・瀬戸他）	153
155 第22表 陶磁器出土傾向	153
155 第23表 時期区分と陶磁器分類	153
155 第24表 中世陶磁器・土器集計表	159
155 第25表 貿易関係集計表	160
155 第26表 濱戸美濃系集計表	161
155 第27表 志戸呂・初山集計表	162
155 第28表 常滑集計表	163
155 第29表 瀬戸集計表	164
155 第30表 山茶碗集計表	164
155 第31表 富士市遺物一覧表	165

## 史料目次

第5章 資料報告	
第1節 6-7世紀の手工業生産と地域の編成（菱田）	
史料1 『日本書紀』大化二年三月壬午条	115
史料2 竹村屯食に関する文献史料	119

## 写真図版目次

### PL.1 東平遺跡 第87地区

1. 本調査区全体（北から）
2. SK205 セクション（南から）
3. Pls207・SK208・Pls209・Pls210（北西から）
4. 確認調査 1T（南から）
5. 確認調査 2T（北西から）

### PL.2 中古原宿遺跡 第11地区

1. 調査前全景（南から）

2. 3Tr 西壁（東から）

3. 2Tr 道物出土状況（南東から）

4. 4Tr 道物出土状況（北東から）

5. 2Tr 道物出土状況（北西から）

6. 4Tr 道物出土状況（東から）

### PL.3 中古原宿遺跡 第11地区

1. 3工区 SX2011 木材検出状況（北西から）
2. 3工区 SX2011 木材検出状況（北西から）
3. 3工区 SX2011 漆桶（73）検出（東から）
4. 3工区 SX2011 下面検出（西から）
5. 3工区 南壁 SX2010・SX2011 セクション（北東から）
6. 4工区 SX2008・Pls2002 検出（北西から）

### PL.4 中古原宿遺跡 第11地区

1. 7工区 Ⅲ層検出（南東から）
2. 10工区 SX2002 検出（東から）
3. 8工区 道物出土状況（南東から）
4. 7工区 SX2006 検出（北東から）
5. 8工区 SX2003・SX2004・SX2005（東から）
6. 8工区 木材検出（南から）
7. 8工区 SX2006 道物検出（南東から）

### PL.5 中古原宿遺跡 第11地区

1. 10工区 SX2002 木材検出（南西から）
2. SX2002 漆桶（71）。曲物（76）検出（南東から）
3. 10工区 SX2002（南西から）
4. SX2002 漆桶（71）検出（南西から）
5. 10工区 SX2002 完漆（南東から）
6. 10工区 北壁 SX2002 セクション（南東から）
7. 調査区全景（北西から）

### PL.6～9 中古原宿遺跡 第11地区

- 出土遺物

### PL.10 一色D-第35号墳

- 出土遺物集合

### PL.11 一色D-第35号墳

1. 調査前の様子。奥の茶缶で石室を検出（南から）
2. 石室検出（南から）
3. 石室全景（南から）

### PL.12 一色D-第35号墳

1. 組合式箱形石棺（東から）
2. 石棺南側部分（北東から）
3. 鉢尻金具（2）出土状況（南から）
4. 刀子（10）出土状況（西から）
5. 銀鏡（5）出土状況（西から）
6. 鈔尾（1）出土状況（南から）
7. 銀鏡（4）出土状況（西から）
8. 銀鏡（3）出土状況（東から）

### PL.13 一色D-第35号墳

1. 床面構築面（南から）
2. 調査の様子（南から）
3. 基底石（南から）
4. 墓坑・掘り方（南から）

### PL.14 一色D-第35号墳

- 出土遺物

### PL.15 浅間古墳

1. 墳丘全景（南から）
2. 墳丘全景（北東から）

### PL.16 浅間古墳

1. 後方部墳頂部（南から）
2. 後方部墳頂部（南西から）
3. 後方部西側斜面（南から）
4. 後方部南側斜面（西から）
5. 後方部後端傾斜（南から）
6. 後方部後端傾斜（北から）
7. 後方部北側斜面（東から）
8. 後方部北側斜面（東から）

### PL.17 浅間古墳

1. 前方部南側墳丘（南西から）
2. 前方部墳頂部（西から）
3. 前方部から見た後方部（東から）
4. 北側くびれ部（東から）
5. 南側くびれ部（南西から）
6. 南側くびれ部（北から）
7. 南側くびれ部（東から）
8. 前方部前端（北から）

### PL.18～19 医王寺経塚

- 出土遺物

### PL.20 富士市内遺跡出土の中世陶磁器

- 東平遺跡3地区 出土遺物

- 三日市廬寺跡（東平遺跡16地区）出土遺物

- 三新田遺跡 出土遺物

- 中原遺跡 出土遺物

- 萩館遺跡 出土遺物

- 出口遺跡 出土遺物

- 沢上遺跡 出土遺物

- 北松野屋敷 出土遺物

### PL.21 富士市内遺跡出土の中世陶磁器

- 東平遺跡28地区 出土遺物

### PL.22 富士市内遺跡出土の中世陶磁器

- 浅間林遺跡 出土遺物



# 第1章 平成29年度の調査

## 第1節 調査体制と調査概要

### 1 調査体制

平成29年度の埋蔵文化財発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体 富士市教育委員会 教育長 山田 幸男  
調査担当 市民部 部長 高野 浩一

文化振興課 課長 久保田伸彦

文化財担当 統括主幹 植松 良夫

主幹 石川 武男

埋蔵文化財調査室 主査 佐藤 祐樹

主事補 伊藤 愛

臨時職員 服部 孝信

小島 利史

若林 美希

### 2 調査件数

文化財保護法（以下、法という。）第99条に基づき、平成29年度は、確認調査38件、本発掘調査4件を実施した。また、県指定史跡琴平古墳の測量調査を実施した。確認調査費用の一部には『国宝重要文化財等保存整備費補助金』及び『静岡県文化財保存費補助金』を使用している。確認調査の事業目的は宅地造成が10件と最も多く不動産売買による事前把握を目的とした調査が次いで多い。本発掘調査は、個人住宅、工場、その他建物、宅地造成目的がそれぞれ1件ずつである。

### 3 届出・通知の周知徹底と件数

法93条に基づく届出は199件と前年の226件からは若干減少している。内訳は電気（電柱）、ガス工事に伴うものが最も多く96件を数える。一方、公共工事については、前年度の2月に、次年度の公共事業の全リストを提出するように府内各課に求め、そのリストを基に法第94条の通知の必要な事業、事前の確認調査の実施が必要な事業などを回答している。平成29年度は24件の通知があった。

### 4 発掘調査の概要

**縄文時代** 平成29年度は縄文時代の調査が多く行われた。天間沢遺跡は、昭和初期からその存在が広く学界に知られていた遺跡だが、昭和46年の市立天間幼稚園建設や市営住宅天間団地建設に伴う調査により縄文時代中期の遺構の広がりが認識され、静岡東部地域を代表する縄文時代の遺跡として有名になった。平成29年度の調査では市営住宅天間団地に隣接する箇所において確認調査（48地区）を実施し、縄文時代中期の遺物を検出し擁壁設置に伴う工事立会いでも数多くの遺物が出土した。また、48地区的北側でも確認調査を実施し（49地区）、同じく中期の土器とともに遺構も検出された。両地区とも工事計画により保護層が確保されたため、本発掘調査は実施していない。以上のように天間沢の西側ではこれまで多くの調査が行なわれていたが、沢の東側ではあまり遺構が密集しないと考えられており、昭和62年に調査された23地区では400平米の調査範囲に埋甕1、土坑1、配石遺構1が検出されたのみで、また、平成27年度に調査した40地区でも646平米の調査範囲で竪穴建物は1軒しか検出されていない。しかし、平成29年度の調査では沢の東側に当たる23地区と40地区的間に位置する45地区において遺構・遺物が密集して存在することが明らかとなった。わずか271平米の調査範囲にもかかわらず竪穴建物4軒、埋甕1を含めて遺構が多数検出された。これらの正式報告は別冊で報告された（富士市教育委員会2019）。

**弥生・古墳時代** 平成28年度に一度確認調査を実施した沖田遺跡第155次調査地点において追加の確認調査を実施し、弥生時代後期の遺物包含層の存在を改めて確認した。155次調査地点では平成29・30年度の2回に分けて本発掘調査を実施したが、その成果は平成31年度に合わせて報告する予定である。古墳時代の集落調査は行なわれなかつたが、

静岡県指定史跡琴平古墳の範囲確認を目的とした測量調査を実施した。琴平古墳の測量図は昭和 33 年に『吉原市の古墳』において公表された測量図面しかなくそこから径 31m、高さ 5m の円墳と考えられていたが、墳丘盛土の流失も著しいことから測量調査を実施し、径 29m の円墳に復元されることが明らかとなった。また、平成 30 年度には琴平古墳北側において計画された擁壁設置工事に伴い周溝部分のトレンチ調査を実施したため、それらの成果も併せて平成 31 年度に報告する予定である。

**奈良・平安時代** 富士郡家と推定される東平遺跡及び白鳳時代の寺院遺跡である三日市廃寺跡における確認調査が多く行なわれた。第 91 地区では個人住宅建設という限られた調査範囲ながら、奈良・平安時代の竪穴建物跡などの遺構が密集して残存する状況が確かめられた。周辺の第 20 地区の本発掘調査（富士市教委 2017b）や第 64 地区の確認調査（富士市教委 2015）においても遺構が密集している状況が確認されており、当該期の土地利用を考える上で興味深い成果といえる。また、平成 29 年度は第 94 地区として確認調査を実施した。調査地東側の第 14 地区（旧「三日市廃寺宮の上 B 地区」）（富士市教委 1989）や第 16 地区（富士市教委 2002）ではこれまでに布目瓦が大量に出土しており、瓦の分布が期待された。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡を複数検出したものの布目瓦の出土は少量であった。これまでの調査結果もあわせて考えるとかつての寺院の中心は、現在の妙永寺周辺である可能性がより高まつたといえる。

範囲変更に伴う調査としては宇東川遺跡の隣接地（Y 地区）の試掘調査を実施し、ピットとともに奈良・平安時代の土器や縄文土器が出土したため、宇東川遺跡の範囲を変更した。また、平成 28 年にそれまで谷部には遺跡が広がらないと考えられてきた国久保遺跡において新たに奈良・平安時代の集落が濃密に展開することが明らかとなった（富士市教委 2017a）。平成 29 年度は拡大した部分のうち最東端部分の確認調査を実施したところ（第 6 地区）、前回の調査同様、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。今後、さらに遺跡の範囲が広がる可能性が指摘される。

**中世・近世** 近世では、中吉原宿遺跡・富士塚遺跡の調査を行った。

吉原宿は東海道 14 番目の宿場として知られているが、その場所自体は台風の高潮による被害により、約 40 年ごとに移転しており、中吉原宿も寛永 16～17 年（1639～1640）に所替し、延宝 8 年（1680）閏 8 月 6 日に襲来した江戸時代最大級の台風による高潮の被害を受け壊滅している。平成 11 年や平成 28 年の調査において高潮の存在を考古学的に証明するとともに、その土層にパックされるように遺構・遺物が存在することが明らかとなっている（富士市教委 2002b・2017c）。平成 29 年度には、狭い範囲ながら本発掘調査を実施し、これまでの調査成果を裏付ける遺構・遺物が検出されており、本書において報告する。

富士塚遺跡は駿河湾に隣接する田子の浦砂丘上に位置する富士山信仰に関連する遺跡である。江戸時代の地誌には、富士山登拝前に石を積み上げて、安全を祈願した塚と記載されており、平成 29 年度はそれらの石の広がりを図化するために、清掃とともに詳細測量図の作成を行なった。その成果は既に、文献史学や民俗学、地理学などの多角的分析成果とともに報告書を刊行しているが（富士市教委 2018）、本書において改めて報告する。

#### 参考文献

- 富士市教育委員会 1989『三日市廃寺宮の上 B 地区確認調査概報』  
富士市教育委員会 2002a『東平遺跡 第 16 地区（三日市廃寺跡）』、第 27 地区発掘調査報告書  
富士市教育委員会 2002b『中吉原宿遺跡 第 5 地区詳細確認調査報告書』  
富士市教育委員会 2015『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成 24・25 年度』富士市埋蔵文化財調査報告第 57 集  
富士市教育委員会 2017a『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成 26・27 年度』富士市埋蔵文化財調査報告第 60 集  
富士市教育委員会 2017b『東平遺跡 第 20 地区』富士市埋蔵文化財調査報告第 61 集  
富士市教育委員会 2017c『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成 28 年度』富士市埋蔵文化財調査報告第 62 集  
富士市教育委員会 2018『鈴川の富士塚』富士市埋蔵文化財調査報告第六集  
富士市教育委員会 2019『天間沢遺跡 第 45 地区』富士市埋蔵文化財調査報告第 65 集



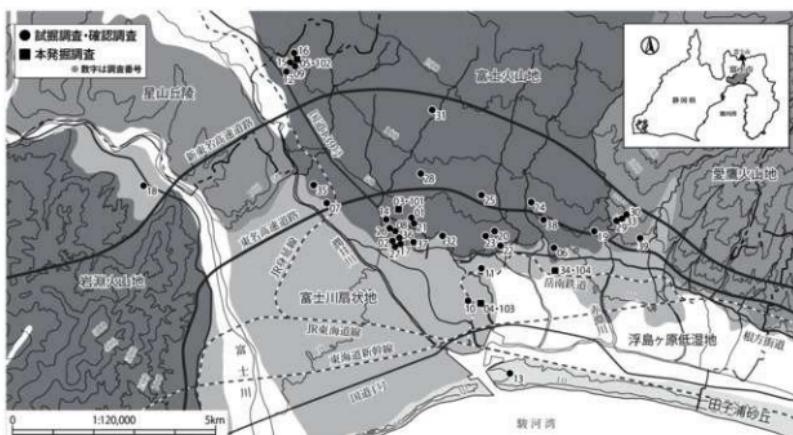
調査番号	所轄番号	遺跡名・地区名	調査区分	調査期間	所在地 原因・目的	対象面積 測量面積 (m <sup>2</sup> )	時代	遺構	遺物	調査担当者
B29	1 事 2 第 29	国久須遺跡	確認	20180119	国久須 一丁目 2120-6 不動産売買	561,450 13,402	奈良・平安	土師器	土師器・漆器	佐藤・伊藤・服部・小島
B29	1 事 2 第 30	向山遺跡	確認	20180115	宮土町 2104-1 舊市役所	1,340,000 30,987	なし	なし	なし	佐藤・伊藤・小島
B29	33	第 5 事 30 沖前遺跡	確認	20180131	比治山 643 番 1 外 工業新設	4,654,400 18,456	奈良・平安 不明	生糸土器・土師器・瓦	土師器・漆器・若林	佐藤・伊藤・服部
B29	34	予定 (H21) 第 155 次調査地点 2 次調査	確認	20180206	久川 96-1 合合住宅地盤	996,080 9,701	古墳・奈良・平安 不明	土師器	土師器	佐藤・伊藤・服部・小島
B29	35	1 事 2 第 31 氏東入道跡	確認	20180206	伝馬 2006-3 附 不動産売買	1,432,190 8,592	時期不明	ピット	なし	佐藤・伊藤・服部・小島
B29	36	1 事 2 第 32 東平遺跡	確認	20180206	三日市宿 11-10 建築住宅建設	715,200 45,596	聖穴埋物跡・ピット	土師器・漆器・瓦	土師器・漆器・瓦・小島	佐藤・伊藤・服部
B29	37	1 事 2 第 33 東平遺跡	確認	~ 20180221	高麗 94 地 C 1 次調査	なし	なし	なし	なし	佐藤・伊藤・服部・小島
B29	38	1 事 2 第 34 風間 4 古墳群 第 2 地区 1 次調査	確認	20180222	原原 1307 番 17 附 宅地分譲・駐車場造成	1,206,290 30,516	なし	なし	なし	佐藤・服部・小島
B29	39	別添報告 中第 3 古墳群	積立測量	中里地先						佐藤
	予定 (H21)	年平古墳								



第 1 図 重機掘削の様子



第 2 図 発掘調査の様子



第 3 図 平成 29 年度調査地の位置と地形区分

## 第2節 平成29年度の発掘調査報告

### 1 東平遺跡 第86地区 1次調査

所在地 伝法2426番1

調査面積 35.624 m<sup>2</sup> (対象面積 505 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年4月6日

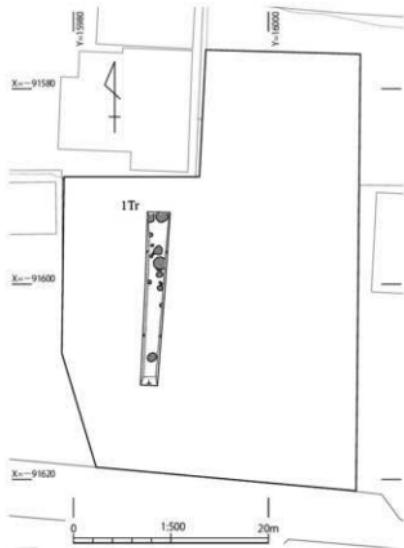
調査の原因 宅地分譲

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

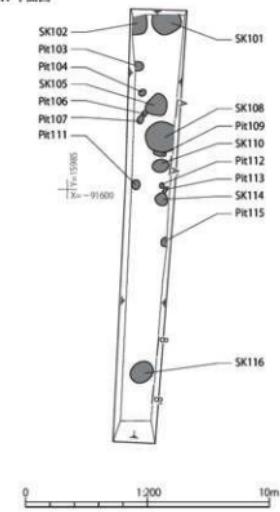
調査の結果 土地全体が削平を受けているものの、散漫な状況ながら奈良・平安時代の遺構（土坑・ピット）の存在を確認した。遺物は、土師器片が数点出土したが図示には至らなかった。



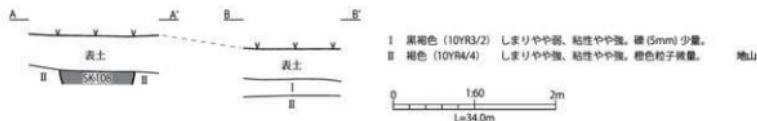
第4図 東平遺跡第86地区 位置図



1Tr 平面図



1Tr南北セクション断壁



第5図 東平遺跡第86地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 2 東平遺跡 第 19 地区 2 次調査

所在地 伝法 3104 番 1 ほか

調査面積 62.904 m<sup>2</sup> (対象面積 1,210.39 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 4 月 12 日～4 月 13 日

調査の原因 店舗建設

調査の概要 敷地内に 5 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 敷地中央の 5Tr 付近にはガソリンスタンドのタンク設置に伴うと考えられる深さ 3m 以上の擾乱が存在する。3Tr および 4Tr において遺構(ピット)が確認された。

伊勢塚古墳の周溝を確認する目的で設定した 1Tr では、地山直上に黒色土が認められたが、周溝覆土なのか耕作土なのか判断できなかった。黒色土からは円筒埴輪片 1 点が出土し、図示した(第 10 図)。

また、奈良時代と見られる瓦片も出土している。

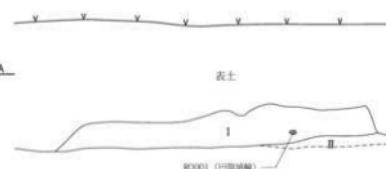


第 6 図 東平遺跡第 19 地区 位置図

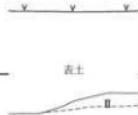


第 7 図 東平遺跡第 19 地区 トレンチ配置図

1Tr 南北セクション西壁



2Tr 南北セクション西壁



I 黒褐色土層 (10YR3/2)  
II 暗褐色砂質土層 (10YR3/4)

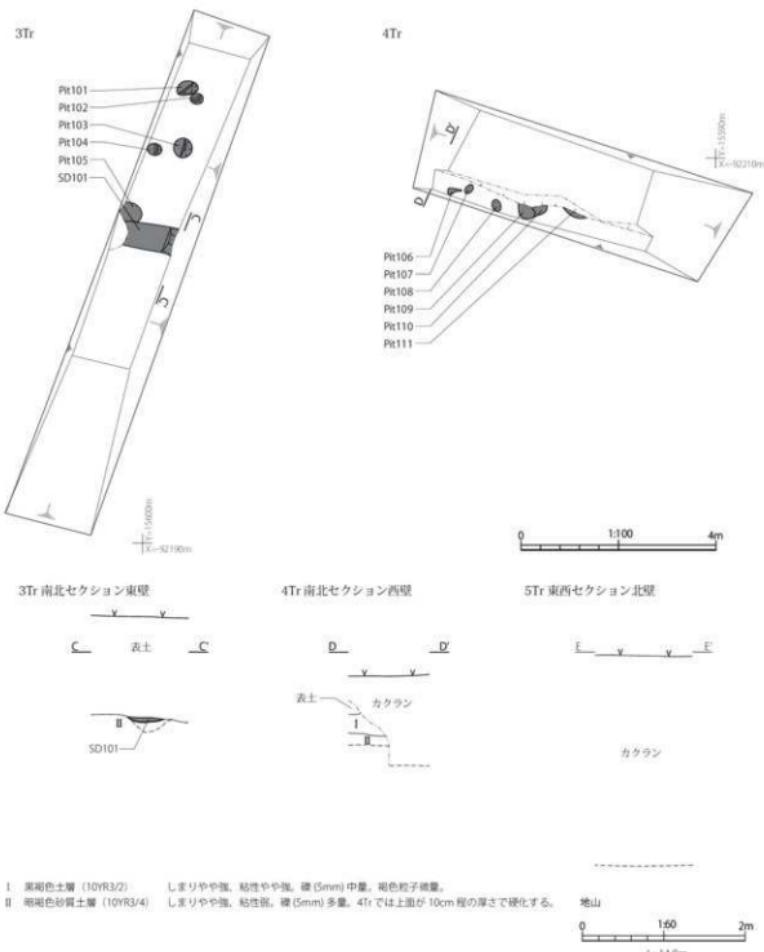
しまりやや強、粘性やや強。礫 (5mm) 中量。褐色粒子微量。

しまりやや強、粘性弱。礫 (5mm) 多量。4Tr では上面が 10cm 程の厚さで硬化する。

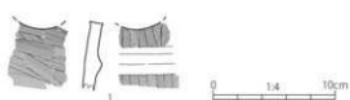
地山

0 1.60 2m  
L=14.0m

第 8 図 東平遺跡第 19 地区 セクション図



第9図 東平遺跡第19地区 トレンチ平面図・セクション図



第10図 東平遺跡 第19地区 2次調査 出土遺物

第2表 東平遺跡 第19地区 2次調査 出土遺物観察表

探査番号	R番号	享和 時期	出土 場所	種別	法量(cm)	
					日様	月様
第10回 1	R0001	47年	1Tr	土製品 円筒埴輪	-	(5.6)
				橢円 残存率	内面色調	外面色調
				良好	SYR7/8 橙色	SYR7/8 橙色

### 3 比奈 4 古墳群 第 1 地区 1 次調査

所在地 比奈 1095-1

調査面積 6.547 m<sup>2</sup> (対象面積 1446.19 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 5 月 15 日

調査の原因 宅地分譲

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。表土直下に地山を検出した。地山は溶岩疊が多量に入り、古墳が存在する地形とは考えられない。



第 12 図 比奈 4 古墳群第 1 地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

### 4 川窪遺跡 第 3 地区 1 次調査

所在地 厚原 218-5

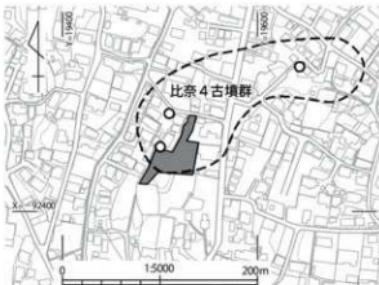
調査面積 14.132 m<sup>2</sup> (対象面積 973 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 5 月 17 日

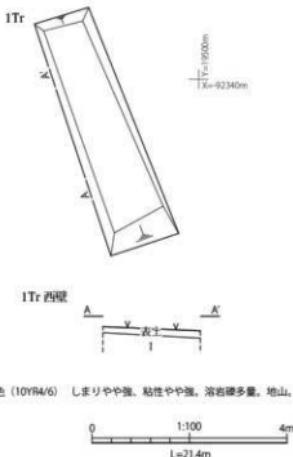
調査の原因 工場新築

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第 11 図 比奈 4 古墳群第 1 地区 位置図

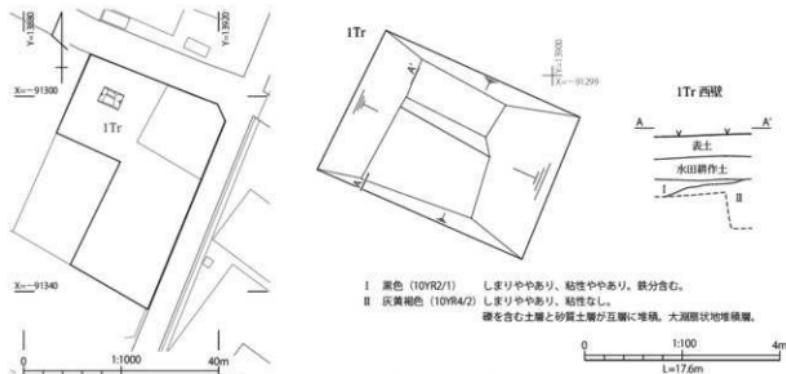


I 褐色 (10YR4/6) しまりや強、粘性やや強。溶岩疊多量。地山。

0 1:100 L=21.4m 4m



第 13 図 川窪遺跡第 3 地区 位置図



第14図 川産遺跡第3地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 5 東平遺跡 第88地区 1次調査

所在地 伝法2795番12、13

調査面積 9.143 m<sup>2</sup> (対象面積 198.33 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年5月23日

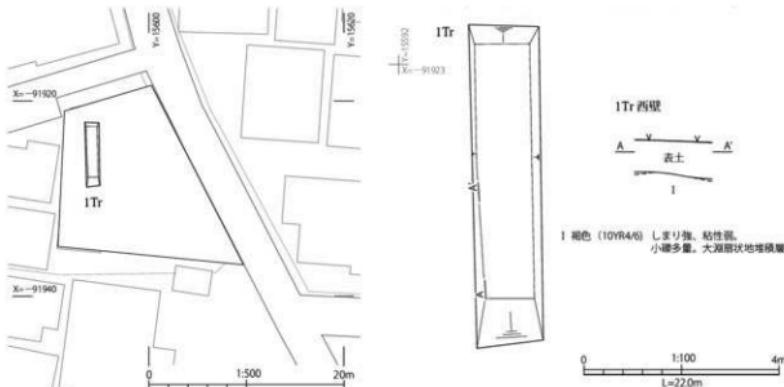
調査の原因 不動産売買

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第15図 東平遺跡第88地区 位置図



第16図 東平遺跡第88地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 6 天間沢遺跡 第 46 地区 1 次調査

所在地 天間 1137-1

調査面積 25.212 m<sup>2</sup> (対象面積 1,415 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 6 月 28 日～6 月 29 日

調査の原因 農地改良

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

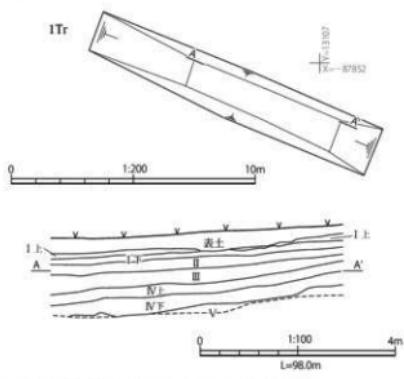
調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第 18 図 天間沢遺跡第 46 地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図



第 17 図 天間沢遺跡第 46 地区 位置図



## 7 中吉原宿遺跡 第 12 地区 1 次調査

所在地 八代町 190 番 2 ほか

調査面積 15.373 m<sup>2</sup> (対象面積 360 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 6 月 13 日～6 月 14 日

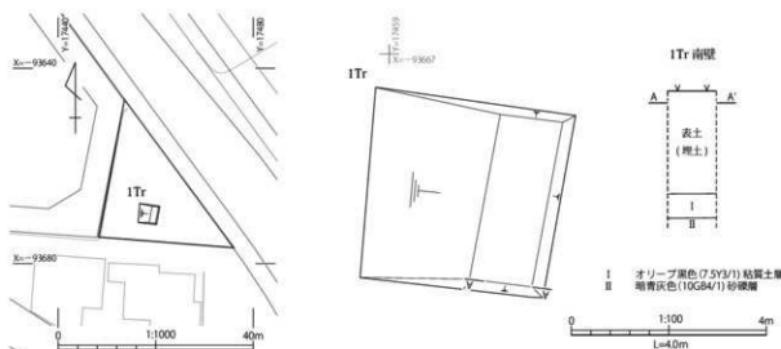
調査の原因 建売住宅建設

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 約 2m 程度の深さで廃棄物が認められ、その下層から地山を検出したものの遺構・遺物は確認されなかった。調査地は宿場の範囲から外れる可能性が高い。



第 19 図 中吉原宿遺跡第 12 地区 位置図



第20図 中吉原宿遺跡第12地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 8 沖田遺跡 第157次調査地点

所在地 今泉二丁目84番1

調査面積 61.259 m<sup>2</sup> (対象面積 5.974 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年7月27日

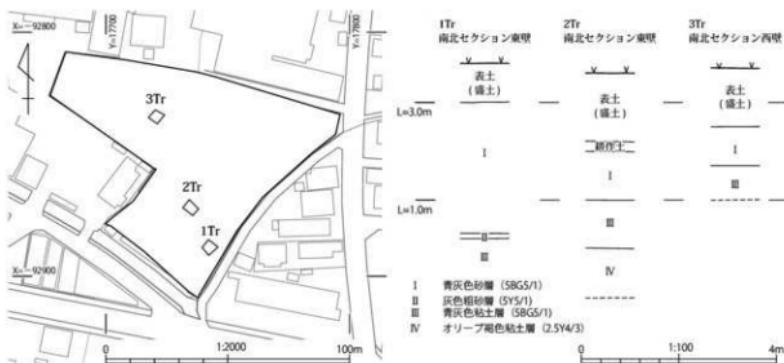
調査の原因 不動産賃貸

調査の概要 敷地内に3箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 涌水の影響もあり、遺構・遺物を検出することが出来なかった。周辺の調査例から当該地に埋蔵文化財が存在する可能性は否定できないものの、今回の調査では明らかとならなかった。



第21図 沖田遺跡第157次調査地点 位置図



第22図 沖田遺跡第157次調査地点 トレンチ配置図・セクション図

## 9 天間沢遺跡 第 47 地区 1 次調査

所在地 天間 1098-12

調査面積 5.709 m<sup>2</sup> (対象面積 165 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 7 月 3 日

調査の原因 不動産売買

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 繩文時代のピット 4 基を検出した。

また、縄文時代早期後葉と考えられる繩文土器片と黒曜石が出土したが、図示には至らなかった。

北に位置する第 32 地区において平成 23 年度に行なわれた確認調査でも早期後葉（茅山下層式）の遺物が確認されている（富士市教育委員会 2013『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成 22・23 年度－』）ことから、同時期の遺構が比較的まとまって存在することが明らかとなった。

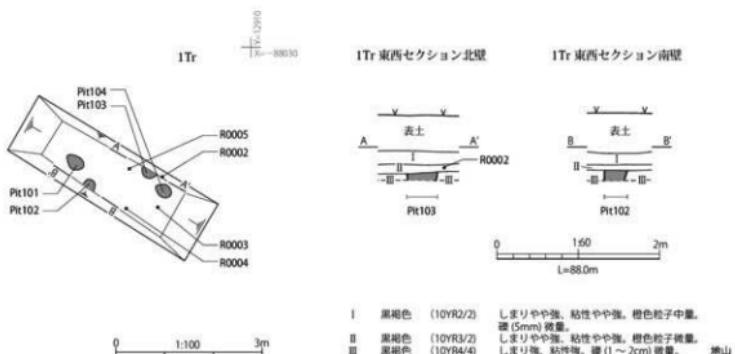
また、南側に隣接する天間まちづくりセンター建設に伴う調査周辺において、今回確認された縄文時代早期と同時期の遺物が確認されており、中期以降とは異なる集落展開が想定される。



第 23 図 天間沢遺跡第 47 地区 位置図



第 24 図 天間沢遺跡第 47 地区 トレンチ配置図



第 25 図 天間沢遺跡第 47 地区 トレンチ平面図・セクション図

## 10 富士塚遺跡 第1地区 3次調査・4次調査

所在地 鈴川西町628-496 外

### 【3次調査】

調査面積 23 m<sup>2</sup>

調査期間 平成27年12月8日～平成28年1月21日

調査の原因 周辺整備

調査の概要 富士塚周辺の整備事業計画に伴い、塚本体の残存状況を確認する調査を実施した。

**調査の結果** 塚の頂上部に半円形に設定した1トレンチでは、頂上部にあった浅間宮社基礎下から210cmでⅢ層を確認した。Ⅲ層にいたるまでは砕石やコンクリート破片を含む搅乱土Ⅰ層で、昭和51年工事の盛土と判断した。なお、Ⅱ層は確認できなかった。塚の北部に南北方向に設定した2トレンチでは、Ⅱ層直下にⅢ層を検出した。また、Ⅲ層下にⅣ層、Ⅴ層を確認した。Ⅲ～V層まで堆積に乱がないことから、自然堆積の層と考えられる。このことから塚は人工的に造作されたものではなく、参道から高さ2.60m前後の砂で形成された自然低丘であったことが明らかとなった。また、2トレンチではⅢ層直上に直径10cmほどの丸石が散在する状況が認められた。同様に3トレンチでも3m以北まで丸石が確認された。このため、平成20年度に実施された1次調査と同様、塚の基底部が直径21～22m程度まで広がることが明らかとなった。

ただし、現状でも裾部周辺には同様な丸石が確認されている。これらの石が据部周囲に巡らされたものか、信仰の中断後に散在したものかは明らかにできなかった。

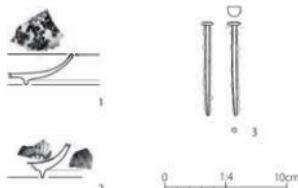
**出土遺物** 1は18世紀中ごろの肥前焼の碗である。

2は外側が二重網目、内側には一重網目と中央に菊花文が施されていることから、18世紀第2四半期に位置づけられる。

3は鉄釘で残存長7.6cm、幅・厚さとともに0.35cmを測る。断面方形を呈する和釘である。



第26図 富士塚遺跡第1地区 位置図



第27図 富士塚遺跡第1地区 出土遺物実測図

第3表 富士塚遺跡第1地区 出土遺物観察表

採集番号	R番号	写真 回数	出土 場所	種別	種別	法値 口径 (cm)	法値 底径 (cm)	重さ (g)
平27回1	R0001	51	1F	和皿	皿	-	-	(2.5)
平27回2	R0003	51	2Tr	和皿	皿	-	-	(2.8)

採集番号	R番号	写真 回数	出土 場所	種別	種別	法値 長さ (cm)	法値 厚さ (cm)	重さ (g)
平27回3	R0004	51	2Tr	鉄製品	釘	(7.6)	0.35	0.35 6.41

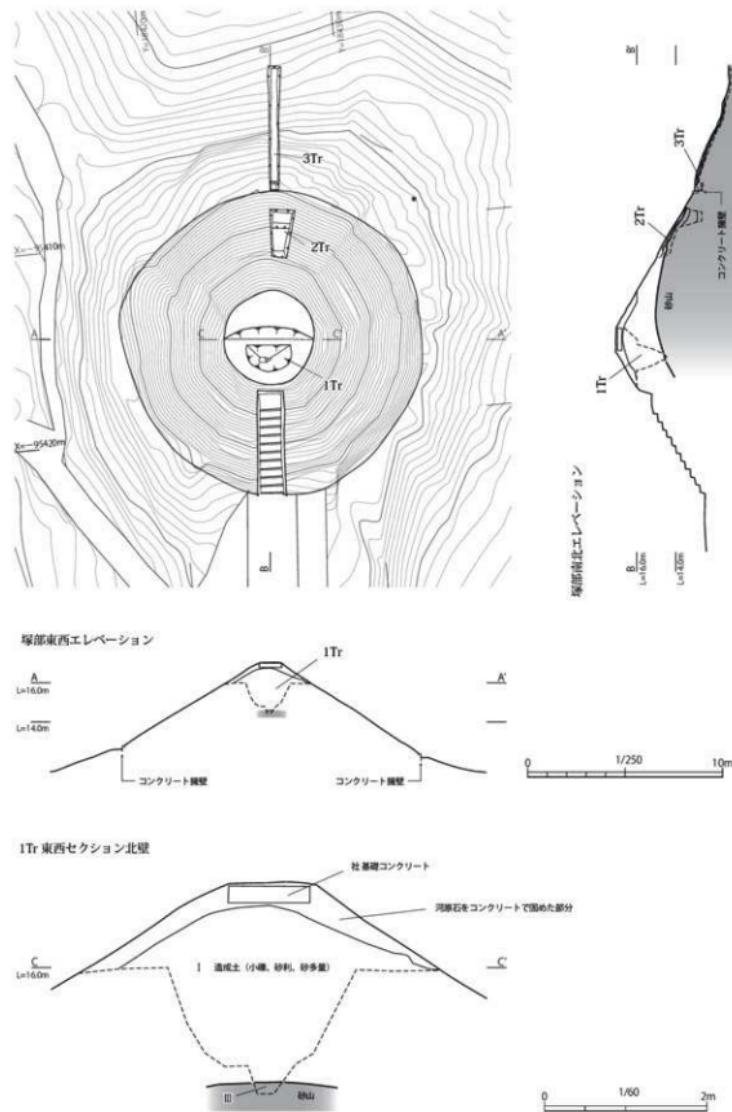
### 【4次調査】

調査期間 平成29年7月3日～7月27日

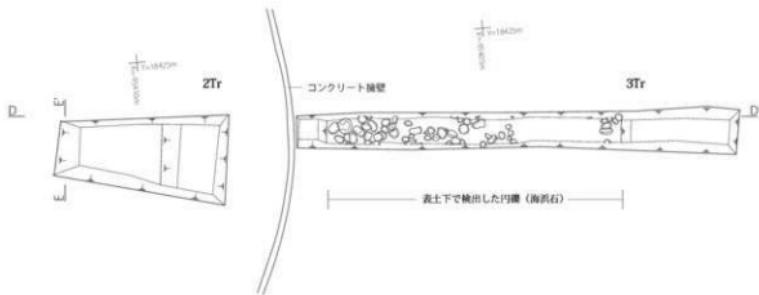
調査の原因 篰の確認

調査の概要 3次調査の成果と、富士塚に関する文献調査・民俗調査・石材調査の成果について報告書（富士市教育委員会 2018『鈴川の富士塚』富士市文化財調査報告書 第六集）を刊行するにあたり、富士塚の現状を記録するため、地形測量と周辺の礫の検出、写真測量をおこなった。

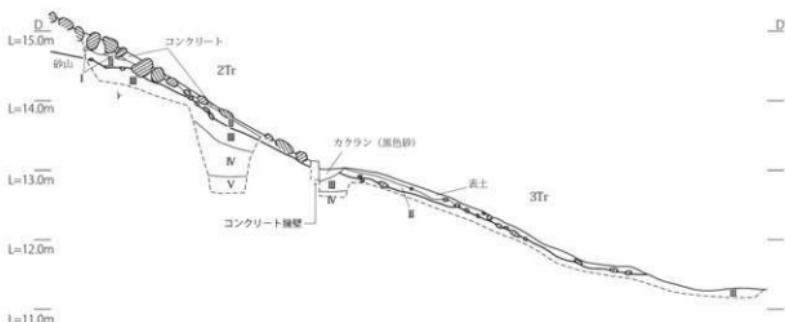
**調査の結果** 写真測量の結果、礫の分布が北側正面と西側園路に沿って集中することが明らかとなつた。また、南東部では塚から50cm幅で石の集中が認められた。礫の大きさは10cmから30cmと、大きさにばらつきがみられた。



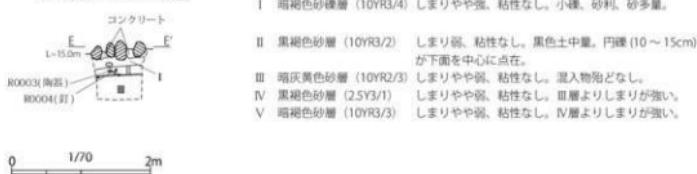
第28図 富士塙道路第1地区 トレーンチ配置図・エレベーション図



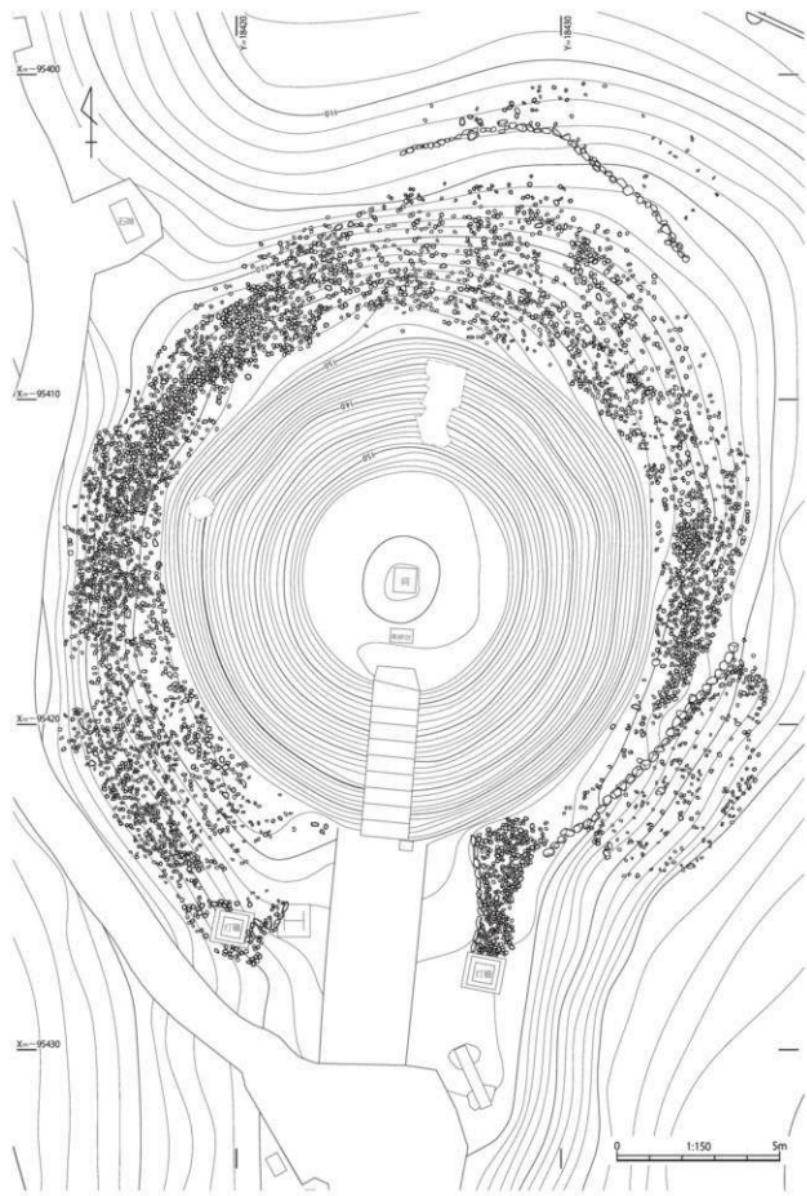
2Tr・3Tr南北セクション西壁



2Tr東西セクション南壁



第29図 富士塚遺跡第1地区 トレンチ平面図・セクション図



第 30 図 富士塚遺跡第 1 地区 墓周辺碑分布状況

## 11 東平遺跡 第89地区 1次調査

所在地 伝法 2619番 48

調査面積 14.562 m<sup>2</sup> (対象面積 198.34 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29年 8月 4日

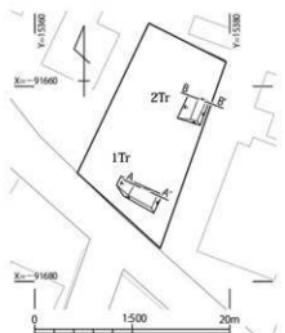
調査の原因 保育事業所増設

調査の概要 敷地内に2箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

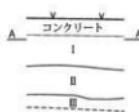
調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第31図 東平遺跡第89地区 位置図



1Tr 東西セクション北壁



2Tr 東西セクション北壁



0 160 2m  
L=28.0m

I 黒褐色 (10YR3/2) しまりやや弱、粘性やや強。  
II 黒褐色 (10YR2/2) しまりやや弱、粘性やや強。礫(10~20cm)少量。  
III 褐色 (10YR4/4) しまりやや強、粘性やや強。

旧耕作土  
地山

第32図 東平遺跡第89地区 トレンチ配置図・セクション図

## 12 天間沢遺跡 第48地区 1次調査

所在地 天間 1011-1, 1011-4, 1011-5, 1045-5 の内

調査面積 29.647 m<sup>2</sup> (対象面積 1,454.73 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29年 7月 20日 ~ 7月 21日

調査の原因 宅地造成



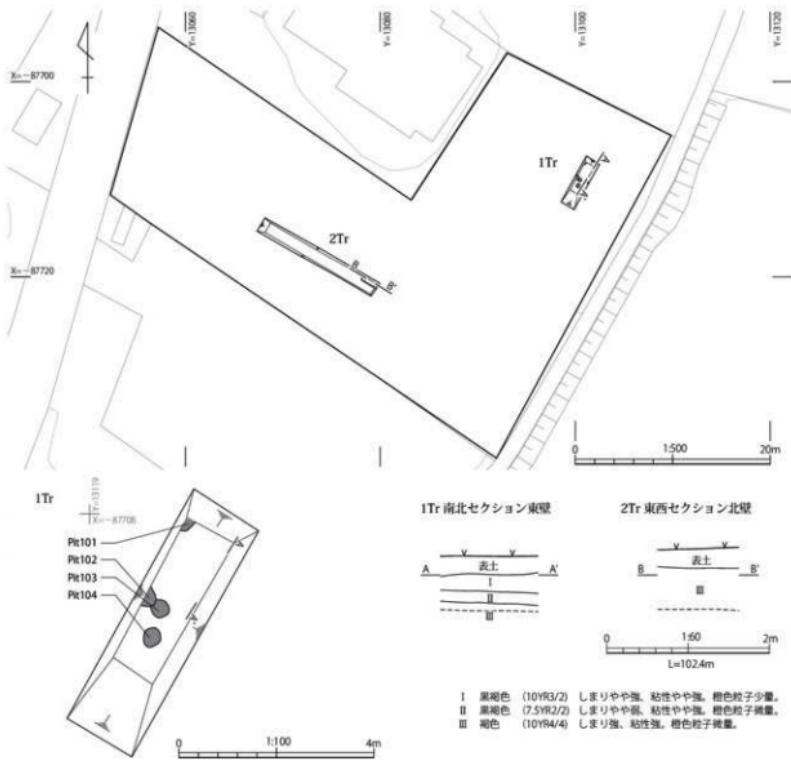
第33図 天間沢遺跡第48地区 位置図

調査の概要 敷地内に2箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 繩文時代のピット4基を検出し、縄文土器片が出土した。

敷地西側においては土地全体が大規模な削平を受けており、既に遺構は存在しないことが明らかとなった。2Tr以東の谷側においては、縄文土器を含む包含層が良好に残存することが明らかとなった。

また、造成工事時の工事立会で縄文時代中期の土器が出土し、竪穴建物跡の存在も確認された。本章第3節にて報告する。



第34図 天間沢遺跡第48地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

### 13 天間沢遺跡 第49地区 1次調査

所在地 天間 988-15

調査面積 23.106 m<sup>2</sup> (対象面積 488.70 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29年 8月 17日～8月 18日

調査の原因 宅地造成

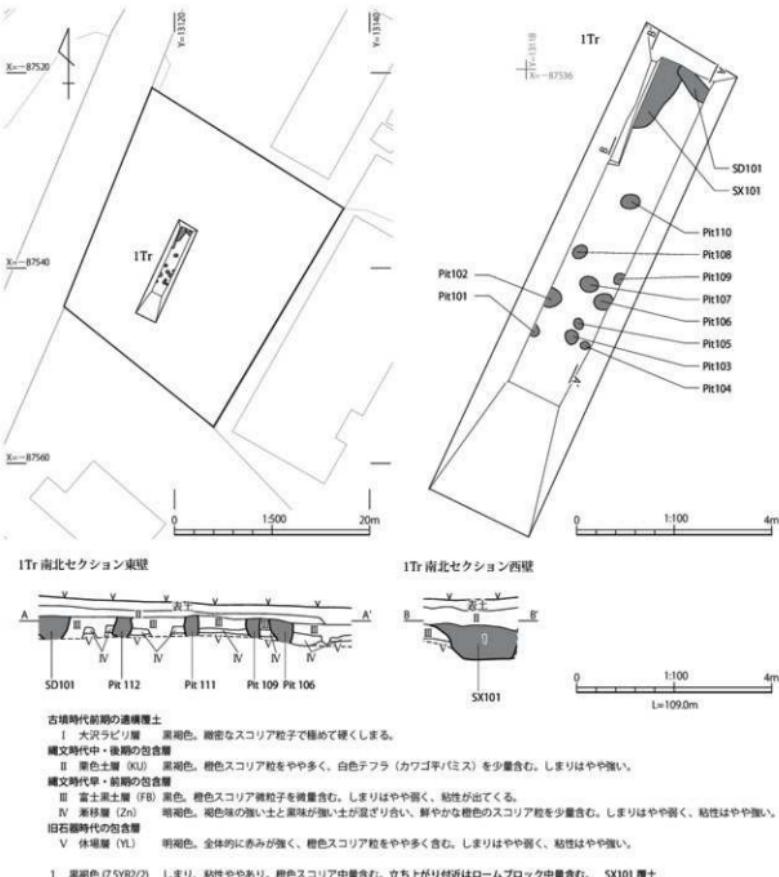
調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 繩文時代のピット12基と、溝、性格不明遺構を検出し、繩文土器片が出土した。

また、住宅新築工事時の工事立会でも繩文土器片が出土した。本章第3節にて報告する。



第35図 天間沢遺跡第49地区 位置図



第36図 天間沢遺跡第49地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 14 東平遺跡 第90地区 1次調査

所在地 伝法3054-2 外

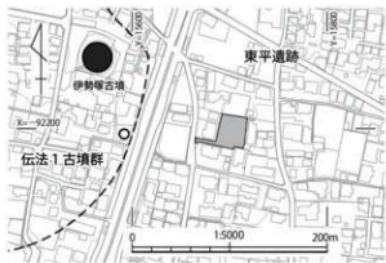
調査面積 47.182 m<sup>2</sup> (対象面積 973.88 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年9月13日～9月14日

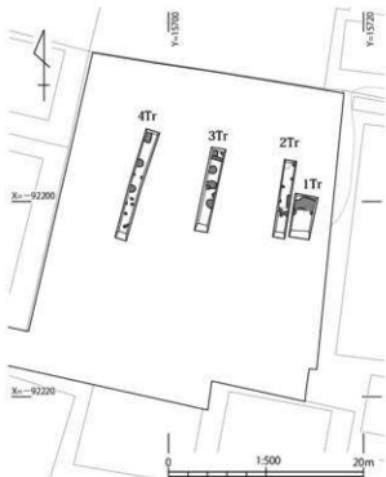
調査の原因 アパート新築

調査の概要 敷地内に4箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

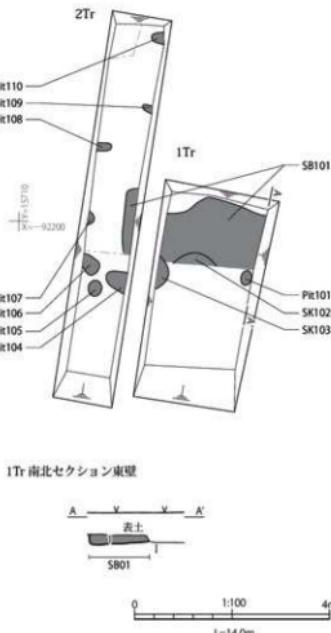
**調査の結果** その結果、土地南側を中心に削平を受けているものの、散漫な状況ながら奈良・平安時代の遺構（竪穴建物跡・土坑・ピット）の存在を確認した。敷地西側には建物跡は広がらない可能性が高い。遺物は、少量の土師器片が出土したが図示には至らなかった。



第 37 図 東平遺跡第 90 地区 位置図



第 38 図 東平遺跡第 90 地区 トレンチ配置図



第 39 図 東平遺跡第 90 地区 トレンチ平面図・セクション図

## 15 吉添遺跡 第 2 地区 1 次調査

所在地 南松野 2129 番 1 ほか

調査面積 58.743 m<sup>2</sup> (対象面積 5,129 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 9 月 20 日～9 月 21 日

調査の原因 倉庫等建設

調査の概要 敷地内に 4箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。

当該地は河川氾濫源のため、遺跡は形成されなかつた可能性が高い。



第 40 図 吉添遺跡第 2 地区 位置図



第41図 吉添遺跡第2地区 トレンチ配置図・セクション図

## 16 富士岡1古墳群 第17地区 1次調査

所在地 比奈1713番の一部

調査面積 19.377 m<sup>2</sup> (対象面積 345.44 m<sup>2</sup>)

第42図 富士岡1古墳群第17地区 位置図

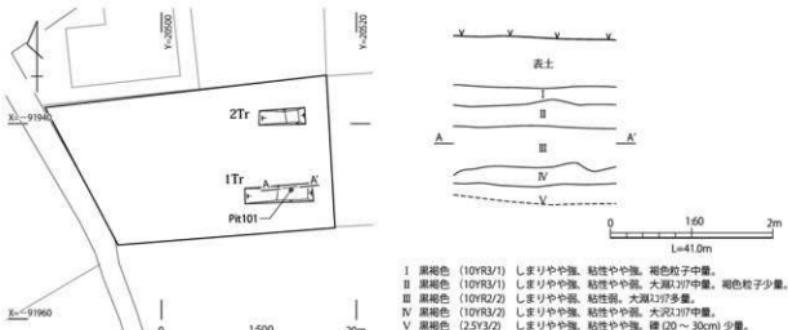
調査期間 平成29年9月26日

調査の原因 個人住宅新築

調査の概要 敷地内に2箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 古墳時代中期末に富士山の側火山から噴出した大瀬スコリアを含む土層が厚く堆積していることが確認され、それが当時の谷を埋めていることが明らかとなつた。

地表下2mよりピットを1基検出した。出土遺物がなく時期は特定出来ないが、覆土からは縄文時代の可能性が指摘される。



第43図 富士岡1古墳群第17地区 トレンチ配置図・セクション図

### 17 宇東川遺跡 X 地区 1次調査

所在地 今泉 1782-1

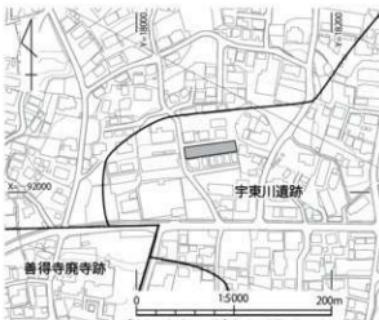
調査面積 14.947 m<sup>2</sup> (対象面積 582.97 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29年 10月 3日

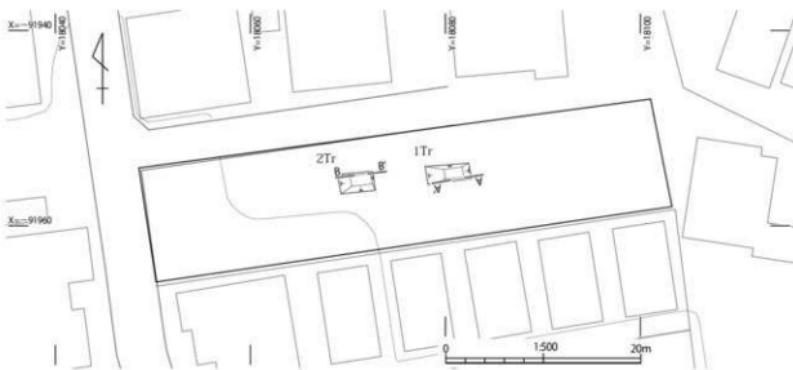
調査の原因 社宅新築

調査の概要 敷地内に2箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

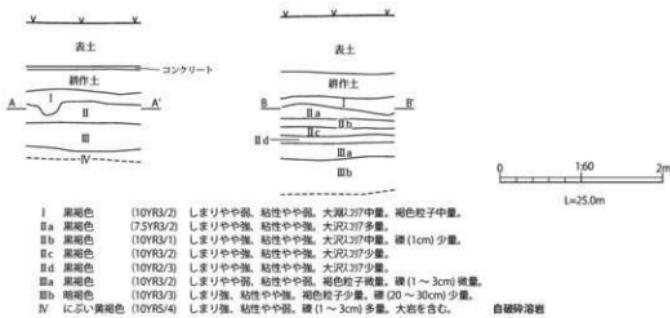
調査の結果 遺構は検出されなかった。大瀬スコリア層から奈良・平安時代の土師器が出土したが図示には至らなかつた。土層の堆積状況から、調査地の旧地形は谷であったと考えられる。



第44図 宇東川遺跡X地区 位置図



第45図 宇東川遺跡X地区 トレンチ配置図



第46図 宇東川遺跡X地区 セクション図

## 18 東平遺跡 第91地区 1次調査

所在地 伝法2389-7ほか

調査面積 10.758 m<sup>2</sup> (対象面積 209.60 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年10月11日

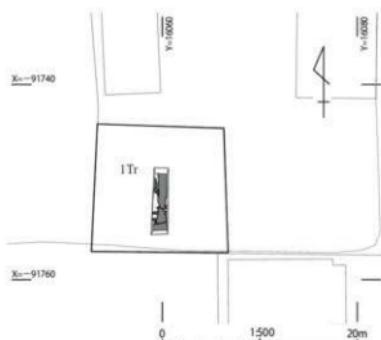
調査の原因 個人住宅新築

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 その結果、地表下約0.6mで奈良・平安時代の遺構（不明遺構・溝状遺構・ピット）を検出した。遺構は切り合って密集する。不明遺構内からは遺物（土師器・須恵器・灰釉陶器）が出土し、土師器壺の底部I点を図示した（第49図）。



第47図 東平遺跡第91地区 位置図

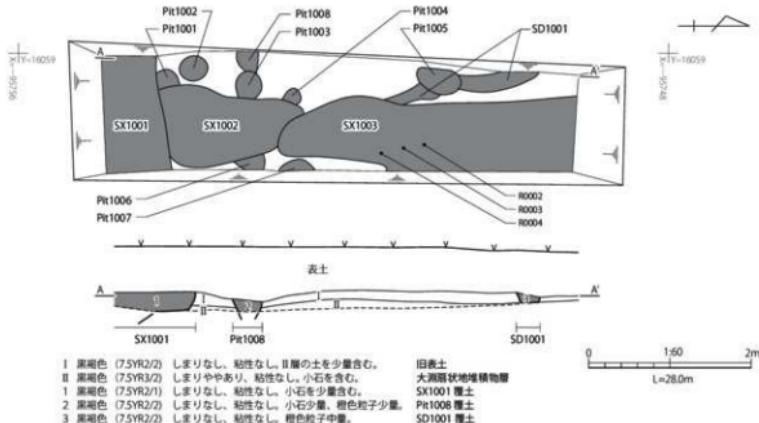


第48図 東平遺跡第91地区 トレンチ配置図



第49図 東平遺跡第91地区 出土遺物実測図

探査番号	R番号	写真回数	出土場所	種別
第49図1	R0001	54回	SX1001, 1002	土師器 壺
法縁(cm)			内面色調	外面色調
口径 底径	器高	保存率	(0.8) 良好	SYR46 赤褐色 SYR56 明赤褐色



第 50 図 東平遺跡第 91 地区 トレンチ平面図・セクション図

## 19 包藏地外 宇東川遺跡 隣接地

(宇東川遺跡 Y 地区 1 次調査)

所在地 今泉 4 丁目 936 外

調査面積 9.907 m<sup>2</sup> (対象面積 416.41 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 11 月 7 日

調査の原因 宅地分譲

調査の概要 敷地内に 2 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 地表下約 0.3 ~ 0.4 m で縄文時代のピットと奈良・平安時代の竪穴状の遺構を検出した。遺構内からは遺物（縄文土器・土師器）も出土しており、これまで包藏地と認識されていなかった今回の調査地にまで遺跡が広がることが確認された。

縄文土器片 2 点を図示した（第 52 図）。

今回の調査結果に基づき、包藏地の範囲変更をおこなった（本章第 4 節）。



第 51 図 宇東川遺跡 Y 地区 位置図

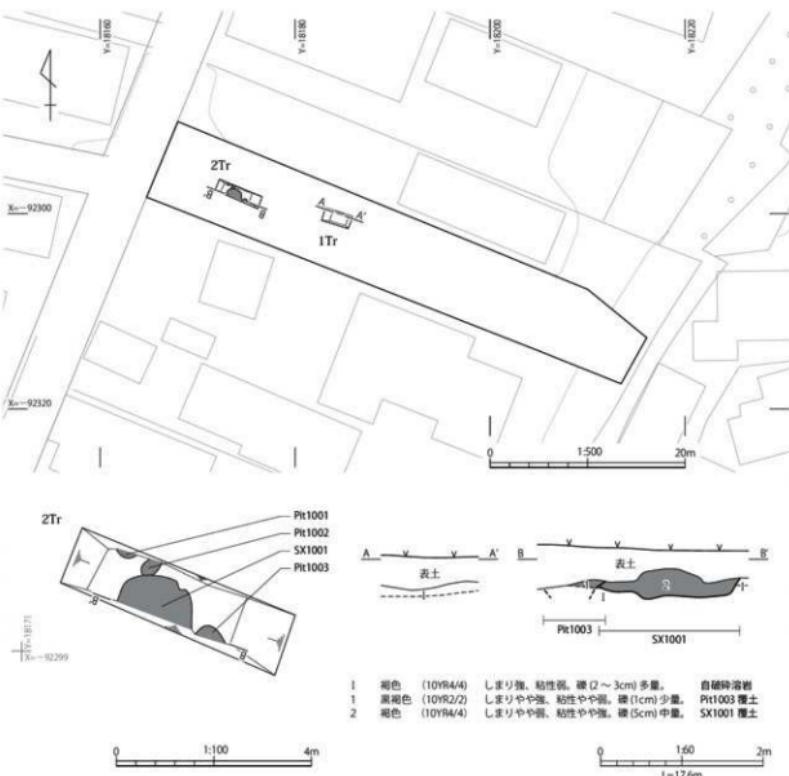


0 1.4 10cm

第 52 図 宇東川遺跡 Y 地区 出土遺物実測図

## 第 5 表 宇東川遺跡 Y 地区 出土遺物観察表

辨認番号	R 番号	写真 図版	出土場所	種別	細別	法量 (cm)			既存 率	既存 率	内面色調	外面色調
						口径	底径	厚さ				
第 52 図 1	R0002	54 頁	2Tr Pit1001	縄文土器	井戸尻 (鶴坂 3)	-	-	(3.3)	良好	-	5YR 4/2	灰褐色
第 52 図 2	R0002	54 頁	2Tr Pit1001	縄文土器	井戸尻 (鶴坂 3)	-	-	(3.8)	良好	-	7.5YR 2/3	黒褐色
											7.5YR 3/1	黒褐色



第53図 宇東川遺跡Y地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 20 善得寺廃寺跡 第4地区 1次調査

所在地 今泉 1856番1

調査面積 9.310 m<sup>2</sup> (対象面積 154 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年11月16日

調査の原因 局舎新築

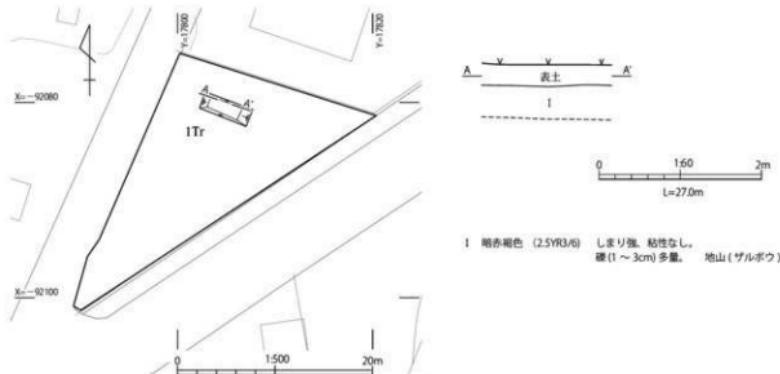
調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は発見されなかった。

表土直下で地山を検出した。地山はザルボウで、細縫を多量に含む。



第54図 善得寺廃寺跡第4地区 位置図



第 55 図 善得寺古墳跡第 4 地区 トレンチ配置図・セクション図

## 21 包蔵地外 滝川 1 古墳群隣接地

(滝川 1 古墳群 第 2 地区 1 次調査)

所在地 三ツ沢 870 番 1 他 9 筆

調査面積 68.937 m<sup>2</sup> (対象面積 1,944.26 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 11 月 20 日 ~ 11 月 22 日

調査の原因 宅地分譲

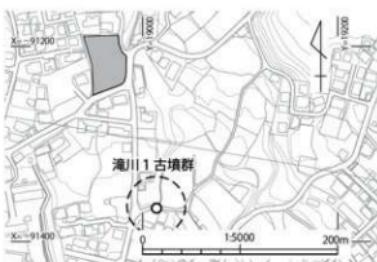
調査の概要 敷地内に 4 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかつたが、地表面から土錐等を採集し、2 点を図示した(第 57 図)。

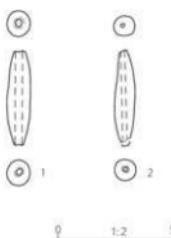
調査地の中部から南東部にかけては谷にあたり、厚い自然堆積層が形成されていた。

また、微細な根が入る搅乱が等間隔に確認でき、現在の茶畑とは列を異にする古い茶畑の痕跡と考えられる。

以上のように、遺物を採集できるものの、調査により遺構の広がりはないものと判断された。



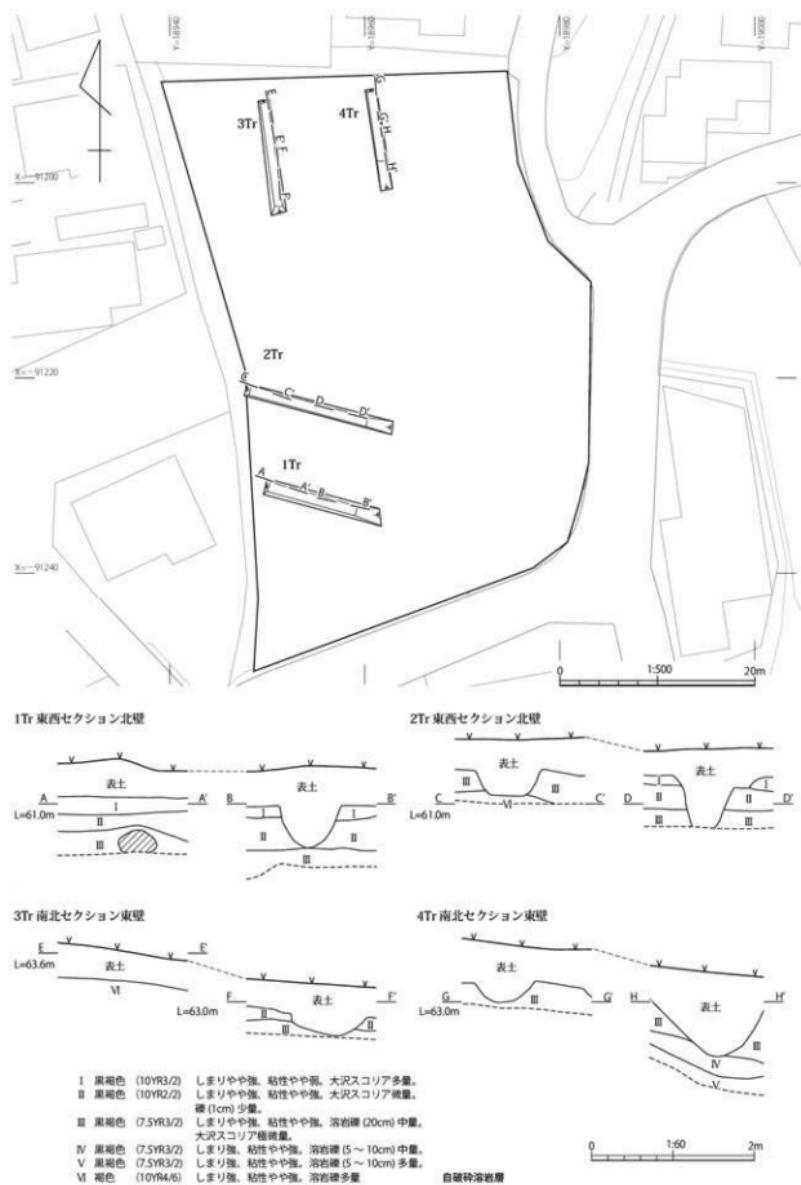
第 56 図 滝川 1 古墳群第 2 地区 位置図



第 57 図 滝川 1 古墳群第 2 地区 出土遺物実測図

## 第 6 表 滝川 1 古墳群第 2 地区 出土遺物観察表

辨認番号	R番号	写真 回数	出土 場所	種別	調査	沿長 (cm)	幅 幅	孔径	焼成	残存 率	外面色調
第 57 回 1	R0001	55 頁	表様	土製品	土錐	3.8	1.0	0.2	良好	-	7.5YR5/4 にぶい褐色
第 57 回 2	R0001	55 頁	表様	土製品	土錐	(3.8)	0.9	0.15	良好	-	SYR5/6 明るい褐色



第58図 滝川1古墳群第2地区 トレンチ配置図・セクション図

## 22 包蔵地外 一色 9 古墳群 隣接地

(一色 9 古墳群 第 1 地区 1 次調査)

所在地 今泉 3259-1 外

調査面積 260.549 m<sup>2</sup> (対象面積 15,684 m<sup>2</sup>)

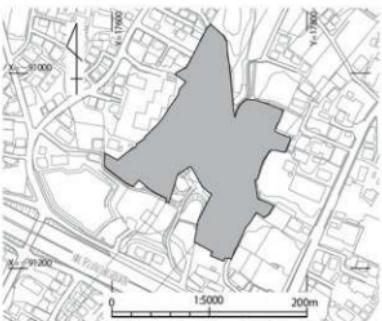
調査期間 平成 29 年 11 月 27 日～11 月 30 日

調査の原因 宅地分譲

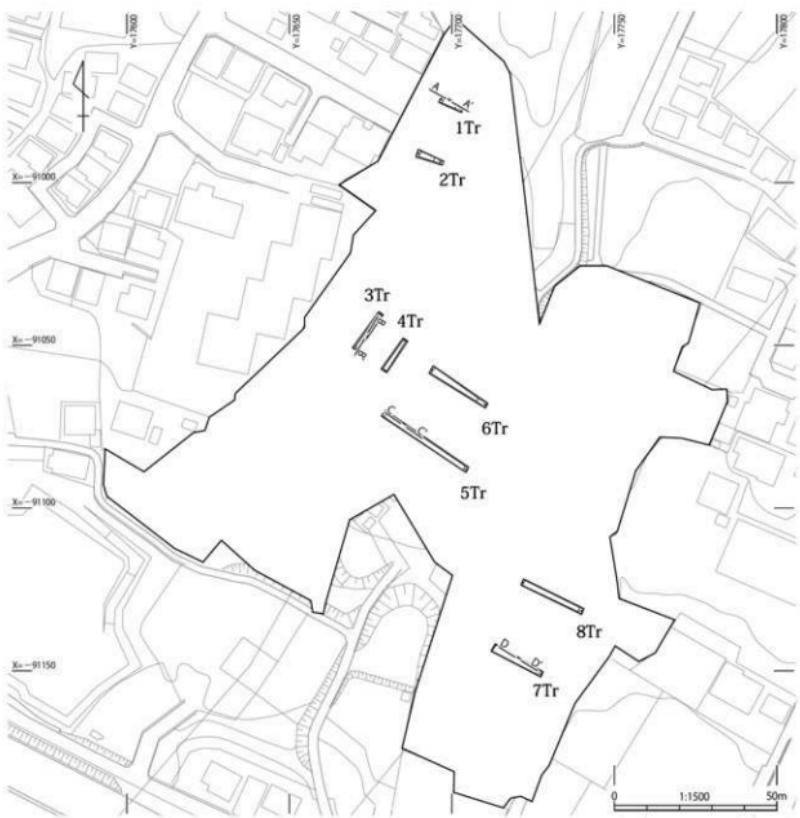
調査の概要 敷地内に 8 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物とも検出されなかった。

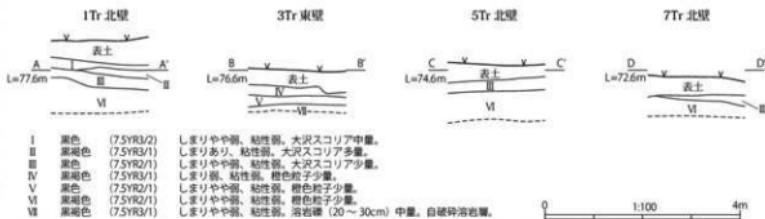
調査地の旧地形は谷であると考えられ、トレンチによっては土が厚く堆積している様子が見られた。



第 59 図 一色 9 古墳群第 1 地区 位置図



第 60 図 一色 9 古墳群第 1 地区 トレンチ配置図



第61図 一色9古墳群第1地区 セクション図

## 23 東平遺跡 第92地区 1次調査

所在地 伝法2755-3、2755-1

調査面積 7.763 m<sup>2</sup> (対象面積 171.51 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年12月4日

調査の原因 宅地分譲

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 トレンチ北端の搅乱中から奈良・平安時代の土器片が出土したが、少量で図示には至らなかった。また、明確な遺構は確認されなかつた。



第62図 東平遺跡第92地区 位置図

## 24 東平遺跡 第93地区 1次調査

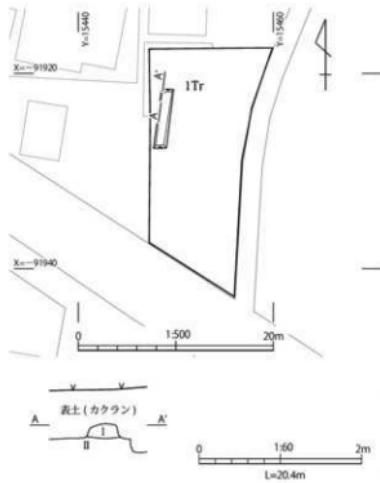
所在地 伝法3098-7ほか

調査面積 11.375 m<sup>2</sup> (対象面積 906.33 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年12月5日~12月6日

調査の原因 不動産売買

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

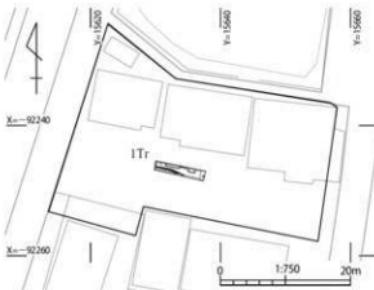


第63図 東平遺跡第92地区 トレンチ配置図・セクション図

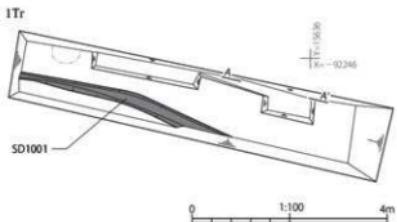
調査の結果 溝状のプランを検出したものの、覆土から近世以降のものと考えられた。そのほかには全体的に搅乱が目立ち、埋蔵文化財は存在しないことが明らかとなった。土器片、灰釉陶器の極小破片が出土したが、搅乱からの出土であり図示には至らなかつた。



第 64 図 東平遺跡第 93 地区 位置図



第 65 図 東平遺跡第 93 地区 トレンチ配置図



第 66 図 東平遺跡第 93 地区 トレンチ平面図・セクション図

## 25 土手内・中原 2 古墳群 第 15 地区 1 次調査

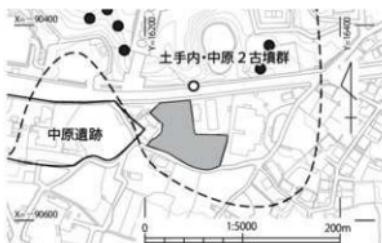
**所在地** 伝法 54-1

**調査面積** 209.277 m<sup>2</sup> (対象面積 3,118 m<sup>2</sup>)

**調査期間** 平成 29 年 12 月 11 日～12 月 15 日

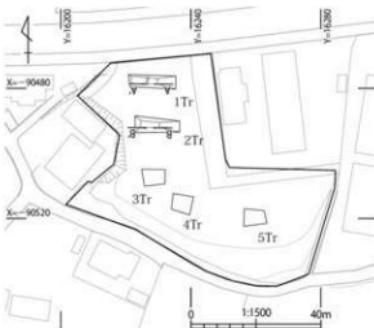
**調査の原因** 店舗建設

**調査の概要** 敷地内に 5 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

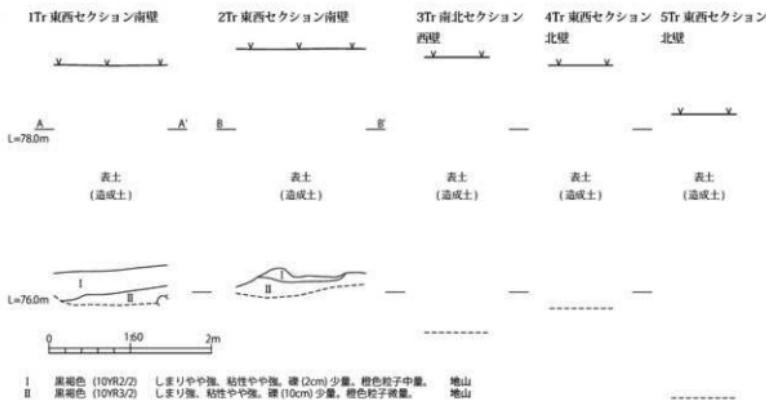


第 67 図 土手内・中原 2 古墳群第 15 地区 位置図

**調査の結果** 地表面より須恵器が 1 点採集されたが図示には至らなかった。土地全体に 3m 以上の盛土がなされており、トレンチの一部で地山を確認したが、埋蔵文化財を確認することはできなかった。



第 68 図 土手内・中原 2 古墳群第 15 地区 トレンチ配置図



第69図 土手内・中原2古墳群第15地区 セクション図

## 26 向山遺跡 第3地区 1次調査

所在地 富士岡 2108-1ほか

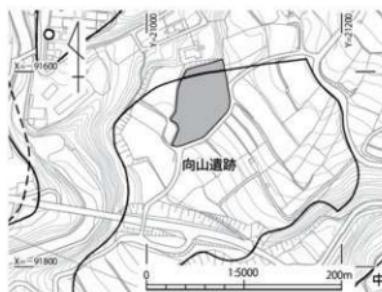
調査面積 59.121 m<sup>2</sup> (対象面積 3,230 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成29年12月18日～12月20日

調査の原因 農地改良

調査の概要 敷地内に3箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

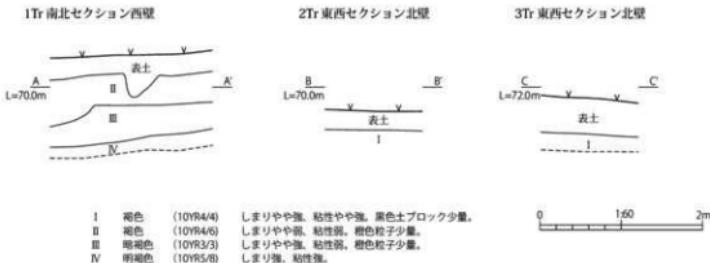
調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。長年の耕作などにより、既に土地全体が削平を受けており、埋蔵文化財が残存する可能性は低い。



第70図 向山遺跡第3地区 位置図



第71図 向山遺跡第3地区 トレンチ配置図



第 72 図 向山遺跡第 3 地区 セクション図

## 27 向山遺跡 第 4 地区 1 次調査

所在地 富士岡 2105 ほか

調査面積 18,924 m<sup>2</sup> (対象面積 1,372 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 12 月 26 日

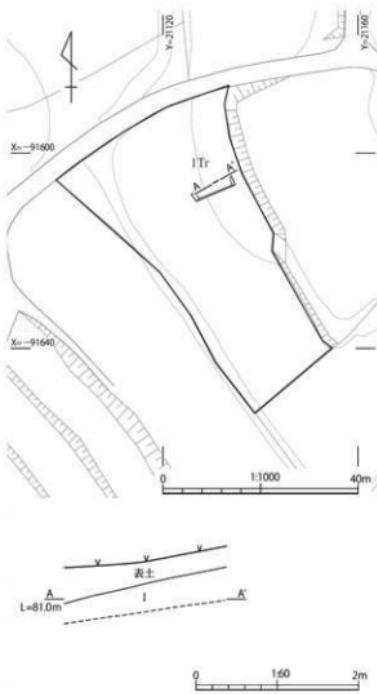
調査の原因 農地改良

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。長年の耕作などにより、既に土地全体が削平を受けており、埋蔵文化財が残存する可能性は低い。



第 73 図 向山遺跡第 4 地区 位置図



第 74 図 向山遺跡第 4 地区 トレンチ配置図・セクション図

## 28 井倉遺跡 第2地区 1次調査

所在地 中野 413-8 ほか

調査面積 33.791 m<sup>2</sup> (対象面積 1,083 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 30 年 1 月 11 日

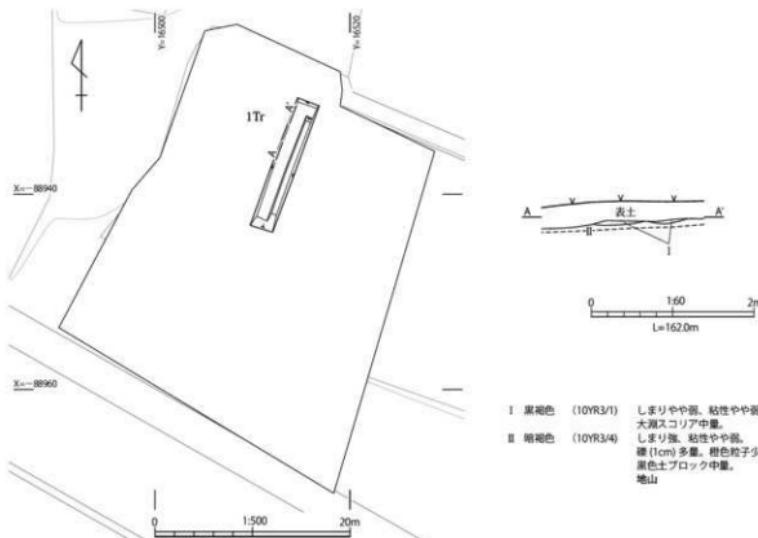
調査の原因 駐車場造成

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 地表面から 30cm ほどで地山に到達し、遺構・遺物は確認されなかつた。当該地の南東には谷が広がつていてと推測される。



第 75 図 井倉遺跡第 2 地区 位置図



第 76 図 井倉遺跡第 2 地区 トレンチ配置図・セクション図

## 29 国久保遺跡 第6地区 1次調査

所在地 国久保一丁目 2120-6

調査面積 13.402 m<sup>2</sup> (対象面積 561.45 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 30 年 1 月 19 日

調査の原因 不動産売買

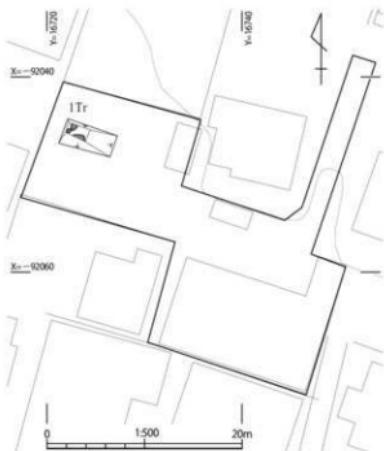
調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 奈良・平安時代と見られる 3 基の土坑と、須恵器・土師器などの遺物を確認した。出土した遺物は少量で図示には至らなかつた。

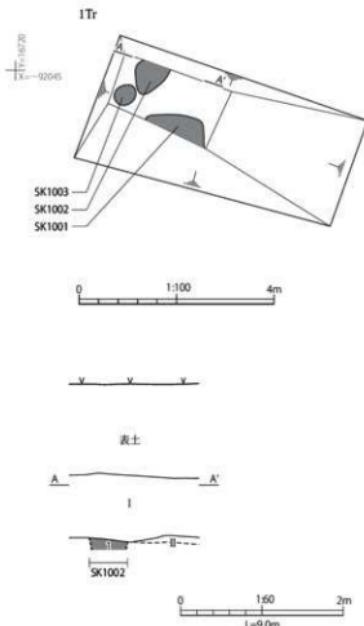
トレンチでは、地表面より約 1.9 m の深さで遺構面に到達したが、後世の搅乱の影響もあり、既に遺構面が削平されている箇所も見られる。



第 77 図 国久保遺跡第 6 地区 位置図



第 78 図 国久保遺跡第 6 地区 トレンチ配置図



第 79 図 国久保遺跡第 6 地区 トレンチ平面図・セクション図

### 30 向山遺跡 第 5 地区 1 次調査

所在地 富士岡 2104-1

調査面積 30.987 m<sup>2</sup> (対象面積 1,340 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 30 年 1 月 15 日

調査の原因 農地改良

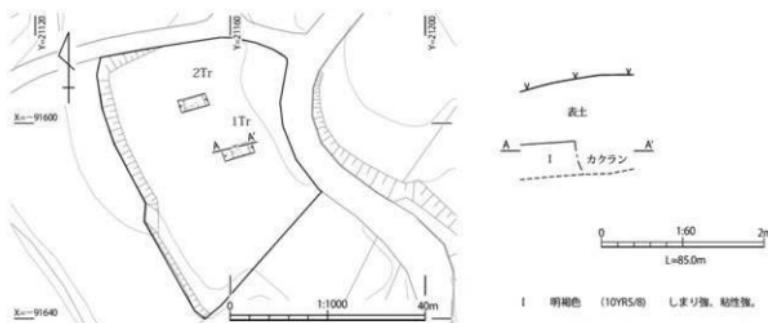
調査の概要 敷地内に 2 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。

長年の耕作などにより、既に土地全体が削平を受けており、埋蔵文化財が残存する可能性は低い。



第 80 図 向山遺跡第 5 地区 位置図



第81図 向山遺跡第5地区 トレンチ配置図・セクション図

## 31 沢東A遺跡 第20次調査地点1次調査

所在地 久沢 96-1

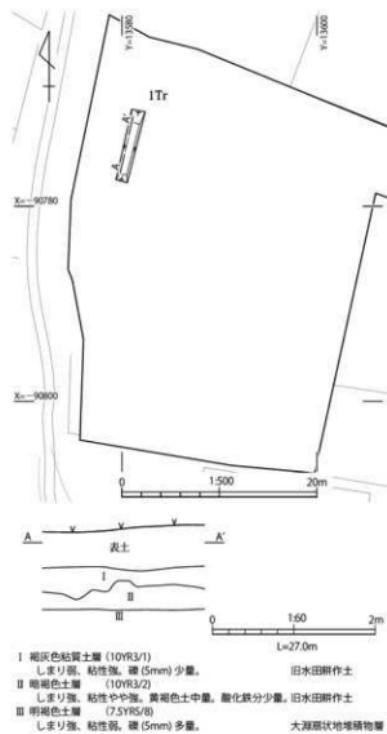
調査面積 9.701 m<sup>2</sup> (対象面積 996.08 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成30年2月6日

調査の原因 集合住宅新築

**調査の概要** 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

**調査の結果** 少量の土師器が出土したが図示には至らなかった。本来の遺構面は旧水田耕作土によって削平を受けており、遺構の残存は確認できない。遺物はこの耕作土中あるいは直下で出土しているため、遺構面を削平した際に紛れ込んだものと考えられる。



第82図 沢東A遺跡第20次調査地点 位置図

第83図 沢東A遺跡第20次調査地点  
トレンチ配置図・セクション図

### 32 東平遺跡 第43地区 2次調査

所在地 伝法 2806-3 ほか

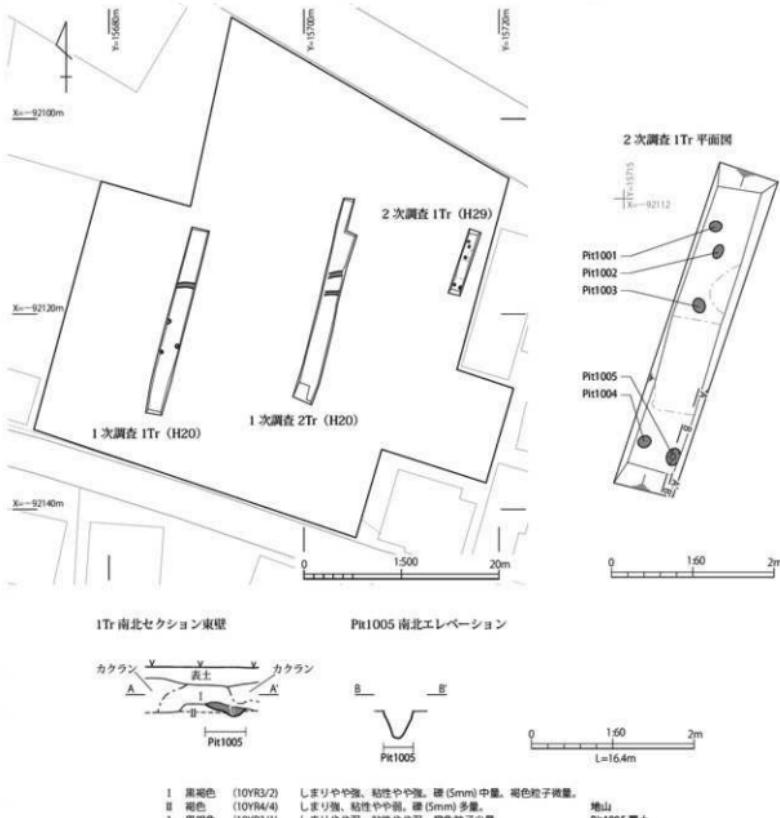
調査面積 8.592 m<sup>2</sup> (対象面積 1,432.19 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 30 年 2 月 8 日

調査の原因 不動産売買

調査の概要 敷地内に 1 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 ピットが確認された。遺物の出土がないため、時期は断定できないが、掘り込みや覆土の様子から、古代のものと推測できる。



第 85 図 東平遺跡第 43 地区 トレンチ配置図・平面図・セクション図

## 33 三日市廃寺跡（東平遺跡 第94地区 1次調査）

所在地 浅間上町11-10

調査面積 45.596 m<sup>2</sup>（対象面積 735.2 m<sup>2</sup>）

調査期間 平成30年2月19日～2月21日

調査の原因 建売住宅建設

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 奈良・平安時代の堅穴建物跡およびピットが確認され、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦が出土した。

土師器3点、灰釉陶器2点を図示した（第90図）。

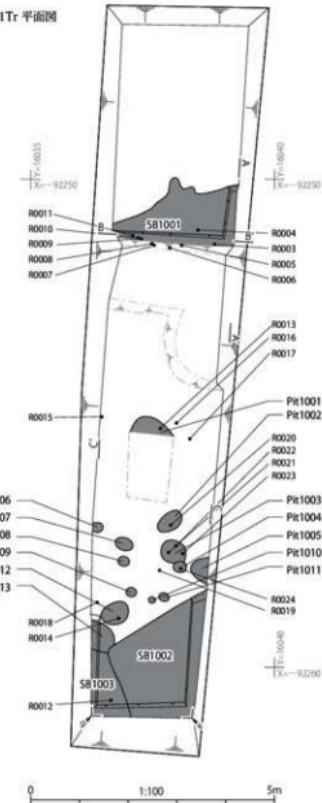


第87図 東平遺跡第94地区 トレンチ配置図

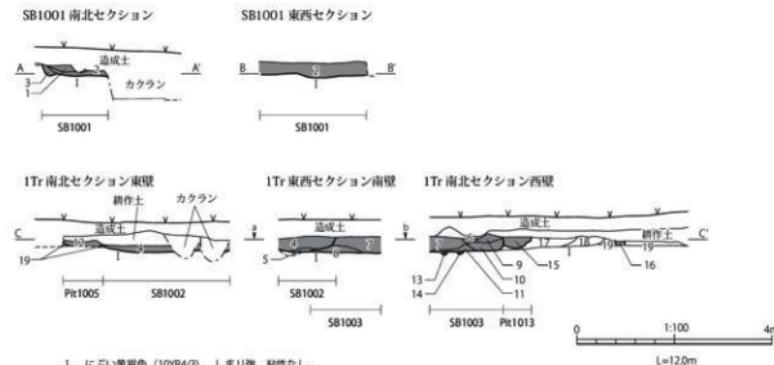


第86図 東平遺跡第94地区 位置図

1Tr 平面図

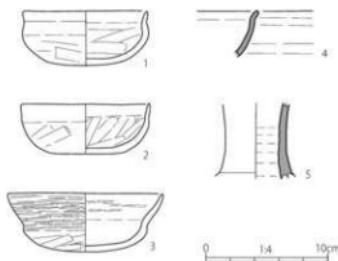


第88図 東平遺跡第94地区 トレンチ平面図



1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	しまり強。粘性なし。	SB1001 稲土
2	黒褐色	(7.5YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。褐色粒子中量。地山アロウ少量。	SB1001 稲土
3	黒褐色	(7.5YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。褐色粒子少量。	SB1001 稲土
4	黒褐色	(7.5YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。炭化材少量。小硬少量。	SB1002 稲土
5	暗褐色	(10YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。炭化材少量。	SB1002 稲土
6	暗褐色	(10YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。炭化材少量。	SB1003 稲土
7	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。粘土多量。粘土多量。	SB1003 稲土
8	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。粘土多量。地山アロウ少量。	SB1003 稲土
9	にぶい黄褐色	(10YR4/3) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。炭化材少量。	SB1003 稲土
10	褐色	(7.5YR4/6) しまりやや弱。粘性弱。地土多量。炭化材中量。地土中量。炭化材少量。	SB1003 稲土
11	暗褐色	(10YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地土多量。炭化材中量。地土中量。炭化材少量。	SB1003 稲土
12	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。地土少量。地山アロウ多量。	Pt1005 稲土
13	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。	Pt1014 稲土
14	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。	Pt1015 稲土
15	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。	Pt1013 稲土
16	暗褐色	(10YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ中量。	Pt1006 稲土
17	黒褐色	(10YR2/3) しまりやや弱。粘性弱。地山アロウ少量。褐色粒子少量。地山アロウ中量。	Pt1006 稲土
18	暗褐色	(10YR3/2) しまりやや弱。粘性弱。地土多量。炭化材少量。	Pt1006 稲土
19	黒褐色	(7.5YR3/2) しまり弱。粘性弱。	Pt1006 稲土

第 89 図 東平遺跡第 94 地区 セクション図



第 90 図 東平遺跡第 94 地区 出土遺物実測図

第 7 表 東平遺跡第 94 地区 出土遺物観察表

探査番号	R番号	写真頁	出土場所	種別	細別	法量 (cm)			焼成率	内面色調	外面色調
						口径	底径	高さ			
第 90 図 1	R0021	59 頁	Pt1003	土師器	壺	[10.0]	-	[4.4]	良好	30%	5YR7/6 棕色
第 90 図 2	R0021	59 頁	Pt1003	土師器	壺	10.4	6.0	4.0	良好	80%	7.5YR6/6 棕色
第 90 図 3	R0019	59 頁	立合崩	土師器	壺	[12.5]	-	[4.8]	良好	45%	10YR7/2 にぶい黄褐色
第 90 図 4	R0031	59 頁	表塗	灰釉陶器	碗	-	-	[3.8]	良好	-	2.5Y4/1 黄灰色
第 90 図 5	R0031	59 頁	表塗	灰釉陶器	壺	-	-	[6.2]	良好	30%	2.5Y6/1 黄灰色

## 34 滝川4古墳群 第2地区 1次調査

所在地 原田 1397番 17ほか

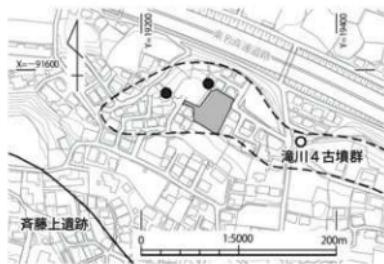
調査面積 30.516 m<sup>2</sup> (対象面積 1,206.29 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 30年 2月 22日

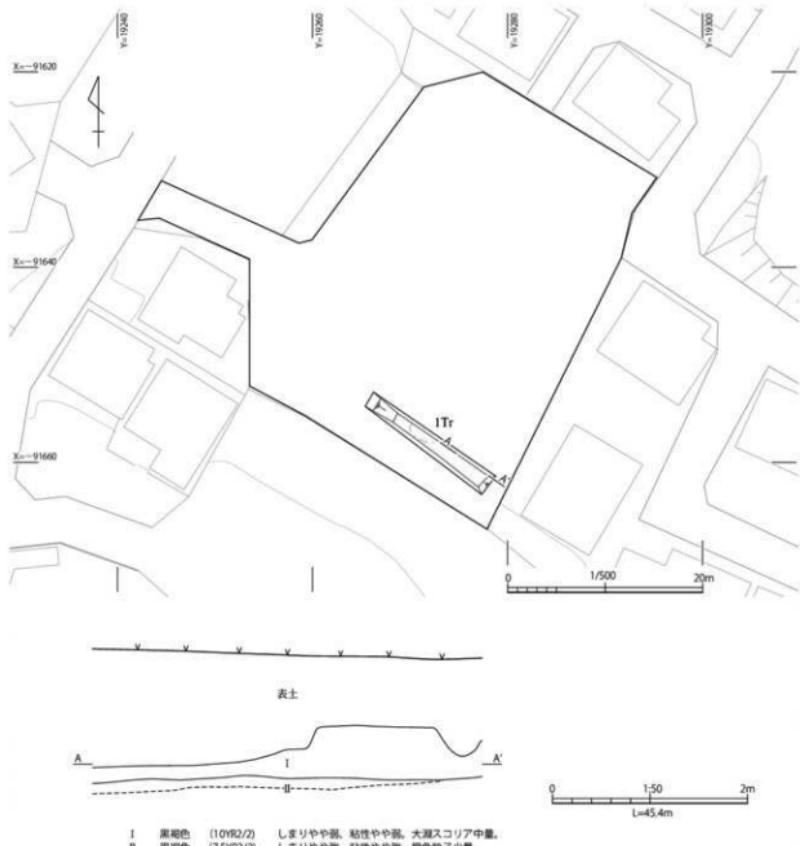
調査の原因 宅地分譲・駐車場造成

調査の概要 敷地内に1箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第91図 滝川4古墳群第2地区 位置図



第92図 滝川4古墳群第2地区 トレンチ配置図・セクション図

### 第3節 工事立会の報告

#### 1 天間沢遺跡 第48地区

所在地 天間 1011-1、1011-4、1011-5、1045-5 の内

調査面積 87.252 m<sup>2</sup> (対象面積 1,454.73 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29 年 12 月 21 日～12 月 22 日

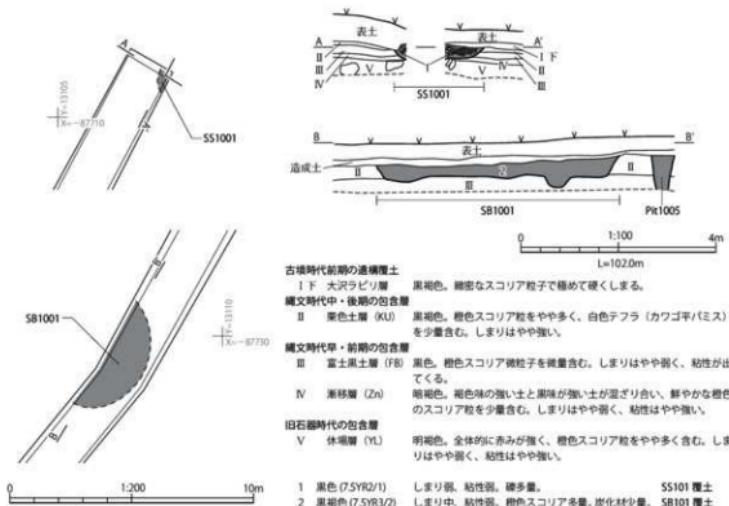
調査の概要 平成 29 年 8 月 4 日事業者より法 93 条に基づき、「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出された。8 月 21 日、静岡県教育委員会より、工事中の立会いのもと工事を着工するよう指示がなされた。

敷地全体は盛土工事であるため、敷地東側の擁壁設置工事において工事立会をおこなった。

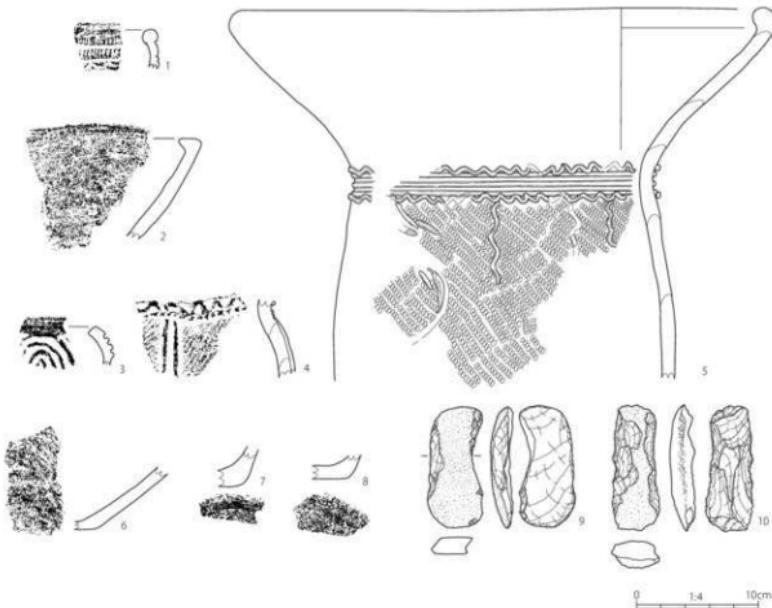
調査の結果 縄文時代中期後半を中心とした縄文土器片が出土した。また工事掘削範囲の壁面精査により、竪穴建物跡 1 軒 (SB1001) と集石土坑 1 基 (SS1001) の存在を確認した。SB1001 に伴うと考えられる遺物は多いものの、集石土坑 (SS1001) からは出土遺物がなく、詳細な時期は明らかでない。



第93図 天間沢遺跡第48地区工事立会 対象範囲配置図



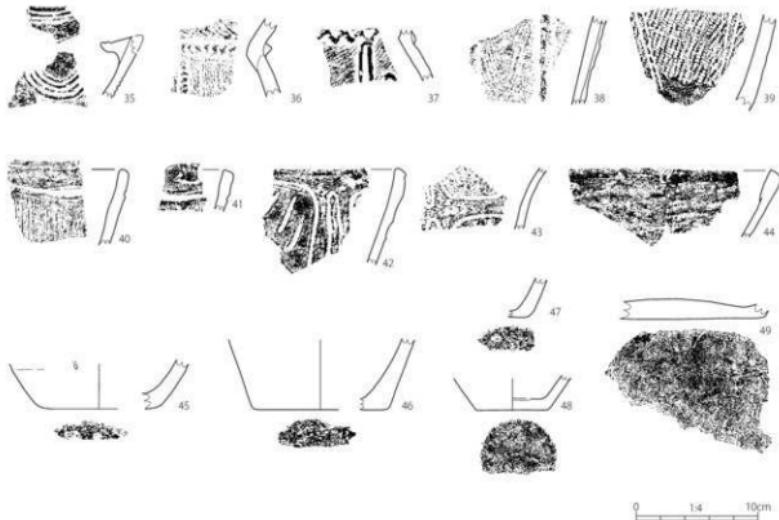
第94図 天間沢道路第48地区工事立会 平面図・セクション図



第95図 天間沢道路第48地区工事立会 出土遺物実測図



第96図 天間沢遺跡第48地区工事立会 出土遺物実測図2



第97図 天間沢遺跡第48地区工事立会 出土遺物実測図 3

第8表 天間沢遺跡第48地区工事立会 出土遺物観察表

探査番号	R番号	写真	出土地場	種別	細別	出土量 (cm)			現存率	内面色調	外面色調
						口径	底径	高さ			
第95回1	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	縄内	-	-	(3.0)	良好	-	SYR6/8 棕色
第95回2	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	曾利I～II	-	-	(8.1)	良好	-	SYR4/4 にぶい赤褐色
第95回3	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	曾利II	-	-	(3.1)	良好	-	SYR4/2 灰褐色
第95回4	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	曾利II	-	-	(6.2)	良好	-	SYR6/4 にぶい褐色
第95回5	R0003	60頁	SB1001	縄文土器	曾利II	[42.5]	-	(30.5)	良好	-	SYR4/3 にぶい赤褐色
第95回6	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	底部	-	-	(5.0)	良好	-	SYR3/3 黑褐色
第95回7	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	底部	-	-	(3.2)	良好	-	SYR6/4 にぶい褐色
第95回8	R0005	60頁	SB1001	縄文土器	底部	-	-	(1.9)	良好	-	SYR1/6 棕色
第96回11	R0001	61頁	Tr	縄文土器	縄内	-	-	(8.5)	良好	-	7.SYR4/2 灰褐色
第96回12	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	縄内	-	-	(5.8)	良好	-	SYR3/3 黑褐色
第96回13	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.4)	良好	-	SYR3/1 黑褐色
第96回14	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(8.2)	良好	-	7.SYR4/2 灰褐色
第96回15	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.2)	良好	-	SYR4/3 にぶい赤褐色
第96回16	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(6.2)	良好	-	7.SYR3/4 棕褐色
第96回17	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	[20.9]	-	(1.9)	良好	-	SYR3/1 黑褐色
第96回18	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.1)	良好	-	SYR6/6 棕色
第96回19	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(9.2)	良好	-	SYR3/1 黑褐色
第96回20	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(6.2)	良好	-	SYR5/4 にぶい赤褐色
第96回21	R0001	61頁	Tr	縄文土器	井戸尻	-	-	(7.7)	良好	-	SYR4/4 赤褐色
第96回22	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.3)	良好	-	SYR3/3 棕褐色
第96回23	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(7.3)	良好	-	SYR5/2 灰褐色
第96回24	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.6)	良好	-	7.SYR5/6 明赤褐色
第96回25	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.7)	良好	-	SYR6/4 にぶい褐色
第96回26	R0002	61頁	2Tr	縄文土器	井戸尻	-	-	(5.0)	良好	-	7.SYR4/6 棕色
第96回27	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(7.0)	良好	-	SYR4/4 にぶい赤褐色
第96回28	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(8.0)	良好	-	7.SYR3/2 黑褐色
第96回29	R0004	61頁	工事立会	縄文土器	井戸尻	-	-	(4.6)	良好	-	SYR4/1 灰褐色
第96回30	R0003	61頁	工事立会	縄文土器	加曾利E2	-	-	(4.2)	良好	-	2.SY4/6 赤褐色
第96回31	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利I～II	-	-	(6.2)	良好	-	2.SY4/4 赤褐色
第96回32	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利I～II	-	-	(7.5)	良好	-	SYR4/4 にぶい赤褐色
第96回33	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利I～II	-	-	(10.5)	良好	-	SYR4/3 にぶい赤褐色
第96回34	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利I～II	-	-	(8.0)	良好	-	SYR5/1 にぶい赤褐色

探査番号	R番号	写真 図版	出土場所	種別	細別	法量(cm)			焼成	保存率	内面色調	外面色調
						口径	底径	器高				
第97回35	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅱ	-	-	(5.0)	良好	-	SYR4/4	にぶい赤褐色
第97回36	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅲ	-	-	(5.2)	良好	-	SYR5/2	灰褐色
第97回37	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅳ	-	-	(4.0)	良好	-	SYR6/4	にぶい赤褐色
第97回38	R0002	62頁	2Tr	縄文土器	曾利Ⅲ～IV	-	-	(7.2)	良好	-	7.5TR4/2	灰褐色
第97回39	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅲ～IV	-	-	(7.9)	良好	-	7.5YR6/3	にぶい褐色
第97回40	R0004	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅳ	-	-	(6.0)	良好	-	SYR6/5	にぶい褐色
第97回41	R0004	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅴ	-	-	(3.3)	良好	-	SYR4/2	灰褐色
第97回42	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅴ	-	-	(7.7)	良好	-	7.5YR6/4	にぶい褐色
第97回43	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	曾利Ⅳ	-	-	(4.8)	良好	-	7.5YR3/1	灰褐色
第97回44	R0004	62頁	工事立会	縄文土器	不明	-	-	(5.4)	良好	-	7.5YR6/4	にぶい褐色
第97回45	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	底部	-	-	(4.0)	良好	-	SYR3/3	暗赤褐色
第97回46	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	底部	-	-	(5.9)	良好	-	7.5YR3/1	灰褐色
第97回47	R0001	62頁	1Tr	縄文土器	底部	-	-	(3.0)	良好	-	2.5Y3/1	暗赤褐色
第97回48	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	底部	-	-	(2.0)	良好	-	SYR3/4	暗赤褐色
第97回49	R0003	62頁	工事立会	縄文土器	底部	-	-	(1.7)	良好	-	SYR5/8	暗赤褐色

探査番号	R番号	写真 図版	出土場所	種別	細別	法量(cm)			重さ (g)
						長さ	幅	厚さ	
第95回9	R0005	60頁	SB1001	石製品	打製石斧	9.85	4.55	1.85	116.5
第95回10	R0005	60頁	SB1001	石製品	打製石斧	10.28	3.85	2.05	102.7

## 2 天間沢遺跡 第49地区

所在地 天間 988-15

調査面積 23.106 m<sup>2</sup> (対象面積 488.70 m<sup>2</sup>)

調査期間 平成 29年 12月 1日

平成 30年 1月 25日

調査の原因 建売住宅新築工事

調査の概要 清浄槽の埋設工事において工事立会をおこなった。

調査の結果 縄文土器が出土し、2点図示した。



第98図 天間沢遺跡第49地区工事立会 出土遺物実測図

第9表 天間沢遺跡第49地区工事立会 出土遺物観察表

探査番号	R番号	写真 図版	出土場所	種別	細別	法量(cm)			焼成	保存率	内面色調	外面色調
						口径	底径	器高				
第98回1	R0005	62頁	-	縄文土器	(後期)	-	-	(5.2)	良好	-	7.5YR7/4	にぶい褐色
第98回2	R0005	62頁	-	縄文土器	加曾利B	-	-	(4.2)	良好	-	7.5YR5/3	にぶい褐色

埋蔵文化財包蔵地の範囲や遺跡種類等の内容については、確認調査や現地踏査により得られた情報に基づいて、随時、変更や新規登録を行っている。

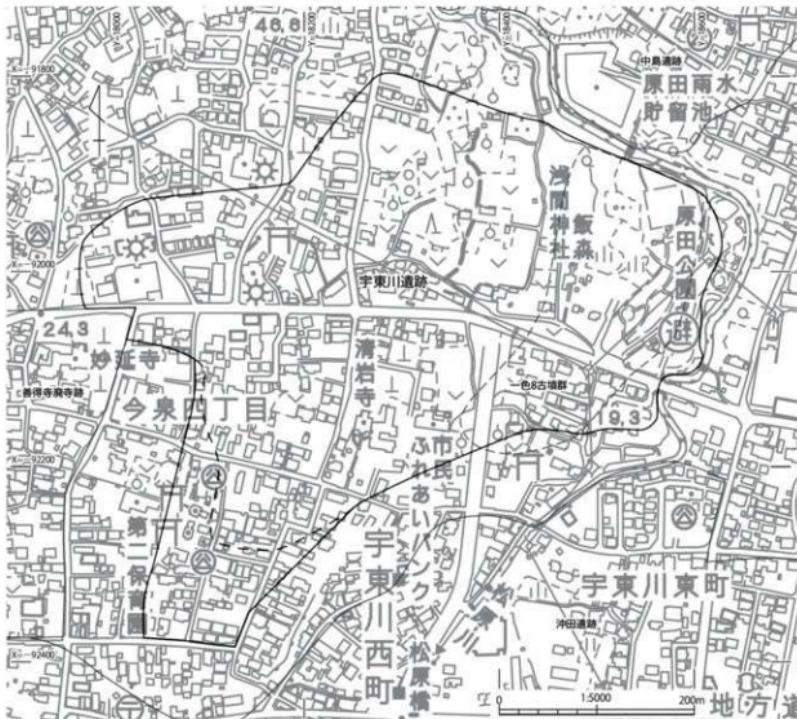
平成29年1月から平成30年12月の間に行われた埋蔵文化財包蔵地の登録内容変更について、ここで報告する。

#### ・登録内容の変更

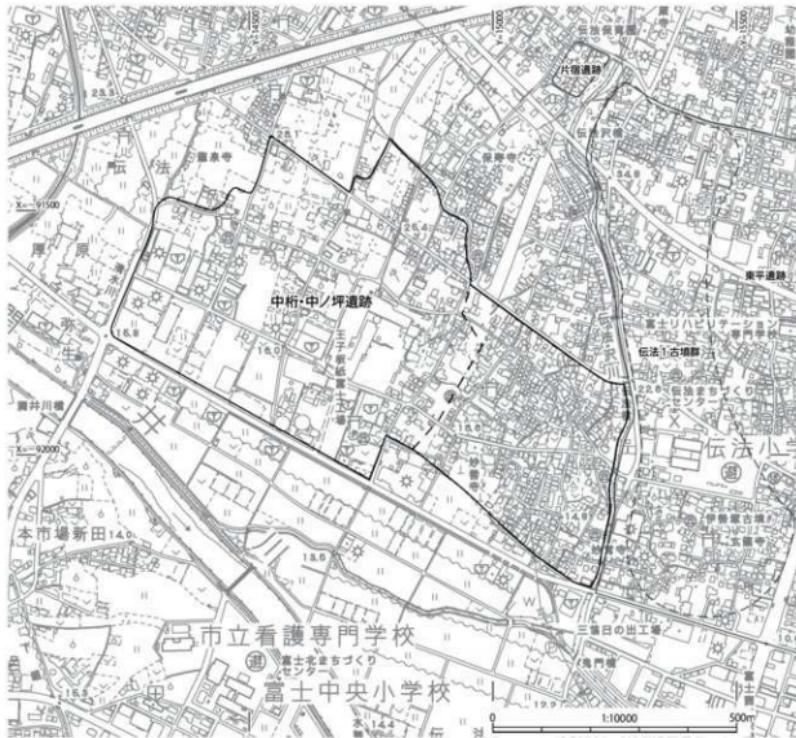
遺跡番号	遺跡名	変更内容	変更年月日
50	宇東川遺跡	包蔵地範囲を拡大（第99図参照）	H29.11.30
128	中村・中ノ坪遺跡	包蔵地範囲を拡大（第100図参照）	H30.8.3
43	三日市魔寺跡	遺跡の種類「社寺跡」→「集落跡・社寺跡」	H30.11.12
42	東平遺跡	遺跡の時代「古墳・奈良・平安」→「古墳・奈良・平安・中世」	H30.12.21

#### ・地図の凡例

範囲変更遺跡について、新規範囲を実線で、旧範囲を破線で、変更しない部分については、実線のみで示す。



第99図 宇東川遺跡の範囲変更



第100図 中野・中ノ坪跡の範囲変更

## 1 東平遺跡 第86地区



1. 重機掘削の様子（北から）



2. 1Tr 北側（南西から）



3. 1Tr（南西から）

## 2 東平遺跡 第19地区



1. 4Tr（東から）



2. 3Tr SD101（南から）



出土遺物

3 比奈 4 古墳群第 1 地区



1. 1Tr (南東から)

4 川窓遺跡第 3 地区



1. 1Tr (南東から)

5 東平遺跡第 88 地区



1. 1Tr (南東から)

6 天間沢遺跡第 46 地区



1. 1Tr (南東から)

7 中吉原宿遺跡第 12 地区

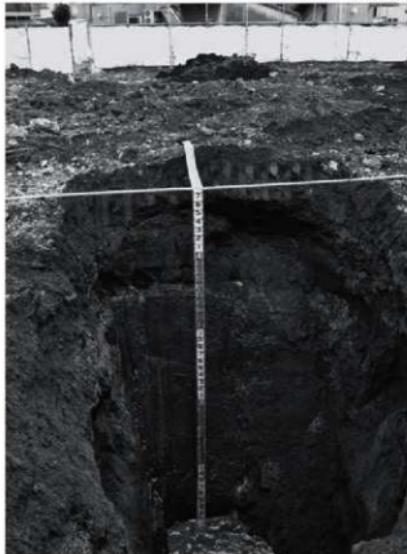


1. 1Tr (北から)

8 沖田遺跡第 157 次調査地点



1. 1Tr (西から)



2. 2Tr (西から)

9 天間沢遺跡第 47 地区



1. 重機掘削の様子 (北西から)



2. 1Tr (西から)

11 東平遺跡第 89 地区



1. 1Tr (南西から)



2. 1Tr 北壁セクション (南から)

10 富士塚遺跡第1地区



1. 富士山と富士塚（南から）



2. 富士塚（上空から）

## 10 富士塚遺跡第1地区



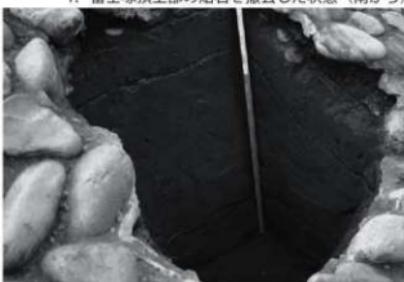
1. 富士塚頂上部の貼石を撤去した状態（南から）



2. 1Tr（南東から）



3. 2Tr・3Tr（北東から）



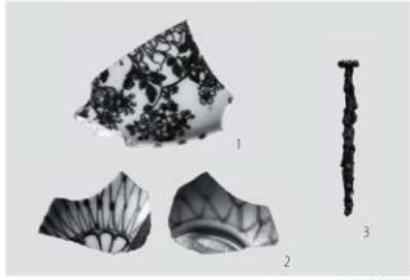
4. 2Tr 北部分（北東から）



5. 3Tr（南東から）



6. 写真測量作業風景（東から）



出土遺物

12 天間沢遺跡第48地区



1. 1Tr (南から)



2. 2Tr (南東から)

13 天間沢遺跡第49地区



1. 1Tr (北から)

14 東平遺跡第90地区



1. 1Tr・2Tr (南西から)



2. 1Tr SB101 (東から)

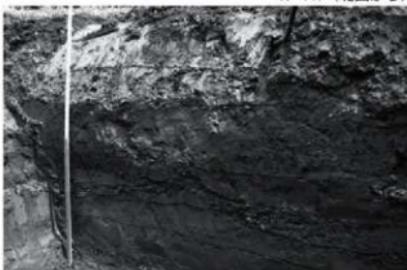


3. 3Tr (南西から)

15 吉添遺跡第2地区



1. 1Tr (北西から)



2. 4Tr 東壁セクション (西から)

17 宇東川遺跡X地区



1. 1Tr (北西から)



2. 2Tr (南西から)

16 富士岡1古墳群第17地区



1. 重機掘削の様子 (北東から)



2. 2Tr (南西から)



3. 1Tr (西から)

18 東平遺跡第91地区



1. 1Tr 遺構検出（南東から）

19 宇東川遺跡Y地区



1. 2Tr 遺構検出（北西から）



1

出土遺物



1

出土遺物

20 善得寺廃寺跡第4地区



1. 重機掘削の様子（南西から）



2. 1Tr（南西から）

21 滝川1古墳群第2地区



1. 2Tr (西から)



2. 3Tr (南から)



3. 4Tr (北から)



1

2

出土遺物

22 一色9古墳群第1地区



1. 1Tr 北壁 (南東から)



2. 3Tr 東壁 (西から)



3. 5Tr 北壁 (南西から)



4. 7Tr 北壁 (南東から)

23 東平遺跡第 92 地区



1. 1Tr (南東から)



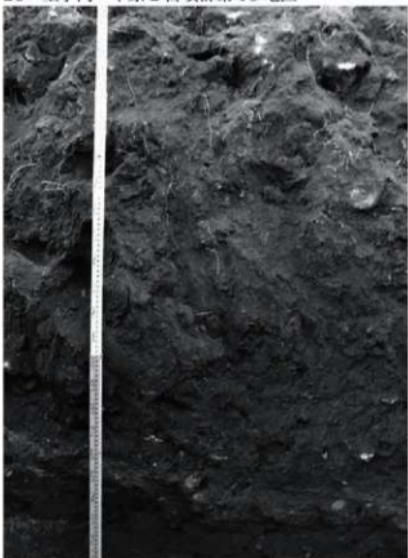
2. 1Tr 西壁 (東から)

24 東平遺跡第 93 地区



1. 1Tr (北西から)

25 土手内・中原 2 古墳群第 15 地区



1. 2Tr 南壁 (北から)



2. 1Tr 北壁 (南から)



2. 5Tr 北壁 (南東から)

26 向山遺跡第3地区



1. 重機掘削の様子（北から）

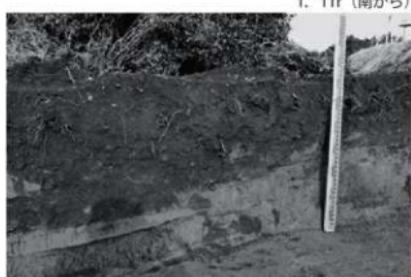
27 向山遺跡第4地区



1. 1Tr (南から)



2. 1Tr (南東から)



2. 1Tr 北壁 (南西から)

28 井倉遺跡第2地区



1. 1Tr (北東から)

29 国久保遺跡第6地区



1. 1Tr (東から)

30 向山遺跡第5地区



1. 1Tr (南から)



2. 2Tr (南西から)

32 東平遺跡第43地区



1. 1Tr 遺構検出 (北から)

31 沢東A遺跡第20次調査地点



1. 1Tr (北から)



2. 1Tr 東壁 (西から)

34 滝川4古墳群第2地区



1. 1Tr (南西から)

33 三日市廃寺跡（東平遺跡第 94 地区）



1. 1Tr 遺構検出（南から）



2. 1Tr SB1001 検出（南西から）



3. 1Tr SB1002・SB1003・Pit1013 検出（北東から）



1



2



3



4

5

出土遺物

工事立会 天間沢遺跡第48地区



1. 工事掘削範囲全景（南から）



2. SB1001 検出（北東から）



3. SS1001 検出（南西から）



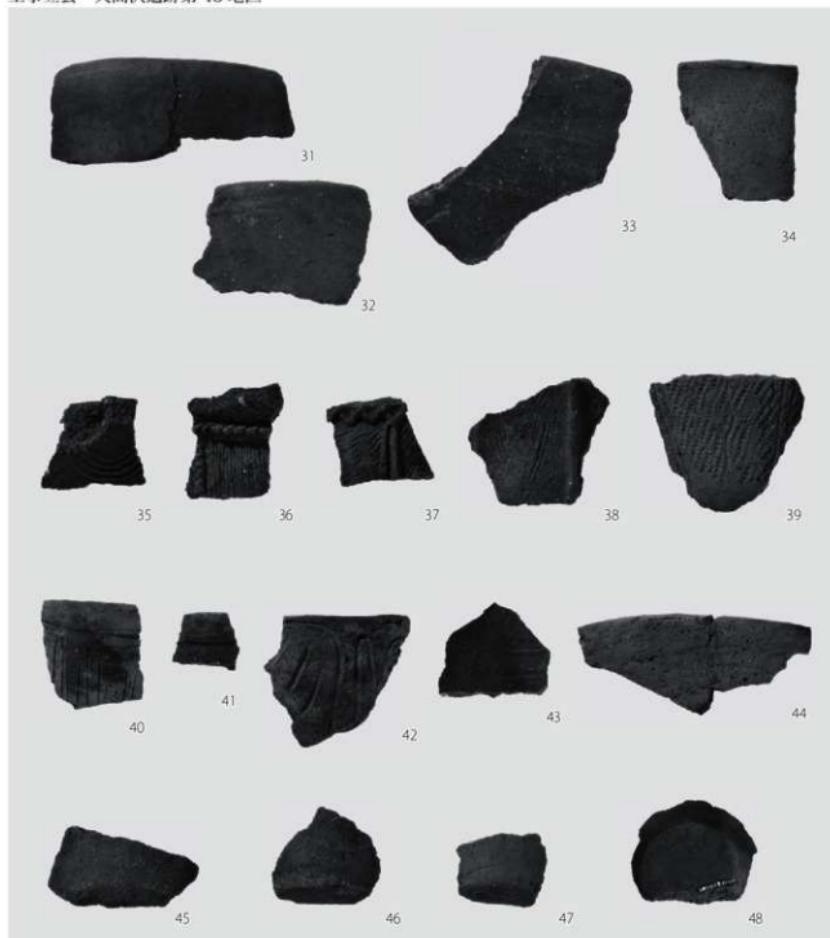
出土遺物

## 工事立会 天間沢遺跡第48地区



出土遺物

工事立会 天間沢遺跡第48地区



工事立会 天間沢遺跡第49地区



## 第2章 東平遺跡第87地区の調査

### 1 調査の概要

#### (1) 調査に至る経緯

株式会社 平和堂土地（以下、不動産業者）は、富士市の公売により富士市伝法字西平 2595 番 1 ほか（対象面積 899.72 m<sup>2</sup>）を取得し、宅地分譲を行う開発者への転売を計画した。しかし、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「東平遺跡」に該当することから、その前に埋蔵文化財の有無を明らかにすることを希望し、富士市教育委員会（以下、市教育委員会）の補助執行機関である富士市民部文化振興課と埋蔵文化財の対応について協議を開始した。

当該地の南側（東平遺跡第 69 地区、平成 26 年度確認調査）では、奈良時代の堅穴建物跡 4 軒が検出されている。

平成 29 年 3 月 24 日、不動産業者から「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」および「発掘調査承諾書」が市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて文化振興課は、4 月 11 日、文化財保護法第 99 条に基づく書類「発掘調査について」を静岡県教育委員会教育長（以下、県教育長）宛に提出し（富士文發第 30 号）、文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。

#### (2) 確認調査

確認調査は平成 29 年 4 月 18 日に行った。敷地内に 2 本のトレンチ（総掘削面積 54.799 m<sup>2</sup>）を設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構および遺物の検出に努めた。

その結果、奈良時代のものとみられる土坑・ピット 35 基（Pit101～135）と溝状遺構 1 条（SD101）を検出した。遺物は Pit101 から土師器 1 点が出土し、4 月 19 日、富士警察署長宛に「埋蔵物の発見届」（富士文發第 72 号）を、県教育長宛に「埋蔵文化財保管証」（富士文發第 72-2 号）を提出した。これは 4 月 28 日、県教育長により埋蔵文化財の認定を受けている（教文第 225 号）。

4 月 25 日、不動産業者ならびに県教育長宛に「発掘調査結果概要」（富士文發第 92 号）を提出した。

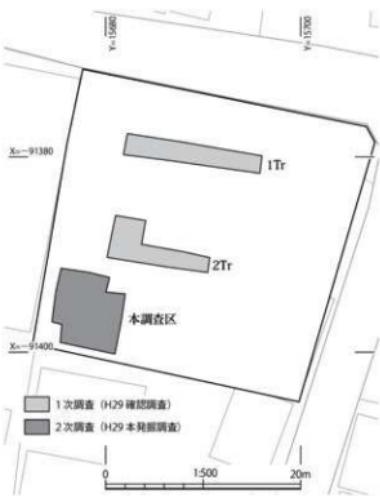
#### (3) 本発掘調査

ホームポジション株式会社（以下、事業者）は、不動産業者より当該地を取得し建設個人住宅の建設工事を計画し、文化振興課と埋蔵文化財の対応について協議を開始した。

確認調査の結果に基づき、遺跡の保護を前提に協議したが、一部土壤改良工事を行う箇所については遺跡の現地保存が困難な可能性が示された。



第101図 東平遺跡第87地区 位置図



第102図 確認調査トレンチおよび本調査区配置図

5月12日、事業者より市教育委員会教育長宛に、「埋蔵文化財本発掘調査見積依頼書」が提出された。また、文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出書」が提出され、市教育委員会はこれを県教育委員会に進呈した。

5月19日、県教育委員会教育長から、遺跡の保護が図れない部分について本発掘調査を実施するよう指示が通知された（教文第356号の2）。これを受けて、事業者からの委託により市教育委員会が本発掘調査を実施することとなった。

5月24日、事業者と富士市長、市教育長の3者間で文化財調査（発掘作業および整理作業）に関する協定が締結され、これに基づいて同日、事業者と富士市長の2者間で文化財調査に関わる業務委託契約が締結された。

5月25日、文化財保護法第99条に基づく「発掘調査について」を県教育長に提出し（富市文第214号）、文化振興課職員による記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は5月29日から6月1日にかけて行った。本調査を指示された敷地の南西部分に調査区（掘削面積48.194m<sup>2</sup>）を設定し、重機による掘削後、人力による精査で遺構を検出した。

その結果、土坑2基・ピット8基を検出、完掘し、測量・写真撮影等による記録保存を行った。

遺物は少量の土師器が出土し、6月5日、富士警察署長宛に「埋蔵物の発見届」（富市文発第230号）を、県教育長宛に「出土品保管証」（富市文発第230-2号）を提出した。これは、6月13日、県教育長により埋蔵文化財の認定を受けている（教文第534号）。

6月1日、事業者に対し発掘作業に関わる業務の完了報告を行い（富市文発第229号）、6月21日、事業者ならびに県教育長宛に「発掘調査結果概要」（富市文発第315号）を提出した。

その後、業務委託金の精算をもって、東平遺跡第87地区的文化財調査に関わる業務委託契約は終了した。

本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて市教育委員会にて保管している。

#### (4) 整理作業

現地調査の終了後、測量図面など記録類の整理・編集、遺物の洗浄・注記・接合検討、文章執筆などの作業を行い、これらを編集して報告書を作成した。東平遺跡第87地区の埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

#### (5) 調査の体制

東平遺跡第87地区に関する発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山田 幸男
調査担当	市民部	部長	高野 浩一
	文化振興課	課長	久保田伸彦
	文化財担当	統括主幹	植松 良夫
		主幹	石川 武男
	埋蔵文化財調査室	主任	佐藤 祐樹
		事補	伊藤 愛
		臨時職員	服部 孝信
			小島 利史

## 2 調査の成果

### (1) 確認調査

確認調査では、東西方向のトレーナーを2本（1Tr, 2Tr）設定し、重機による表土掘削後、人力による精査を行った。その結果、奈良時代のものとみられる溝状遺構1条（SD101）、土坑・ピット35基（Pit101～135）を検出した。遺物はPit101から土師器1点が出土地したが、図示には至らなかった。

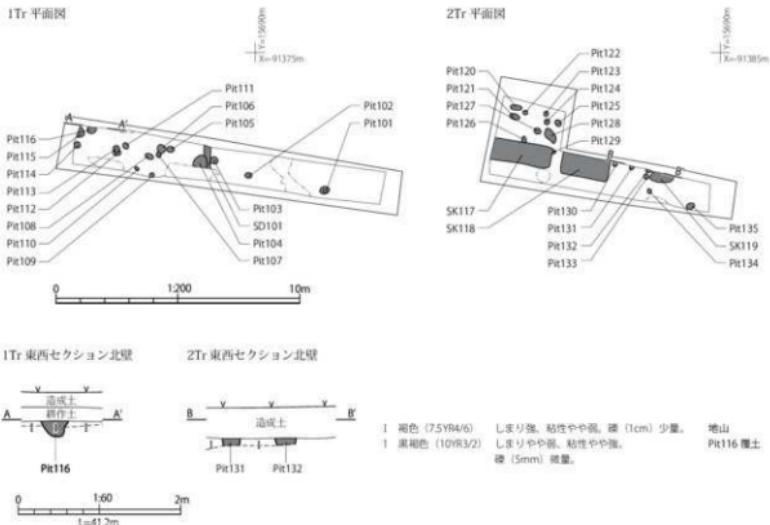
散漫な状況ではあるものの、敷地内に奈良時代の遺構・遺物が存在することが確認された。

### (2) 本発掘調査

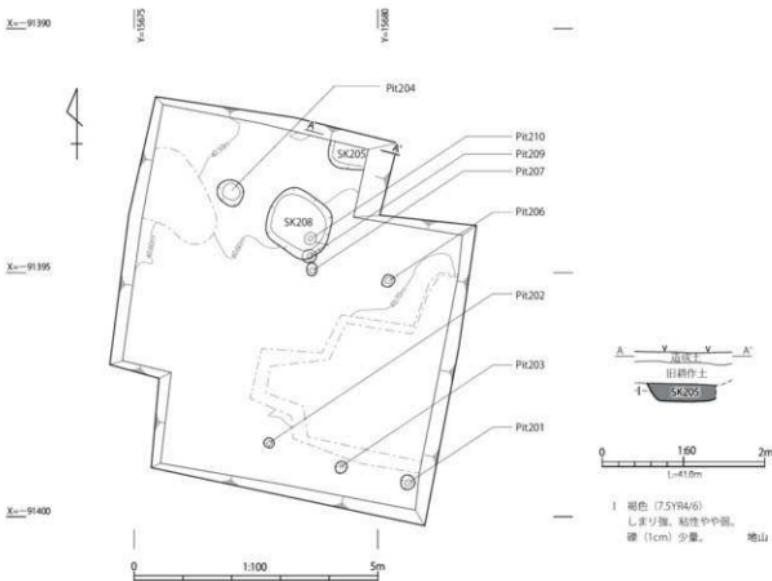
本発掘調査では、敷地南西部分に調査区（掘削面積48.194m<sup>2</sup>）を設定し、調査を行った。

その結果、10基の土坑・ピット（Pit・SK201～210）を検出、完掘し、記録保存を行った。土坑・ピットの規模等の詳細は第10表に示す。

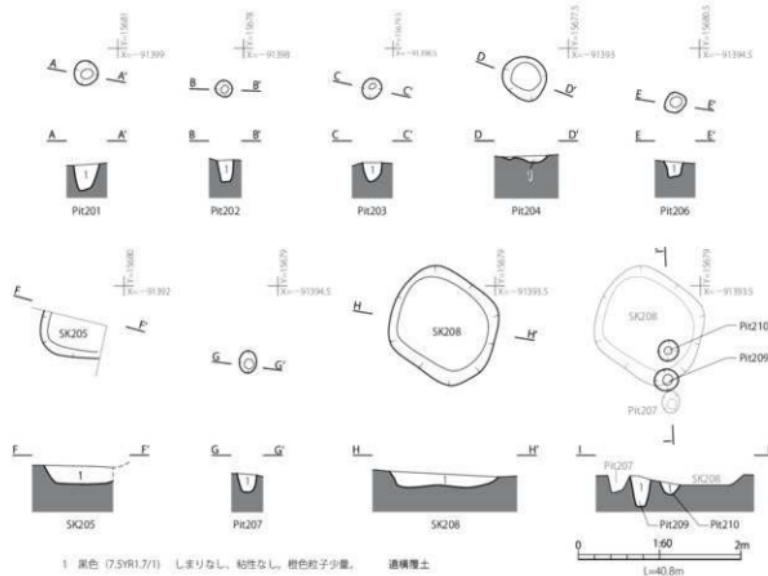
遺物は、少量の土師器が出土したが、図示には至らなかった。



第103図 確認調査トレーン平面図・セクション図



第104図 本調査区全体図



第105図 土坑・ピット 平面図・セクション図

第10表 土坑・ピット 道構概要一覧表

道構番号	道構種別	規模(cm)			断面形	出土遺物	土層	切り合い(古→新)
		長軸	短軸	深さ				
Pit201	ピット	30	30	34	U字形	なし	A	なし
Pit202	ピット	20	20	29	U字形	なし	A	なし
Pit203	ピット	26	21	24	U字形	なし	A	なし
Pit204	ピット	53	52	14	浅いU字形	なし	A	なし
SK205	土坑	(80)	(54)	20	浅い逆台形	なし	A	なし
Pit206	ピット	26	24	19	U字形	なし	A	なし
Pit207	ピット	28	22	22	U字形	なし	A	なし
SK208	土坑	131	133	19	浅いU字形	なし	A	Pit209 → SK208
Pit209	ピット	31	28	35	U字形	なし	A	Pit209 → SK208
Pit210	ピット	29	28	17	U字形	なし	A	Pit210 → SK208

土層 A 黒色土(7.5YR1.7/1) しまりなし、粘性なし。径2mm程度のオレンジ色の粒子を少量含む。

# 第3章 中吉原宿遺跡第11地区の調査

## 第1節 中吉原宿遺跡の概要

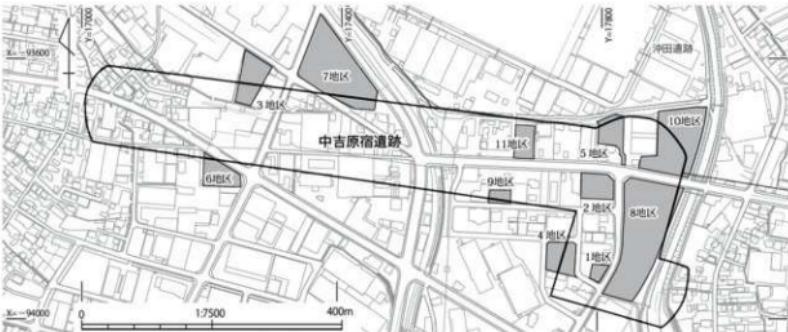
現在、富士市の中心市街地の一つである吉原は、東海道の原宿と蒲原宿の間に位置し、東海道14番目の宿場として栄えた。しかし、その場所は、台風と高潮による被害を絶えず受け、元吉原宿、中吉原宿、新吉原宿と、およそ40年ごとに移転してきた。

元吉原宿自体も、田子の浦港東側の「阿字神社」北側にあった「見附」の宿が、風波の被害を受けて今井と呼ばれる場所に作られ、慶長6年(1601)に徳川幕府から東海道の宿場に指定された場所である。しかし、砂丘上に立地するため、砂山が駅舎を埋めてしまい、寛永16～17年(1639～1640)にかけて中吉原宿に所替をした。中吉原宿は元吉原宿から依田原村、左富士をすぎた場所にあたる。しかし、これまでよりも内陸に移動したものと安定した

宿場経営をすることが出来ず、延宝8年(1680)閏8月6日に襲来した江戸時代最大級の台風による高潮の被害を受け壊滅した。

平成11年の第5地区における発掘調査では、延宝8年に近い年代を示す遺物は見られなかったものの、17世紀中葉における良好な廃棄資料を得ることができ、土層検討からも高潮の存在を考古学的に証明する事が出来た(富士市教育委員会2002)。

天和元年(1681)、吉原宿は現在の場所(新吉原宿遺跡)に所替され、現在まで続いている。しかし、その後、高潮などの被害に全くあわなかつたわけではなく、元禄12年(1699)にも町の一部が浸水被害を受けている。



第106図 中吉原宿遺跡 調査履歴図

第11表 中吉原宿遺跡 調査履歴一覧表

調査年度	地区名	調査期間	調査内容	調査方法	発見品目	調査範囲
H04	1地区	武蔵	八代町63-4	古墳復元	19930206	なし
H06	2地区	武蔵	八代町28-2	古墳・多治木壁	19900812	なし
H06	3地区	武蔵	御正町46-5	古墳	19900920～19940922	なし
H11	4地区	武蔵	八代町28-2	古墳・多治木壁	19900920～19940922	なし
H11	5地区	武蔵	八代町28-2	古墳・多治木壁	19900920～19940925	古墳・多治木壁・土器・遺物
H11	6地区	武蔵	八代町393-5	不動産実査	20041218～20041222	なし
H12	7地区	武蔵	八代町158-4 (1975)	古墳復元・古墳	20031206～20131207	なし
H12	8地区	神奈	八代町212-2	防災施設等復元	20140312～20140315	道界・築堤
H12	9地区	神奈	八代町12	不動産実査	20140320	なし
H12	10地区	神奈	八代町206-2	不動産実査	20160425～20160428	江戸・柳沢・ジット・丹波不明遺構
H12	11地区	神奈	八代町379-4	不動産実査	20170420～20170425	築堤・古墳・遺物
H12	本宿裏	本宿裏	八代町379-4	古墳探査	20170428～20170503	築堤・築堤・防風林・販賣店・木製品

参考書：A「江戸上りの遺跡と歴史的資源地図帳」-平成4・12年版-1富士市郷土文化財調査報告 第53集 (2002)

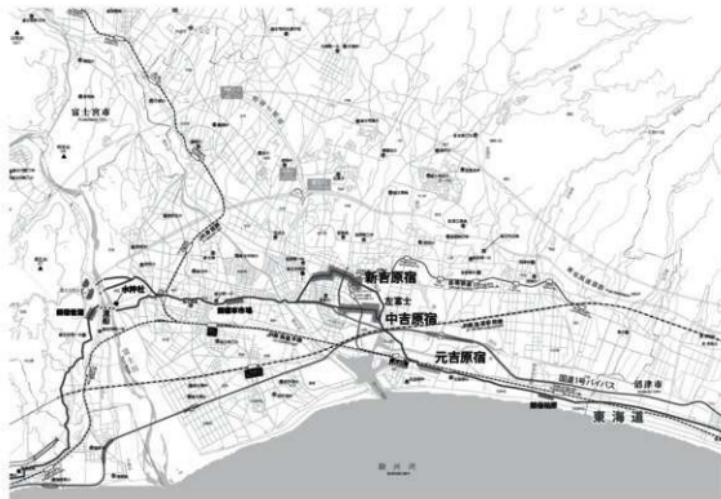
B「吉原宿遺跡 第5地区発掘調査報告書」(2002)

C「平成24年度 富士市内古跡発掘調査報告書」(2012)

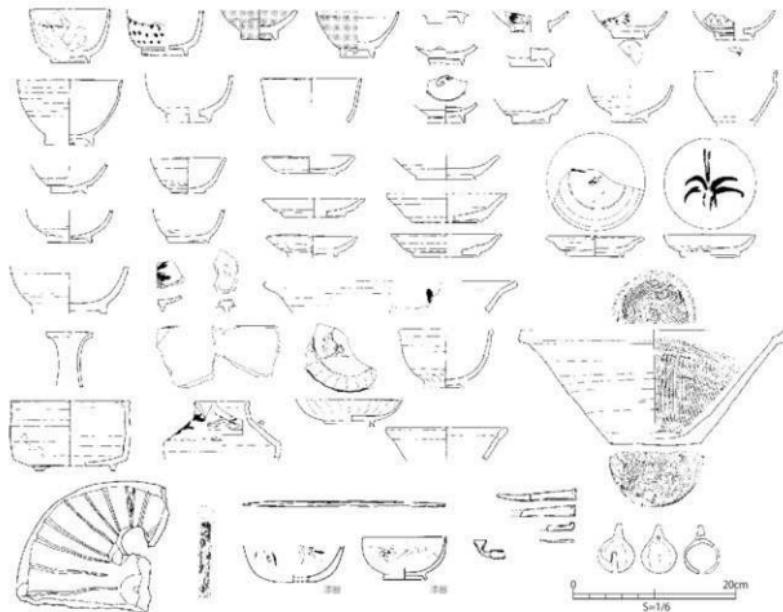
D「富士市内古跡発掘調査報告書」-平成24・25年版-1富士市郷土文化財調査報告 第47集 (2013)

E「富士市内古跡発掘調査報告書」-平成26・27年版-1富士市郷土文化財調査報告 第40集 (2017)

F「富士市内古跡発掘調査報告書」-平成28年版-1富士市郷土文化財調査報告 第62集 (2017)



第107図 吉原宿の変遷図



第108図 中吉原宿遺跡第5地区 出土遺物

## 1 調査に至る経緯

株式会社池田商事（以下、事業者）は富士市八代町 3719-1 ほか（1,509 m<sup>2</sup>）において、倉庫建設を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包藏地「中吉原宿遺跡」の範囲内に位置することから、富士市教育委員会（以下、市教育委員会）の補助執行機関である富士市市民部文化振興課と埋蔵文化財の対応について協議を開始した。

当該地の周辺では近世の宿場「吉原宿」に伴うと考えられる遺構や遺物が検出されており、当該地においても遺構・遺物が残存している可能性があることから、工事に先立って確認調査を実施する必要があることを事業者に伝えた。

## 2 確認調査（第1次調査）

平成 29 年 3 月 3 日、事業者から「発掘調査承諾書」「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」が富士市教育委員会教育長（以下、市教育長）宛に提出された。

これを受けた文化振興課は、4 月 17 日、文化財保護法第 99 条に基づく書類「発掘調査について」を静岡県教育委員会教育長（以下、県教育長）宛に提出し（富市文発第 61 号）、文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。確認調査は平成 29 年 4 月 20 日から 25 日にかけて行った。調査では、敷地内に 4 箇所のトレンチを設定し、重機による掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、礫を多く含む土層から 17 世紀の陶磁器類が比較的まとまって出土した。

4 月 27 日、富士警察署長宛に「埋蔵物の発見届」（富市文発第 103 号）を、県教育長宛に「埋蔵文化財保管証」（富市文発第 103-2 号）を提出した。これは、5 月 8 日、県教育長により埋蔵文化財の認定を受けている（教文第 277 号）。また、5 月 1 日には事業者ならびに県教育長宛に「発掘調査結果概要」（富市文発第 116 号）を提出した。また、事業者と、埋蔵文化財の保護に対する対応についての協議を開始した。

## 3 本発掘調査（第2次調査）

平成 29 年 8 月 2 日、県教育委員会から、遺跡の保護が図れない部分について本発掘調査を実施するよう指示が通知された（教文第 809 号）。これを受けて、事業者と文化振興課は協議を行い、事業者からの委託により市教育委員会が本発掘調査を実施することとなった。

7 月 21 日、事業者から「埋蔵文化財本発掘調査依頼書」「発掘調査承諾書」が市教育長宛に提出され、8 月 21 日、事業者（2 社）と富士市長、市教育長の 4 者間で文化財調査に関する協定が締結され、これに基づいて、事業者と富士市長の間で発掘作業に関する業務委託契約が締結された。8 月 22 日、文化財保護法第 99 条に基づく「発掘調査について」を県教育長に提出し（富市文発第 516 号）、文化振興課職員による記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

調査は平成 29 年 8 月 28 日から 9 月 15 日にかけて行った。

まず、工事計画に基づき、10 ヶ所の調査工区（1 工区～10 工区）を設定し、調査を行った。本発掘調査では、コンテナ 10 箱分の陶磁器、銭、木製品が出土し、9 月 19 日、富士警察署長宛に「埋蔵物の発見届」（富市文発第 593 号）を、県教育長宛に「埋蔵文化財保管証」（富市文発第 593-2 号）を提出した。これは、9 月 26 日、県教育長により埋蔵文化財の認定を受けている（教文第 1149 号）。

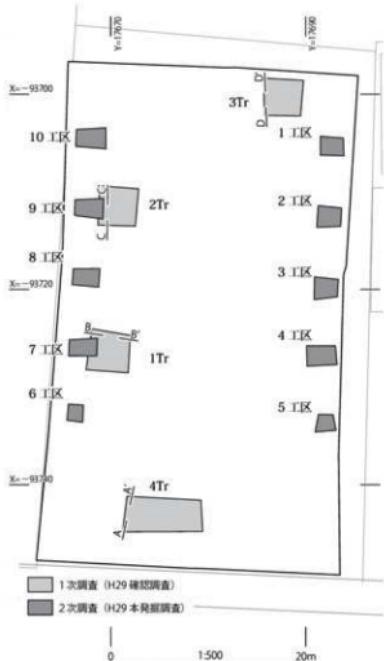
平成 29 年 9 月 19 日、事業者に対し、発掘作業に関わる業務の完了報告を行い（富市文発第 605 号）、9 月 21 日、事業者ならびに県教育長宛に「発掘調査結果概要」（富市文発第 613 号）を提出した。その後、業務委託金の精算をもって、発掘作業に関わる業務委託契約が終了した。

#### 4 整理作業

現地調査の終了後、平成30年6月1日、事業者と富士市長の2者間で整理作業に関する業務委託契約が締結され、調査記録および出土遺物の整理作業が開始された。造構測量図面の整理・編集、遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・写真撮影、文章執筆などの作業をすすめ、これらを編集して報告書を作成した。

中吉原宿遺跡第11地区3次調査の埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて市教育委員会にて保管している。



第109図 確認調査トレンチおよび本調査工区配置図

#### 5 調査の体制

中吉原宿遺跡第11地区3次調査に関する一連の調査は、以下の体制で実施した。

##### 〔調査主体〕

富士市教育委員会 教育長 山田 幸男

##### 〔調査担当〕

市民部 部長 高野 浩一

文化振興課 課長 久保田伸彦

文化財担当 統括主幹 植松 良夫

主幹 石川 武男

埋蔵文化財調査室 主査 佐藤 祐樹

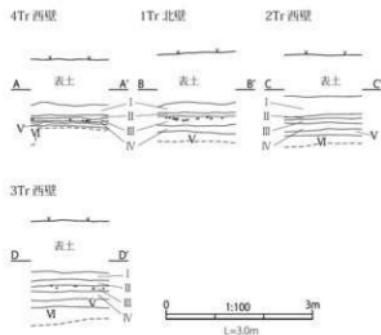
主事補 伊藤 愛 (平成29年度)

主事 伊藤 愛 (平成30年度)

臨時職員 服部 孝信 (平成29年度)

小島 利史

若林 美希



- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| I 黄灰色粘質土 (2.5y4/1)       | しまりやや弱、粘性強。<br>礫3cm少量。    |
| II 黄灰褐色粘質土 (2.5y4/2)     | しまりやや強、粘性強。<br>砂中量、円錐液微量。 |
| III 底オーピーブ色粘土層 (7.5y4/2) | しまり強、粘性強。<br>円錐(5~1cm)中量。 |
| IV 底オーピーブ色粘土層 (7.5y5/2)  | しまりやや弱、粘性強。               |
| V 青灰色粘土層 (10BG5/1)       | 弱中量、白色粒子微量。               |
| VI 明緑褐色粘土層 (5G3/1)       | しまり弱、粘性強。<br>砂中量、白色粒子多量。  |
- (高湖による被災痕跡)

第110図 確認調査セクション図

**1 基本土層**

中吉原宿遺跡II地区の基本土層は以下の通り整理される。

**I 黄灰色粘土層 (2.5Y4/1)**

しまりやや弱い、粘性強。

礫 (3cm) 少量含む。【造成土】

**II 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)**

しまりやや強い、粘性強。

砂中量、円礫微量。【旧耕作土】

**III 灰オリーブ色粘土層 (7.5Y4/2)**

しまり強、粘性強。

円礫 (1 ~ 5cm) 中量。【高潮に伴う被災土】

**IV 灰オリーブ色粘土層 (7.5Y5/2)**

しまりやや弱、粘性強。

【宿場活動時の地表面および堆積土】

遺構はこの層を切って構築される。

**V 青灰色粘土層 (10BG5/1)**

しまりやや弱、粘性強。

砂中量、白色粒子微量。

【宿場形成以前の堆積土 無遺物層】

**VI 暗緑灰色粘土層 (5G3/1)**

しまりやや弱、粘性強。

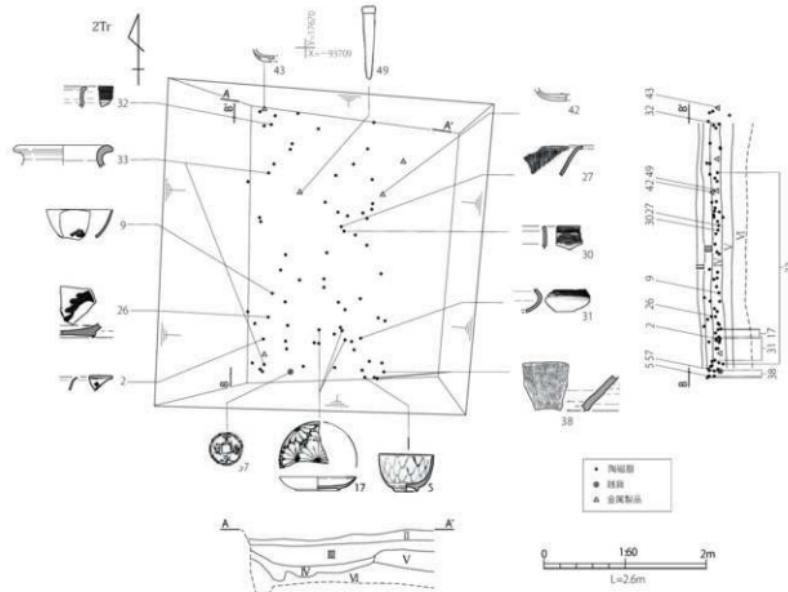
砂中量、白色粒子多量。

【宿場形成以前の堆積土 無遺物層】

**2 確認調査成果**

確認調査では4箇所のトレントを設定し、掘削を行なった。旧東海道に近い南側から、4Tr、1Tr、2Tr、3Trの順でトレント間は10m前後ある。

**1Tr** 本調査の7工区の東側に接している。遺物の出土量は極めて少なく遺構と考えられるプランも検出されなかった。



第111図 確認調査2トレント 遺物出土状況図

**2Tr** 本調査の9工区の東側に接している。11.5m<sup>2</sup>の調査区に対して80点と多くの遺物が出土した。ほとんどの遺物は、調査当時IV層と想定した土層から出土した。ただし、炭化材も多く混ざっているなどの特徴が、隣接する9工区のSX2001の覆土と酷似しており、同様の遺構を見落とした可能性が高い。

**3Tr** 調査地の最北地点に設定したトレーナーである。VI層まで掘削を行なったものの出土遺物・遺構とともに検出されなかった。宿場の範囲外のエリアと考えられる。

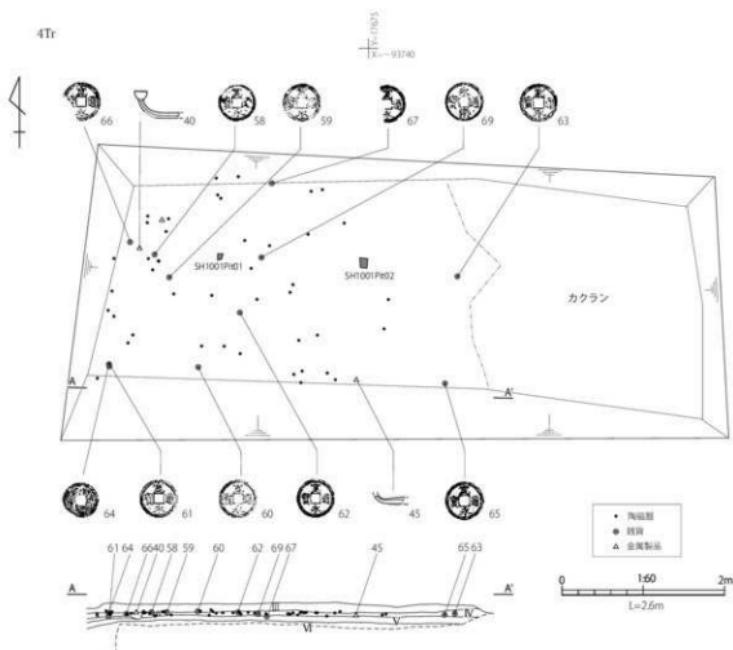
**4Tr** 調査地でもっとも南側で比較的広い面積を掘削したトレーナーである。旧東海道にもっとも近いこともあり、多くの遺物が出土した。東側は大規模な搅乱によりIV層も削平されており、遺構・遺物は確認されなかつたものの西側は遺物が比較的まとまって出土した。平面的にはIII層を除去してIV層上

層の様じまいの面で掘削を終了している。その結果、礫混じりの面から陶磁器、キセルや寛永通宝などの銭が平面的に万遍に出土した。トレーナー中央で東西方向に2箇所四角い杭を打ち込んだような痕跡が検出された。杭の間が約180cmであることから建物の痕跡と考えられる。

### 3 本発掘調査成果

本調査は建設する倉庫の基礎設置に伴いIV層が掘削されるまたは、保護層が確保されない部分に限定して行なわれた。そのため、一つずつの工区は非常に狭いもので遺構の全体の様相を示すことはできなかった。

工区は北東から時計回りに1工区から10工区まで設置した。以下、工区ごとに成果を述べていく。



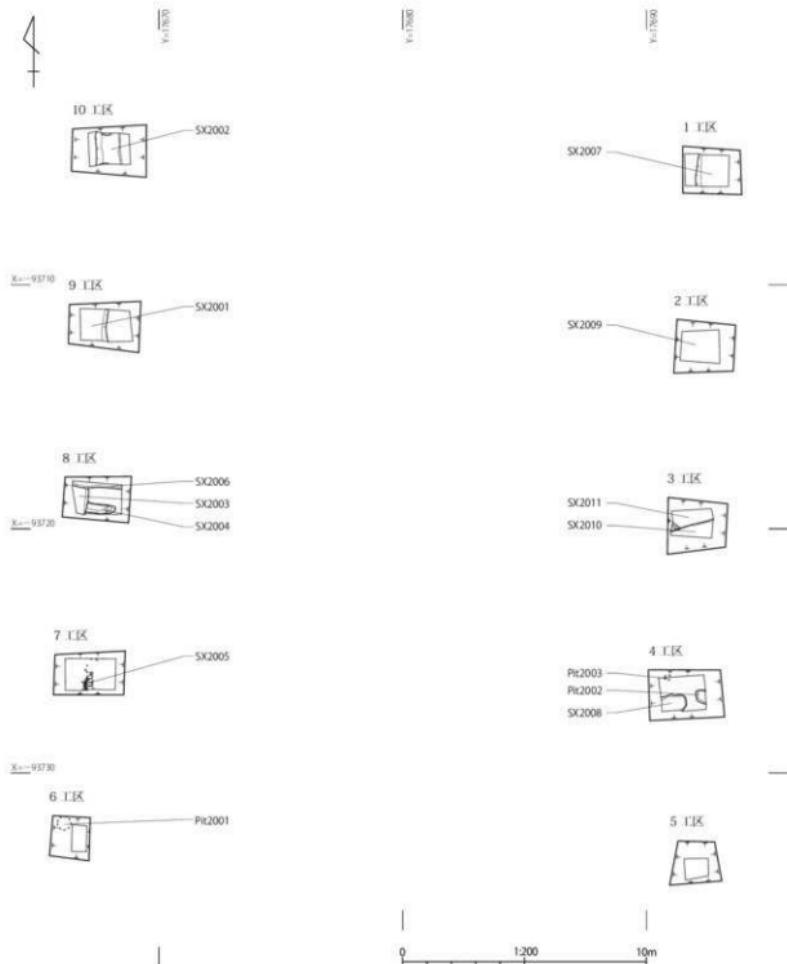
第112図 確認調査4トレーナー 遺物出土状況図

## 1工区

IV層を掘り込むように工区の東側にSX2007を検出した。掘り込みはほぼ南北方向(N-5.5°-E)に直線的に延びる。遺構の深さは13cmで、底面はほぼ平坦である。覆土に炭化材が認められ、出土遺物は陶磁器数点と少ない。

## 2工区

IV層を掘り込むように工区全面が遺構の内部であると考えられ、SX2009とした。土層観察から遺構覆土は17cmを測り、1工区のSX2007同様、炭化材が混ざる覆土で遺物が少量含まれる。遺構床面は平坦である。



第113図 本調査全体図

## 3工区

III層を掘削し、IV層掘削時に工区南側で炭化材が比較的まとまって検出される範囲があり、SX2010として遺構認定し掘削を行った。掘り込みは深さ16cmで覆土に炭化材が認められ、遺物は少量出土した。また、SX2010の下層から屋根材などの建築部材と考えられる木材が崩れたように検出されたため、SX2011とした。ほとんどが建築部材と考えられる木材で、一部漆器や陶磁器の破片が出土した。

## 4工区

IV層を掘り込むように工区全面が遺構の内部であると考えられ SX2008 とした。遺構は南北部分でさらに掘り込んであり、そのプランを平面的に検出した。その落ち込みからは木片が直角に配置されるように検出されたが、性格は不明である。また、工区北側、東側で SX2008 の覆土を切るようなピットを検出したため、それぞれを Pit2003、Pi2002 とした。

## 5工区

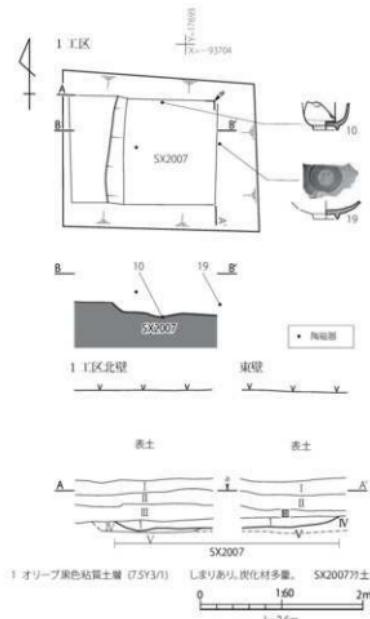
工区が非常に狭く、遺構の検出はできなかった。出土遺物も数点出土したのみである。

## 6工区

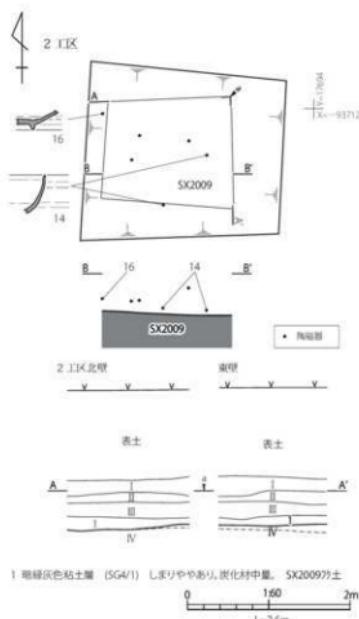
工区が非常に狭く、平面的に遺構を検出することはできなかったが、北壁、西壁の土層観察においてIV層を切り込むようなピットの存在が明らかとなつたため、Pit2001とした。覆土は炭化材を含む土層で深さ26cmを測る。

## 7工区

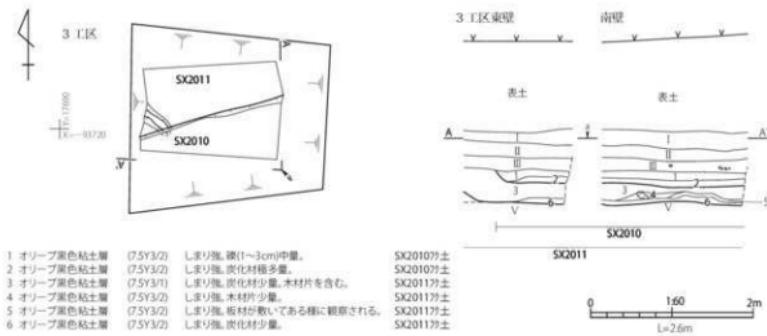
III層の掘削中、南北方向に延びる石列を検出し SX2005 とした。IV層上面に20cm大の石4つを東側に面をもたせるようにほぼ南北方向に配置している。また、石列の西側には比較的細かな石で裏込めするように円礎が検出された。石列は一段しか確認されていない。周辺から陶磁器片が出土している。



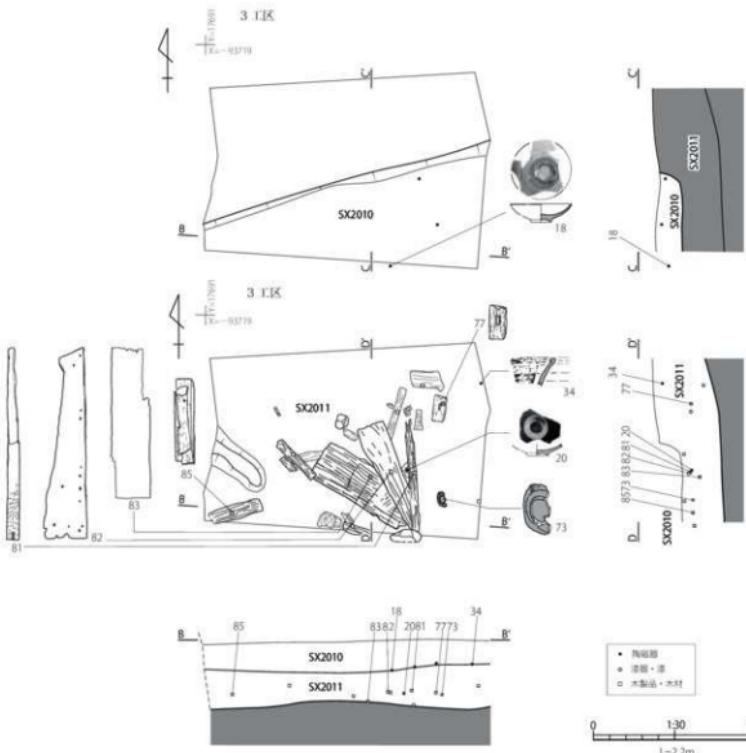
第114図 1工区 SX2007



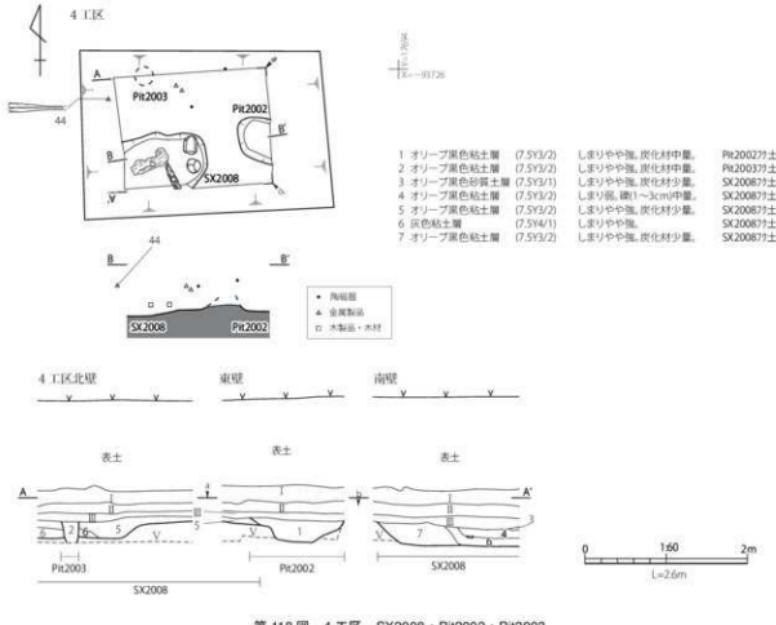
第115図 2工区 SX2009



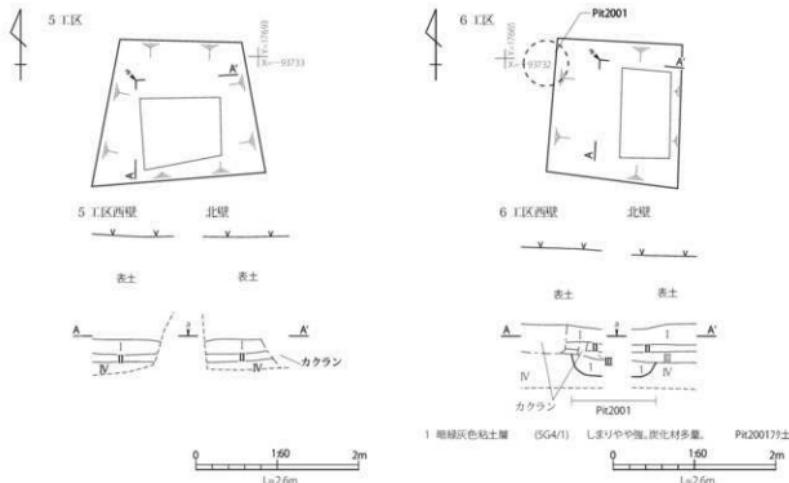
第 116 図 3 工区 SX2010・SX2011



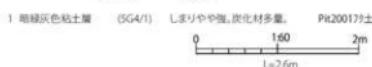
第 117 図 3 工区 遺物出土状況図



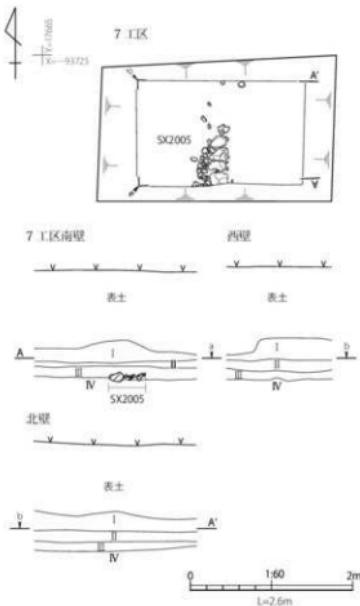
第118図 4工区 SX2008・Pit2002・Pit2003



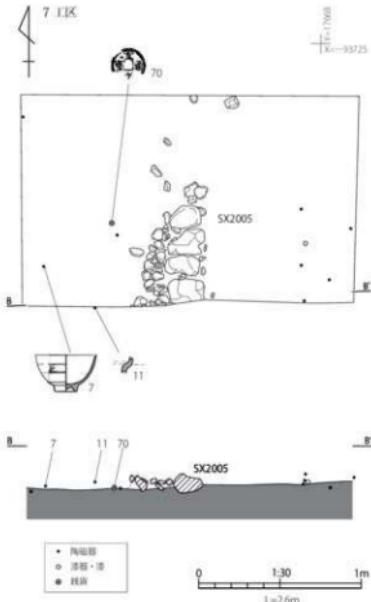
第119図 5工区



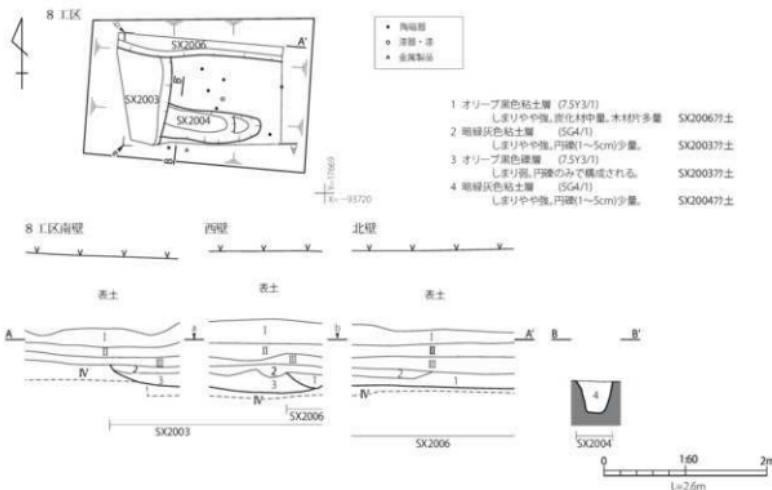
第120図 6工区



第121図 7工区 SX2005



第122図 7工区 遺物出土状況

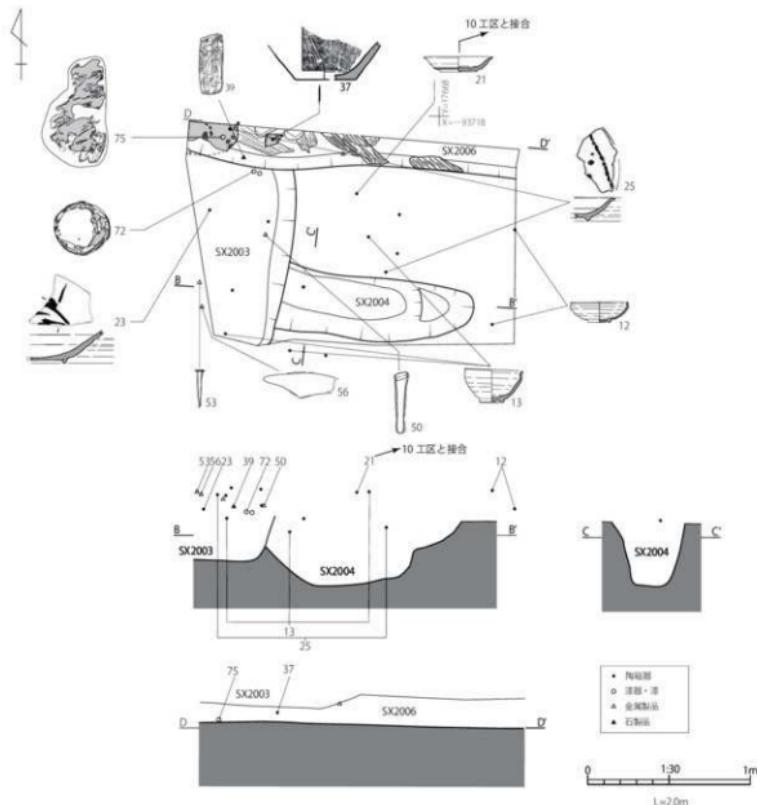


第123図 8工区 SX2003・SX2004・SX2006

## 8工区

III層掘削後、IV層上面において複数の遺構(SX2003・SX2004・SX2006)を検出した。それぞれが切り合いを持っており、最も古い遺構は工区南端で検出されたSX2004である。幅42cmの細長い溝状の掘り込みで西側はSX2003に切られている。床面は確認面から20cmほど落ち込んだ後、さらに深く40cmまで掘削されているが、SX2003に向かって浅くなっている。遺物はあまり出土しない。

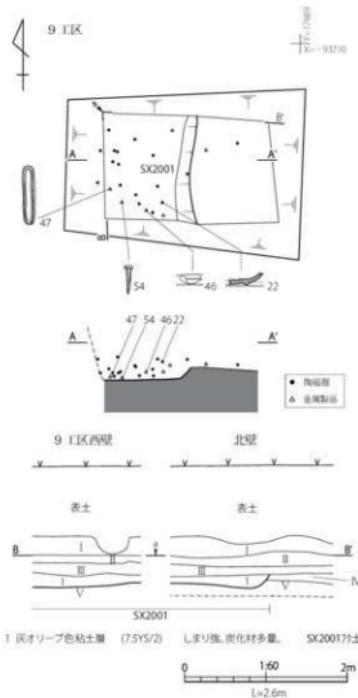
SX2003は工区の西側で南北方向に直線的に検出された。北側はSX2006に切られている。深さは25cm程度認められるが、遺物が出土するのは上層部分のみである。SX2006は工区の北端で検出された。掘り込みは9cmと浅いが炭化材を含む覆土からは漆器や木材など比較的多くの遺物が出土した。SX2006はSX2003が完全に埋まる、もしくは埋められる前に掘削されていることが土層から明らかとなっている。



第124図 8工区 遺物出土状況

## 9工区

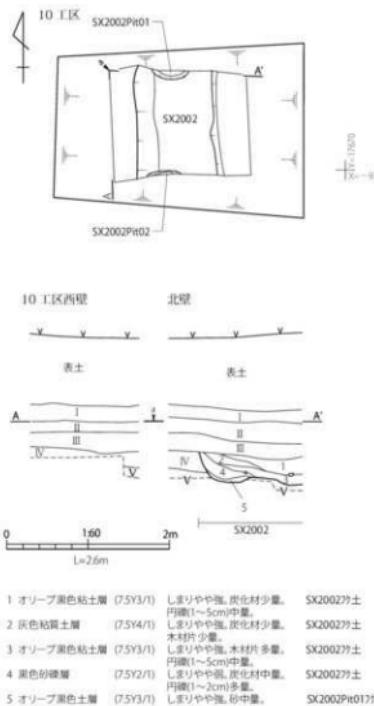
IV層を掘り込むように工区の西側にSX2001を検出した。掘り込みはほぼ南北方向(N-0.5°-W)に直線的に延びる。遺構の深さは18cmで底面は、ほぼ平坦である。覆土に炭化材が混じり、出土遺物は陶磁器や金属片が比較的まとまって出土している。



第125図 9工区 SX2001

## 10工区

IV層を掘り込むように工区の東側で溝状の落ち込みを検出し SX2002とした。西側から東側に向かって二段階で落ち込んでおり、それぞれの深さは28cm、40cmを測る。炭化材を含む覆土からは陶磁器、漆器、金属製品、木材片などがまとまって出土したが、木材の長辺が基本的には南北方向を向いており、元位置を留めている出土状況ではなく、南側から流れてきたような出土状況であるといえる。



第126図 10工区 SX2002

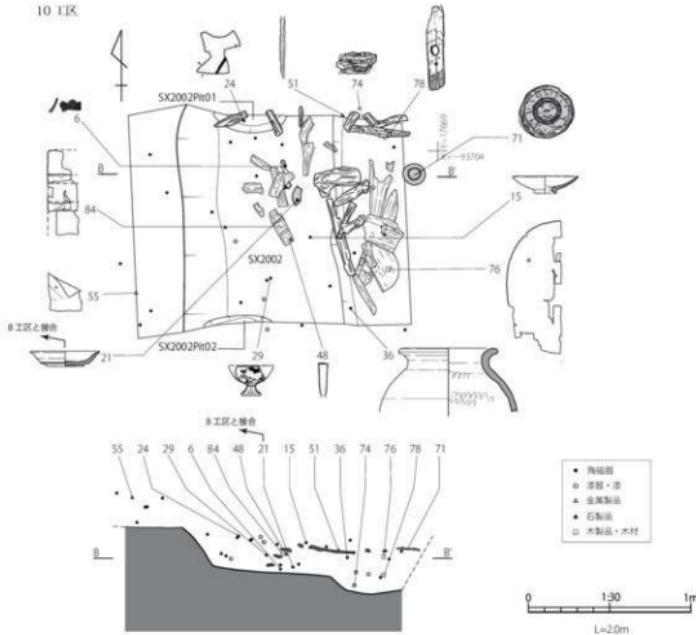
#### 4 出土遺物

1から4はいすれも景徳鎮窯系磁器である。17世紀前葉から前にかけての碗や盃で、口縁端部を強く外反させ全体的に薄い作りが特徴といえる。

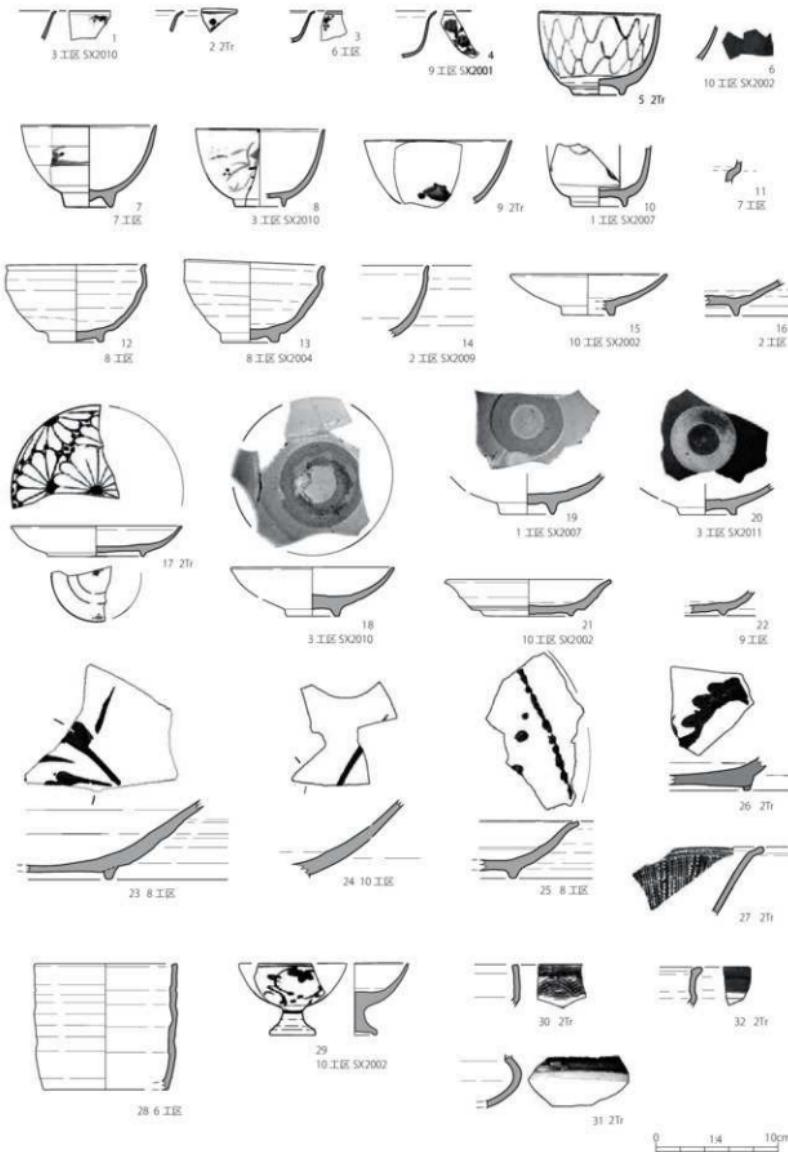
5・7から10は肥前系磁器である。5は確認調査の2Trで出土した碗で高台は比較的小さく腰の張る形状をしめす。1630年から1640年代の生産と考えられる。7はあまり腰の張らないタイプで高台が厚い三角形を呈する。1640年代の生産である。8は3工区SX2010からの出土の色絵碗で1660から1670年代の生産と考えられる。9は2Trから出土した腰の張らない直線的で薄手の碗である。1650から1660年代の生産である。10は腰が張り、体部が直立するやや小ぶりの碗で1650から1670年代の生産である。6は肥前系陶器である。10工区SX2002から出土している。肥前内野山窯産の碗で17世紀後半と考えられる。

11から14は瀬戸美濃系陶器の碗である。11は7工区から出土した白天目で茶道具として使用されていたものと考えられる。17世紀前葉の生産である。12・13はいすれも8工区から出土した天目茶碗である。12が17世紀後半、13が17世紀中葉の生産である。14は2工区SX2009から出土した碗で17世紀前葉から中葉の生産である。

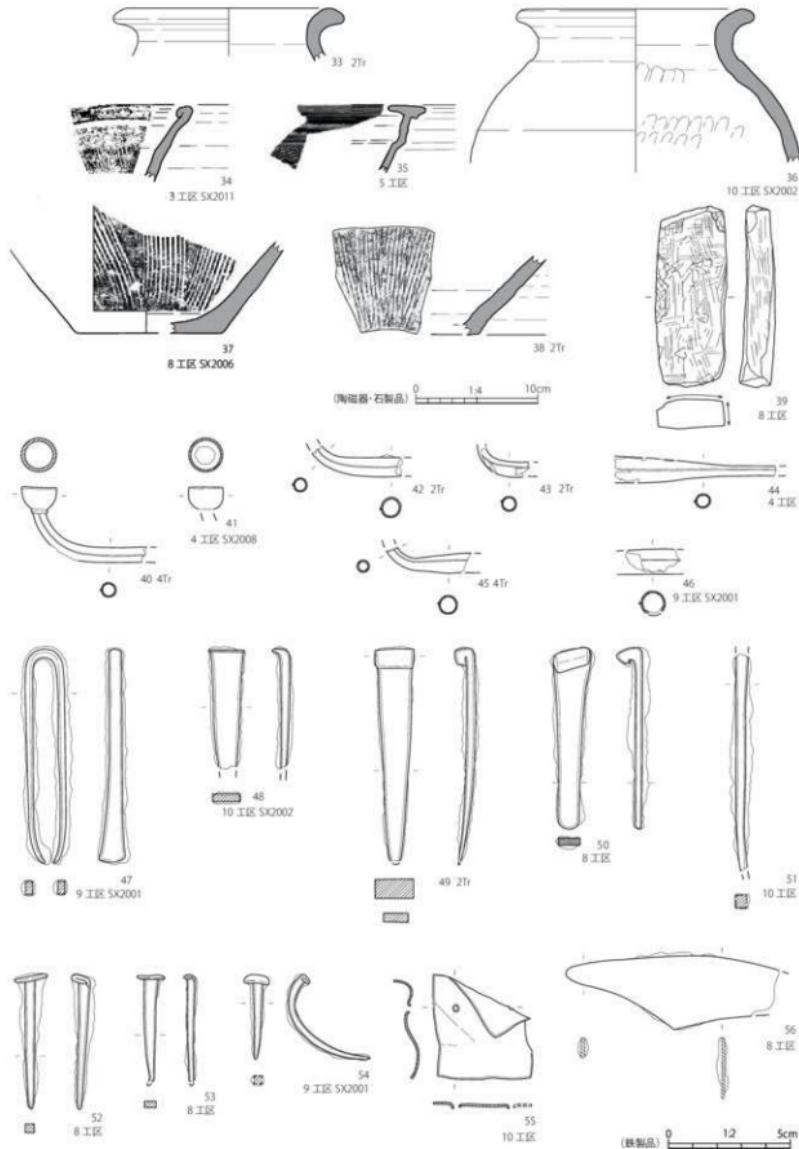
15から20は肥前系の皿である。15は高台の厚い皿で17世紀後半、16は蛇ノ目釉剥ぎの皿で17世紀後葉から18世紀前葉、17は高台断面が三角形を示す皿で高台内側に「製」の字が見える。1630から1640年代の生産である。18は見込み部が蛇ノ目釉剥ぎされた皿で17世紀後半の生産、19も同じく蛇ノ目釉剥ぎの皿で17世紀後葉から18世紀前葉の生産である。20は銅緑釉が施釉され、見込み部が蛇ノ目状に釉剥ぎされた皿である。内野山窯製品で17世紀後半の生産である。



第127図 10工区 遺物出土状況



第128図 出土遺物実測図 1



第129図 出土遺物実測図 2

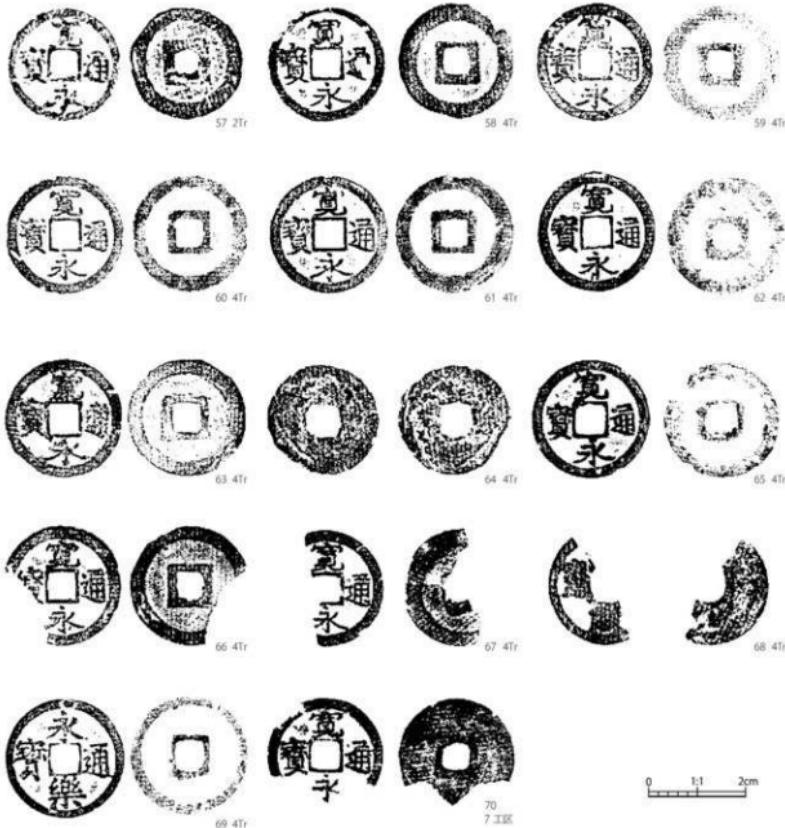
21・22は瀬戸美濃系の皿でいずれも高台が低い三角形を示す。21は10工区 SX2002から出土した破片と8工区から出土した破片が接合している。17世紀前半の生産である。22は17世紀中葉の生産である。

23から26は瀬戸美濃系の鉢で23・25・26は笠原鉢とされるものである。いずれも17世紀前半の生産である。24は黄瀬戸の鉢で17世紀後半と考えられる。

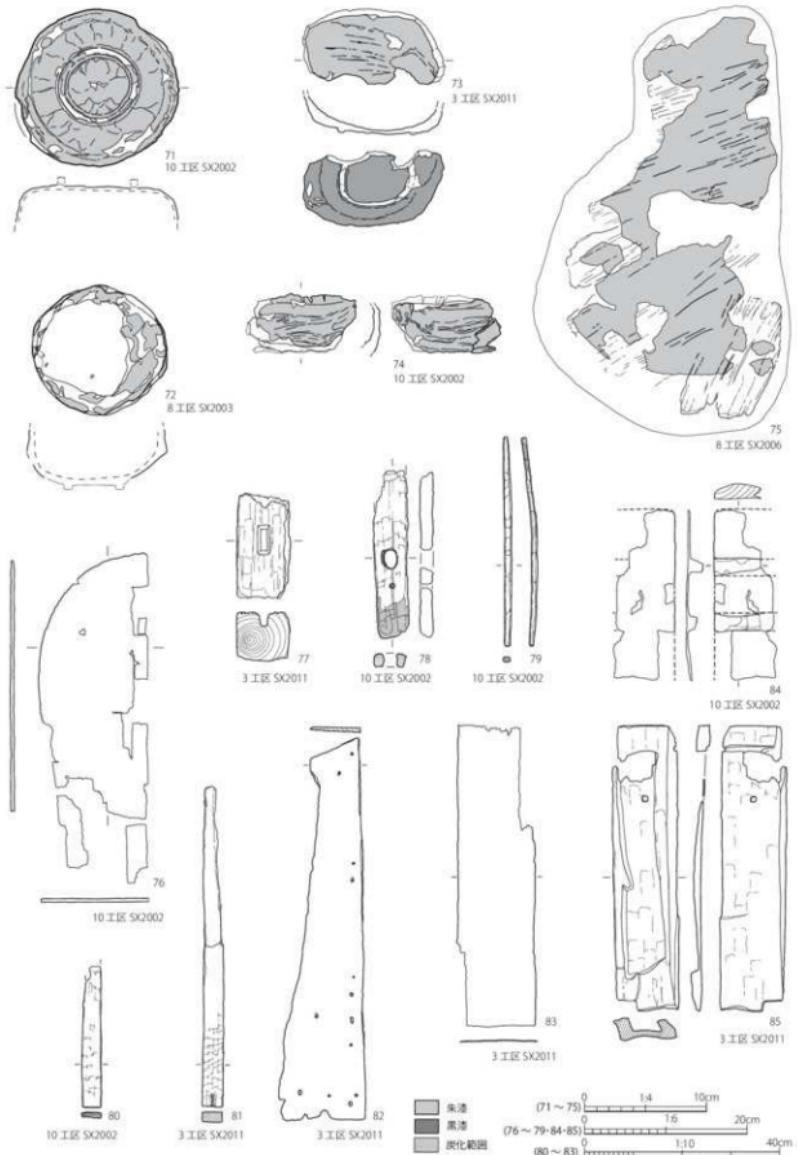
27は肥前系の鉢で刷毛目が施されている。17世紀後半の生産である。

28は志都呂産の鉢で蓋物である。17世紀の生産と考えられる。29は肥前系の仏飯器で17世紀後半の生産である。30から32はいずれも2Trから出土した肥前系の香炉で30には刷毛目が認められる。17世紀後半の生産である。

33は備前の甕で17世紀前葉から中葉、34・37は瀬戸美濃系の描鉢で17世紀後半の生産である。



第130図 出土遺物実測図 3



第131図 出土遺物実測図 4

35は備前系の甕と考えられるがあまり類例がない。17世紀第3四半期の生産である。36は常滑系の甕であるが生産年代は絞れない。37は瀬戸美濃系の擂鉢で17世紀後半、38は丹波系の擂鉢で17世紀後半と考えられる。

以上、陶磁器の出土組成については下表のとおりであり、これまでの分析の同様、日常使いの容器が多いが、初期伊万里が数点含まれる。

39は砂岩の砥石である。側面と上面の二面に使用痕が明瞭に認められる。

40から46は煙管で、筒部の側面に合わせ目が觀察される。47は鏹子で先端部分がやや広がっている。48から50はクサビで上部を折り曲げている。52から54は釘で頭は折り曲げて作られている。55は用途不明の銅板で、建具の一部ではないかと考えられる。56は包丁と推測される。

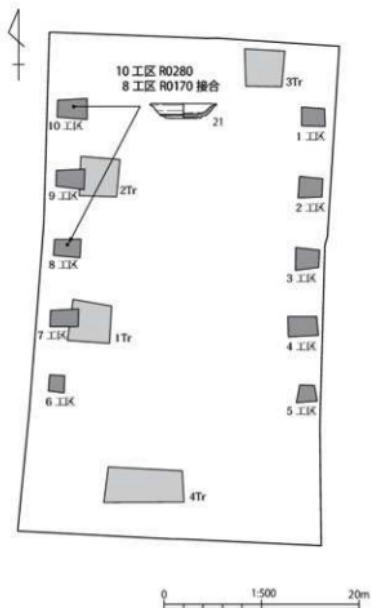
57から70は錢で69の永楽通宝以外の13枚は寛永通宝で、「寛」の書体などからいわゆる「古寛永」とされるものである。

71から75は漆器である。遺存状況がよく、図化できるものをあげた。71から74は碗もしくは蓋で基本的には赤漆が施されているが73の外側には黒漆が認められる。75は大皿の一部と考えられ木質の上に部分的に赤漆が残存している。いずれも木質の遺存状況が悪く、材質は明らかではない。

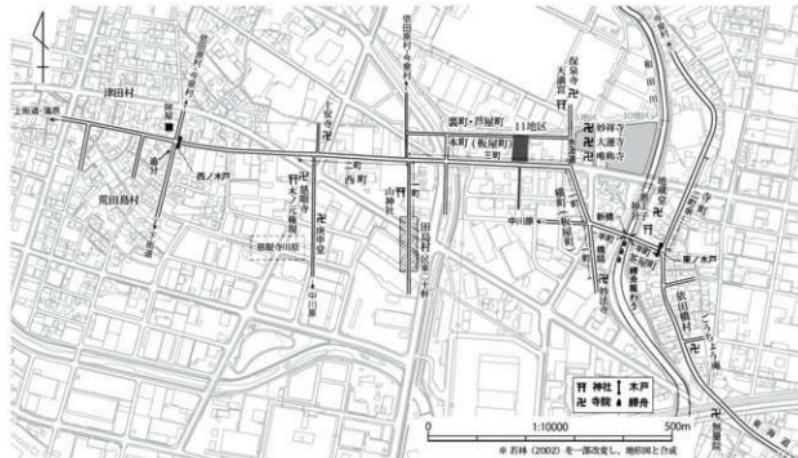
76は曲げ物の一部と考えられ材質はスギ。77は建築部材で他は、用途不明なものが多い。82は針葉樹の板材、83はヒノキの樹皮でいずれも屋根の部材の可能性が考えられる。84は針葉樹の下駄である。85はマツ材の加工品で用途は不明。人為的な小さな穴と逆刺のような抉りがあり、何かを引っ掛けける用途が想定される。

第12表 出土遺物組成表

物質	生産地	器種	慣用名	点数
磁器	尾張鉢	碗・盃		4
	肥前	碗・盃		153
		皿	初期伊万里	2
			その他の	81
		瓶		17
		小杯		5
		鉢		3
		不明		3
	肥前磁器合計			264
陶器	肥前	碗・盃		18
		皿		9
		鉢		17
		香炉		5
	肥前陶器合計			49
	瀬戸・美濃	碗	天目	5
			志野	3
			その他の	52
		皿	志野	33
			その他の	27
		擂鉢		17
		鉢		20
		香炉		6
		徳利		6
		壺		4
		水滴		2
		不明		11
	瀬戸・美濃陶器合計			186
	京都・信楽	壺		2
	京都・信楽陶器合計			2
	備前	甕		2
		壺		1
	備前陶器合計			3
	志戸呂	皿		1
		擂鉢		3
		甕		2
		瓶		2
		徳利		1
	志戸呂陶器合計			9
	常滑	甕		3
	丹波	擂鉢		1



第132図 本調査工区外遺物接合図



第133図 中吉原宿遺跡復元図

## 5 総括

第11地区の本調査は、調査範囲が狭く部分的な調査ではあったものの、延宝8年（1680）閏8月6日に襲来した江戸時代最大級の台風による高潮に伴うと考えられる堆積層を検出し、その土層にパックされるように遺構・遺物を検出した。出土遺物を全点検討した結果、17世紀中葉から後葉にかけての生産と考えられる陶磁器に限られ、18世紀の遺物が1点も出土しなかったことは、土層の解釈と矛盾がなく、また、中吉原宿が高潮による被害を受けた後、復興されることなく新吉原宿（現在の吉原）に移転したとの地誌『田子のふるみち』の記載とも一致している。

中吉原宿遺跡におけるこれまでの調査では、平成11年に初めてその存在を考古学的に証明した第5地区の調査成果がある（富士市教委2002）。第1トレンチでは東西方向の溝2条を検出しているが、調査時の所見では高潮層の堆積直後の掘削とされており、宿場の一時的な復興に伴う排水などの行為の存在も想定される。また、第2トレンチでは、水場と考えられる遺構とともに、幅1.0～2.0mの硬化面を検出している。

享保15年（1733）に吉原宿の住人である姉川一夢の著した『田子のふるみち』を分析し、中吉原宿

の略図を示した鈴木富男氏の成果（鈴木1974）とそれを一部修正した若林淳之氏の成果（若林2002）をもとにして現在の地図に合成した。その結果、平成11年に第2トレンチで検出した硬化面は「水汲道」とした付近にあたる。

また、今回調査した第11地区は本町（板屋町）と裏町（芦屋町）の間に位置していると推測される。調査では約14m離れて出土した陶磁器が接合していることからも高潮の影響から遺物が北方向に移動しているものと推測される。しかし、今回の調査地の北端では遺物が見つかっていないということは、調査地の北側は宿場から外れた範囲であったことを示している。

今回報告した第11地区の調査範囲は非常に狭いもので、宿場の町並みを復元するほどの成果を得ることはできなかった。しかし、今後も地誌の記載など複眼的分析を進め、宿場の様相を明らかにしていく必要があろう。

## 参考文献

- 鈴木富男 1974 『解説田子のふるみち』富士南麓の歴史 その2（郷土古文書）
- 富士市教育委員会 2002 『中吉原宿遺跡』
- 若林淳之 2002 『吉原宿から中吉原宿へ』『中吉原宿遺跡』富士市教育委員会

# 第4章 一色 D- 第35号墳の調査

## 第1節 調査の概要

### 1 調査経緯

平成5年、富士市長 鈴木清見（以下、事業者とする。）は、富士市一色 284-1 外（面積 33,539.47 平米）において市立小学校の新設を計画し、7月 27 日、富士市教育委員会（以下、市教委とする）教育長宛に「埋蔵文化財分布確認調査指導依頼書」を提出した。これを受け市教委では 8月 9日に分布確認調査を行い、当該地の北東部分が周知の埋蔵文化財包藏地「一色遺跡」にあたり、西側の丘陵上には「一色 D- 第35号墳」が存在するため、文化財保護法第 57 条の 3 第 1 項の規定による通知が必要であることを事業者に伝えた。平成 7年 3月 14日、事業者は文化庁長官に「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出した（富教管第 66 号）。3月 28 日、市教委は通知を静岡県教育委員会教育長（以下、県教委とする。）に達し（富教文第 314 号）、3月 31 日、県教委より事業者に対して市教委と協議し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった（教文第 2-359 号）。

平成 8年 1月 26 日、市教委は文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づき、県教委に「埋蔵文化

財発掘調査の通知」を提出し（一色遺跡：富教文第 228 号、一色 D- 第35号墳：富教文第 229 号）、市教委文化振興課により確認調査を実施することになった。

確認調査は平成 8年 1月 29 日から 2月 8日まで実施した。

一色遺跡に含まれる範囲では、トレンチを 3 本設定し、重機により造構検出面まで掘削し、人力により精査、土層観察を行った。その結果、第 2 トレンチで溝状造構 1 条（SD）、第 3 トレンチで土坑 1 基（SK）を検出した。これらの造構から遺物は出土せず、時期は特定できない。

当初、一色 D- 第35号墳の調査は、地表に露出する溶岩を東西方向の石室と想定し、これを横断する南北方向のトレンチを設定（1 トレンチ）、重機により地山まで掘削し精査を行った。さらに 1 トレンチと直交する 2 トレンチを掘削したが、いずれのトレンチにおいても露出する溶岩は地山溶岩であることが確認された。結果として、古墳の存在が想定された場所には古墳は確認されなかった。



第 134 図 調査地区位置図

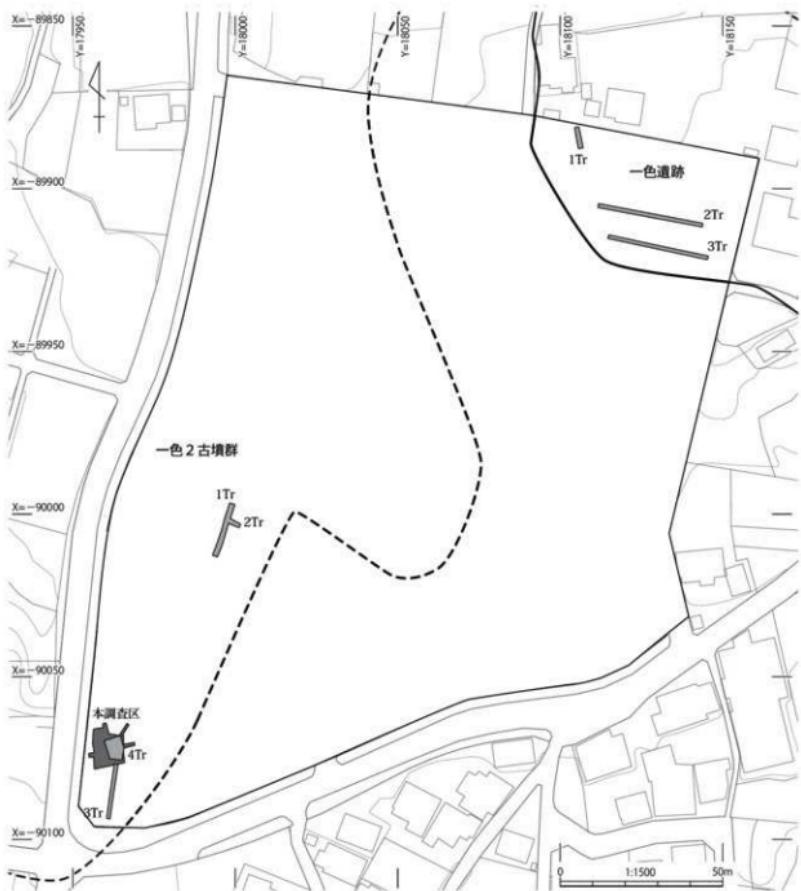
一方、周辺を踏査したところ、当初、古墳の存在を想定していた地点から南南西に80～90mの地点で須恵器の甕や壺、甕の破片が採集され、ここに南北方向のトレンチを設定した（3トレンチ）。地山まで掘削したところ、須恵器破片は出土するものの古墳は検出されなかった。続いて、3トレンチ北側の一段高くなる茶畠に4トレンチを設定し、重機により掘削したところ、古墳石室を検出した。

その為、古墳については本発掘調査が必要なこと、

その他の部分については工事立会が必要なことを事業者に伝え、本発掘調査に向けて調整を開始した。

3月5日、県教委に「発掘調査終了報告書」を提出した（一色遺跡：富教文第274号、一色D-第35号墳：富教文第275号）。

平成8年2月15日、市教委は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき、県教委に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し（富教文第253号）、本発掘調査を実施することとなった。



第135図 確認調査トレンチおよび本調査区配置図

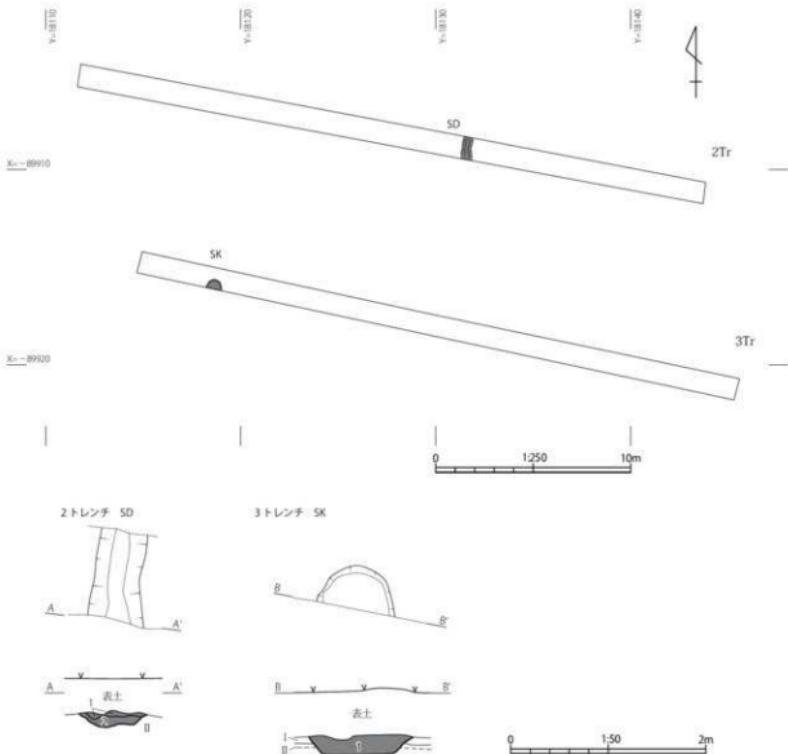
本発掘調査は、平成 8 年 2 月 19 日から 3 月 29 日まで実施した。古墳は組合式箱形石棺を有する横穴式石室であり、周溝は確認されなかった。石室内からは鞍尻金具や蛇尾、鐵鏃、刀子などの金属製品と、少量の須恵器片、土師器片が出土した。

4 月 4 日、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」(富教文第 7 号)を、県教委宛に「埋蔵文化財保管証」(富教文第 8 号)を提出した。また、4 月 25 日、事業者ならびに県教委教育長宛に「発掘調査終了報告書」(富教文第 26 号)を提出した。

## 2 調査体制

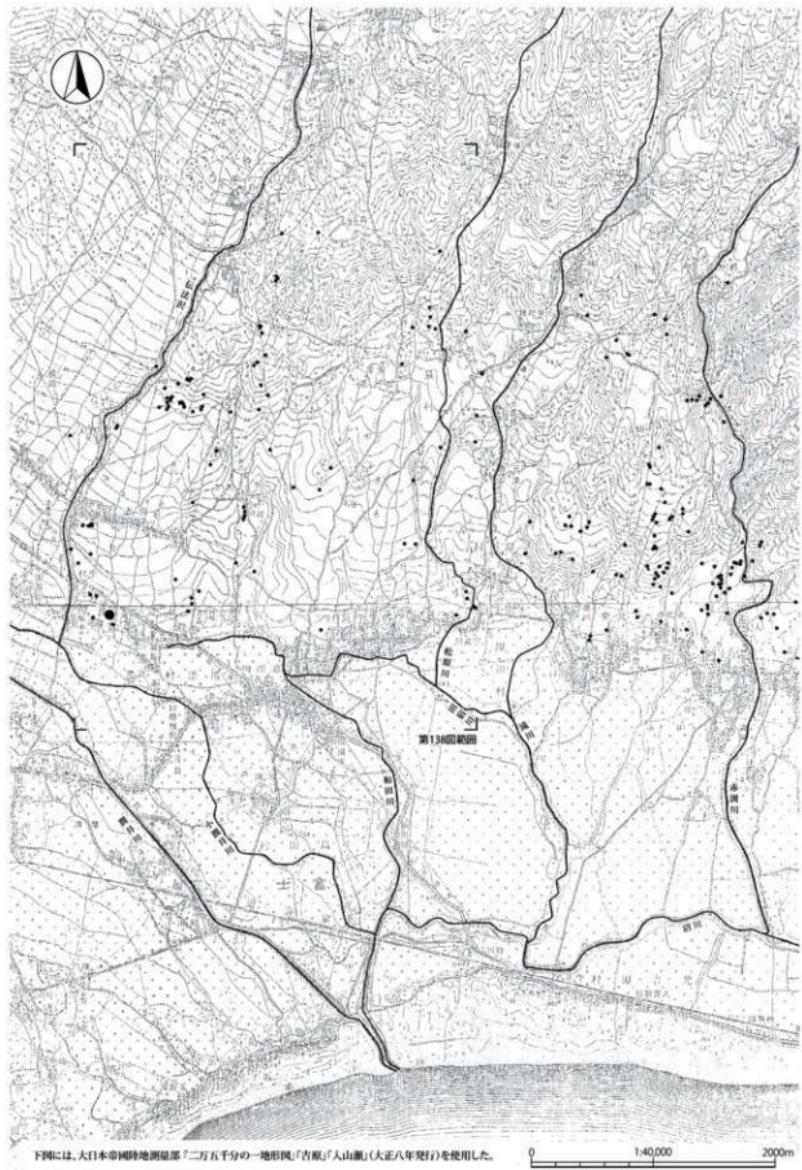
調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	太田 均
		教育次長	影島 英三
		文化振興課	課長 立田 守彦
			課長補佐 平澤 信子
			係長 池田 晴夫
調査担当	主査 渡井 義彦		
	主事 久保田伸彦		



1 黒色 しまりあり、粘性あり、大沢スコリア・カブゴ平バニスを少量含む。  
II 茶茶褐色 しまりあり、粘性あり、赤色スコリア少量、白色スコリア微量含む。  
1 黒色 しまりあり、粘性あり、赤色スコリア・白色スコリア・大沢スコリア少量含む。 SD・SK 塗土  
2 黒色 しまりあり、粘性あり、赤色スコリア・白色スコリア・大沢スコリア微量含む。 SD・SK 塗土

第 136 図 確認調査トレーンチ 平面図・検出遺構図



第137図 周辺の古墳分布図 1



第138図 周辺の古墳分布図





古墳 番号	古墳名	形状	標高 (m)	墳形	墳長 (m)	内部主体	開口 方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考 文献
612	西平第3号墳	円錐	37	-	-	無袖形横六式石室(残存長1.5m、幅0.6m、床面1面)	南東	8c後半	-	-	20
613	西平第4号墳	円錐	37	-	-	無袖形横六式石室(残存長4m、幅0.7m、床面1面)	南東	8c後半	須恵器片(長頸瓶・环身・甕)	-	20
614	西平第5号墳	円錐	38	-	-	無袖形横六式石室(推定長2m、幅0.6m、床面1面)	南南東	8c後半	-	-	20
615	西平第6号墳	円錐	28	-	-	無袖形横六式石室(残存長3.2m、幅0.9m、床面1面)	南南東	7c後半 ～末	-	-	19
629	国久保古墳	存在	25	円墳	(8)	無袖形横六式石室、設置窓(全長4.7m、幅1.2m)	南東	7c後葉 ～中葉	鉄抜大刀柄頭片・鎌日金具2・鉄製八咫鏡1・大刀身茎部分・鎌頭・絞其志立牌式横状鏡板付帶1・玉韁(ガラス製原木玉1・水晶製切子玉2・珪化木製丸玉2・ガラス製丸玉26)・耳環4・掛繩1・須恵器片(环)	-	23
635	中村上第1号墳	円錐	18	-	-	無袖形横六式石室、設置窓(残存長4.8m、幅1.3m、床面1面)	南南西	7c後葉 ～中葉	須恵器(ラクスコ形長頸瓶1・側瓶1)・鉄鏡3・鉄製刀子3・銅製耳環1	-	22

第13表の参考文献

- 後藤 守一ほか 1958「第四 伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
- 中野 国雄 1958「第五 吉原市域の古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
- 中野 国男 1972「第一章第四節(4)伝法・石坂古墳群」『吉原市史 上巻』富士市
- 及川 司 1981「古墳時代の調査 第2章 中原1号墳」『西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 横沢古墳・中原1号墳 伝法遺跡群(伝法A～E地区) 天間地区』富士市教育委員会
- 及川 司 1981「VI-2 中原第2号墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 土手内古墳・中原第2号墳・中原道路』富士市教育委員会
- 志村 博 1981「古墳時代の調査 第1章 横沢古墳」『西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 横沢古墳・中原1号墳 伝法遺跡群(伝法A～E地区) 天間地区』富士市教育委員会
- 志村 博 1981「VI-1 土手内古墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 土手内古墳・中原第2号墳・中原道路』富士市教育委員会
- 志村 博 1983「西平第1号墳緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 志村 博 1983「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 志村 博 1983「大沢村倉第1号墳石室実測調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 渡井 義彦 1984「第10回企画展 富士の古墳文化」富士市立博物館
- 渡井 義彦 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』富士市教育委員会
- 久松 昭義 1990『東平第1号墳発掘調査概報』富士市教育委員会
- 久松 昭義 1991『荒久古墳発掘調査報告』『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集』富士市教育委員会
- 富士市教育委員会 1994『中原第3号墳・第4号墳 発掘調査概要報告書』
- 富士市教育委員会 1996『舟久保遺跡 第20・21・33・34地区発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2001『富士市の文化財』
- 志村 博 2003『第II章第1節 第4地区の調査』『東平遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 志村 博 2003『第II章第3節 第24地区の調査』『東平遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 前田 豊己 2003『第II章第2節 第23地区の調査』『東平遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 前田 豊己 2008『駿河東部の事例報告 富士市中原4号墳』『静岡県考古学会 2007年度シンポジウム 東国に伝う横穴式石室・駿河東部の無袖式石室を中心に』静岡県考古学会
- 藤村 邦 2010『第III章第1節-1 中村上1号墳』『東平遺跡 第15地区』富士市教育委員会
- 藤村 邦 2011『第3章 伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 富士市教育委員会 2015『第3章 石坂2古墳群の調査』『富士市内遺跡発掘調査報告書 一平成24・25年度』
- 富士市教育委員会 2016『伝法 中原古墳群』
- 富士市教育委員会 1986『富士市指定史跡 実円寺西古墳保存修理工事報告書』
- 富士市教育委員会 2018『伝法 東平第1号墳』

## 第2節 調査の成果

### 1 発見時の状況

一色D-第35号墳は、以前から存在することが認識されていたものの、その明確な場所が確認されていなかった古墳である。

市立小学校建設工事に伴う確認調査の際、古墳が存在するとみられる地点の周辺を踏査し、須恵器の破片を探集した。その為、須恵器採集地点とその北側の茶烟にトレントを設定したところ、北側に設定した4トレントで石室を検出した。

遺構検出高はおよそ 109.5 mである。

### 2 墳丘の構造

上面が削平されているため、明確に墳丘盛土と断定できる土層は確認されない。また、周溝も検出されず、墳丘の構築過程や構造、規模等の詳細は不明である。

### 3 埋葬施設の構造

**墓坑** 墓坑は堅穴構造で残存部は方形を呈する。上面は北から南へ傾斜して削平されており、南側は墓坑のプランが明確でない。検出された墓坑プランでは幅（東西）は 4.70 m を測る。長さ（南北）は、西辺が南端で屈曲するようであるが、東側壁の基底石や掘り方の状況から、5.36 m 以上と推定される。検出状況で北側の深さは 77cm を測る。

**石室** 南南東に向かって開口する横穴式石室である。上面を削平されており、側壁は基底石が残存するのみであるが、残存状況から無袖形横穴式石室であると考えられる。石室は溶岩の自然縫で構築されている。玄室の平面形はやや胴が張る長方形を呈する。石室全長は、確実な基底石まで 4.80 m、石の広がりをすべて含めると 5.75 m を測る。玄室幅は奥壁で 1.15 m、中央で 1.36 m、開口部側で 1.12 m を測る。主軸方位は N・166°・E である。

**奥壁・側壁** 奥壁・側壁とも、基底石（1段目）のみが残存している。

奥壁の基底石は、幅 140cm、高さ 75cm、厚さ 36cm の大型の溶岩を、墓坑北壁に接して立ててい

る。裏込めの石は認められない。

側壁の基底石は、西壁で 4 石、東壁で 6 石が残存する。西壁は、奥壁から 3 石が平積みで並び、基底石が抜き取られたとみられる 80cm ほどの間隔において 1 石が小口積みで据えられている。東壁は奥壁から 5 石が平積みで、1 石が小口積みで並ぶ。

西壁・東壁とも、側壁と墓坑の間に大量の裏込石が黒色土とともに埋め込まれた様子が認められる。

**石棺** 石室の西奥には組合式箱形石棺が据えられている。第1次（初葬）床面の構築と同時に据えられたものと考えられる。石棺の底石は大型の扁平な溶岩礫を使用している。奥壁から 30cm ほど南に石棺の奥石を 2 石立て並べ、西側面は石室の西側壁に沿って板石を 2 石、前石には同様の板石を 1 石立てている。東側面については、検出時には立石が認められず、東に開口していた。石棺の東には大型の溶岩礫が床石として敷かれており、追葬時に石棺の東側石を床石に転用した可能性が考えられる。

石棺の長さは内法で 170cm を測り、幅は 53cm ほどに復元される。

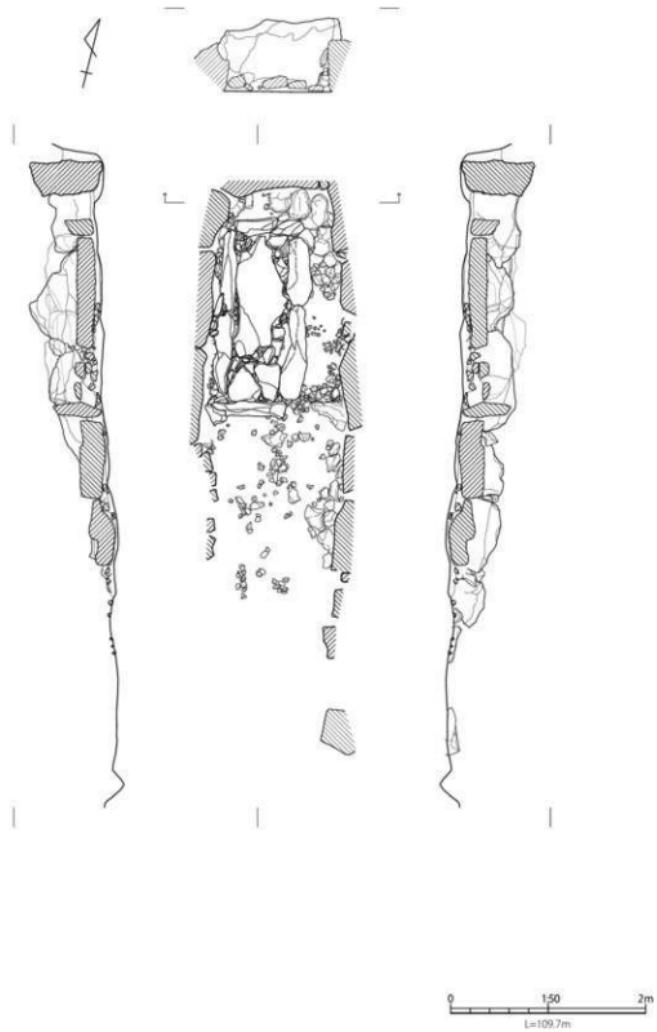
**床面** 床面は 2 面確認できる。構築された順に、下面を第1次床面（初葬面）、上面を第2次床面（追葬面）と呼称する。

第1次床面では、5 ~ 30cm ほどの小振りな溶岩礫が床石として用いられている。ただし、床石は均一に敷きつめられておらず、地面が露出する部分も多い。このため、床面として捉えづらい状況であるが、上面の大型敷石除去後に遺物が検出されていることから、この面も床面として使用されたものと考える。第2次床面を構築する際に、床面を平坦にするために第1次床面の床石を動かして調整した可能性がある。

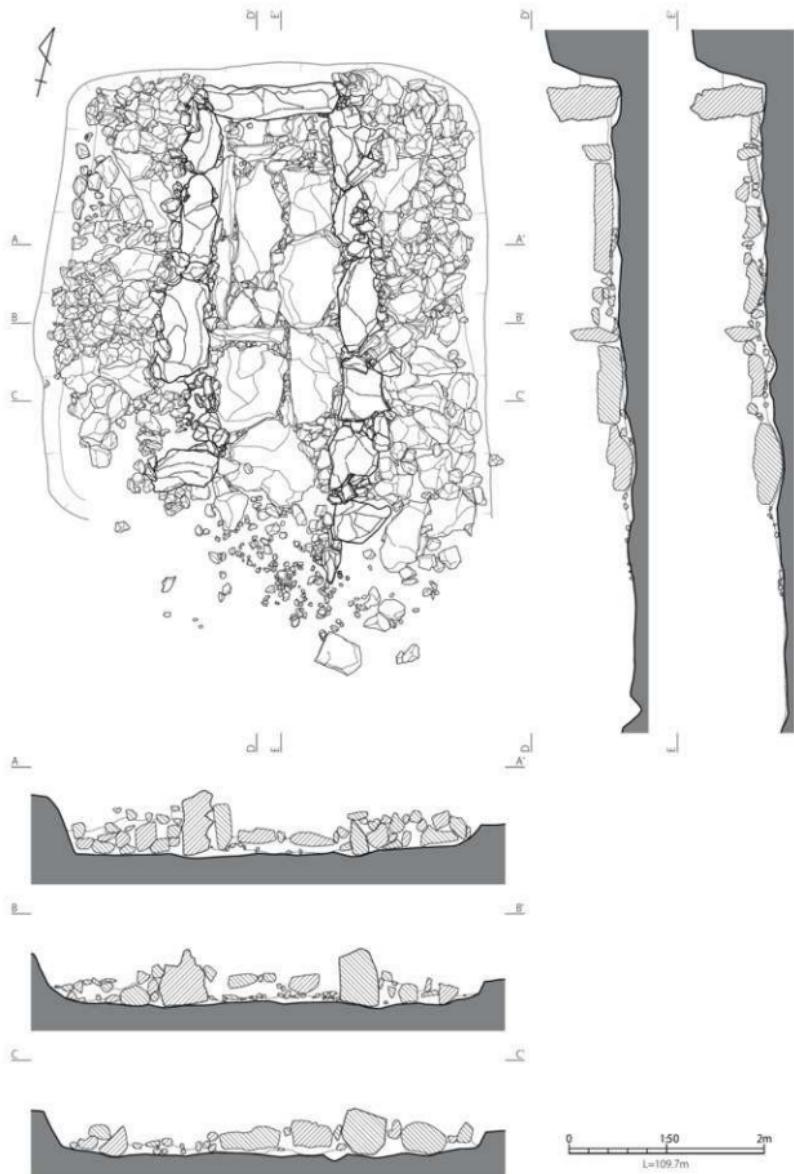
第2次床面では、前述したように、石棺の東側石が倒されて石棺東側の床石に転用された可能性が考えられる。石棺の南、石室開口部側には、幅 1m 前後の扁平な大型溶岩礫を 3 枚敷き並べている。それより南側は古墳全体の残存状況がよくない部分であり、本来の床面の状況は不明である。



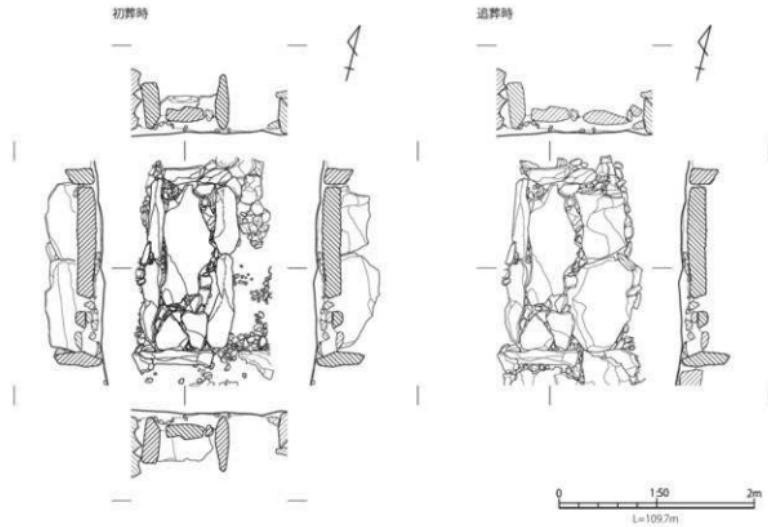
第139図 本調査区 全体図・セクション図



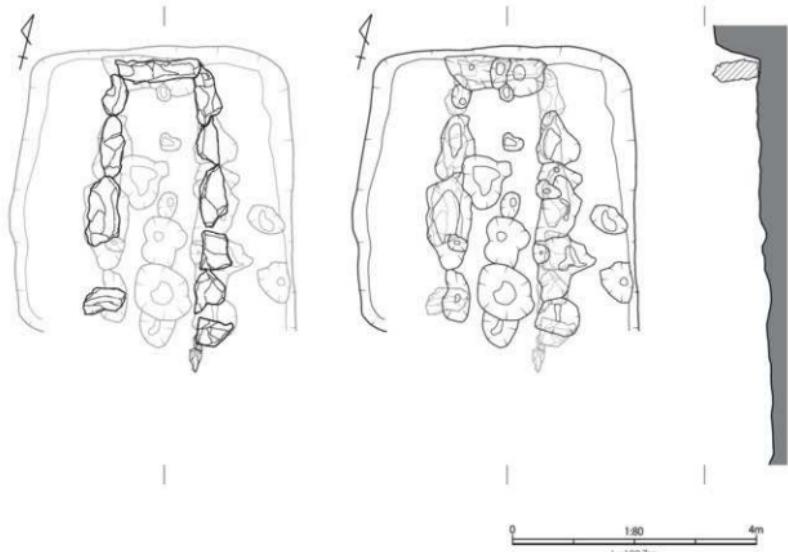
第140図 石室 展開図（第1次床面）



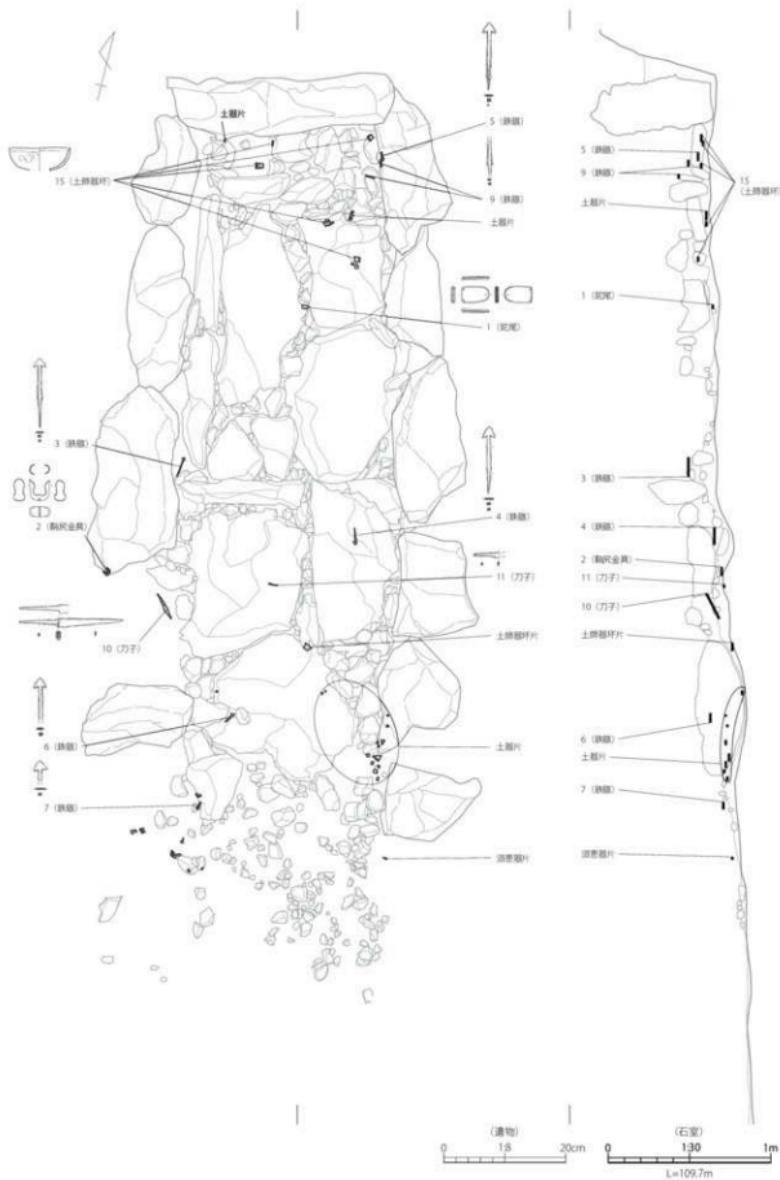
第141図 石室 平面図・断面図（第2次床面）



第142図 石棺 平面図・断面図・推定復元図・展開図



第143図 石室基底石・基底石据え方・墓坑 平面図・断面図



第144図 石室 遺物出土状況図

#### 4 遺物の出土状況

一色D-第35号墳からは、鞞尻金具や腰帶具の鉈尾、刀子、鐵鎌などが出土している。

まず、石室の第2次床面を検出した段階で、鞞尻金具(2)、刀子(10)、鐵鎌(6・7・9)が出土した。ただし、鞞尻金具については、西側壁の根石が失われている部分にあり、副葬時から位置が動いていることが推定される。また、刀子(10)と鐵鎌(7)については、第2次床面を構成する大型躰の脇で出土しており、出土面の高さとしては、第1次床面のレベルと同等と言える。鐵鎌(6)は最も開口部に近い大型躰の上で、鐵鎌(9)は奥壁手前の東側壁際で出土しており、この2点については、第2次床面に属するものと言える。

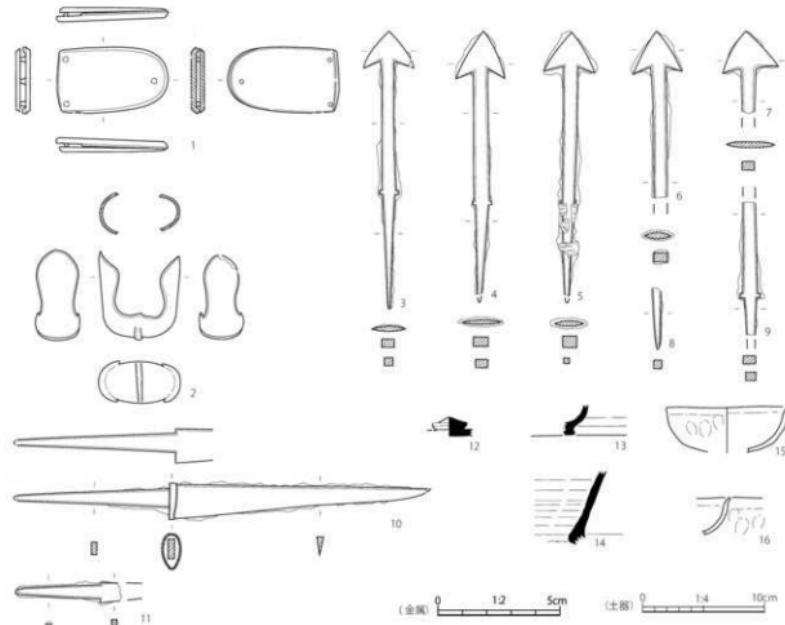
第2次床面および石棺の除去後、鉈尾(1)、鐵鎌(3・4・5)、刀子(11)、土師器壺(15)が出土した。鉈尾(1)は、石棺底石の隙の下にあり、もともと石棺内にあったものが、追葬時に石棺東側石を動か

した際に、石棺下に落ち込んだ可能性が考えられる。

鐵鎌(3)は石棺西側石と石室西壁の間にあり、出土レベル的には第2次床面の高さと同等である。鐵鎌(4)と刀子(11)は石棺南の大型躰の真下にあり、第1次床面の存在を裏づける遺物である。土師器壺(15)の破片は奥壁寄りに散在していた。

#### 5 出土遺物

1は銅製の鉈金具の鉈尾である。釣鐘形を呈し、帯との付け根から緩いカーブを描く。帯幅2.7cm、鉈尾長4.5cmを測り、その比率は1:1.67となる。表金具は厚さ0.2cmほどの銅板を折り曲げて立ち上げている。裏金具は表金具よりも一回り小さく作られているが、面取りが丁寧に施されている。鉈尾は帯基部側に2箇所、先端に1箇所認められる。側面から観察すると基部側は表金具と裏金具の間に0.2cm程度の隙間をもち、先端部は表金具と裏金具が密着し、隙間はほぼない。



第145図 出土遺物実測図

2は銅製の鞘尻金具で形状はいわゆる心葉形抉りを有するもので、方頭大刀の鞘尻金具と考えられる。縦ぎ目は観察されず一枚の銅板を打ち伸ばした後、心葉形の透孔を切り取っている。全長3.6cm、幅3.3cmを測り、棟側と刃部側でカーブの反りが異なる。豊島は方頭大刀の把頭の分類上B類とされるものに本例のような打延ばし製作の鞘尻金具がセットになると指摘し、楊目金具や足金具、鞘尻金具のセット関係から細分したB1類を7世紀第III四半期、B2類を7世紀第IV四半期の生産とし、いずれも飛鳥の官営工房で生産されたとした（豊島2014）。

3から9は鉄鎌で、鎌身部の残存する3から7はいずれも平根三角形式鉄鎌である。全長の推定できる3から5は11cm前後で、鎌身部長は1.5cmから2.0cmで收まり、「規格性」の高い鉄鎌（藤村2011）と評価される。

10・11は刀子である。特に10は鍔が銀装であることが注目される。全長16.7cm、闇幅1.4cm、茎部長6.5cm、茎部幅0.7cmを測る。闇は直角両闇で茎は直線的に茎尻に向かう。銀装の鍔は長軸1.45cm、短軸0.8cmを測る。

12から14は須恵器で12は坏蓋の摘み、13が底部、14は広口長頸壺の颈部と考えられる。いずれも遼江V期頃と考えられる（鈴木2005）。

15・16は手捻りの土師器の坏である。口縁部は軽く外反しており、外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。器壁が非常に薄くもろい。また、底部には木葉痕を残すことが特徴といえる。同様の特徴を示す土器片が一定量存在することから、もう数個体あるものと想定される。

### 第3節 総括

#### 1 古墳の立地

かつて『吉原市の古墳』（吉原市教委1958）では旧吉原市域（現富士市域の内おおむね潤井川以東）の古墳について、「スルガのクニ西部古墳群」と捉え、さらに古墳の位置的まとまりを西方からAからMの13支群に分けている（中野1958）。現在の埋蔵文化財包蔵地との関係については若林（2016）に譲ることとする。

一色D-35号墳は標高約109mの高所に立地する古墳で、現在の包蔵地名では「一色2古墳群」に包括されている。古墳の南側の丘陵には古墳時代後期から平安時代にかけて長期間継続した舟久保遺跡が立地している。古墳は舟久保遺跡周辺から北に伸びる旧道沿いの傾斜が急になる付近に立地しており、一色古墳群のまとまりの一部（西側）と舟久保遺跡は、生活域と墓域という有機的関係を示す可能性がある。東西をつなぐ旧道沿いに立地している点からは交通路の交差点上に立地しているとも評価できるだろう。

#### 2 埋葬施設

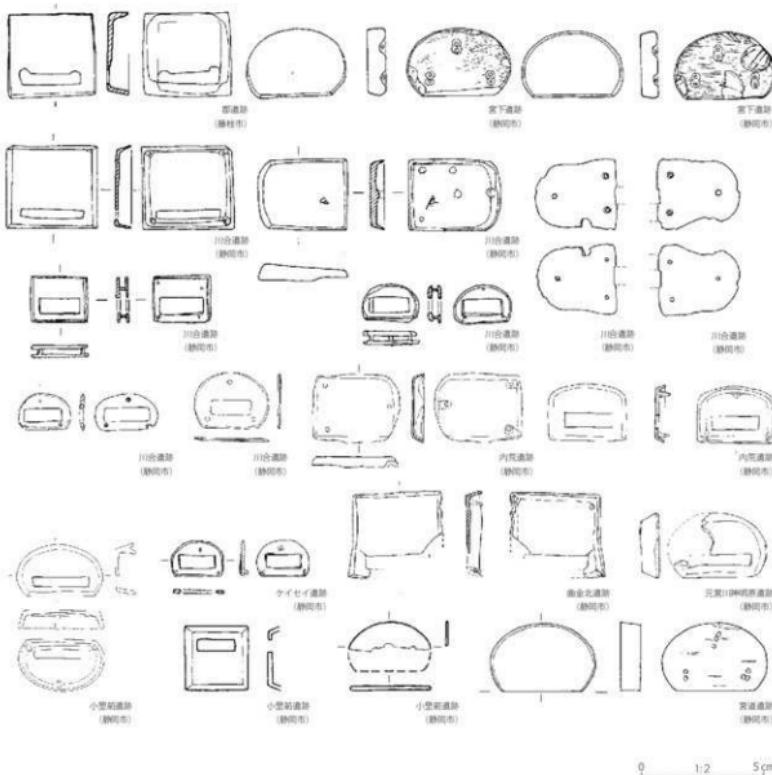
埋葬施設は南側に開口する無袖形横穴式石室である。開口部付近の石材が失われており、本来の全長は明らかではないが現状の石の広がりから5.75m以上と想定され、方形の墓坑を有する。富士山南麓地域では「中型石室」（藤村2016）と位置づけられる石室で裏込め縁を多用するという特徴も共通する要素といえる。また、組合式箱形石棺を持つことも特徴といえる。一般的に一色D-35号墳が位置する富士火山地南麓では仕切り石、愛鷹山南麓では箱形石棺を備える例が多いが、実態は両者がモザイク状に入り乱れる様相を示す（藤村2016）。調査時は石棺の東側の石材が平らに倒されていたが、石の下より初葬時の副葬品と考えられる土師器や石棺前面の平らな石材の下からも副葬品が多数出土したことから、初葬時には石棺と床石は拳大の石材で床が敷き詰められ、追葬時に石棺東側の石材が平らにならされ、あわせて石棺全面に大型の石材が敷きなおされたものと推察された。

### 3 副葬品

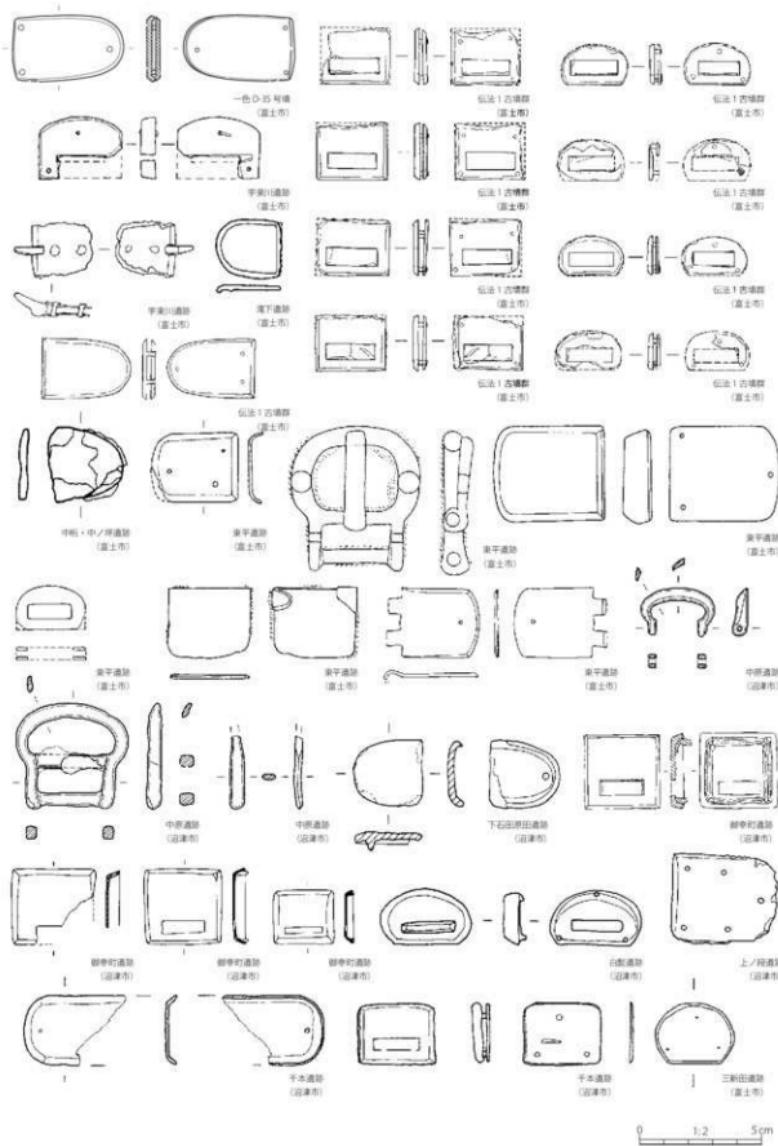
**銅金具** 銅製の鉢金具の鉢尾（第145図1）の出土が注目される。幅2.7cm（9分）であることが既に報告されており（植松2003）、本報告でも修正の必要はない。鉢金具は駿河国富士郡内では4遺跡2古墳から20点の出土が認められ（佐藤2018）、富士郡家とされる東平遺跡出土のまとまりがある。東平遺跡の西端に存在する西平第1号墳からは巡方4点、丸柄4点、鉢尾1点がまとまって出土しており、8世紀第1四半期の副葬とされ（富士市教委2003a）、郡司層の墳墓と考えられる。一色D-35号墳から出土した鉢金具は西平第1号墳から出土した

ものより3mm（1分）小さいが、これが位階の差を示しているかは明らかではない。しかし、被葬者が富士郡家における官人層であった可能性を示す遺物と注目される。

**方頭大刀** 出土した鞘尻金具（第145図2）は方頭大刀に伴うものと考えられる。形状はいわゆる心葉形抉りを有するもので、7世紀後半に飛鳥の官営工房で生産されたものと推測されている（豊島2014）。富士山南麓において方頭大刀は、大阪上古墳（吉原市教委1958・富士市教委1988）、妙見F-1号墳（富士川町教委1987）に加えて前述の鉢金具9



第146図 駿河国出土鉢金具実測図集成 1



第147図 駿河国出土鍍金具実測図集成 2

点がまとまって出土した西平第1号墳（富士市教委2003a）からも出土している。妙見古墳群は富士郡家である東平遺跡とは富士川を挟んだ対岸に位置しており、官人層の墓域であった可能性が高い。

以上の4例の方頭大刀のうち大坂上古墳を除く3例は豊島分類のB類に分類され、それを所有していた階層は「国家の支配体制に組み込まれつつ

あつた在地首長層と位置づけられ」ている（豊島2014）。また、その背景には「東日本の在地首長層を国家の軍事編成に取り組む政策」を想定しており（豊島前掲）、富士郡における郡司層に繋がる被葬者が想定される東平第1号墳などの分析結果とも調和的といえ（富士市教委2018・藤村2018）、鉄金具から推測される被葬者像とも一致する。

第14表 駿河国出土鉄金具一覧表

遺跡名	所在地	遺物詳細	報告書	国名	郡
郡遺跡	藤枝市立花	銅製造方1	静岡県 1992	駿河国	慈頃郡
宮下遺跡	静岡市葵区川合	石製丸軸2	静文研 1991	駿河国	安倍郡
川合遺跡志保田地区	静岡市葵区川合	銅製造方2,銅製丸軸1 銅製鉈尾1,銅製鉈具2	静文研 1998	駿河国	安倍郡
川合遺跡八反田地区	静岡市葵区川合	銅製丸軸1	静文研 1995	駿河国	安倍郡
内荒遺跡	静岡市葵区川合新田	銅製鉈尾1,銅製丸軸1	静文研 1988	駿河国	安倍郡
ケイセイ遺跡	静岡市駿河区中田一丁目	金鑄製丸軸1	静岡市教育委員会 2012	駿河国	有度郡
曲金北遺跡	静岡市駿河区曲金北二丁目	銅製造方1	静文研 1997	駿河国	有度郡
神明原・元宮川遺跡	静岡市駿河区宮川	銅製丸軸1	静文研 1989	駿河国	有度郡
小里前遺跡	静岡市清水区庵原町	銅製丸軸1,銅製造方1 銅製丸軸裏金1	静岡市教育委員会 2015 静岡市教育委員会 2016	駿河国	庵原郡
宮道遺跡	静岡市清水区三保	石製丸軸1	清水市教育委員会 1980	駿河国	庵原郡
一色D-35号墳	富士市一色	銅製鉈尾1	富士市教育委員会 2003 本書	駿河国	富士郡
宇東川遺跡	富士市今泉	銅製鉈具1,石製丸軸1	富士市教育委員会 2003	駿河国	富士郡
隣下遺跡	富士市伝法	銅製鉈尾1	富士市教育委員会 1991	駿河国	富士郡
伝法1古墳群	富士市伝法	銅製造方4,銅製丸軸4 銅製鉈尾1	富士市教育委員会 2003	駿河国	富士郡
中折・中ノ坪遺跡	富士市伝法	銅製鉈尾1?	富士市教育委員会 2004	駿河国	富士郡
東平遺跡	富士市伝法	銅製丸軸1? 1. 鉄製鉈具1, 銅製鉈尾2,銅製鉈具1 銅製丸軸1	富士市教育委員会 1981 富士市教育委員会 2003	駿河国	富士郡
中原遺跡	沼津市一本松中原	銅製鉈具2,銅製鉈具の刺金	沼津市教育委員会 2016	駿河国	駿河郡
下石原田遺跡	沼津市大岡	銅製鉈尾1	沼津市教育委員会 2000	駿河国	駿河郡
御幸町遺跡	沼津市御幸町	銅製造方4	沼津市教育委員会 1979	駿河国	駿河郡
白鶴遺跡	沼津市長浜南町	銅製丸軸1	沼津市 2002	駿河国	駿河郡
千本遺跡	沼津市本	銅製鉈尾1,造方1	沼津市教育委員会 2002	駿河国	駿河郡
上ノ段遺跡	沼津市松長上ノ段	銅製鉈尾?	沼津市教育委員会 2005	駿河国	駿河郡
三新田遺跡	富士市植新田	銅製丸軸	富士市教育委員会 2000	駿河国	駿河郡

静文研 1988『内荒遺跡〔遺物編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第16集

静文研 1989『大谷川IV〔遺物・考古編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第20集

静文研 1991『川合遺跡〔遺物編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第33集

静文研 1991『宮下遺跡〔遺物編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第31集

静文研 1995『川合遺跡八反田遺跡〔遺物・考古編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第63集

静文研 1997『曲金北遺跡〔遺物・考古編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第92集

静文研 1998『川合遺跡志保田地区〔考古編〕』静岡県埋蔵文化財調査研究課発行報告 第102集

静岡県 1992『静岡古史』資料編 第古二

静岡市教育委員会 2012『カイセイ遺跡』第8次、第10次発掘調査報告書一』静岡県埋蔵文化財調査報告

静岡市教育委員会 2015・2016『小里前遺跡、庵原鉈跡』、『小里前遺跡、庵原鉈跡(第2次)』静岡市埋蔵文化財調査報告

清水市教育委員会 1980『清水市埋蔵文化財調査報告第2集 宮道1遺跡』

沼津市 2002『沼津市史 資料編 古考』

沼津市教育委員会 1979『御幸町遺跡第1次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告 第17集

沼津市教育委員会 2000『下山出原田遺跡発掘調査報告』沼津市文化財調査報告 第74集

沼津市教育委員会 2002『千木遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告 第79集

沼津市教育委員会 2003『浅間文化財発掘調査報告書』

沼津市教育委員会 2016『中道遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告 第113集

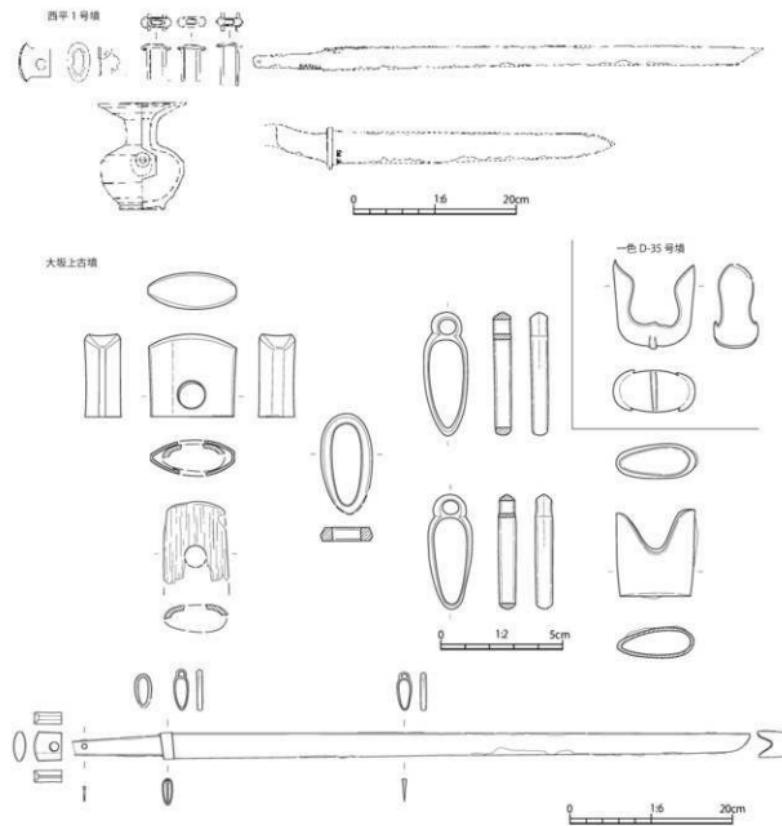
富士市教育委員会 1981『東平』

富士市教育委員会 1991『舟久保道路1丁目地区・廻下遺跡、廻久古墳 舟久保道路高山西地区 出口遺跡』

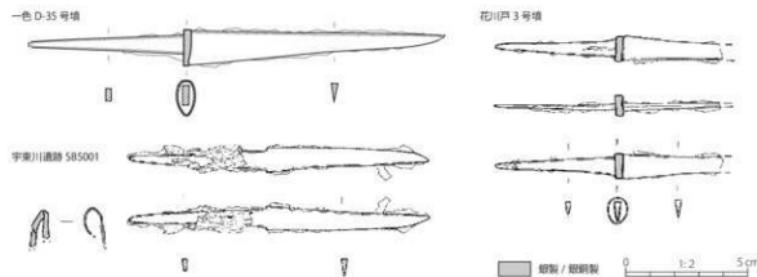
富士市教育委員会 2000『新田遺跡(D地区)発掘調査報告書』

富士市教育委員会 2003『東山道路発掘調査報告書』

富士市教育委員会 2004『中折遺跡』



第148図 富士市内出土方頭大刀の類例



第149図 富士市内出土銀装刀子の類例

**銀装刀子 鐙が銀装の刀子（第145図10）**が出土している。富士山南麓では宇東川遺跡A地区において8世紀の堅穴建物のSB5001から出土しており（富士市教委2012）、また、花川戸3号墳からも認められる（富士市教委2003b・藤村2012）。7世紀以降の装飾刀子の変容と装飾大刀生産が方頭大刀に淘汰される現象との関係を指摘する考え方（藤村2013）や宇東川遺跡の銀装刀子が土馬と共に伴していることや墨書き土器や緑釉陶器が出土するなど郡家関連遺跡と捉えられることや、前述の方頭大刀の分析や鍔金具などからも郡家や郡司層とのつながりが指摘でき矛盾しない。

#### 4 被葬者像

これまでの分析により一色D-35号墳の被葬者は7世紀末から8世紀初頭にかけて駿河国富士郡における官人層であり、古墳の立地からは富士郡衙関連遺跡とされる舟久保遺跡におけるさまざまな活動を実質的に取りまとめていた人物と想定される。

#### 参考文献

- 植松章八 2003「静岡県の鍔金具」『東平遺跡発掘調査報告書』  
富士市教育委員会  
佐藤祐樹 2018「駿河・伊豆の手工業関連遺物」『静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産』地域と考古学の会・浜松市博物館・静岡県考古学会  
鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』浜松市文化振興財團  
豊島直博 2014「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』第98号第3号  
中野国雄 1958「吉原市域の古墳」『吉原市の古墳』  
富士川町教育委員会 1987『駿河妙見古墳群』  
富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』  
富士市教育委員会 2003a『東平遺跡発掘調査報告書』  
富士市教育委員会 2003b『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』  
富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡A地区』  
富士市教育委員会 2018『伝法 東平第1号墳』  
藤村 翔 2011「国久保古墳の評価と被葬者像」『富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書 平成13年度』  
藤村 翔 2012「銀装刀子とその類例」『宇東川遺跡A地区』富士市教育委員会  
藤村 翔 2013「金の刀子と銀の刀子」『立命館大学考古学論集VI』（和田晴吾先生定年退職記念論集）  
藤村 翔 2016「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会  
藤村 翔 2018「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と在地社会の展開』『境界の考古学』日本考古学協会 2018年度静岡大会研究発表資料集  
吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』



# 第5章 資料報告

## 第1節 6・7世紀の手工業生産と地域の編成

### —地域開発と豪族の交通—

菱田 哲郎

#### はじめに

みなさん、おはようございます。今、過分な紹介をいただきましたが、関西よりまいりました、菱田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

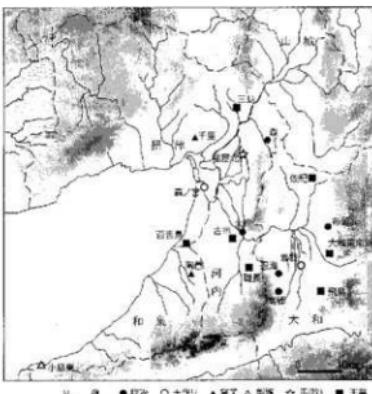
実は静岡県は、古墳研究の盛んなメッカの一つであると言っています。

私どもも、よく学生のゼミとかしておりますと、静岡県での様々な古墳の研究が、そういう学生の参考文献としてあがっているということが、頻繁にあるのですけれども、今日はそういう、こちらでの古墳研究をリードされている皆さんと一緒に、こういう機会で話をさせていただけたことになりましたこと、大変感謝しております。また素材になりました中原4号墳ですが、勉強させていただくと、こんなに面白い古墳があったのか、と目から鱗でして、この地域、駿河国富士郡というのがこんなに面白い場所だったのか、ということを痛感いたしました。その、どう面白いか、ということを今日お話をしていくことになるわけですが、このあとのお話の中でもおそらく当時の王権、大和にだいたい宮がありますが、そういう王権との関係というようなことが、この後たびたび出てこようかと思います。

そのためにもまず、そういう王権の周辺でどういう事が起こってきているのか、それがまた全国にどういうふうに影響をおよぼし、あるいは繋がっていったのか、こうすることにつきまして、少し詳しくご説明をさせていただいて、ある意味で午後のご発表に対する一つの地ならしのような形をとらせていただければありがたい、というように思っております。

#### 1 5世紀以降の手工業生産の展開

日本の国づくりがどのように進んだかというのは、実はいろいろ議論が分かれていますが、論者によっては早い時代、もう3世紀の時代、卑弥呼の時代にはもう国家だ、という方もいらっしゃいますし、もっと遅くて、律令国家ができる飛鳥の時代になって初めて国づくりが整うんだ、という方もいらっしゃって、百家争鳴の感がございます。しかしその私自身は、今日もこの後主題になります、様々なもの生産、手工業生産もそうですし、農業生産もそうですが、そういう生産であったり開拓であったり、そういうところに着目すると、だいたい5世紀、古墳時代でいうと中期と呼んでいる時代が、国づくりにとっては決定的に大きな革新の時期であったのではないかと考えております。その評価がいいかどうかは別にしましても、その5世紀を起点にするものが、その後のずっと長い歴史の中で基盤になつたといったことは実は動かない事実であります。



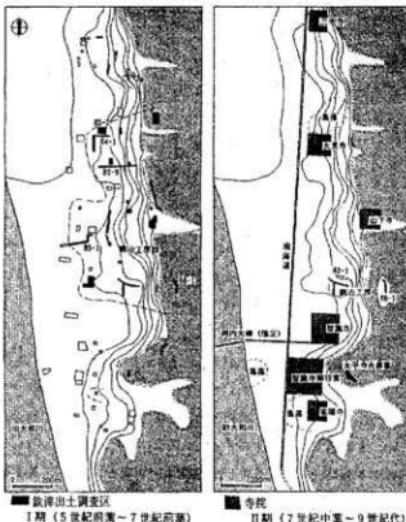
第150図 5・6世紀の手工業拠点と王墓

で、今日はまずその5世紀に始まる様々な物作りといふものを見ていただければ、と思っております。

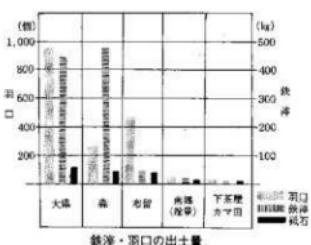
第150図は、今の大阪府を真ん中において、右側に奈良県、右上が京都府に大体あたる関西の主要部分の地図にあたりますが、その中にこの5世紀の段階に成立してきました主要な生産拠点を地図上におとしたものです。さきほど、中原4号墳の説明の中で、鍛冶具に注目してください、というお話をありました。これは何故かというと、やはり鉄の道具といふものは、「鉄は国家なり」という有名な言葉があるように国づくりにとっても重要で、武器として先ず何より軍事力の最先端の技術でもありますし、また物の生産、物作りにとっても鉄の刃物の類といふものは不可欠な重要なものになってまいります。ですからその鉄の道具を作る鍛冶工房といふものは非常に重要な役割を果たしております。この近畿地方の事例でいいますと、大阪の柏原市というところに大県（オオガタ）遺跡、交野市というところに森遺跡、それから奈良県天理市というところに布留遺跡、そして葛城市忍海と御所市の南郷など、いくつかの拠点的な鍛冶工房が成立していくことがわかつ

ております。

第151図がその内の大県遺跡の事例になります。それから第153図に、その当時新しく伝わってきた鍛冶具、五条猫塚古墳で出土しておりますが、こういう物を示しました。先ほどのお話をよく聞いていらっしゃった方は、あつ、これは鉄鋤だな、ということがすぐお分かりになるかと思いますが、実はこういう物が定着するのも、この5世紀の初め頃に朝鮮半島から伝わってきた渡来人による新たな技術なのですけれども、右側に復元図（第154図）を出しておきます。こういった轔をつかって高温で熱した鉄を打って刃物などにしていくための道具類が、実際に遺跡で出ているということになります。こういう技術の革新を伴って、そして大規模な生産が行われるようになりました。これが5世紀から6世紀の鍛冶工房の様子で、その生産量の多さってどうやって測るのかって言いますと、この工房などでは沢山のスラッギングという廃棄物や、この轔の先端部分で使われる羽口ですね、この土管の先みたいなもんですが、こういうものが遺跡で大量に出土してまいります。その出土する量を推移でとると第152図の



第151図 大県遺跡とその消長



第152図 鉄滓と轔からみた鍛冶工房

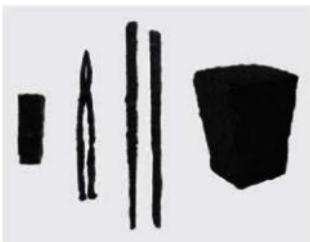
ようになるのですが、5世紀から6世紀にかけて大量の生産を行っており、そういう主要な拠点的工房が成立していることがわかつてきます。5世紀に先に近畿地方、畿内で先行しますが、瞬く内に6世紀にはこういう鍛冶具の広がり、鍛冶工房の広がりということで、全国に広がっていくということになつていくわけです。

それから、先ほども中原4号墳の出土遺物の紹介で須恵器がとり上げられていましたが、須恵器の生産が始まるとも4世紀の終わり頃で、ちょうどこの革新の時期に当たっています。舞台は陶邑という大阪府南部と千里と呼んでいる大阪の北の2箇所、この時期、西日本を中心に須恵器の生産地が確立しますが、重要なのは、この後継続的な展開を遂げていく大規模生産地が成立するということが大きな特色になっています。たとえば先ほどの陶邑の窯というのは、初期の窯だけでも三つの丘陵に跨って存在していて、丘陵全体を、この地区全体を焼き物の窯場としていこうという計画が最初からあったということが何えます（第155図）。実際に調査されている窯の中でもっとも古いTG232号窯ですが、14メー

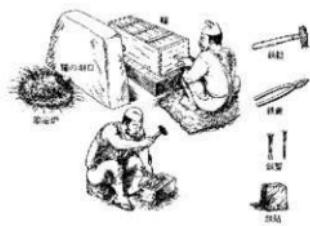
トルほどの範囲に捨てられた失敗品と灰などがおびただしい量が出ていて、当初からかなり大規模な生産を行っているらしいということが判つております。その初期の須恵器は、朝鮮半島の同時期のものに酷似する形態をしております。渡来人の参画を得て新しい技術が定着したということになります。

そもそも窯と言うのは、今だとあたりまえなのでですが、たいへん優れた装置で、斜面にトンネルを掘ることによって、トンネル効果で勝手に空気が吸い込まれますから、この中は常に高温を作りだすことができます。また、一方から一方へ空気が抜けていくので、その焚口の部分をコントロールすることによって、中の空気を酸化の状態にしたり、還元の状態にしたりといふうにできます。床面や壁が青く見えているのは還元の状態を長く維持したことを見せておりまして、須恵器を見るような青く緻密な器というものを、簡単にいふ語弊がありますが、こういうものを焼き上げができる装置として成立をしてきたということになるわけです。西日本にかなり広がっていますが、拠点的な窯として陶邑の窯が成立してくることが重要ということになります。

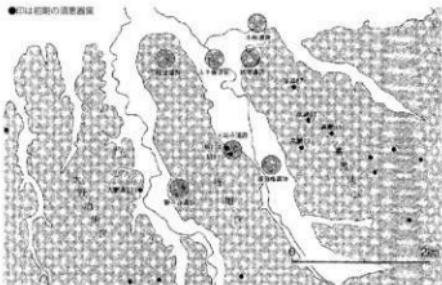
面白いのは、そこから5世紀の終わりから6世紀にかけての動きなのですが、これが全国各地に広がっていくという状況が確認されています。玉突き的な状況もあると思うのですが、高坏の脚の絵をずっと並べてみると（第156図）、もともとの陶邑の形態によく似せて作っているということが解ります。静岡県内でも湖西、浜松、磐田、袋井あたり



第153図 五条塚古墳出土鍛冶具



第154図 窯の復元図

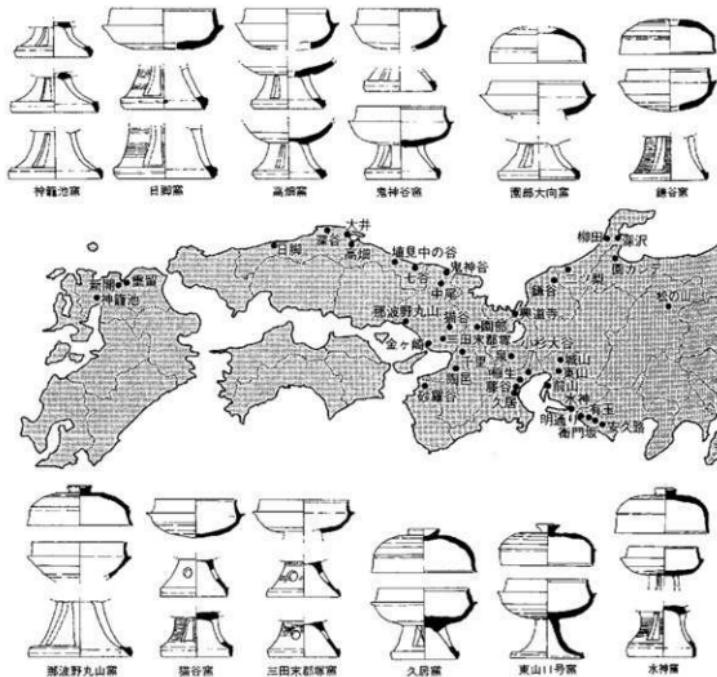


第155図 陶邑窯跡群の成立

に、それぞれ見つかりているように、かなり点々と各地であります。もちろん窯跡っていうのは、まだ見つかっていないものもたくさんありますから、私自身この5世紀の後葉から6世紀の初めにかけての窯場と言うのは、もっとたくさん全国にあっていいかなと思っております。ですから静岡県の東側にも及んでいるのではないかという風に想像しておりますけれども、こういう生産技術が5世紀の早い段階に、王権の膝元と言っていい近畿地方、畿内で確立した後に、5世紀から6世紀にかけて全国的に広がっていくという現象、これは須恵器という焼き物、残りやすい焼き物ですので、ここからその伝わり方がよく分かるという状況になっております。

この時期にはいろんな現象が起こるのですが、玉作りもその一つです。玉作りもいくつか拠点的な生産地ができるようなんですが、中でも大和盆地の飛

鳥に近い橿原市の曾我というところで、巨大な玉作り工房があるということがずいぶん前の調査ですが解ってまいりました。そこでは様々な地域で産出する素材は、近畿地方では滑石が多いんですが、遠方で産出する琥珀であったり、メノウであったり、あるいはヒスイ、水晶であったり、こういう日本各地で出てくる素材を一箇所で集めて、玉作りをするということになります(第157図)。これも5世紀になつて成立をしてきて、古墳時代の間、6世紀中位までは続いているようですが、言つてみればまさしく王権の膝元、王宮の近くだろうと思いますが、そういう場所で、大規模な玉作り生産をまかなければ、その5世紀の段



第156図 5世紀後半から6世紀前半の須恵器地方窯

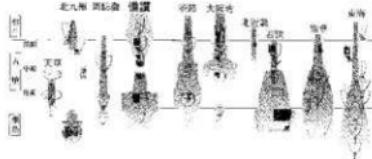
階に一つの大きな動きがあります。

それとよく似た動きが塩作りにあります。これも（第158図）でご確認いただければと思うのですが、もともとの塩作り、塩は濃縮した海水を熱してひたすら水分をとばして塩を作るというやり方、これ、土器で作るので「土器製塩」という言い方をしますが、このやり方は、鉄釜が出来るまでの基本的なやり方ですけど、その一つの中心的な产地が備讃瀬戸です。吉備と讃岐ですから岡山県と香川県の間に挟まる場所で、お年を召した方ならば昭和40年頃まではその辺りたくさん塩田があって、近代でも塩作りの中心地であったということをご存知だと思いますが、そういう瀬戸内海で塩作りが弥生から古墳にかけて盛んだったのですが、その遺跡の消長といいますか、盛衰を調べた、香川県の大久保さんの研究成果なのですが、ちょうど5世紀の段階で、衰退するということが分かっています。ちょうど同じ時期に活発になるのが大阪湾、淡路などですね。やはり王權に近い近畿地方での生産が活発になってきます。言うならば塩作りも王權の足元での集中的な生産に、一時期、なってららしいということがわかります。この段階には、小さな小型のカップ型の製塩土器、大阪溝型といったりしますが、登場しております。これは、後で述べますが、馬を飼うための牧場にこういう物が運ばれたりしてますので、そういう持ち運びも含めて塩の生産とそれから運搬というものを考えた小型の容器が登場するという特色があります。岡山の方もこの後また製塩が復活するのですが、こういう新たにでき上がった小型丸底の製塩土器をここで受け入れるという形で、また再開することがわかっています。この備讃瀬戸は、むしろ6世紀になりますとさらに大規模な生産になってきます。同じ時期、若狭も大規模な生産になってきます。これらの生産地は、飛鳥、奈良時代の塩のシェアをかなり大きく占めていくということになります。そういう意味で、一旦5世紀の段階で、王權の足元に塩作りをまとめた後に、6世紀からまた各地での生産が復活するというか、また適材適所で始まる、こういう現象が塩作りで見られます。

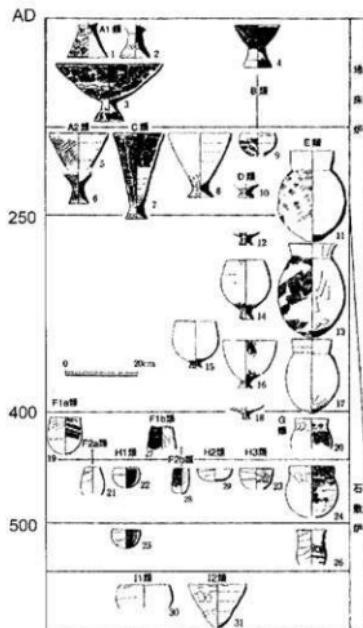
それから、馬の飼育が始まるのも5世紀でして、一番明瞭な例は、大阪平野の東の方になります。大



第157図 曾我遺跡の玉材料の原産地



第158図 製塩遺跡の消長



第159図 製塩炉の変化

阪平野の真ん中辺、河内のあたりは、もともと湖として、その湖にいくつもの川が流れ込む、こういう低湿地のところに「牧」ができていたようです。

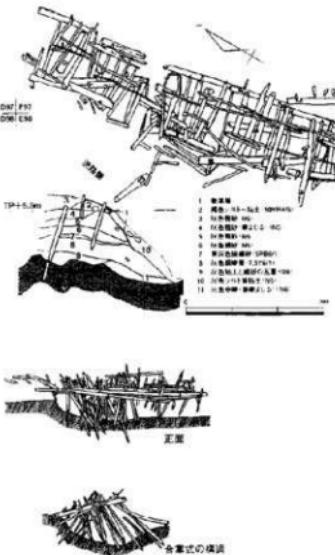
そういうところにある、大阪の四条畷市藤屋北遺跡で大規模な調査が行われた結果、馬を埋葬した土坑、從来から「おむすび型の土坑」と呼んでいたのですが、これ、馬の埋葬だったんだということがわかりました（第160図）。近くの遺跡では、馬に乗るための鞍が出てますし、朝鮮半島からの渡来人を示すものも出土しています。同じ遺跡で先ほど製塩土器が大量に埋められたという状況も見つかっていまして、馬を飼うためにはミネラルとして塩が必要だという知識も含めて馬を飼い増やすという技術が伝わり、これが起点になっていることがわかります。馬の生産も瞬く間に長野県の伊那谷だったり、さらに東であったりというように各地に広がっていって、馬を放牧するのに適した土地のあるところへ、その後5・6世紀を通して、瞬くうちに広がっていくということになります。

他にもですね、近畿地方ではこういう土木技術がかなり革新されたようとして、堤を築く技術などが整えられていったということが遺跡の調査から明らかになっています（第161図）。



第160図 藤屋北遺跡の馬埋葬

こういう様々な手工業生産の展開にあわせる様に、そういった地域の中に伝承上の王宮の所在地を重ねてみると（第162図）、ほぼほぼこの近畿地方、畿内のエリアの中で様々な王宮が造られていったということがわかつております、まさに5世紀の段階にこの王權の膝元、後に畿内と呼んでいるエリアが形成されて、そこでは様々な生産も行われ、そして王宮も築かれ、そして王墓、有名な百舌鳥古墳群や古市古墳群というものがその中におかれますが、こういう王權の基盤というものが5世紀の段階に整えられていましたと言えます。それから、もう一つ先程来お話ししてきましたように、その5世紀に築きあげられた基盤がもとになって、それが各地に伝わっていくという現象が早いところで5世紀後半から起り、5世紀から6世紀にかけての一つの基調をなす動きになっていきます。そういう意味で5世紀の段階の、この倭國の中心部分の形成というものは、その後の日本の列島全体の国づくりにとって非常に大きなターニングポイントになったんだというように考えております。

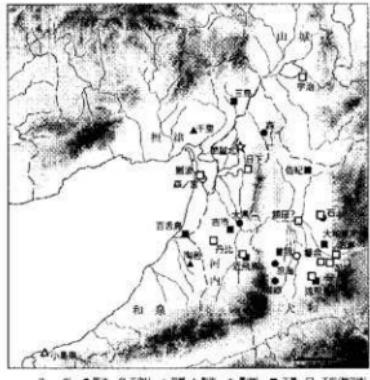


第161図 久宝寺遺跡の護岸施設および「シガラミ」

## 2 ミヤケの設置と地域社会の形成

次にその6世紀の段階にどのようにモノが伝わり、そして把握されていったのかということについて、少し文献の研究なども参照しながら、お話しをしてまいりたいというように思います。

これも扱いにくい言葉なんですが、6世紀代に各地の拠点におかれた施設として「ミヤケ」というものがあったということが知られています。ミヤケというのは「屯倉」と書きますけれど、本来の意味は「ミ」という尊称に「ヤケ」という建物をあらわす言葉がついて、「尊称+建物」なので、せいぜい「立派な建物」というぐらいの意味しかありません。文献の中でいくつも、屯倉を置いた、というような記事が出てきますけれども、そういうものの実態がどういうものであるか、考古学的にはどういうものが当たるのかっていうことは、随分これまででも研究はあるのですけれども、これも意見がわかっているということになります。ただ、文献に出てくる例でいって、先ほど出てきた郡の役所、富士郡の役所が東平遺跡だとお話をありました。郡の役所のことと郡（こおり）の屯倉と呼んでいたりありますので、お役所的な物を屯倉と呼んでいたりらしい、ということを考えてよいかと思います。だから、屯倉という言葉は今風に考えれば「お役所」といつてるぐらいの意味なのかなと、とっておけばいいと思っております。



第162図 手工業生産地と王宮推定地

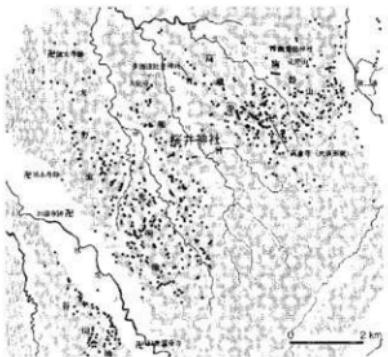
その屯倉が、実は日本の古代においては、ちゃんと郡の役所ができるまで、相当数各地にあつたらしいという事がうかがえる資料、証拠になる史料がございます（史料1）。これを説明を簡単にいたしますと、大化2年、いわゆる乙巳の変のクーデターが起った翌年に、様々な新政策が発表されることになってますが、ここも大化改新があったか無かったか議論が随分わかっているところですけども、記録の中でどんなことが出てくるかという中に、ちょっと面白い屯倉を巡る議論があります。これはどういう内容かというと、皇太子というのが中大兄皇子、後の天智天皇、その時の天皇は孝德天皇で、その二人の間でのやり取りです。要は天皇が、あんたが持ってる屯倉、あるいは部民ですね、名代、子代という部民のことなのですが、そういうものをいったいどうしようかという相談をしているわけです。

「其れ群（むれむれ）の臣（おみ）連（むらじ）、及び伴造（とものみやつこ）、国造（くにのみやつこ）、これも実は地方豪族ですね、地方豪族たちの持てる「昔在（むかし）の天皇の日に置ける子代入部（こしろいりべ）」っていうのが子代のこと、それから「皇子等（みこと）の私に有てる御名入部」、これが名代のことですが、そういう子代や名代、それから「皇祖大兄」は彦人大兄皇子という中大兄からみるとおじいさんにあたりますが、その名代です

史料1　『日本書紀』大化二年三月壬午条

皇太子、使を使して奏請して曰く、昔在の天皇等の世、天下を混齊して治めたまといき、今はに及ぼびて分れ離れて業を失う。天皇、我が聖、万民を牧うべき運に属りて、天人合ひ處、厥の政、惟れ新なり。是の故に、慶び尊びて、頂戴きて伏奏す。現為明神御八島國天皇、臣に聞いて曰く、其れ群の臣連、及び伴造、國造の所有る。昔在の天皇の日に置ける子代入部、皇子等の私に有てる御名入部、皇祖大兄の御名の入部、及び其屯倉、猶古代の如くにして置かんや不。且、即ち恭ひて詔する所を承りて、奉答て曰さく。天に双日無し、國に三王無し。是の故に、天下を兼并して、万民を使いたまうべきところば、唯た天皇のみ、別に、入部及び封ぜる所の民を以て、仕事に開充せんこと、前の処分に従わん。自宗以外は、私に新役せんことを恐る。故、入部五百四十四、屯倉一百八十一所を獻る。

ね、そして、その屯倉をどうしましょうか。昔のように置くのか置かないのかっていう事を尋ねた時に、いやいや今や全ての土地や民は天皇のものですからそういう物は返上しましょう。ということになつて、最終的に中大兄が持っている部民 524 戸、それから屯倉 181 所を奉るというように、中大兄がおそらくおじいさんの代、彦人大兄などから、父親が舒明天皇ですが、そこを経て継承してきた先祖代々の部民や、この屯倉という物を献上するという内容で、事実としていいのかなと思いますが、その数がなんと、その一人の皇子が持っている屯倉の数だけで 181 もあると出てきます。これは文献記録で知られている屯倉の数とほぼ同じくらいで、要は文献に知られていない屯倉が無数にあったと考えてよいだろうということをほのめかす数字だと言えます。文献の中には 6 世紀には、どこそこに屯倉を置く、駿河でも唯一、稚賛屯倉（ワカニエノミヤケ）を置くという記事がありますけれども、そういう事実は実は氷山の一角であつて、それ以外にたくさんの屯倉が存在したと考えられます。現に地名を見てましても、そういう文献に出てこないけれど、ミヤケという地名があるよ、というような場所が各地に



第 163 図 陶邑窯跡群の分布と社寺

第 15 表 陶邑窯跡群の地区別基數

	5 世紀	6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀
大野池	31	2	2	2	0
光明池	14	21	23	41	1
梅	22	38	36	22	0
高藏	55	38	17	39	3
陶器山	11	38	12	15	11

ありまして、そういう隠れた無数の屯倉があるということになります。ちょっと注意しておきたいのは、「伴造、国造の所有する」ということですから、屯倉は本来お役所のような、そこを中心に王権に奉仕するための拠点なんんですけども、そういう物を豪族たちが持っている、豪族たちが管理をしている、という事がこの記事からもうかがえます。ですから、屯倉は、辞書的な紹介の中では天皇の直轄地とかいうように出ることがあるのですが、実際にはそうではなくて、もちろん王権に奉仕する拠点ではあるのですが、実態は、その豪族たちがそこを管理しているということはこの記録からも充分に読み取れます。そういう理解でいくと、6 世紀代、いろんなところにたくさんの屯倉があつて、それぞれの地域の豪族達は、そこの管理を通して、王権に奉仕をするというようなことを想像させる記録になります。

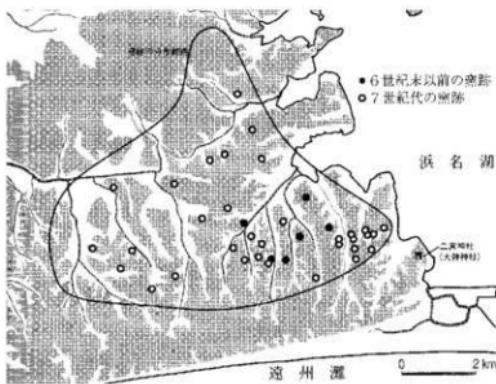
実際にその屯倉という物が、6 世紀代どのように機能しているのか、それがわかる事例についてお話をしたいと思います。先ほど見た巨大な生産地では、その生産者達は、部民として把握されている人たちであったのではないか、ということが一応想像されます。第 163 図は、大阪の陶邑の窯をドットしているのですが、梅地区という地区が 6 世紀から 7 世紀の中心地なのですけれども（第 15 表）、この梅という字のすぐ右下くらいに「上神谷」と書いた地名があります。これ「かずわだに」と読んでいて、かつては「にわだに」と読んでいました。「にわだに」の前はおそらく「みわだに」と呼んでいたという地域になります。ですから、この梅地区、6・7 世紀の中心地の一つですが、ここは「みわだに」という地名で、しかもこの地域の有力豪族に神直（ミワノアタイ）、ミワという名は上神谷の神と言う字で、その神直がこのあたりにいたらしい。そういう須恵器の生産を神直、そしてその配下である神部（みわべ）と言う人たちが、陶邑全体ではありませんが、しかし陶邑の重要な部分を担っていたということがわかっております。また、桜井神社、これ桜井の屯倉というのがこの辺にあったということがわかっているのですが、おそらくそういう生産も屯倉が管理していたのではないかということを推測させる事例になっています。ちなみにこの陶邑で、7 世

紀代、硯のような最先端の焼き物を盛んに焼いていたのは、この辺りです。

同じように神（ミワ）の人たちが焼き物をやっていたということがよくわかる例が、静岡県の湖西になります（第164図）。ここは湖西市の後藤建一さんが随分研究されていて、私もそれを引用しているにすぎませんが、稀有な資料が残っています。天平12年の浜名郡輪租帳です（第16表）。奈良時代の半ばくらいに、ここから税金を納めたという記録が正倉院文書に残っています。どんな史料かといいますと、昔も台風の被害を受けて田んぼが流れてしまつたとなると、税金を免除してもらいますので、その税を免除される人のリストにあたる史料です。誰それの所は全損だからいらないよ、とか、あそこは半分、税金も半分だけ払ってくれ、みたいな、そういうリストがたまたま帳面で残っているわけです。ですから、それによって、この地域に住んでいた人はどんな名前の人たちか、ということを知ることができます。そういう非常に珍しい資料ですが、残念ながら、この資料の中で欠けているのは、まったく被害にあわなかつた人で、それはここに書き上げる必要がないので、そういう運のいい人の名前は出てこないことがあります。これを見てましても、神直、これですね、神人、神人部、やはりこの神って言う字を「みわ」と読みますが、先ほど陶邑で見た人たちが結構たくさんいるらしいということがわかれます。

ります。実は一番多いのがこの「敢石部」と書いて「あえのいそべ」と読むんですが、「いしべ」ではなくて「いそべ」で、ようするに海浜の魚とか貝とかを採る人たちを「いそべ」と言います。ですから、この一番多い人々はまさしく浜名湖岸らしく、こういう海浜の生産に当たっている人たちだなあということになります。そういう意味で、この須恵器の生産をおこなっているのはその次にどうも多い神（ミワ）の人たちじゃないか。そして彼らが祭る神社、二宮神社、大神神社ですが、ここがこの新居郷にも存在をしていますので、彼らがこの神社を祭り、また須恵器の生産にあたつてると考えてよいのかなと思います。

このように6世紀代には各地に生産地が出来ていますが、たとえば今見えた大規模生産地である湖西の窯について見ると、神部という人々が中心になっていて、そういう部がついている部民、部の民ですね、生産を行っている。そういう王権とのつながりというものが、こういうところからうかがえたるわけです。他にもこの神部に限って言えば、牛頭であったり南加賀など、神部の存在、濃濃もそうですが、うかがえる例があり、実は須恵器生産には、神部だけでなくもっといろんな部民が関わっているんですけれども、その中でも神部の関与というものはわりとメジャーな存在ではないかと思っています。ですから先程、須恵器の生産が各地に広



第164図 湖西窯跡群と大神神社

第16表 「天平十二年浜名郡輪租帳」  
にみえる新居郷の住民

郷 戸	房 戸	
神直	3	神直 1
神人	1	神人 1
神人部	3	神人部 2
和田神人	2	和田神人部 1
敢石部	18	敢石部 14
語部	5	語部 5
爪工部	2	爪工部 1
三使部	1	三使部 1
宗宜部	4	宗宜部 2
麻績部	3	麻績部 1
神麻績部	1	物部 1
伊福部	1	津守部 1
計	44	計 31

がるというお話をしましたけれども、広がっていく過程で、その人たちは中央とのつながりを持った部民というような、一定の役割を持って広がっていくんだというふうに考えてよいと思っております。こういう部のつく部民の人たちを統括する場所、管理する場所に屯倉というものが存在していたというのは先程の記録からうかがえますので、こういった生産の背景には、どこかにやはり屯倉というものがあると考へる必要があります。

今度はその屯倉の、実際に置かれた場所で、どのように地域の遺跡が変化しているのかということについて、また遠くの事例で申し訳ないのですが、大阪の北側の、高槻とか茨木と言っている京都・大阪間にあたるエリアですが、そこでのお話をしまりたいと思います（第165図）。ここに記録の中で、史料2に示しておりますが、534年に「竹村」と書いて「たかふ」と読んでいますが、竹村屯倉というものが置かれたという記録が出ています。ここは、そこに地名が出てくるので、御野原とか桑原とか、そういう地名のおかげで、これが大体どこにあるかというようなことがわかるエリアになっています。そこで、このエリアに6世紀代にこういう屯倉が置かれたということが地図上でわかるのですが、それが前代からとそれ以後でどう変化をもたらしている

のかということについて、見ておきたいと思います（第166図）。屯倉の置かれているエリアの中心を安威（アイ）川っていう一つの川が流れています。この川の流域が一つの大きなポイントになります。まず立地関係みておきますと、安威川の両岸ですが、この辺りの灌漑水路というものは江戸の初めぐらいになつて初めて記録に出てきますが、二本の大きな灌漑水路が両側にあるんですね。それがこの安威川に堰を作つて、そこから水をひいて灌漑するというものです。これがいつたいいつからあるのだろうかということがずっと悩んでいたところですが、この灌漑によって潤わされる集落、両岸にあるのですが、それらがいずれも5世紀の前半に、朝鮮半島からの遺物などを伴つて出てくるということがわかっています。ちょっと大胆な推測にはなるのですが、こういう灌漑がすすめられたのは、5世紀の初めごろで、技術を持った渡来人の集落が登場するんじやないかと推測しております。屯倉になるのはそれから百数十年後のことですね。534年のことです。その時にどんな記録になっているかと言うと（史料2）、ここを屯倉にするにあたって二人の人物が出てきます。一人は三島県主飯粒（みしまあがたぬしいいほ）という人で、この人はもともと三島県主というようになつてこの地域の土着の豪族ですが、喜んでその土地を



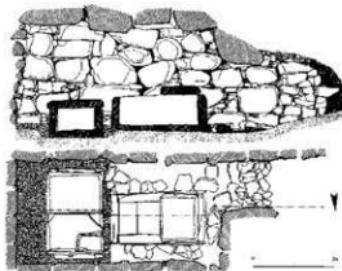
第165図 三島地域の古墳分布

提供した話になっています。もう一方ですね、凡河内直味張って言う人はちょっとケチつていい土地を隠して、それが露呈して大変叱責をうけて、後にこの屯倉の生産をおこなうにあたって、「丁（よぼろ）」すなわち、農夫を出しましようと言つて、何とか罪を償つたっていう記録が出てまいります。ですので、この地域のもともと土地開発にあたっていた三島県主、それから今度は凡河内氏という二つの豪族達が、一方は喜んで、一方は渋々、屯倉に土地を提供している、そういうことがわかります。

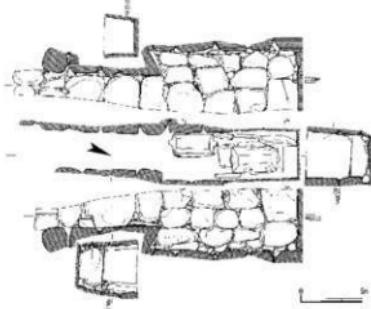
その後この地域はどんな風に変化していくのかというのを見てみると、横穴式石室をもつ古墳が6世紀半ばぐらいに突如出てまいります。一つは南塚古墳（第167図）、一つは耳原古墳（第168図）ですが、そして同時に、この時期、7世紀8世紀におそらく住んでいた豪族たちだと言うのは、地名を持つ

ていることでわかるのですが、中臣氏の一族がこの辺りにその後住んでいるということがわかります。

ですから屯倉の設置を契機として、この場合、ここを担う豪族の変化があり、そして古墳では横穴式石室が現れて、今まで古墳の空白であったところに、耳原古墳であったり南塚古墳が登場してくることになります。このように、どうも古墳の動きとい



第167図 南塚古墳石室実測図 (1:120)



第168図 耳原古墳石室実測図 (1:400)



第166図 安威川と用水路

(西側) (島下)	(島上)	(東側) 安通宮山
300 紫金山 将軍山	御陵山 井天山 井天山C1 郡家車塚	岡本山
400 太田茶臼山	茶臼山	中将塚
500 南塚 青松塚 真原 北塚 桐原塚 (桜原古墳群)	今坂塚 経冲車塚	初田1・2 阿武山

第169図 三島地域の古墳編年

うものが地域の編成のされ方とリンクしています。そして、ここの場合、屯倉を作るということが記録にあるので、その変化の背景が屯倉の設置であることがわかる、という事例になります。

同じようなことは吉備でも言えますが、ここは時間の関係で省略しますが、こうもり塚古墳という横穴式石室を持つ巨大な古墳が成立する背景に、白猪屯倉（シライノミヤケ）とか児島屯倉（コジマノミヤケ）があるだろうと常々推測されています。

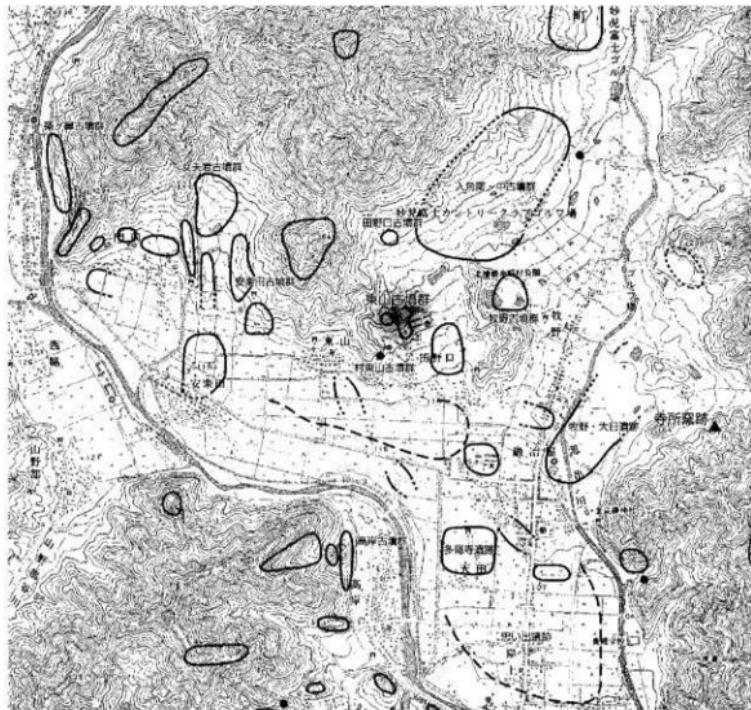
次にもう一つ別のパターンをお話ししていきたいのですが、屯倉の設置を契機にして地域の開発が進む事例を見ておきたいと思います。第170図は兵庫県の真ん中にあたりにある多可町と呼んでいるところですけれども、妙見山っていう美しい山の麓で300基くらいのたくさんの古墳が築かれました。首

長墳は南麓の東山古墳群です。ここに大型の横穴式石室が集中しております。

ここは風土記にも出てきていて、大海山という山がこの地域の中に出でてきていて、これは明石の郡、播磨の沿岸部の大山の里の人々がここへやってきてこの山の麓に住んだので、大海山（おおみやま）と言うということが記されます。大海山の比定地と、先程見ていただいた妙見山の裏にあります。もともと妙見山が大海山でいいんじゃないかなと思っています。そういう移住の記録が先程の風土記の記事に残っているのではないかと考えております。

古墳では6世紀の終わりから7世紀にかけて、大型の横穴式石室が次々に作られております。

この地域、先程も中原古墳群やその前段階の古墳からですね、集落との関係が議論がありましたけれ



第170図 妙見山麓の古墳群と寺所跡跡

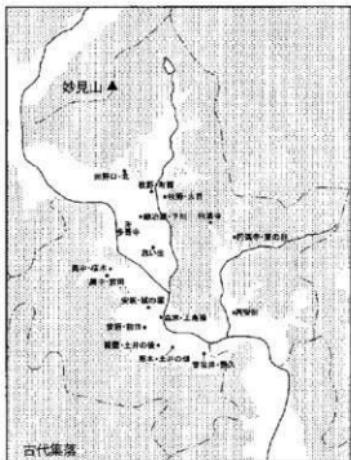
ども、ここも古墳と集落との関係をみていくと非常にうまく連動しております。6世紀の終わり頃から集落もたくさんできて、すなわち、人がたくさん住み始めて地域の開発が進むこと、古墳が集中して築かれるということと、どうも連動しているらしいということがわかります(第171図)。たくさんのが古墳が集中するのは妙見山の山裾になりますが、そこから見える範囲の中にどんなものがあるかと言いますと、先ずは古代のお寺跡、さっきも三日市廃寺の話がありましたが、ここは郡の名前をとった多哥寺。多可郡という郡の中心部になるのですが、いまもお寺さんがあって、もともと多哥寺だという

平野部	道路名	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
北	貞明道	■		前平	後平
	田狩門・北		■	■	
	牧野・町西		■	■	■
	牧野・大口		■	■	■
	鐵砲塚・下出		■	■	■
	多和寺	■	■	■	■
	筑治原		■	■	■
	志い山		■	■	■
安	日高寺・葉の谷		■	■	■
田	内安田	■	■	■	■
出	内瀬寺	■	■	■	■
中	馬中・桜木		■	■	■
部	馬中・前田		■	■	■
	安坂・北上田		■	■	■
	安坂・城の堤		■	■	■
	坂本・毛皮		■	■	■
	坂尾・十三の後	■	■	■	■
	坂本・十三の前	■	■	■	■
	曾我井・小入	■	■	■	■

■…馬傍複数表記は30m以上の十数段土  
■…先点溝未済の谷筋上

伝承を持っています。そして、そのすぐ隣に郡の役所跡、郡家(ぐうけ)といいます。こちらでは東平遺跡でしたが、それはやっぱり同じようにお寺のすぐ近くにあります。

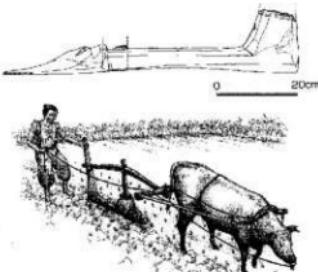
多可郡の郡家では巨大な井戸も見つかっていて、井戸にはやはりシンボリックな意味があるのかなと思っています。そして、もうちょっと南の安坂・城の堀遺跡(あさか・じょうのほりいせき)というところでは、馬に引かせる犁(カラスキ)という農具があり、これは人が耕すのではなくて牛あるいは馬によって耕すという当時の最先端の農具が導入されているわけです(第173図)。そういう地域の開



第171図 妙見山麓の集落の消長



第172図 東山古墳群遠景



第173図 安坂・城の堀遺跡出土の犁と復原図

発が進み、古墳の主というものがそのまま後に郡の役所の長官、郡の大領といいますけども、そういう長官になったことを示す事例ということがわかります。

郡ができるのは、早くは大化の頃に「評」というのがあったっていうことになって、それが後の郡(コオリ)の原型だとされています。それ以前はどうだったのかということになりますが、ここもやはり先程見ましたように、6世紀の終わり位からは人が住み始めて、盛んにこういう開発をやっています。古墳もその時期の人たちのものがあります。おそらく、そういう人たちが拠点にしていったものが屯倉ではないかと言えそうです。



第174図 平城京在京二条二坊五坪二条大路  
濠状造構（北）出土木簡



第175図 量與寺寺領図

というのは、第174図は平城京の左京二条大路の濠から出ている木簡なのですが、奈良時代の木簡の中に、播磨国多可郡中郷に三宅里というのがあるというのが出てまいります。ですので、地名でしかありませんけれども、この中郷というのがだいたい多可町の中村なのですが、その中に三宅里というのがあったということになり、どうもともと前代にあった屯倉が地名として残っていることを示す事例と考えてよいと思います。ですから、郡の役所が出来る前にそういう屯倉を拠点として開発をおこなっている、そういう姿がこの地域の成果から見えてまいりました。

ちなみに第175図は多哥寺の後身で、現在も量與寺さんというお寺さんがあるのですが、そこが持っている中世の文書です。その中に中世初頭位に書かれた寺領図のようなものがあります。伝承としては推古天皇御願とあって、これは疑わしいということになりますが、しかし7世紀から存在していたお寺は瓦が出ていることは確かです。ここで面白いのは、



第176図 多哥寺の位置

このお寺の周囲の地割に、誰がここを今耕しているかというようなことがざらつと書いてあるのです。ちょっと小さくて見えにくいのですが、いずれも返すべしとして書いてあります。お寺が真ん中にあって、周囲のこの八区画がお寺の寺領、寺の田んぼですね、寺田であったという事を示していて、おそらく誰かよその人がこうこう今持て耕していて、本来はうちの土地だから返すべしとして言うようなことが書かれているのです。返すべし返すべしとしてうるさいくらいに書いてあります。こうやって、その1町の四方の中の何反が誰それの分、何反は誰それの分みたいに書いてあるのですが、ほほほほみんな周りは取られているなって感じがわかります。ただ、ここからわかるることは何かと言うと、こうやって地域の真ん中にお寺を建てているのは誰かというと、これはやはり豪族、大型横穴式石室の被葬者あるいはその子孫と考えていいと思うのですね。巨大な古墳を作った人たち、次の時代はお寺を造っていきました。何故作っていったかというと、一つには、こういう形でもともと自分たちの持っていた土地を寺の田んぼという形にして残していくことがあげられます。それ以外にも、もちろん郡の役人になれば、職田って言って郡の役人の分の、これもかなりの面積なのですが、田んぼを持つことができます。ですから地方の豪族たちの保命策として、自分たちが開発

してきた土地というものを寺田にしたり、あるいは郡司の職田にして保っていく、そういうような狙いもお寺作りにはあったんだということを、これは示す事例になります。ちなみにこの多哥寺を現在の地割に置いてみても、ほぼほぼこの地図と同じような方眼、ここ八区画、お寺もあわせて九区画ですね、ここに復元することができまして（第176図）、こういう古代の姿が中世の文書に残り、現在の地割からも確認できるということになります。

私は、この地域の展開と、先程佐藤さんのほうでお話のあった富士郡の地域の展開は、かなり似ているという気がいたします。そういう地域の開拓といいうものが進められる中で、どこかにおそらく屯倉のような施設があり、それを管理する人たち、それが次々にお墓を作っていました。そういうような現象が

第17表 駿豆の須恵器窯跡の消長

国	郡	5c	6c	7c	8c	9c	10c
駿	大國度原郡	駿馬				駿馬	
河	安原郡		大野高岸			大野高岸	
伊豆	方賀郡		大野山			花坂	
	賀茂郡						



第177図 東海地方の主要な須恵器生産地

ここ富士郡でもあつただろうと思います。このエリアの開発の結果、7世紀になって富士郡という形で領域が設定されていく中で、郡の役所、そしてお寺が造られ、また豪族たちはそこに関わっていくという歴史がみえてきそうです。日本古代の地方制度の面白い点は、そういう地方制度ができたときに新しく派遣されて誰かが来るのでなくて、もともとの地元の有力者が郡の役人になっていくというところが最大の特色です。ですから、それまでの地域の有力者が郡の役人になっていたと考えてよいわけですが、その前の段階にどんなことをしていたのかといふと、今お話しして来ましたように、郡と同じような地域の核になる施設、屯倉のような施設を管理し、そういう屯倉の管理を通して、王権と繋がり、あるいは、そこと行き来するというようなことができていたのではないかと考えています。実は屯倉などを考えていく時に一つヒントになるのは、焼き物の窯だろうと考えております。先程、5世紀から6世紀に広がるって言いましたが、6世紀の間にも須恵器の窯は随分あります、わりと短命な窯が多いのです。屯倉の場合は、実はかなり手工業も関わっているということがわかっています。先程紹介した吉備も実は鍛治生産とか須恵器生産が屯倉を核にして行われていたと推測されています。播磨の多可郡でも、須恵器の窯が同じ平地の北寄りにあり、地域の中で生産が完結するような様子というのがこの屯倉の時代に見られるわけです。

これを参照すると、実は静岡県というのは、この6世紀から7世紀前半ぐらいの、屯倉の時代と考えている時期に、小規模な窯があちこちあるのですね（第17表・第177図）。こういう場所はいずれも、その後の郡の役所なんかと関係してこないかななど、思っております。そして、結果としては、湖西の窯が、奈良時代には巨大になりますのでどの窯もそれほど続かないんですね。7世紀の中ではぼしやってしまふのですが、しかし、あえて各地域で窯場を設ける理由というのが、そういう屯倉なら屯倉の完結した世界の中で手工業を一通り取り揃える。そういうような動きがあったと考えていいとこの分布から見ております。

### 3 地域開発と豪族の交通

最後に、屯倉の時代、つまり6世紀から7世紀前半にかけての時期というのは、各地の豪族達が頻繁に都と行き来をしているのではないかと考えます。当然、郡ができるからには、飛鳥時代、奈良時代にはたくさんの貢物、先程の布がまさしく税の一つですが、そういう税が都へ送られたり、あるいは都からの使節が頻繁にやってくるというのは、飛鳥、奈良時代の、古代の一般的な交通ですけれども、その原型のようなことはすでに6世紀には始まっています。もっと古い事例では、埼玉稻荷山の鐵劍銘（第178図）に出てくる「獲居臣（オワケノオミ）」という人が出てまいります。この人物が「杖刀人首（じょうとうじんのおびと）」、まあ武人でしょうか、こういう一つの役職としてずっと王権に仕えてきたということを言って、「獲加多支頭（ワカタケル）」ですから雄略天皇の時に、天下を左治した、助けたというようなことまで言っておりますが、埼玉の、おそらく豪族の子供でありますか、が若い頃こうやって王権の、王宮に出仕をして、そこで働いたというようなことの記念だというふうに、ここでは申し述べているわけです。後には、そういう制度は、舎人という制度として確立していくのですけれども、各地の豪族たちの子供たち、あるいは若い人たちが都へ出て働いたり、あるいは豪族そのものも都と行き来するというようなことが頻繁にあったんだろうということが、こういう事例から推測できます。その結果と言つてもいいかもしれません、それぞれの豪族達が屯倉を管理するようになり、そこを通して王権に奉仕してますことになるのではないかでしょうか。「奉事根原」と言う言葉が鐵劍銘の最後の部分に出てまいります。そういう、王権に仕えるという意識の中で、各地の豪族たちの拠点形成や、王権との交通が進んだというふうに考えてよいと思っています。

その中で彼らは様々な物を入手します。中でも、刀・鎧・弓矢、こういう物は必須のアイテムであったということがわかります。第18表は、文献記録からおこしたものなんですが、ずっと下って7世紀になると、豪族たちに対する武器武具を与えたリストです。一番上にあるのは、天智天皇三年に、大き

な氏の上に大刀、小さな氏は小刀、それ以外の、これ地方豪族たちですが、伴造等の氏上に盾と弓矢、みたいなものがでてきますし、豪族たちが配備すべき武器などで必ず大刀とか鎧とか、そして弓矢がでてきます。ですから、この王権に仕える、そういう人たちがそれを示すアイテムとしてたくさんの武器を持つ、そういうことは当然必要であったのではないかと思っています。

中原4号墳において、大刀がありますし、それからもう一つ、弓矢も矢の数がやはり非常に多い。これは大きな特色で、矢筒に入った矢こそが矢一具とされるものであって、これは単に多いと言うだけではなくて、おそらく溶けてしまつた有機質の矢の矢筒があつたんだろうと思うのですけども、そういうちゃんととした矢を持っています。そういうようなところからすると、やはり地域を代表する豪族であったんだということを示すアイテムではないかというように思っております。

その人物が何故、このやや小ぶりな石室に入っているのか。これは非常にアンバランスで、これだけの立派な副葬品が、何故このちょっと小規模な、見過ごしてしまいそうな石室の中に入っているのか、またみなさんのお話を聞きながら被葬者像を描くことができたらいいな、というように思っております。

### おわりに

なかなか地域に即した話ができなくて申し訳ないのですけれども、しかしこここの古墳群で見てることというのは、6世紀から7世紀の列島社会の動きを見ていく中で、かなり一つの典型になる、大きな足がかりになる事例ではないかと思いました。その背景には、この類稀なる資料ですね、これだけのものが荒されずに全部残されてくれていたことがあげられます。またこのロケーションですね。これまたいろいろ検討が進めばと思うんですけれども、先程お話をあった伝法沢川などとか、明治の地図をのせてみると、まさしくこのエリアから龍側がずーっと田んぼになっていて、古墳があるとこから上側が台地になっています。そういう、ちょうど肥沃な台地の下の部分を灌漑していく開発っていうものが、おそらく、この5世紀から6世紀にかけておこなわれ

(表)	辛亥年七月己記乎獲居臣上祖名意富比壇其兒多加利足 其兒名弓已加利獲居其兒名多加利次獲居其兒多沙 鬼獲居其兒名半豆比
(裏)	其兒名加差坡余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來 至今獲加多支兩大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百 鍊利刀記乎奉事根原也

第178図 塙玉稻荷山古墳鉄劍

第18表 豪族の武具武器の装備

年	西暦	月日	対象	武具・武器
天智天皇三年	664	2月9日	大氏之氏上	大刀
			小氏之氏上	小刀
			伴造等之氏上	千幡弓矢
持統天皇七年	693	10月2日	淨冠～正冠	甲一領、大刀一丁、弓一張、矢一具、鈴馬、
			鶴冠～進冠	大刀一丁、弓一張、矢一具、鈴馬一枚。
文武天皇三年	699		正大式～無位	正大式及び兵馬。各有差。

で、そういうものを通して王権と繋がっていく地域の有力者像ってものをみることができるわけです。その姿と、そしてここはもう一つ大事なポイントとして、東海道に面する、つまりメインストリートにもあたる場所であります。そういう二つの要素というものが、この地域性を考えていく上で非常に大きなポイントになると思っております。そういう意味でもこここの富士市の地域、旧富士郡でどんな地域編成がおこなわれてきたのかということを知ることができる格好の機会に、今日はなるのではないかと思います。これから話に私もぜひとも参加させていただいて、豊かな地域史、そしてそれをまた列島の歴史の中にしっかりと位置づけていくということができるればうれしい、と思っております。

つたない発表で申し訳ありませんでしたが、このエリアを理解するための背景になるような話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。



第179図 富士郡の古代地図

本論は、平成30年1月21日、富士市役所において開催された『平成29年度 中原第4号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム 中原第4号墳の被葬者に迫る』における講演内容を文字化し、当日配布資料やパワーポイント資料などを用い、再構成したものである。

なお、当日の資料集は富士市役所のホームページで公開されている。

#### 参考文献

- 佐藤祐樹 2016 「伝法古墳群の展開と地域社会の成立」『伝法・中原古墳群』富士市教育委員会
- 城ヶ谷和広 2010 「東海」霊跡研究会編『古代農業の基礎研究—須恵器窯の技術と系譜—』真陽社
- 鈴木一有 2013 「7世紀における地域拠点の形成過程—東海地方を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』179号 国立歴史民俗博物館
- 田中史生 2002 「渡来人と王権・地域」『日本の時代史』2 吉川弘文館
- 菱田哲郎 2005 「須恵器の生産者—五世紀から八世紀の社会と須恵器工人」『列島の古代史』4 岩波書店
- 菱田哲郎 2007 『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 菱田哲郎ほか 2012 『新修茨木市史』第1巻 通史編1 茨木市
- 菱田哲郎 2013 「7世紀における地域社会の変動—古墳研究と集落研究の接続をめざして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』179号 国立歴史民俗博物館

## はじめに

静岡県富士市増川に所在する浅間古墳は、古墳時代を通じて静岡県内最大規模を有する前方後方墳であり、駿河湾全体から望むことのできる立地から「海浜型前方後円（方）墳」に位置づけられる典型的な古墳といえる（広瀬 2013）。近年では、沼津市高尾山古墳や三島市向山 16 号墳、南南町瓢箪山古墳など東駿河・伊豆における前期古墳の発見が相次いでいるものの、浅間古墳がもつ重要性に変わりはない。

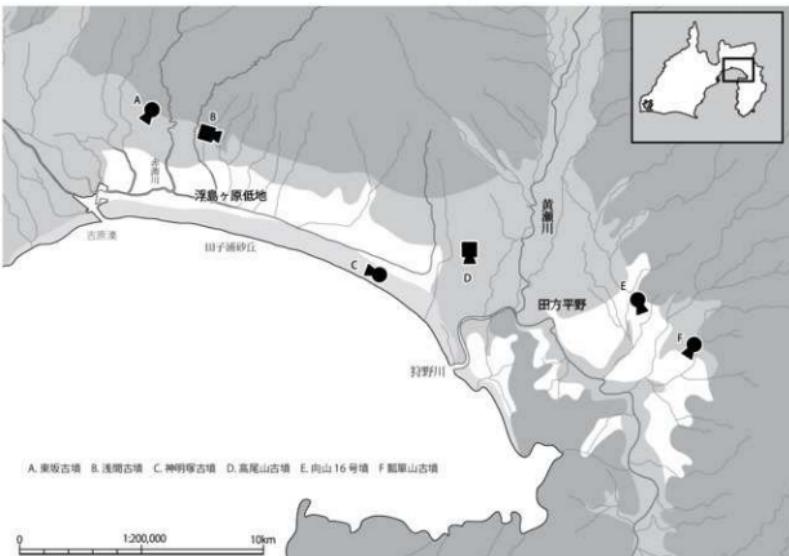
これまでに発掘調査が行なわれたことはないものの 1997 年には静岡県教育委員会から委託を受けた静岡大学人文学部考古学研究室により詳細な測量調査が実施されている。

本論ではこれまでの所見や墳丘復元を再検討し、新たに墳丘に対する所見や復元図を示すことを目的とする。

## 1 これまでの調査成果

浅間古墳におけるこれまでの研究史は 1998 年の報文に詳しい（静岡大学人文学部考古学研究室 1998、以下「1998 報文」とする）。研究史上、特に重要なのは永らく前方後円墳と認識されてきた浅間古墳に対して測量図を示しながら前方後方墳であることを指摘した内藤晃氏の報文である（内藤 1958）。さらに長軸 103m、後方部幅 61m、同高 11.8m、前方部幅 40m、同高 8m という復元値を提示した点は、現在まで続く、浅間古墳における基礎的な研究の定石ともいえる。

また、前述の 1998 報文では「墳丘約 90m、後方部長約 60m、南北側墳裾からの後方部高約 10m の前方後方墳である」とされ、後方部二段、前方部一段の墳丘復元がされた。また、明確な記述はないが墳丘復元図上では墳長 92.3m 程度の大きさが示されている。



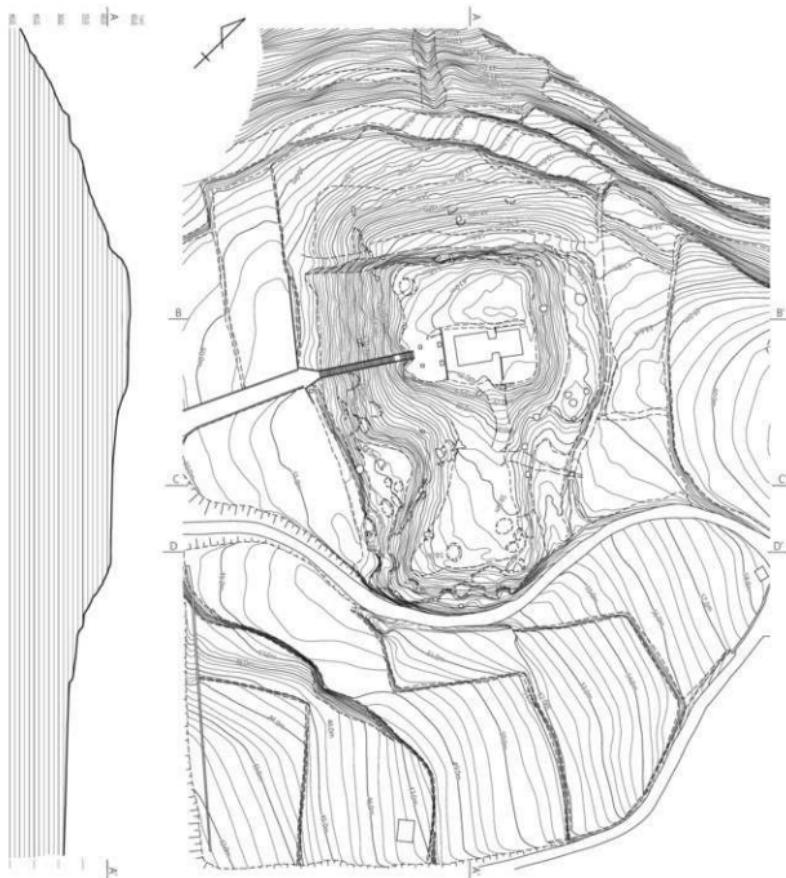
第 180 図 東駿河・伊豆における前期古墳

## 2 墳丘の再検討

墳丘各所における事実記載については1998報文にあるので詳細はそちらに譲り、今回は大きく異なる所見について述べていくこととする。

浅間古墳の最大の特徴ともいえる南側（海側）からの正面観に関連しての墳丘のあり方、特にくびれ部の解釈についてである。1998報文では南側のくびれ部と平坦部について「張り出し、あるいは、造

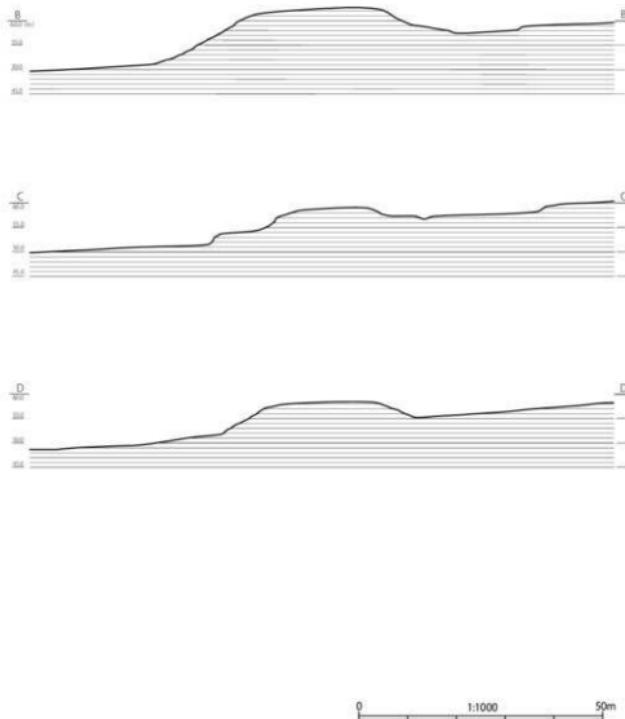
り出し状の施設の存在も考えられるが、このくびれ部付近では他の傾斜部分より等高線の間隔がせまく急傾斜を成すことから、このくびれ部分が大きく崩落した土石の堆積によってテラス状の地形が生じた可能性」を指摘している。おそらく後方部南側の墳頂とくびれ部の傾斜変換線がうまく接続しないことからこのように考えたと考えられる。



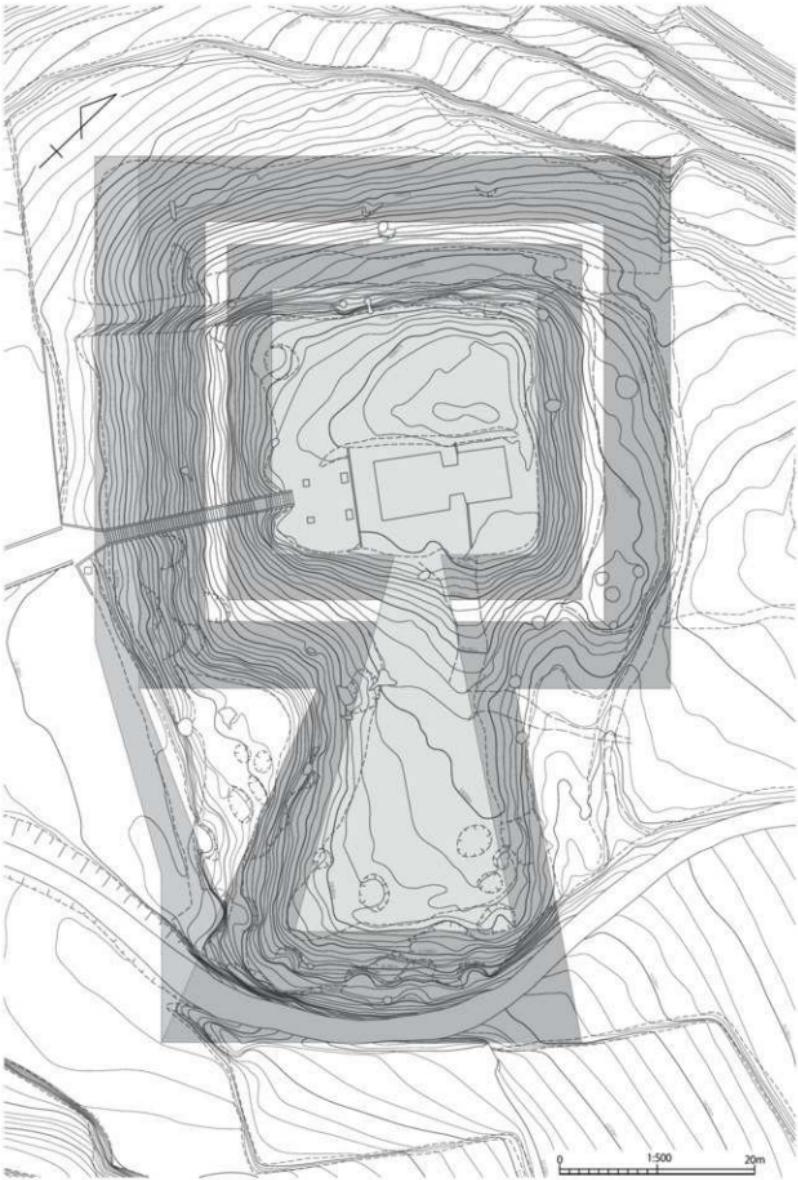
第181図 浅間古墳 測量図・エレベーション図

その問題を解決するために基壇の存在を指摘したい。前方後円墳における「基壇」とは一般的に栃木県域における後期古墳において特徴的に認められる「段築の第一段目のテラス部が広く基壇状を呈」する部分について示す際に使用される用語である（進藤2002）。その「基壇」と今回、浅間古墳において指摘する部分については、その目的も時期も大きく異なるが今回は暫定的に使用する。

さて、結論を述べると浅間古墳は海からの視認性を強く意識して築造されており、南側のみ一段多く築造されていると考えられるのである。具体的にはくびれ部に明瞭に観察される傾斜変換線は、墳頂が良好に遺存した状況を示しており、標高54.5m付近が本来（設計上）の墳頂で、それが後方部南側においては基壇傾斜の上部に接続していると考えられるのである。



第182図 浅間古墳 エレベーション図



第183図 淡間古墳 墓丘復元図

前方部南側側面については土地改変が著しいが等高線や現地の観察からは後方部同様に基壇が存在している。

ただし、基壇の傾斜と墳丘傾斜との間に明確な傾斜変換は現状では観察することはできない。結果的にはくびれ部とその前面に広がるテラス状の部分は前方後方墳であることを明確に認識させるための強い意識のもとで作られた平坦面といえよう。現状では、海側にある基壇は前方部南側面の基壇や山側に向かってどのように収束するかは明らかではないが、等高線を見る限り後方部西側ではなく、墳丘の海側（南側）のみを高く見せるための造作であったものと推測される。

以上の分析から浅間古墳は基本的には後方部二段築成、前方部一段築成だが、基壇部分を含めると、南側のみは後方部三段築成、前方部二段築成と表現できる。

### 3 墳丘復元

墳丘復元をするにあたり、現状で観察（認識）することができる傾斜変換について改めて整理しておくと以下のように整理される。

まず、後方部の後端である。墳丘斜面から自然地形に緩やかに移行すると考えられるが、等高線の密な部分を直線的に認識することができるため、この部分を後端ラインと判断した。後方部の海側（南側）の裾（基壇裾）と一段目の裾、くびれ部については前述の通りである。

前方部前端はもっとも意見の分かれる部分である。前端斜面が土地改変により急傾斜になっており、現状の見た目の傾斜変換よりも外側に本来の裾が存在したと考えられるが、それでも前端付近の農道よりも大幅に外側に広がるとは等高線からは考えられない。そのため、農道が、古墳の裾に沿って作られていると仮定し、農道の外側ラインを前方部前端として捉えておくのが妥当であろう。また、そのように考えると前方部は後方部に対して直角に接続していない可能性や、前方部前端が剣菱状の形態であった可能性も指摘できるが、今回は墳裾が主軸に直交する復元案を作成した。

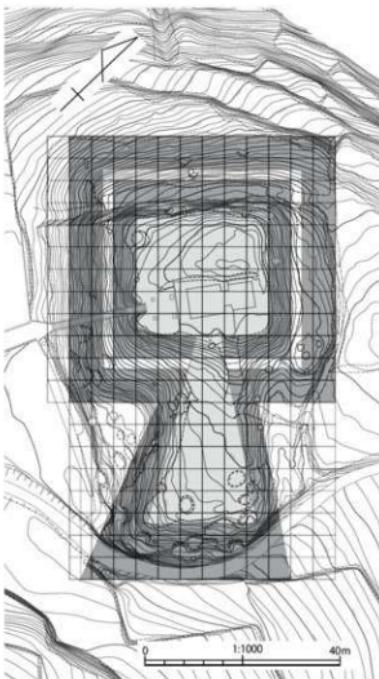
後方部の山側は土地改変が著しいものの傾斜変換を直線的に認識することができる。ただし、そのラインが本来の墳裾をどれほど反映したものであったかは現状では明らかではない。

次に、後方部のテラス部について整理していく。海側（南側）において等高線が緩やかになる部分があり、この部分を一段目のテラスと推測した。また、前方部墳頂平坦面の傾斜変換は前方部前端の墳裾同様、後方部に対して直角ではなかった可能性もある。後方部の二段目は等高線が急になるラインからとし、後方部の墳頂は大きく改変されていないという前提で復元した。

以上を総合して、以下のように復元した。

全長 90.8m、後方部長 54.5m、前方部長 36.3m

後方部高 11m（南側基準）・4.75m（北側基準）、前方部高 7m（南側基準）・2m（山側基準）



第184図 浅間古墳の墓造企画

築造規格については沼澤豊氏の研究成果（沼澤 2005a・2005b・2005c）を参考にして、後方部 12 等分割方法を採用して検討した。その結果、復元される墳丘ラインと 12 等分割方法が極めて適合的であるとの結論に至った。後方部 12 等分割では、前述の基壇を含めず方眼をあてはめたが、海側の基壇部分は 1 区画分に相当することが明らかとなった。また、後方部墳頂平坦面は 6 区画、二段目の墳丘開始ラインが 8 区画に相当する。テラス幅は 1 区画の半分の幅に相当すると復元されたが、これは 24 等分割の規格が働いている可能性がある。また、くびれ部幅も 6 区画、前方部前端ラインは主軸に直交しない可能性もあるが、20 区画に一致している。

さらに本論ではあまり触れなかつたが、後方部山側の墳丘に沿って存在する周溝状の落ち込みは 3 区画分を示しており、自然地形と墳丘との分断を図ることを目的とした周溝と評価することもできよう。

### おわりに

本論ではこれまでの静岡大学によって行なわれた詳細な測量調査成果を基点として海浜型前方後方墳である浅間古墳の最大の特徴である海側（南側）からの視認性の解釈にあたり基壇というものの存在を指摘することでこれまで示されてきた復元図と若干異なるものを提示した。今後、「浮島ヶ原ネットワーク」（佐藤 2018）に含まれる高尾山古墳や神明塚古墳、東坂古墳などの古墳もあり方も再検討し、東駿河・伊豆における前期古墳の歴史性をより重層的に解釈していく必要があろう。

### 参考文献

- 佐藤祐樹 2018 「駿河・遠江における古墳出現期の様相—浮島ヶ原における首長系譜を中心にして—」『東海における古墳出現期の様相』2 (第 30 回考古学研究会東海例会資料)
- 静岡大学人文学部考古学研究室 1998 「静岡県富士市・国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』(静岡県内重要遺跡詳細分布調査報告書) 静岡県教育委員会
- 進藤敏雄 2002 『栃木県』の後期古墳の地域性』『前方後円墳の地域性』(第 7 回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料)
- 広瀬和雄 2013 「海浜型前方後円墳」『海浜型前方後円墳の時代』公益財團法人かがね考古学財团
- 内藤晃 1958 「遠江駿河の前方後方墳」『私たちの考古学』17 考古学研究会
- 沼澤 豊 2005a・2005b・2005c 「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）・（中）・（下）」『考古学研究』第 89 卷第 2 号・同巻第 3 号・同巻第 4 号

## 第3節 医王寺経塚出土資料とその意義

### —12世紀後半における富士山信仰の一様相—

藤村 翔

#### はじめに

昭和9年（1934）に発見された医王寺経塚は、「承安四年」（1174）の紀年銘を有する銅製經筒が見出されたことによって、銘文を中心とした資料的価値の高さが様々な文献によって取り沙汰されたにもかかわらず、個人所蔵資料ということもあってか、実測図を含めた考古資料としての詳細な報告は未実施であった。そのような中、富士市立博物館（富士山かぐや姫ミュージアム）が実施したリニューアルオープン1周年記念展『富士登山列伝～頂に挑むということへ』（会期：2017年6月3日～8月27日）において同資料が展示公開されることとなり、それに併せた実測調査および写真撮影を博物館において

実施することができた。本稿ではその成果を報告し、あわせて医王寺経塚出土資料が提起する諸問題について、若干の考察と現状における見通しを示したい。

#### 1 医王寺経塚研究小史

##### （1）医王寺経塚の立地と発見

医王寺経塚は、富士山南麓を南に流れる滝川と赤瀬川の間、曾比奈溶岩流によって発達した丘陵端部の標高34mに立地する。経塚から真北には富士山山頂、南側には浮島ヶ原低地から駿河湾、伊豆半島を望むことができる。経塚からすぐ南側の丘陵崖下には、浄土宗の寺院である龍水山医王寺の本堂や墓地が広がる。



第185図 医王寺経塚 位置図



第186図 医王寺経塚遠景（本堂上段の丘陵上、南から）

昭和9年（1934）、椎の大木が台風で倒れた際に、根元から銅製経筒1点、和鏡2面、合子2点（組）が出土した。これらの出土資料は、経塚の南側に伽藍を有する比奈・医王寺に納められ、昭和59年（1984）12月24日には「医王寺経塚遺物」として、富士市指定有形文化財（考古資料）に指定された（富士市教委1984、以下『指定書』）。発見場所について地図上に提示した文献は『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』（渡井1988、以下『富士市の埋蔵文化財』）のほかなく、現地にも標柱など発見地を指示するものはないが、発見地近傍には、平成18年（2006）に阿弥陀三尊（阿弥陀如来・勢至菩薩・觀世音菩薩）の石像が建立されている。

## （2）報告の変遷とその評価

「医王寺経塚遺物」のうち、銅製経筒に銘文が存在することについては市指定の段階で注目されていたが、その判読は「承安四年」（1174）、「三月五日」、「僧」までに留まっていた。また、その意義については、平安末期に浸透した末法思想の影響を富士市域において確認できる貴重な資料であるとして、その歴史的価値が評価された（富士市教委1984）。その後、『経塚遺文』編纂時に有識者によって判読が行われたようであり、「承安四年口歲甲午／三月五日／僧鑿應」まで報告されるに至る（閔編1985）。その所見は『静岡県史 資料編4 古代』（静岡県1989）にも踏襲・再掲された。

出土状況と遺物の概要については、『富士市の埋蔵文化財』に紹介されたが、各資料の点数については記載が無く、経筒、和鏡についてはすべて写真入りで紹介されたものの、合子は完形品のものしか掲載されていない。経筒は円筒形被蓋作りで底が嵌板であること、「承安四年」の紀年銘があることについて紹介されたが、後述するように実際の底部は被底である。また、和鏡の形式について、『富士市の埋蔵文化財』に記載はないものの、「12世紀頃盛行した典型的な和鏡」とする。一方、『指定書』には2面とも水草双鳥鏡であることが明記されている。その後、『静岡県史 資料編3 考古三』経塚遺物一覧では、医王寺経塚の出土品は「経筒一・和鏡二・青白磁合子一」とされ、新たな写真も掲載されたが（平野・志村1992）、『富士市の埋蔵文化財』に

依拠したためか、もう一点の合子の存在については漏れている。『富士市の文化財』（富士市教委2001・2012）では『指定書』の記述に基づき、資料の正確な点数の記載と、初めて破片の合子も含めた集合写真が掲載され、銘文については先の『静岡県史 資料編4』と同様のものが紹介された。その後、富士宮市教育委員会が刊行した『村山浅間神社調査報告書』において、経筒と合子の簡易実測図および和鏡の写真が掲載されたが、詳細な事実記載はされていない（渡井2005）。

以上、管見の限り、医王寺経塚についての報告をまとめてみたが、市の公文書である『指定書』やそれを受けて刊行された『富士市の文化財』にある程度その全容がわかる形で記載されているものの、それ以外は断片的な報告に留まっており、紀年銘経筒という重要な資料が出土している割には、広く周知されてきたとはいがたい。特に、静岡県考古学会等が牽引した駿河・伊豆地域の中世関連資料集成事業には、1997年のシンポジウムでは採り上げられず（静岡県考古学会1997）、2003年にいたって漸くその概要が紹介された（静岡県考古学会2003）程度であり、当該期の研究者にも十分に情報が共有されていない状況にあるといえる。

## 2 医王寺経塚出土資料

本節では、既存の報告では断片的・部分的にしか明らかにされてこなかった医王寺経塚出土資料について、その詳細を種別毎に報告していきたい。

### （1）銅製経筒

1は銅製経筒であり、総高19.5cm、身高19.4cm、口径9.9cm、底径10.2cm、器厚0.1～0.15cm、蓋高1.4cm、蓋径10.5cm、底部高0.7cmを測る。銅鋳製とみられ、円筒形の筒身に被蓋式の平蓋を載せ、底部は被底となる（石田1927）。蓋・身とともに内面は綠青が発達しており、錫掛などの痕跡は不明瞭である。外面は発見後の錫落としによって、一部地金が見えるほどに研磨されている。地金は銀色を呈する。

経筒銘文は、今回の実測調査によって初めてその全文を判読することができた。筒身外表面の縦11.0cm、横4.5cmの範囲に、「承安四年大歲甲午／三月五日／僧鑿應」の銘文が陰刻される。発見後の研磨によ

る影響もあったのか、銘文の刻線は非常に細く、不明瞭なものとなっている。

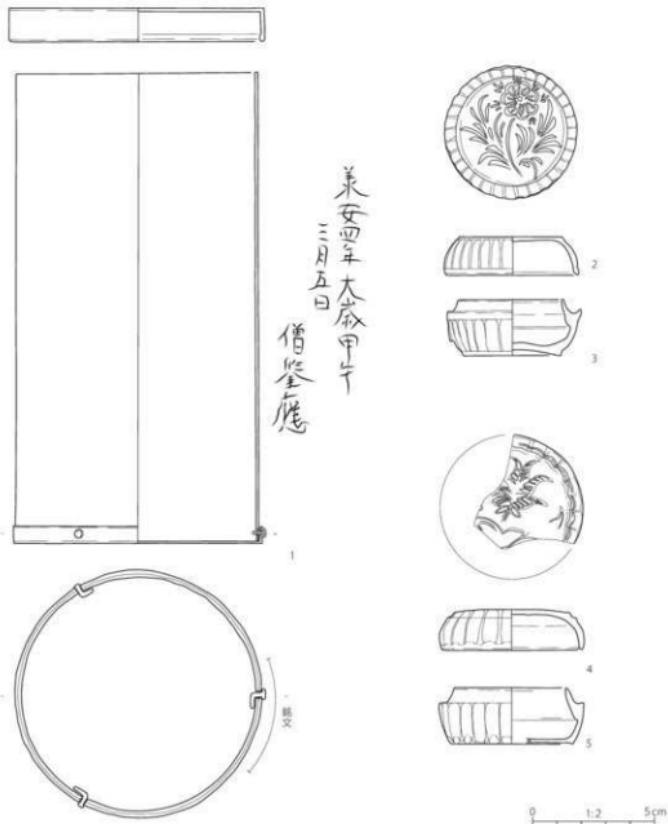
蓋は頂部が平坦で立ち上がりが垂直となる平蓋形であり、端部内面は肥厚させ、端部と立ち上がり部の境界には沈線が巡っている。

被底となる底部は、蓋と類似した円筒形で平底の部材を筒身下部に被せ、外側から3ヶ所を銅製の鉢で固定している。鉢は3本とも全長約1.0cm、鉢頭の形状が径0.4cmの円形のものであったとみられるが、鉢頭がよく残るのは1ヶ所のみであり、他の2ヶ

所は鉢頭の一部が欠損する。鉢を打ち込む際、筒身の内部に突出した鉢芯部は、上から覗き込むと時計回りの方向へと揃えて直角に折り曲げることで、内部を比較的円滑に仕上げている。

## (2) 土器

2~5は、白磁合子であり、いずれも型押し成形によって縞連弁状の陽刻が側面に入るるものである。『富士市埋蔵文化財』・『静岡県史 資料編3』とともに、合子は完形の1組しか報告されていなかったが、今回の報告によって、少なくとも2組以上埋納



第187図 医王寺跡出土 経筒・土器

されたことが明らかになった。2、4が蓋、3、5が身であり、出土状況に基づいた使用時の組み合わせは不明であるが、既報告では完形品の2・3を組み合わせた写真が掲載されている。2組ともに、円形の印籠蓋造りである。釉の発色はやや緑色を含む薄い青色を呈する。

2の蓋は口径が5.4cm、最大径が5.5cm、器高が1.6cmを測る。頂部には花文があしらわれる。釉薬は、外面は全体に、内面は蓋内部の天井部にだけ施される。3の身は上げ底で、口径が4.2cm、最大形が5.5cm、器高が2.3cmである。釉薬は、外面は体部上半から口縁部にかけての部位に、内面は全体に施される。外面の一部に赤褐色の付着物がみとめられるが、顔料かどうかは不明である。4の蓋は欠損が多く、残存率は口縁部で30%、頂部で40%ほどである。口径5.7cm、最大径が6.0cm、器高が1.7cmである。頂部には葉文があしらわれる。釉薬は、外面が体部上半から頂部まで、内面は蓋内部の天井部にだけ施される。5の身も欠損があり、残存率は底部で50%ほどである。口径が4.6cm、最大形が6.0cm、器高が2.3cmである。釉薬は、外面は体部から口縁部にかけての部位に、内面は全体に施される。

以上の白磁合子は、その特徴から12世紀後半～13世紀前半の所産と判断される。

### (3) 和鏡

和鏡は2面出土しており、ともに似た意匠ながらも細部が異なる洲浜萩薄双雁鏡（洲浜秋草双鳥鏡）である。6は面径10.4cm、周縁高0.5～0.6cm、周縁幅0.2cmを測る細縁鏡である。外区に0.4cm大の欠損があるが、意図的なものか定かではない。鏡背中央に花形座紐を置き、周囲には界圏を巡らす。界圏は1条で、線の太さは左下部分でやや細くなるものの、比較的安定している。紐は半球形、孔は扁平な蒲鉾形で貫通する。鏡背文様は、雁2羽、萩、薄、流水によって構成される。下部にはS字状に流水をあしらい、その周りには小型の薄を、紐上方に大型で力強い薄を配する。雁は、紐と大型の薄の左右に1羽ずつ向かい合い、ともに上方に飛翔する構図をとる。萩葉は界圏に沿って巡るが、上部では中央の大型の薄から左右に広がるような意匠となっており、一部は薄と同化している。薄は穂を実らせたか

のように先端をやや肥厚させているほか、雁も描線に強弱をつけることで繊細な表現となっており、7の鏡と比べて全体的に繊細な造形が施された文様表現が達成されている。

7は復原面径10.5cm、周縁高0.6cm、周縁幅0.2cmを測る細縁鏡である。外区から周縁の6割が欠損する。また外区には径0.4cmの円形の孔が穿たれている。鏡背中央に菊花座紐を置き、周囲には界圏を巡らす。界圏は1条で、線の太さは一定である。紐は載頭半球形、孔は隅丸方形で貫通する。鏡背文様は、雁2羽、萩、薄、流水によって構成される。下部には流水をあしらい、その周りには小型の薄を、紐上方に大型の薄を配する。6の薄と比べると、7の薄は先端が先細る簡略な形態となっている。雁は6と同様、紐と大型の薄の左右に1羽ずつ向かい合い、ともに上方に飛翔する構図をとっているが、描線はやや太く、単調な表現となる。外区の一部には、界圏に沿って萩とみられる葉の細い植物も見える。

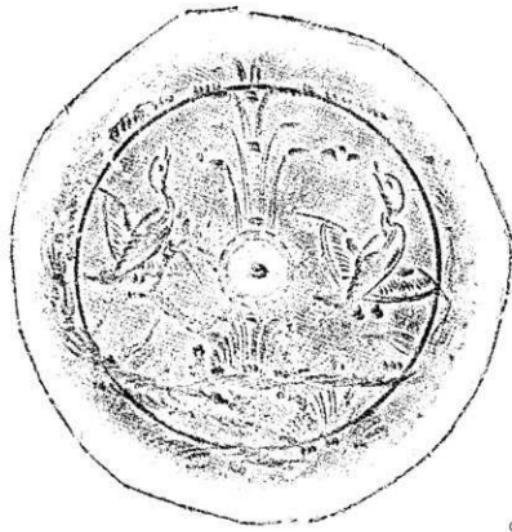
6・7は、文様構成と細縁、薄い鏡胎の特徴から12世紀第2四半期～第3四半期を中心とする年代が与えられる一方で、花形座紐は12世紀末から13世紀前半の特徴とされている（久保1999）。ただ、本例の花形座紐としたものは、6では花形座の内側の円が所々角張るため正円となっておらず、7は花形座の放射状の線にやや振舞のような箇所があり、ともに振舞座紐の特徴が非常に強く残る形態をとっている。以上の点から、本例の年代観としては、12世紀後半頃の年代が妥当であると考えられる。

### (4) 小結

医王寺経塚出土資料の年代観をまとめると、経筒がその銘文から埋納年代が平安時代末期の承安四年（1174）に定めることができるなかで、白磁合子は12世紀後半～13世紀前半、和鏡は12世紀後半にそれぞれ比定することができ、銘文年代との矛盾はみとめられない。したがって、本資料は大きく時期を違えた複数回の埋經活動による所産ではなく、経筒銘文にある承安4年（1174）三月五日の埋經時あるいはそれに極めて近接する時期に納められた資料群とみてよいだろう。



6

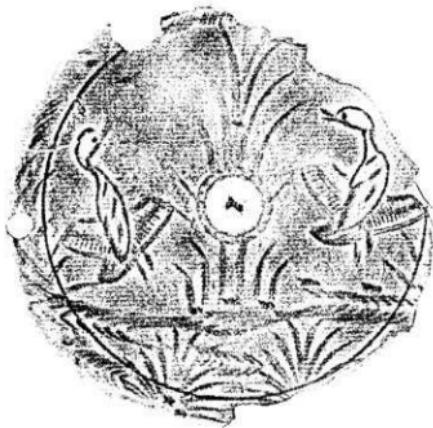


0 1:1 2cm

第188図 医王寺経塚出土 和鏡 1



—  
— 7 —



0 1:1 2cm

第189図 医王寺経塚出土 和鏡2

### 3 医王寺経塚出土資料の意義

本節では、前節までに得られた医王寺経塚出土資料の知見を基に、その性格や歴史的意義についてまとめてみたい。

#### (1) 僧鑒應と富士山信仰

医王寺経塚出土資料を埋納した僧鑒應については、残念ながら現状では管見の限り他の史料資料にその名が現れておらず、その来歴は明らかではない。しかし、平安末期に「鑒」の字を共有し、富士山周辺地域で活躍した僧侶は鑒應以外に2名知られているので、その人物達の共通点と、医王寺経塚の立地の観点から、鑒應の性格を推定してみたい。

**富士上人・有鑑（末代）** まず、鑑の名を有する最も有名な人物として、富士上人・末代を挙げることができる。末代は平安時代末期の富士山を山岳修行の場と位置づけた史料的に確実な最初期の人物の一人である。地元駿河国出身で元の名を有鑑と称し、伊豆走湯山のほか（「浅間大菩薩縁起」、西岡2000など）、富士郡岩本の實相寺の智印上人の元で修行した（「實相寺宗徒愁狀」、若林1969）。實相寺とは、鳥羽院の発願によって久安年間に智印上人（阿弥陀上人）によって創建されたと考えられる天台寺院である（若林1969）。『本朝世紀』によると末代は久安五年（1149）四月一六日条において富士登山をして山頂に大日寺を構えたこと、さらに同年五月一三日条にて鳥羽院らが結縁して書写した一切経を山頂に埋納したことが伝わり（荒木1994）、その埋納物の一部あるいは承久年間（1219-1222）の再埋納とみられるものが富士山頂の三島ヶ嶽経塚で発見されているほか（勝又2011など）、12世紀代から本格化する山宮浅間神社遺跡と末代の活動との関連が指摘されている（渡井2017）。



第190図 経塚から富士山を望む（南から）

**金剛佛子・惟鑑** また、末代（有鑑）の一切經埋納から17年後の仁安元年（1166）四月一六日に、金剛佛子・惟鑑という僧侶が走湯山東谷上松尾谷において某書を書写したことが伝わっている（金沢文庫所蔵「不完冊子5」、荒木1994）。伊豆走湯山には12世紀末には西谷に伊豆山権現別當寺である真言宗密嚴院を中心とした諸寺があったとのに対し、東谷には常行堂などの天台寺院があつたとされる（熱海市役所1967、宮家2010）。また山本義孝氏は伊豆走湯山東谷を中心とする天台系寺院・常行（三昧）堂における阿弥陀如来と山神（天台系摩多羅神）の信仰から、走湯権現成立の背景に天台宗山門派の山岳密教の影響があったことを指摘している（山本2004）。惟鑑が書写した文献は不明であるが、その書写時期からも天台系の堂舎において実施された蓋然性は高い。

**富士都医王寺の性格** 経塚が造営された溶岩台地のすぐ南側には、龍水山医王寺の伽藍が広がる。現在の医王寺は淨土宗鎮西派であるが、天平年間に行基が創建したという寺伝が残り、平安時代には真言系の密教道場であったという指摘もある（奈木ほか編1989）。本尊は阿弥陀如來である。本堂東側の台地上に薬師堂があり、11世紀後半～12世紀の定朝様に範をとった木造薬師如來坐像が安置されている（富士市教委2012）。以上の点から、経塚造営の年代と前後する時期である平安時代末期までは、医王寺自体も成立していた蓋然性はかなり高い。

また、第1節で述べたとおり、経塚からは北側に富士山、南側に浮島ヶ原（富士沼）から駿河湾、伊豆半島までを眺望することができる。前掲「浅間大菩薩縁起」には、有鑑（末代）が富士山中の往生寺において浅間大菩薩の眷属である三童子から「末代」



第191図 経塚から医王寺・旧浮島ヶ原・伊豆半島を望む（北から）

の名をもらう重要な場面において、富士山誕生とともに浮島ヶ原と富士沼が形成されたことが説明されており（西岡 2004）、初期の富士山信仰において浮島ヶ原低地一帯も聖地・富士山を構成する重要な要素の一つとして位置づけられていたようである。したがって、医王寺経塚自体はその遼地の際、富士山だけでなく、南側の浮島ヶ原への眺望も重視されていたと推測される。

また、当時の街道との関係から見ると、医王寺は富士山南麓の古代富士郡家から浮島ヶ原の北岸を通って駿河郡家や伊豆国府周辺に至る根方街道と、愛鷹山の西裾を北上して十里木に至る十里木道の辻付近に立地する。十里木道を北上し、西へ向かえば村山浅間神社や山宮浅間神社に、東へ向かえば須山浅間神社に通じており、富士山南麓の信仰上の拠点と根方街道を結ぶ要衝に本経塚が立地する事が指摘される。

したがって、景観・街道双方の視点から、医王寺が山岳修験の道場としての機能を有していたという冒頭の伝承は積極的に首肯されよう。早くに三宅敏之氏が提起した経塚立地分類上（三宅 1977）では、本例は①寺社の境内地・近傍地であり、②聖なる所、靈地、の両方にかかる事例であるが、野澤均氏は経塚造営によって聖地化された空間に寺院が創建された事例が多いことも指摘しており（野澤 2011）、経塚と富士の山岳信仰拠点としての医王寺の造営が鑒應によって同時期に遂行された可能性も推察される。

**推定される鑑應の性格** 有鑑（末代）、惟鑑の活動の内容とその性格について共通点を挙げるなら、第一は伊豆走湯山で修行・活動した経験を有すること、第二は天台系寺院との関わりを有すること、である。このことから、医王寺経塚を営んだ鑑應についても、有鑑（末代）、惟鑑と同じく、少なくとも伊豆走湯山と深い関わりを有した修験僧であったと考えられる。さらに一步踏み込むならば、走湯山東谷の天台系寺院出身者の可能性があるだろう。大高康正氏は、甲斐国吉田口の御室浅間神社にかつて存在した文治五年（1189）銘と建久三年（1192）銘を有する二神像に伊豆走湯山の覚実・覚台坊が富士山で修行したことが記される『甲斐国誌』第三

卷）点などから、平安末期に富士山各登山口が伊豆走湯山を中心とした修験者によって開削され、山岳修験の聖地となっていましたことを指摘する（大高 2013）。『覺』の字を通字とする僧侶については、走湯山西谷の伊豆山別当寺・密嚴院の住持がいずれも『覺』の字を使用する点から、同院に関わる修験者ともと推定されており（宮家 2010）、有鑑（末代）・鑑應らとは同じ走湯山出身でも系譜を異とするのであろう。鑑應はボスト有鑑（末代）世代の修験僧として、聖地・富士山周辺を舞台とする山岳修験の展開の一翼を担い、現在の医王寺の地にその拠点を築いたのではないだろうか。

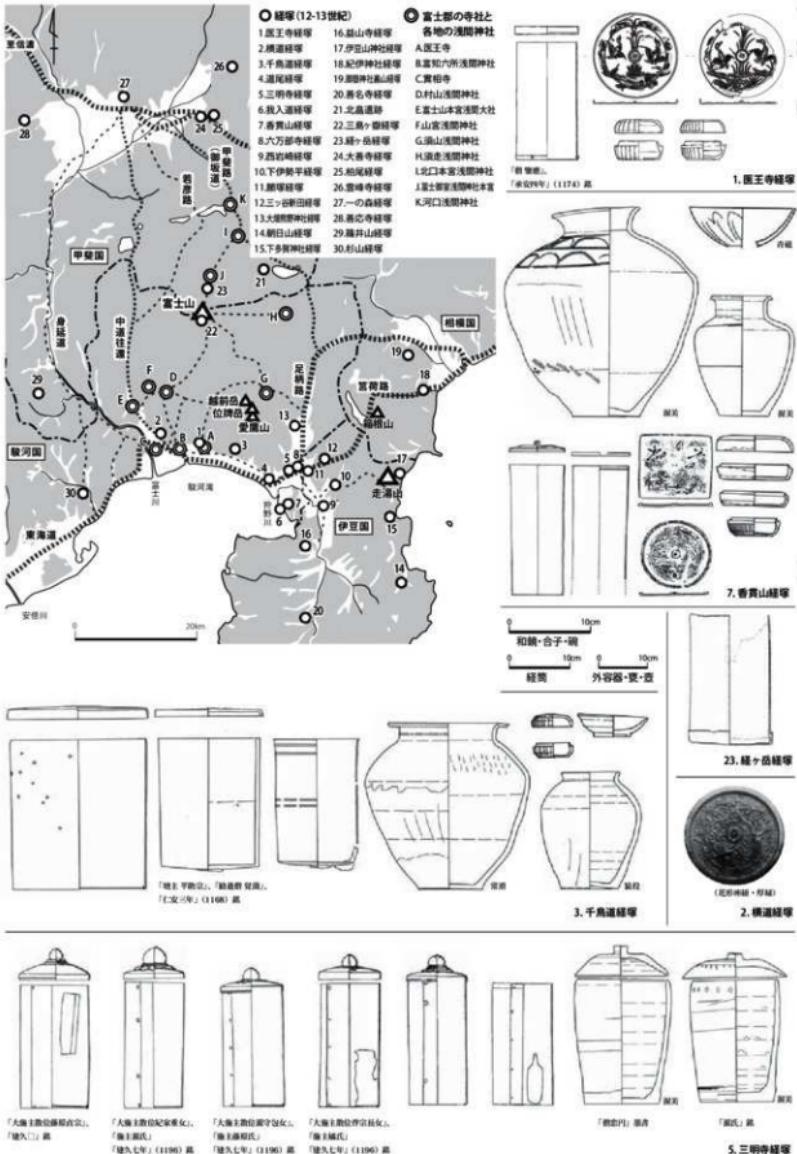
### （2）和鏡意匠の指向性

意匠が揃えられた2面の和鏡 2面の和鏡は法量や文様構成・構図はほぼ同一ながらも、紐の形状や薄・雁の文様細部には工人の技能や個性に起因するとみられる差違が顕著に認められる。2面の鏡には、洲浜+薄を強調した秋草+双雁という意匠や鏡面の大きさを揃えようとした発注者側の強い意向が読みとれるが、手配の結果、異なる工人の手による製品が揃えられた可能性を指摘したい。

**浮島ヶ原の情景と文様意匠** また、発注者側が重視したとみられる文様の意匠は、いずれも経塚が造営された富士山南麓から愛鷹山南麓の低地部に広がる浮島ヶ原低地（富士沼・浮島沼）周辺の情景と共通するものである。勧進僧かつ願主であったとみられる鑑應が、医王寺経塚から南を望んだ際に広がる風景を当初から意識し、その地に埋納するのにふさわしい意匠の和鏡を揃えたのではないだろうか。杉山洋氏や村木二郎氏は経筒形式の共通性から工人（鉄物師）と勧進僧の密接な関係を論じたが（杉山 1983・村木 2017）、本例からは和鏡の発注や製作の場面においても、勧進僧の意向が重視された状況が推察される。

### （3）駿河・伊豆周辺における経塚の展開

**経塚展開の画期とその主体** 駿河・伊豆周辺地域の経塚の展開とその特徴については、勝又直人氏の研究に詳しい（勝又 2003）。その中で、12～13世紀の経塚の立地については、寺社境内やその裏山のほか、箱根権現・伊豆走湯山・富士山といった山岳信仰上の聖地に造営される傾向にあること、またそ



第192図 富士山周辺地域における信仰関連遺跡の分布 (12~13世紀)

れらが伊豆走湯山の真言系僧侶によって牽引されたことを指摘する。また経塚の造営はいずれの地域も12世紀前半に始まり、その願主は鳥羽院のような王権の最高位のほか、甲斐守藤原惟信、三河守藤原顯長のような受領、伊勢神宮神官といったいずれも貴紳によるものが多く、甲斐三枝氏などの在庁官人がそれに加わる傾向にあったものが、12世紀後半のピーク時には、在庁官人や地方の武家による埋経が増加し、さらに13世紀にはそれが幕府の御家人に変わるとして、その造営主体が政治状況によって変動することを示している。

**在地有力者層の成長と経塚** 本稿で報告した医王寺経塚は、立地については本稿1項で検討したとおり、富士山の山岳信仰上の拠点の一つとして、寺社とともに整備された可能性を指摘した。また造営時期である承安四年（1174）は、勝又氏の指摘する駿河・伊豆の経塚造営のピークに該当し、医王寺経塚では勧進僧以外の名は残されていないものの、地方の官人や新興の武家といった在地有力者層の援助の元に実施された可能性も考慮しておくべきであろう。特に12世紀後半から13世紀前半にかけての時期は、駿河東部地域の街道沿線や港湾周辺の経塚や墓域（藤村2016）、集落遺跡など（池谷2018）において貿易陶磁器や瀬戸美濃産陶器、渥美・常滑産陶器の出土量が劇的に増加する傾向にあり、交通の要衝を軸に地域内の有力階層が各地で成長を遂げた状況が明らかになりつつある。当初は鳥羽院などの王権中枢や在京の受領層と地方の在庁官人、僧侶が結びつくことによって導入された経塚造営が、次第に地方の有力者層と僧侶によって遂行されていくようになる背景に、こうした地方の集落等の成長が連動していることが推察される。

**経塚の立地と街道** 医王寺経塚のすぐ東側には、富士郡内における9世紀後半以降の集落再編期（藤村2014）において古墳時代以来の復権を果たした御室ノ前遺跡が立地する（佐藤ほか2008）。現在までの調査履歴では10世紀前半代までの土器しか報告されておらず、その後の動向は不明であるが、当該期の集落跡の再調査で中世陶磁器が多数再確認されている状況を鑑みれば（池谷2018）、根方街道と十里木道の辻付近に立地する当遺跡でも中世の痕跡

が確認される可能性がある。いずれにしても、根方街道や十里木道に面した中心的な集落とその経営主体であった有力階層が、医王寺経塚の造営や医王寺の創建に際し、経済的援助も含めた影響力を發揮していたであろうことが考慮される。当該期の駿河東部・伊豆の経塚は、医王寺経塚以外にも、横道経塚（2）、道尾経塚（4）、三明寺経塚（5）、六万部寺経塚（8）、願塚経塚（11）、三ツ谷新田経塚（12）、下伊勢平経塚（9）など、街道沿線やその周辺に立地する傾向が強く（第192図）、近接する同時期の集落との比較研究も今後一層推進していく必要がある。

### おわりに

以上、医王寺経塚出土資料の資料報告を基に、その資料の提起する諸問題について考察を行った。まず資料の年代観については、経筒の紀年銘にある承安四年（1174）の時期と齋船ではなく、僧鑿應による同年三月五日の一括埋納もしくは極めて近接する複数時期における埋納の所産と判断した。僧鑿應の性格については、同じく鑿の一字を共有し、史料に見える富士上人・有鑿（末代）らの活動や医王寺経塚自体の立地から、伊豆走湯山に縁の深い修験僧としての性格が相応しいと判断し、あわせて聖地・富士山周辺を舞台とした修験の拠点として医王寺自体も同時に整備された可能性を指摘した。また、共通する意匠を有した2面の和鏡が揃えられた背景に、勧進僧と鉄物師の密接な関わりがあったこと、またその意匠が埋納される経塚周辺の情景を意識して揃えられた可能性を提起した。最後に、駿河・伊豆周辺の経塚が、当該期の墓域などと同じく、主要な街道沿線やその周辺に立地する傾向が強いことを示し、経塚造営の背景に在地の有力者層やその経営集落による援助などがあつた可能性を指摘した。

駿河国富士郡下方である富士市域における中世前期の遺跡や遺物の研究は、近年の富士市文化振興課による再整理（池谷2018など）によって艱氣ながらも様相が把握されつつある。将来的にも東海道や根方街道沿いの遺跡の再検討を駿河郡域も含めて実施していくことで、富士修験の活動の実態解明にとどまらず、富士川合戦や富士の巻狩の舞台となった

富士山周辺地域の歴史が一層豊かに描けるようになっていくものと確信する。本報告がそのような作業の一端となれば、幸甚の限りである。

末筆ではありますが、貴重な所蔵資料の展示公開および調査・報告を御快諾いただきました、医王寺住職 中川宏亨様に感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 熱海市役所 1967『熱海市史 上巻』
- 荒木敏夫 1994「神仏習合と密教の流布／写経と埋納経の盛行」『静岡県史 通史編Ⅰ 原始・古代』第3編第4章
- 静岡県 2017「静岡県東部地域における中世墓の概要」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 池谷初恵 2018「吉原湯をめぐる中世遺跡の概要」『鈴川の富士塚』富士市文化財調査報告書 第6集 富士市教育委員会
- 石田茂作 1927『経塚』『考古学講座』20 雄山閣
- 植松章八 1984「富士山南麓文化のあけぼのと天間沢遺跡」『蘆岡町史』富士市
- 内川隆志ほか 2013『神々の光彩 簿と信仰 服部和彦氏寄贈和鏡を中心として』國學院大學博物館
- 大高康正 2013「中世後期の富士山表口村山と修験道」『富士山信仰と修験道』岩田書院 (初出、2011『館報 平成22年度』富士市立博物館)
- 勝又直人 2003「伊豆の経塚」『中世の祭祀と信仰—伊豆地域の祭祀・信仰とその時代—』静岡県考古学会
- 勝又直人 2011「三島ヶ岳経塚小考—富士山本宮浅間大社所蔵写真資料から—」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』第17号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 久保智康 1999『日本の美術 第394号 中世・近世の鏡』至文堂
- 佐藤祐樹・前田勝己ほか 2008『祢宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
- 静岡県 1989『静岡県史 資料編4 古代』
- 静岡県考古学会 1997「静岡県東部地域における中世墓の概要」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会シンポジウム資料集
- 静岡県考古学会 2003「中世の祭祀と信仰—伊豆地域の祭祀・信仰とその時代—」静岡県考古学会シンポジウム資料集
- 榎原 武 2012「伝經ヶ岳出土資料について」『山梨県山岳信仰遺跡詳細分布調査報告書—富士山信仰遺跡に関わる調査報告—』山梨県教育委員会
- 杉山 洋 1983「同形能経簡について—佐賀県市丸経塚を中心として」『古代文化』35-5 (財)古代學協會
- 岡 秀夫 編 1985『経塚遺文』東京堂出版
- 奈木盛雄ほか編 1989『富士市の仏教寺院』駿河郷土史研究会
- 西岡芳文 2000「尊經閣文庫所蔵『古文状』について」『金沢文庫研究』305号 神奈川県立金沢文庫
- 西岡芳文 2004「新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の模相」『史学』73 (1) 慶應義塾大学
- 沼津市教育委員会編 2002『沼津市史 資料編 考古』沼津市
- 野澤 均 2011「経塚造営と聖地」安藤孝一編『経塚考古学論叢』岩田書院
- 平野吾郎・志村 博 1992「歴史時代 経塚遺物一覧」『静岡県史 資料編3 考古三』静岡県
- 富士市教育委員会 1984『富士市指定文化財 指定書』第43号
- 富士市教育委員会 2001・2012『富士市の文化財』
- 藤村 翔 2014「富士郡家閑連遺跡群の成立と展開～富士市東平遺跡とその周辺～」『静岡県考古学研究』No.45 静岡県考古学会
- 藤村 翔 2016「富士市域の中世墓～今井中世五輪塔群・沢上遺跡出土資料の紹介～」『富士山かぐや姫ミュージアム 館報』第31号 (平成29年度) 富士山かぐや姫ミュージアム
- 官家 準 2010「中世の伊豆・箱根・富士と修験」山の考古学研究会編『山岳信仰と考古学Ⅱ』同成社
- 三宅敏之 1977「遺跡と遺構」『新版仏教考古学講座 第六卷 経典・経塚』雄山閣
- 村木二郎 2017「経塚出土文字資料と考古学的視点—同一人物が関与した経塚から—」小野正敏ほか編『遺跡に読む中世史』考古学と中世史研究13 高志書院
- 山本義孝 2004「伊豆走湯権現をめぐる諸問題」『中世の祭祀と信仰—伊豆地域の祭祀・信仰とその時代—』静岡県考古学会
- 若林淳之 1969「岩本山実相寺の創建」『富士市史』上巻 富士市
- 渡井英智 2005「富士地域の閑連遺跡」『村山浅間神社調査報告書一遺跡範囲確認調査編一』富士宮市教育委員会
- 渡井英智 2017「富士山信仰の原風景」『富士学研究』Vol.14 No.1 富士学会
- 渡井英智 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』富士市教育委員会

#### 図版の出典

- 第192図 2: (植松1984)、3・5・7: (沼津市教育委員会編2002)、23: (榎原2012)

## 第4節 富士市内出土の中世陶磁器の様相

池谷 初恵

### はじめに

富士市教育委員会では、平成29年度に吉原地区鈴川に所在する「富士塚」に関する考古学・文献・民俗・岩石の各調査を実施し、文化財調査報告書『鈴川の富士塚』を刊行した（富士市教育委員会2018）。富士塚のある鈴川は東海道元吉原宿に近接し、眼下にはかつての吉原湊をのぞむ陸・海の街道の結節点、流通の拠点であった。そこで、富士塚造営の背景としての吉原湊・宿・街道を明らかにするため、市内遺跡の中世陶磁器の詳細調査を実施した（池谷2018）。

『鈴川の富士塚』では出土陶磁器の概要や傾向を示したが、詳細なデータは掲載していないため、本稿において产地別・型式別・時期別の数量データを提示する。

### 1 富士市の中世遺跡の概要

富士市においては、著名な武士の館や戦国城館、中世の寺社等が知られていなかったこともあり、中世遺跡についてあまり注目されてこなかった経緯がある。これまで明らかになっている中世陶磁器は、発掘調査によるものではなく、偶然発見されたものが多い。

戦前に遡る古い発見資料では、比奈地区的医王寺経塚をあげることができる（静岡県1992）。経塚は天平年間の創建とされる古刹、医王寺境内で発見されたもので、経塚遺物は昭和9年に風で倒れた大木の根元から出土したとされる（駿河郷土史研究会1989）。「承安四年」（1174）の線刻銘のある経筒と、和鏡2面、白磁合子2点が出土している。

また、昭和39年、富士塚に程近い今井地区妙法寺（毘沙門天）西側の砂丘上で、五輪塔、藏骨器、人骨などが多数発見された（鈴木1981）。当時の記録によれば、これらの遺物は造成工事中に砂丘を7～8m削平した際に発見されたと記されている。現在、富士山かぐや姫ミュージアムに保管されている資料は、五輪塔4基と「文保二年十二月八日」紀年

銘のある地輪1基、常滑三筋壺1点である（第193図-1）。五輪塔3基は、組合せは不確実ながら14世紀に位置付けられ、他の1基は15～16世紀のものとされる（藤村2016、溝口2009・2012）。常滑三筋壺には人骨片が入っていたという記録もあり、藏骨器として埋納されたものである。中野晴久氏の編年で常滑2型式（1150～1175年）に比定され、文保二年（1317）の五輪塔地輪とは約150年の年代差が生じることになる（註1）（中野2005・2012）。

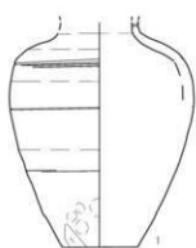
藏骨器と推定されるもう1例として、岩本地区的鎌研4号墳（通称「念信園古墳」）で発見された瀬戸産の壺3点が報告されている（第193図-2～4）（佐藤2010）。個人が採集した資料であり、出土状況は不明である。古瀬戸四耳壺2点と梅瓶1点で、いずれも古瀬戸前期、13世紀代のものである（註2）。出土地の近くには、実相寺や永源寺など中世に建立された寺院があり、また五輪塔などが集石された場所もあるという。これらのことから周辺には墓域が形成されていたと考えられる。

以上の3地点の中世遺物は、発掘調査によるものではないため、遭構や出土状況などが不明であるが、経塚や藏骨器など宗教的な遺物であることが特徴である。

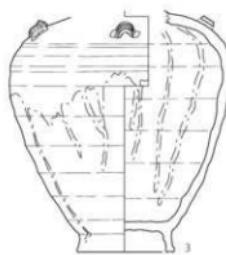
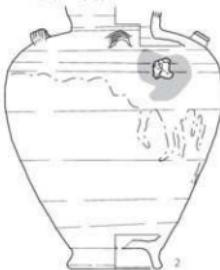
前述のように、著名な中世遺跡が存在しなかった富士市では、中世を主眼とした発掘調査の事例はあまり多くはないが、西富士道路建設に伴なう広範囲の発掘調査において中世墓が検出された事例がある（富士市教委1981a、静岡県考古学会1997）。出口遺跡（註3）では、中世～近世の土坑が400基以上検出され、人骨・副葬品から土坑墓と認定できた遭構は16基である。このうち遺物から確実に中世と断定できる土坑墓は2基である。その他、ほとんどの土坑は出土遺物がなく墓と特定できないが、形状の類似性からみて、多数の土坑墓が存在し、中世から近世にかけての大規模な墓域が形成されていたと考えられる。

このような状況の中、平成28年度に富士山かぐ

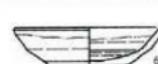
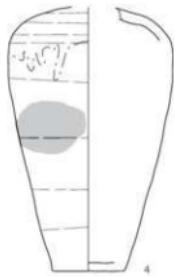
今井五輪塔群



鎌研4号墳



破魔射場



(5~7) 13 10cm

(1~4・8) 15 20cm

(9) 16 20cm

第193図 今井五輪塔群・鎌研4号墳・破魔射場遺跡 出土陶磁器実測図

や姫ミュージアムにおいてテーマ展示「富士へとつながる海の道—吉原ミナトの交通史」が開催され、古代から近世に至る吉原湊に関する資料が紹介された。前述の今井五輪塔群と常滑三筋壺や鎌研4号墳出土古瀬戸壺が展示され、藤村邦氏が富士市内の中世墓関連資料を報告した（藤村 2016）。

## 2 富士市の出土陶磁器

### (1) 調査方法・分類基準

富士市において発掘調査の出土遺物（主に陶磁器）および採集資料を、遺跡ごとに産地・種別・型式ごとに分類し、点数を集計した。

型式分類・時期比定については、以下の分類基準を参考とした。また、瀬戸美濃、常滑、渥美等の東海系陶器については、愛知学院大学藤澤良祐氏・中野晴久氏のご教示を得た。

**貿易陶磁（中国産陶磁器）：**菊川町教育委員会 2000

『横地域跡 総合調査報告書 資料編』、菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器から見る静岡県の中世社会—東でも西でもない』

**瀬戸美濃（瀬戸美濃産陶器）：**藤澤良祐 2007「第1章 総論」「編年表」「愛知県史 別編 窯業2

中世・近世 濱戸系」愛知県

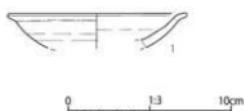
**常滑（常滑産陶器）：**中野晴久 2012「第1章 総論

第3節 常滑窯」「編年表」「愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系」愛知県

**渥美（渥美・湖西産陶器）：**安井俊則 2012「第1章

総論 第2節 渥美窯」「編年表」「愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系」愛知県

なお、本稿においては、瀬戸美濃産陶器、瀬戸美濃系施釉陶器、瀬戸美濃焼などを略して「瀬戸美濃」と記述する。常滑産陶器、常滑焼は「常滑」、渥美・湖西窯陶器、渥美焼は「渥美」と略記する。志戸呂窯製品、初山窯製品については、「志戸呂」、「初山」と記す。



第194図 三新田遺跡 出土陶磁器実測図

### (2) 対象遺跡と調査結果（第19～31表）

今回、調査した遺跡は16遺跡で、既に報告書は刊行されているが、包含層からの出土や他の時代の遺構に混入した中世遺物など、報告書に掲載されていない陶磁器を含めて分類・集計を行った。

### 元吉原宿遺跡

元吉原宿遺跡は戦国時代～近世初頭の吉原宿（元吉原宿）の範囲内にある（富士市教委 2015）。第3地区はわずか6m<sup>2</sup>の面積の発掘調査であったが、瀬戸美濃大窯3段階の擂鉢と端反皿各1点が出土した。また、調査地点の地層は砂層と安定層を交互に堆積していることが確認され、風砂・高波・津波等の自然災害の影響が認められている。

### 三新田遺跡

三新田遺跡は元吉原宿遺跡の東に位置する。1981年と1993年に発掘調査が行われ、古墳時代前期初期と奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡等が多数検出された（富士市教委 1983・2000）。明確な中世の遺構はないが、D地区において併行する2本の溝が検出されており、道路状遺構の可能性が指摘されている。

三新田遺跡では、貿易陶磁同安窯系青磁碗1点、瀬戸美濃古瀬戸後期III期～大窯2段階の天目茶碗、丸皿、盤類など5点、志戸呂皿1点（第194図-I、PL.20-I）が出土している。また、常滑は2～3型式の甕1点、6b型式の甕・片口鉢II類が各1点、13世紀代と15世紀代の甕5点を確認した。このほか15世紀代の羽釜1点が出土している。

### 柏原遺跡

柏原遺跡は『三代実録』貞觀六年（864）十二月十日条に記載され、これ以後廃絶したとされる「柏原駅」の比定地である。発掘調査は11地点で行われ、奈良・平安時代の住居跡、掘立柱建物跡等が検出されている（富士市教委 2012・2013）。

中世の遺物は第4地区の溝と掘立柱建物跡の覆土から3～4型式の常滑・片口鉢I類が各1点出土している。

### 善得寺城跡・東泉院跡

東泉院は江戸時代の吉原宿（新吉原宿）をのぞむ高台に位置する密教寺院である。平成19年度より、

富士市では代々東泉院の住持を務めた六所家が所有してきた膨大な資料、建物の総合調査を開始し、その一環として敷地内の埋蔵文化財の発掘調査を行った（富士市教委 2014、2016）。

調査の結果、出土遺物の大半が近世の陶磁器・土器・瓦であったが、少量ながら中世遺物が認められた。瀬戸美濃は古瀬戸戸後II～IV古期の平碗、縁軸小皿、卸目付大皿など4点、大窯段階の擂鉢1点である。常滑は11型式の甕2点、15世纪代の甕3点、片口鉢II類1点で、中世後期に属するものが多いが、12世纪代の三筋壺や13世纪代の甕が各1点確認された。また、12世纪末～13世纪初頭の渥美甕1点もあり、中世前半の遺物も少なからず確認された。

#### 東平遺跡

東平遺跡は古代の富士郡家に比定される遺跡で、8～10世纪の大規模な集落跡が調査されている。遺跡範囲は広大で、これまで93地点で発掘調査が行われている。今回はこのうち3地区、28地区的出土遺物を調査した。

#### （3）地区

西富士道路建設のため広大な範囲を調査した地区で、中世陶磁器も多数出土している（富士市教委 1981a・1981b）。貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗A類（劃花文）1点、B1類（鎬蓮弁文碗）6点、B4類（線描き蓮弁文碗）1点（PL.20-1）、白磁碗C1類、天目茶碗など計18点である。瀬戸美濃は合計83点出

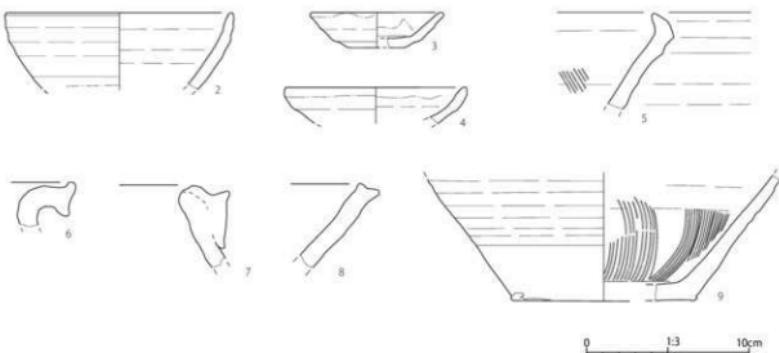
土しており、富士市内の遺跡では最も多い。古瀬戸中期の卸皿が3点出土していることが注目される。その他、古瀬戸後期の平碗16点（第195図-2 PL.20-2）、古瀬戸後IV期～大窯3段階の擂鉢21点（第195図-5 PL.20-5）などが主体となる。また、縁軸小皿・はさみ皿など皿類（第195図-3・4 PL.20-3・4）も多く、古瀬戸後期I期～大窯1段階に集中する傾向がある。その他、古瀬戸後期の天目茶碗2点、壺・瓶類が4点出土している。また、古瀬戸後IV期併行の志戸呂擂鉢2点（第195図-9 PL.20-9）、大窯4段階の内禿皿1点、大窯3後段階の初山内禿皿1点がある。常滑は4～6a型式の甕3点（第195図-6・7 PL.20-6・7）、10型式の甕1点、片口鉢II類2点（第195図-8 PL.20-8）。その他13～14世纪の甕9点、15世纪代の甕10点と計25点確認され、中世全般のものが確認できた。渥美は12世纪後半の甕が4点ある。

このほか、かわらけ15点、器種不明の瓦質製品2点を確認した。

#### （28）地区

28地区は東平遺跡の南部、三日市廐寺跡と隣接する。古墳時代中期と7～8世纪の住居跡、掘立柱建物跡が検出されている（富士市教委 2001）。

貿易陶磁は11点出土しているが、中世前半のものが主体である。同安窯系青磁碗1点、龍泉窯系青磁碗のA類（第196図-1 PL.21-1・2）3点、B1



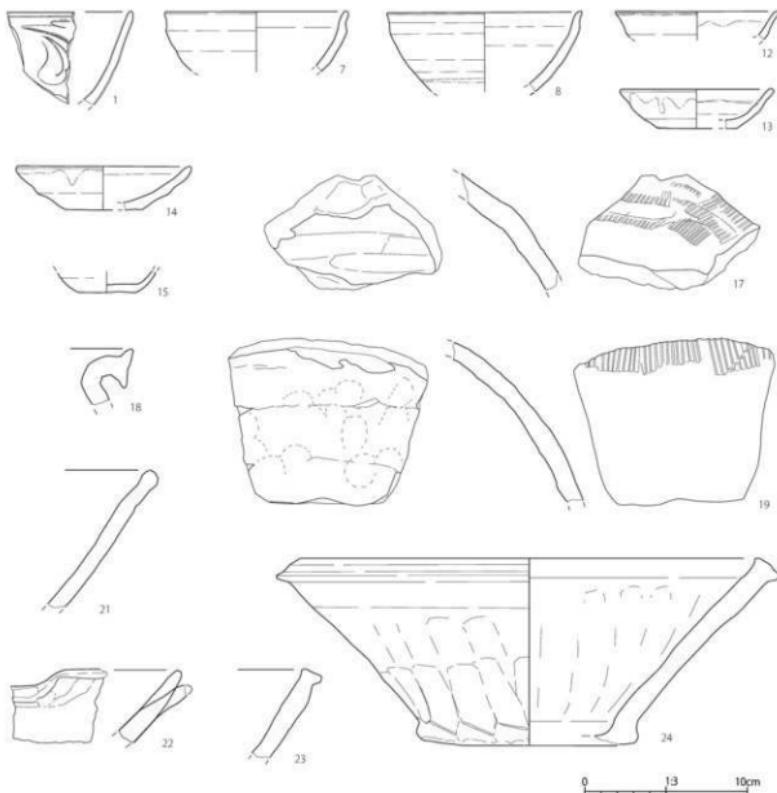
第195図 東平遺跡3地区 出土陶磁器実測図

類(PL.21-3 ~ 4) 7点、白磁皿IX類(PL.21-5) 1点などである。瀬戸美濃は出土数23点のうち古瀬戸後期のものが多く、天目茶碗(第196図-7・8 PL.21-6 ~ 8)・皿類(第196図-12・13・14 PL.21-9 ~ 14)・挿鉢・盤類など20点で、大窯段階は少ない。古瀬戸前III期～中II期の入子1点(第196図-15 PL.21-15)は市内唯一の遺物である。常滑は3型式から10型式まで長期間にわたる焼(第196図-17・18・19 PL.21-16 ~ 20)・片口鉢II類(第196図-21 ~ 24 PL.21-21 ~ 25)が出土しているが、6 ~ 7型式に集中する傾向がみえる。渥美は12世纪後半から13世纪初頭の甕・片口鉢6点を確認した。

本地点ではかわらけがまとめて出土していることが特徴で、12 ~ 13世纪の小皿のみの一群と14世纪後半～15世纪代の大小組み合わせの一群がある。破片資料を含めると、かわらけの出土数は115点で、富士市内では最も多い。また、南伊勢系鍋が1点出土している。

### 三日市廃寺跡(東平遺跡16地区)

三日市廃寺は、東平遺跡の南東部に隣接する遺跡で、古くから奈良時代の瓦が散布していたことが知られる。1994年に発掘調査が行われ、7 ~ 9世纪の住居跡、掘立柱建物跡が検出された(富士市教委2002)。寺院に関連する遺構は確認されなかったが、



第196図 東平遺跡28地区 出土陶磁器実測図

8世紀前半の瓦が多数出土している。

中世の遺物は、常滑10型式の片口鉢II類1点（第197図-1 PL.20-1）が出土したのみである。

#### 出口遺跡

出口遺跡は前述の中世～近世の墓が多数検出された遺跡である（富士市教委1981a）。

第21号土坑墓の副葬品として、初山の天目茶碗1点（第198図-2 PL.20-2）、かわらけ小皿1点、小柄1点、六道錢として納めた中国銭6枚がある。この他に、包含層から瀬戸美濃の古瀬戸戸中I・II期の梅瓶（第198図-1 PL.20-1）、15世紀代の常滑甕が出土している。

#### 中原遺跡

中原遺跡は東平遺跡の北部に位置し、同じく西富士道路建設のための調査が行われた（註4）（富士市教委1981a）。

瀬戸美濃は古瀬戸後I・II期の縁軸小皿、後IV期の擂鉢、大窯2段階の丸皿の計3点と、古瀬戸後IV期併行期の志戸呂縁軸小皿1点（第199図-1 PL.20-1）が出土した。他にかわらけの破片1点を確認した。

#### 浅間林遺跡

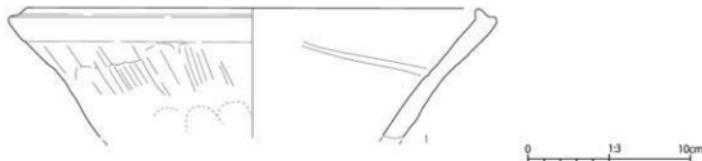
浅間林遺跡は富士川西岸の河岸段丘上に位置する縄文時代～近世に至る複合遺跡である（富士川町教委1981、1991）。各時代の遺構、遺物が重層的に検

出されているが、中心となる時代は縄文時代後・晚期と平安時代である。

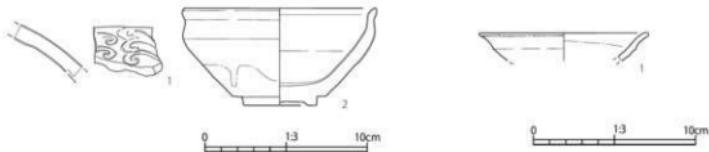
貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗B1類2点（第200図-1 PL.22-1・2）、同時期の折縁皿1点、白磁碗IV類、皿IX類が各1点など、計7点出土している。瀬戸美濃は63点であり、古瀬戸中期の御皿（第200図-12 PL.22-12）や壺・瓶類（第200図-17 PL.22-17）が4点あるが、主体となる時期は古瀬戸後期から大窯I～2段階で、天目茶碗（第200図-3・4 PL.22-3・4）、平碗（第200図-5・6 PL.22-5・6）、丸碗（第200図-7 PL.22-7）、縁軸小皿などの皿類（第200図-8～11 PL.22-8～11）、盤類（第200図-13・14 PL.22-13・14）、擂鉢（第200図-15・16 PL.22-15・16）など器種も豊富である。志戸呂は古瀬戸後IV期併行期の縁軸小皿（第200図-19 PL.22-19）と盤類が各1点ある。常滑は3型式の三筋壺が2点あり、他に5～6a型式の甕1点、片口鉢I類3点、6b～7型式の片口鉢II類1点（第200図-18 PL.22-18）、9～10型式の甕11点、片口鉢II類1点が確認された。渥美は12世紀後半の甕が1点ある。このほか、山茶碗4点、かわらけ7点、滑石製石鍋1点、茶臼1点が出土している。

#### 半在家遺跡

半在家遺跡は浅間林遺跡と同様、富士川西岸の河岸段丘上に位置し、弥生時代末～古墳時代初頭の集



第197図 三日市庵寺跡（東平遺跡 16地区）出土陶磁器実測図



第198図 出口遺跡 出土陶磁器実測図

第199図 中原遺跡 出土陶磁器実測図

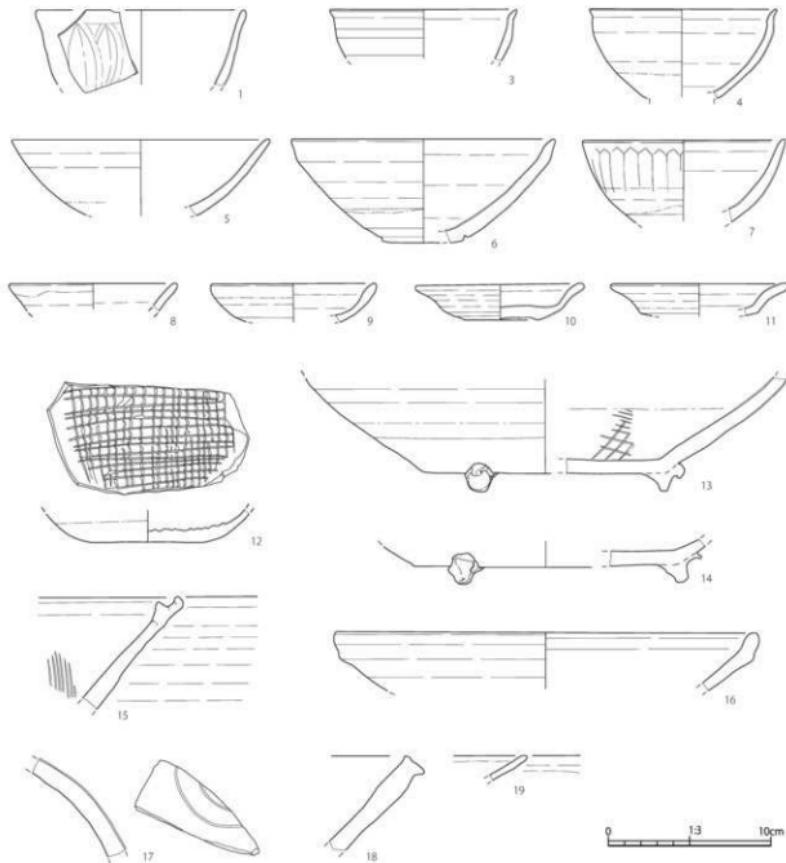
落、中世～近世の土坑墓、堀跡、石積遺構などが検出されている（富士川町教委 1986）。中世～近世の各遺構は時期を特定できていない。

貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗 A4 類と B1 類が各 1 点出土している。瀬戸美濃は古瀬戸後 IV 期の平碗と大窓 3 段階の天目茶碗各 1 点である。

### 荻館

戦国時代の荻氏の居館跡と伝承される遺跡で、江戸時代末の絵図には土塁に囲まれた一町四方の館が描かれているが、現在は土塁の一部が残っているのみである（富士川町教委 1979）。

貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗 B1 類 1 点のみである。



第 200 図 浅間林遺跡 出土陶磁器実測図

瀬戸美濃は古瀬戸後IV期の平碗・擂鉢など6点、大窯段階は4段階の擂鉢・志野皿など5点である。また、初山の内禿皿（第201図-2 PL.20-2）が1点ある。常滑は5～6b型式の甕（第201図-1 PL.20-1）、片口鉢II類が2点ある。数は少ないが、中世全般にわたる遺物が出土しており、戦国時代に限定された居館ではなく、長期間営まれた遺跡と考えられる。

#### 破魔射場遺跡

破魔射場遺跡は富士川西岸の段丘上の遺跡で、東名高速道路富士川サービスエリア改良工事に伴って、広大な面積の発掘調査が行われ、縄文時代中・後期、古墳時代、平安時代の遺構・遺物が多数検出された（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）。中世の遺構・遺物は遺跡北西部のB区で集中しており、土坑墓16基が確認されている。

貿易陶磁は同安窯系青磁碗4点、同皿（第193図-5）1点、白磁碗II類とV類各1点で、12世紀～13世紀初頭に限定される。瀬戸美濃は古瀬戸後I期の縁袖小皿（第193図-6）、同II期の折縁小皿（第193図-7）各1点である。常滑は2～3型式で甕（第193図-9）、三筋壺（第193図-8）、広口壺など計8点出土した。ほかに渥美の壺1点、東遠江系山茶碗が2点出土している。

#### 沢上遺跡

沢上遺跡は岩瀬地区にあり、縄文時代後期の集落と中世～近世の墓が確認されている（富士町年報1968）。

貿易陶磁は龍泉窯系青磁劃花文1点、B1類（第202図-1 PL.20-1）1点のほか、破片のため詳細は不明であるが、12～13世紀の青磁・白磁が確認された。常滑は5～6a型式の片口鉢I類2点、8型式の片口鉢II類（第202図-2 PL.20-2）1点が出土している。12世紀後半の渥美刻文小型壺（第202図-3）は中世墓に伴うもので、中に骨片が入っていたことから骨器と考えられている（藤村2016）。

#### 北松野屋敷遺跡

浅間林遺跡の遺物調査の際に確認した遺物で、表掲遺物と考えられる。大窯4段階併行の志戸呂徳利（第203図-1 PL.20-1）である。北松野屋敷という埋蔵文化財包蔵地はないが、浅間林遺跡の南東に保

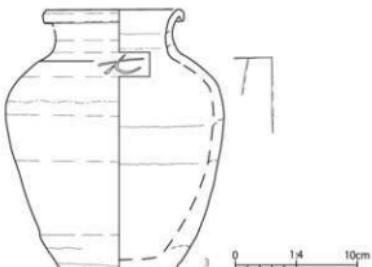
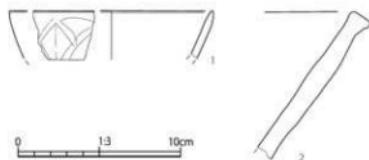
下と呼ばれる地域があり、古い屋敷跡があったといわれている。屋敷跡の詳細や正確な採取地点は不明であるが、浅間林遺跡に近接あるいは包蔵地範圍に含まれる地点の資料であろう。

#### 今井五輪塔群

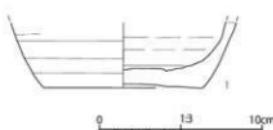
今井五輪塔群では、2型式の常滑三筋壺（第193図-1）が出土しているが、偶然採集されたものであり、出土状況や他の出土遺物は不明である。



第201図 萩館 出土陶磁器実測図



第202図 沢上遺跡 出土陶磁器実測図



第203図 北松野屋敷遺跡 出土陶磁器実測図





### 3 陶磁器の出土傾向の分析

#### (1) 時期区分の設定（第19～22表）

次に前項で概要を記した遺跡の出土状況を比較するため、11～16世紀をI～VI期の6期に区分し、数値を示す表を作成した（第19～22表）。時期区分に際し該当する主な各陶磁器分類は、第23表の通りである。

なお、比較のため、富士宮市元富士大宮司館跡、浅間大社遺跡、沼津市西通北遺跡、中原遺跡の出土数・傾向を各表下段に付した。

元富士大宮司館跡（大宮城跡）は中世前半には浅間大社の大宮司富士氏の居館、戦国時代には大宮城として築かれた重層的な遺跡である（富士宮市教委2000、2014）。元富士大宮司館跡で注目されるのは、陶磁器の出土量の多さとともに、かわらけが大量に出土していることである。破片数で約33000点出土しており、出土量全体の93%を占める（註5）。

浅間大社遺跡は富士山本宮浅間大社の境内地であり、境内5地点と本殿裏の神立山地区、湧玉池などで調査が行われている（富士宮市教委1996、2003、2013、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009）。今回は富士宮市が調査・報告した社殿南側の第1～4地点および湧玉池、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した社殿北側の神立山地区と推定護摩堂跡地点の陶磁器出土量を示した（註6）。浅間大社遺跡では、元富士大宮司館跡と同様に大量のかわらけが出土しており、破片総数は約15600点で、出土量全体の約9割を占めている。

西通北遺跡は沼津市西部、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東端、標高6mに位置する。弥生時代から近世の長期間営まれた集落遺跡で、住居跡・溝などが検出されている。中世の遺構は検出されていないが、一定量の遺物が確認できる（註7）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2011、沼津市教委2013）。

中原遺跡は沼津市の西部、富士市から続く砂丘上に立地し、古代東海道沿いに位置する。古墳時代、奈良・平安時代の住居跡が100軒以上検出された大規模な集落遺跡である（沼津市教委2016）。現在も発掘調査、整理調査が継続中であり、中世の遺構・遺物の詳細については未報告であるが、整理調査中

の遺物を実見する機会を得たため、現状の出土傾向のみ記すこととする。

#### (2) 時期別の出土傾向

##### 貿易陶磁

I期（11世紀後半～12世紀前半）の陶磁器を出土する遺跡は非常に少なく、浅間林遺跡と破魔射場遺跡のみである。II期（12世紀後半～13世紀前半）は、I期より遺跡数が増え6遺跡となる。III期（13世紀後半～14世紀前半）もII期同様の遺跡数で出土数も一定量認められる。IV期以降は東平遺跡3地区の2点を除き、貿易陶磁を出土する遺跡はみられなくなる。また、出土遺物のほぼすべてが碗・皿類であり、白磁四耳壺・青白磁梅瓶などの壺瓶類は出土していない。

全体として富士市内における貿易陶磁の出土数は少なく、元富士大宮司館跡・浅間大社遺跡と比較すると、その差は歴然としている。これら富士宮の2遺跡は、拠点的な富士氏の館跡や宗教施設という特別な存在ではあるが、館や寺社でない沼津市西通北遺跡と比較しても少ない傾向が確認された。

静岡県東部から伊豆地域では、中世前半には一定量の貿易陶磁が見られるが、後半とくに15世紀以降の陶磁器は極端に少なくなる。富士市ではそれが明瞭に現れた状況といえる。また、今までのところ染付が出土していないが、15～16世紀に全国的に展開する染付碗・皿が、当地域では城館以外ではごく少量しか出土しない傾向とも一致している（池谷2015）。

##### 瀬戸美濃

I・II期ではなく、III期から次第に遺跡数が増える。III期4遺跡、IV期6遺跡、V期8遺跡、VI期7遺跡で、III～V期まで次第に遺跡数が増加し、東平遺跡3地区や浅間林遺跡のように出土数も増加する傾向が認められる。VI期になると、遺跡数は変わらないものの出土数は激減する。さらにこの時期には志戸呂や初山の製品が含まれてくるので、瀬戸美濃の減少傾向は著しいといえる。元富士大宮司跡や浅間大社遺跡でも同様の傾向がみられるが、数量の比較では、貿易陶磁などの格差が見られないことは留意しておきたい。

### 東海系陶器（常滑・渥美・山茶碗）

I期とVI期のものはないが、II～V期はいずれも一定量確認できた。II・III期が比較的多いが、東平遺跡3地区・28地区のように、II期からIII期にかけて増加する遺跡と、浅間林遺跡・破魔射場遺跡のようにII期からIII期に減少する遺跡との両者がみられる。後者については渥美的出土量が影響している。

以上のように、富士市内の中世遺跡においては、数は多くないものの中世全般にわたる各種陶磁器を確認できた。前述のように、富士宮市の2遺跡と比較すると数量の差は大きく、また器種の豊富さにも差がある。第22表に調査面積を示したが、一部を除いて広い面積の調査は行われていないことが一因であるが、東平遺跡3地区などのように1万m<sup>2</sup>以上の調査事例もあり、概に調査面積の差ともいえないと。富士宮市の2遺跡は館跡、宗教施設といういわば特殊な性格をもつ拠点となる遺跡であり、とくに

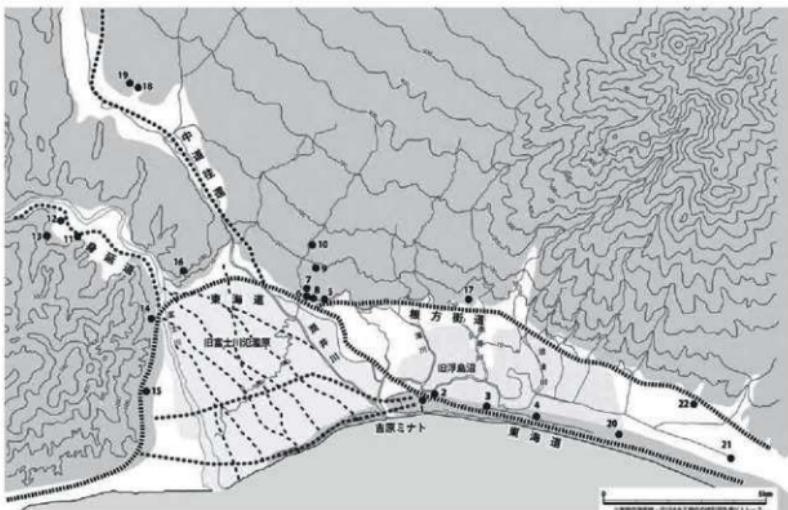
中世前半における数の差はここに起因しているのであろう。

### (3) 遺跡の立地と街道との関連

最後に、これまで述べてきた陶磁器の出土状況を遺跡の分布ごとに整理しておく。

富士川左岸の田子の浦砂丘上の元吉原地区には、元吉原宿遺跡、三新田遺跡など、数は少ないものの中世全般にわたる遺物が出土している。同じ砂丘上に立地する沼津市の中原遺跡、西通北遺跡でも一定量の遺物が確認でき、とくに中世前半の遺物が多い。田子の浦砂丘上には、富士市から沼津市にかけて古代の集落が濃密に分布しており、古代東海道の柏原駅が置かれたことも知られているが、中世においても全般にわたる遺物が出土しており、古代東海道が中世にも継続して使われていたことが確認できた。

つぎに古代に郡衙がおかれた東平遺跡周辺の伝法



- 1.今井五輪塔群
- 2.元吉原宿遺跡
- 3.三新田遺跡
- 4.柏原遺跡(4地区)
- 5.善得寺城跡・東泉院跡
- 6.東平遺跡(28地区)
- 7.東平遺跡(3地区)
- 8.三日市磨寺跡(東平16地区)
- 9.出口遺跡
- 10.中原遺跡(富士市)
- 11.浅間林遺跡
- 12.半在家遺跡
- 13.荻館
- 14.破魔射場遺跡
- 15.沢上遺跡
- 16.鎌研4号墳(信念園古墳)
- 17.医王寺經塚
- 18.元富士大宮司館跡(大宮城)
- 19.浅間大社(市・県)
- 20.中原遺跡(沼津市)
- 21.西通北遺跡
- 22.興國寺城跡

第204図 遺跡位置図

地区の状況をみると、東平遺跡ではII～V期の遺物が出土しており、中世全般にわたるが、北側の3地区ではとくに14世紀後半～15世紀前半の遺物が多い傾向がある。東側の善得寺城・東泉院跡では15世紀後半～16世紀前半の遺物が集中している。また、これらの遺跡の東側は古代東海道と山沿いの根方街道が結節する場所とされており、さらに富士宮市方面へ向かう中道往還（右左口路）（海老沼2008佐藤2015）にも接している。前述のように、富士宮市の富士大宮司館跡・浅間大社遺跡のような居館・宗教・城郭など核となる場が形成されたことにより、東海道の東・西から富士宮方面に向かうルートが重要視されてくることは確実であろう。

富士川右岸の松野地区では、浅間林遺跡で多くの遺物が出土している。IV・V期の遺物が多いが、中世全般にわたる遺物が確認できた。破魔射場遺跡は12世紀前半頃からはじまり、中世前半が中心である。その他、半在家遺跡、荻館など館の伝承をもつ遺跡で、15～16世紀の遺物が出土しているが、戦国時代の遺物に限らないため、伝承の時期とは異なっていることがわかつてき。これらは蒲原から富士川沿いに芝川、甲斐方面に北上するルート、いわゆる身延道（河内路）に沿って点在する遺跡ととらえられる。

最後に、蔵骨器などの出土位置を確認しておく。発掘調査による出土状況は不明瞭ながら、今井五輪塔群・沢上遺跡・鎌研古墳で出土した常滑・渥美・古瀬戸の壺類は、蔵骨器もしくはその可能性が高いものである。医王寺経塚や出口遺跡の中世墓群も含めれば、これら宗教関連遺跡は、富士山麓に点在する傾向をみることができる。また、これらは中世に遡る寺院が山麓沿いに多く分布する傾向とも一致している。

今回抽出した遺跡は古代東海道やそこから派生する中道往還などに分布していることが確認できた。古代東海道は元吉原地区付近から北西に進み、富士郡家である東平遺跡付近を通過した後、富士川を渡り、蒲原方面に南進するルートが想定されている。中世の東海道も基本的にはこれを踏襲していたであろう。しかし、中世においては富士川を渡るルートは1つには限られなかった（大高2018）。古代東

海道ルートのほかに、徒歩で富士川河口をわたり、田子の浦砂丘上か富士川氾濫原の微高地から元吉原地区に至るルートがあった（『十六夜日記』など）。中世後期には、蒲原から船で吉原湊へ渡った記録（『東国紀行』）や、それに従事した矢部氏の存在も史料から明らかになっている。戦国時代には、元吉原地区に今川氏・北条氏・豊臣氏が在陣したという史料が多くあり、この地が領国境界域に位置する重要な戦略拠点であったことも知られる。また、吉原湊口には、元吉原宿に先行して置かれたという「見附」や、旅人の生贋伝説と関連する阿字神社が富士山信仰と関連する信仰や祭祀の場であるとともに、交通上の要所であったことが指摘されている（鈴木1981、松田2018）。

しかし、富士川と元吉原地区を結ぶ田子の浦地区における中世の考古学的情報は皆無であり、かつての吉原湊も自然災害や港湾の整備によって地形が大きく変えられているため、当時の湊や海路についての検証は困難な状況である。

## おわりに

本稿では、中世陶磁器のデータ、出土傾向などを提示し、富士市内の遺跡の消長、分布を整理した。今回は旧東海道沿い・伝法地区・旧富士川町に所在する遺跡の調査を行った。市内のもうひとつの重要な街道である愛鷹山麓沿いの「根方街道」周辺の遺跡については未調査である。今後、同様の視点で調査・分析を行い、富士市内全体の中世の動向を総括的に検討する必要がある。

富士市は東海道、富士川水運、駿河湾海路の重要な拠点のひとつであり、東西、北からも時代によつてさまざまな影響を受け、地域相が変容していくことが想定される。今後の調査の進展により、中世の具体的な地域的特色が明らかになっていくことであろう。

今回の調査、本稿の執筆にあたり、以下の方々にご教示・ご協力いただいた。記して感謝申し上げる。

藤澤良祐 中野晴久 山本智子 森まどか

高野夏姫（敬称略）

## 註

- 中野晴久氏のご教示による。
- 藤澤良祐氏のご教示による。
- 調査時の遺跡名称は伝法道路群B地区である（富士市教育委員会 1981a）。
- 調査時の遺跡名称は伝法道路群C・D地区である（富士市教育委員会 1981a・b）。
- 出土遺物の集計については、昭和59年度、平成9・10年度の調査区は菊川市横地城跡総合調査における調査成果（菊川シンポジウム実行委員会 2005）、平成24年度調査区は報告書掲載データ（富士市教育委員会 2013）と筆者の実見結果に基づいて行った。横地城跡総合調査のデータでは東海系陶器の型式別の出土数が不明なため、報告書掲載遺物から筆者が判断して出土傾向を示した。
- 出土遺物の集計については、第1～4地点は菊川市横地城跡総合調査における調査成果（菊川シンポジウム実行委員会 2005）、湧玉池（富士市教育委員会 2013）と社殿北側の神立山地区と推定護摩堂跡地點（静岡県埋蔵文化財研究所 2009）は報告書掲載データを合算して提示した。
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所と沼津市教育委員会の2機関によって分割されて発掘調査が行われたが、すでに2地点とも報告書が刊行されているため、本稿では合算した数量を示した（静岡県埋蔵文化財研究所 2011、沼津市教育委員会 2013）。

## 参考文献

- 池谷初恵 2015「出土遺物からみた14～15世紀の遺跡の様相－静岡県における陶磁器の組成・量の分析から－」『中世を終わらせた生産革命－量産化技術の広がりと影響－』平成23～26年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 池谷初恵 2018「吉原廻をめぐる中世遺跡の概要」『鉢川の富士塚』富士市教育委員会
- 海老沼真治 2008「古代・中世甲斐国交通関係文献史料の概要」「古代の交易と道」山梨県立博物館
- 大高康正 2018「歴史資料にみる富士塚」『鉢川の富士塚』富士市教育委員会
- 菊川町教育委員会 2000「横地城跡 総合調査報告書 資料編」菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器から見る静岡県の中世社会』
- 佐藤祐樹 2010「富士市岩本出土の古瀬戸」『平成14・20年度富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2015「清水岩の上遺跡出土の弥生土器」『富士市内地跡発掘調査報告書－平成24・25年度』富士市教育委員会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『富士SA関連遺跡 破魔射場跡 谷津原古墳群 北久保遺跡 道構築・遺物編』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『浅間大社遺跡 山宮浅間神社遺跡』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011『西涌北遺跡 平成20～22年度JR東海道線本線・JR御殿場線緊急道路整備事業（街路B）平成21年度JR東海道線本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編3考古三
- 静岡県考古学会 1997『静岡県における中世墓』
- 鈴木富男 1981『鉢川の歴史』鉢川区管理委員会
- 駿河郷土史研究会 1989『富士市の仏教寺院』
- 中野晴久 2005『常滑・瀬美窯』『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
- 中野晴久 2012『第1章 総論 第3節 濱美窯』『編年表』『愛知県史 別編 宅業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 沼津市教育委員会 2013『西涌北遺跡』
- 沼津市教育委員会 2016『中原遺跡』
- 富士川町 1968『富士川町史』追補
- 富士川町教育委員会 1979『ふるさと富士川』第1集
- 富士川町教育委員会 1981『浅間林道跡発掘調査概報』静岡県 鹿部郡富士川町 県道富士川・身延線道路改良工事地での調査
- 富士川町教育委員会 1986『半在家 駿道富士川・身延線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 富士川町教育委員会 1991『浅間林道跡富士川・身延線道路改良に伴う第4次発掘調査概報』
- 藤澤良祐 2005『漸戸美濃と志戸呂・初山』『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
- 藤澤良祐 2007『第1章 総論』『編年表』『愛知県史 別編 宅業2 中世・近世 漸戸系』愛知県
- 富士市教育委員会 1981a『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 横沢古墳・中原1号墳・伝法道路群（伝法A～E地区）・天門地区』
- 富士市教育委員会 1981b『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書 東平遺跡』
- 富士市教育委員会 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2000『三新田遺跡（D地区）発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2001『東平道路 第28地区発掘調査報告書』（東平28地区）
- 富士市教育委員会 2002『東平道路 第16地区（三日市庵寺跡）』、第27地区発掘調査報告書（東平16地区（三日市庵寺跡））
- 富士市教育委員会 2012『15.柏原遺跡第3地区』『富士市内地跡発掘調査報告書－平成11・12年度』
- 富士市教育委員会 2013『第4章 柏原遺跡の調査』『富士市内地跡発掘調査報告書－平成22・23年度』
- 富士市教育委員会 2014『六所家総合調査報告書 埋蔵文化財』（善得寺城跡・東泉院跡）

- 富士市教育委員会 2015「28. 元吉原宿遺跡 第3地区」『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成24・25年度』
- 富士市教育委員会 2016『六所家總合調査報告書 埋蔵文化財②』
- 富士市教育委員会 2018『鉢川の富土塚』
- 富士宮市教育委員会 1996『浅間大社遺跡 一神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(1・2次調査)
- 富士宮市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡 一大宮城跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 富士宮市教育委員会 2003『浅間大社遺跡II』(3・4次調査)
- 富士宮市教育委員会 2005『浅間大社遺跡 第5次』『富士宮の遺跡III ワラビ平遺跡 塚本古墳第2次 浅間大社遺跡 第5次 発掘調査報告書』(5次調査)
- 富士宮市教育委員会 2013『浅間大社遺跡III 一国指定特別天然記念物『湧玉池』再生事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 富士宮市教育委員会 2014『元富士大宮司館跡II 一大宮城跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 藤村 邦 2016『富士市域の中世墓 ～今井中世五輪塔群・沢上遺跡出土資料の紹介～』『富士山かぐや姫ミュージアム 館報 第31号 (平成29年度)』
- 松田香代子 2018『富士塚と民俗』『鉢川の富土塚』富士市教育委員会
- 構口彰啓 2009『遠江・駿河の石塔』『東海地域における中世石塔の出現と展開』石造物研究会第10回研究会資料
- 構口彰啓 2012『東海(遠江・駿河・伊豆)』『中世石塔の考古学』高志書院
- 安井俊則 2012『第1章 総論 第2節 湿美糞』『編年表』『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 渡井英誓 佐野恵里 2003『信仰遺跡の変遷』『富士宮の遺跡II 一富士宮市遺跡詳細分布調査報告書II』富士宮市教育委員会

第24表 中世陶磁器・土器集計表

種別	元吉原宿 遭跡	三新田 遭跡	柏原遭跡 6地区	勝徳寺跡・ 東京院跡	東平遭跡 3地区	東平遭跡 28地区	三日市廢寺 (東平16地区)	出口遭跡	中原遭跡	西間林 遭跡	半在家 遭跡	萩窯	磁鐵射線 遭跡	穴上・北松野 遭跡	星板
山茶碗類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	2	0	0
碗										2					
小皿										2			1		
片口鉢													1		
小ぶりわらけ	0	0	0	0	15	115	0	4	1	7	0	0	0	0	0
繩紋	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0
瓦質製品	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滑落窓	0	8	2	8	25	60	1	1	1	29	0	2	8	3	0
窓					1	1				2			6		
匣	7			6	23	51		1	1	22		1	2		
片口鉢	1	2	1	2	8	1				5		1		3	
深美・湖西産	0	0	0	1	4	6	0	0	0	1	0	0	1	1	0
窓													1	1	
匣				1	4	5				1					
片口鉢					1										
窓戸・矢瀬座	2	5	0	5	83	23	0	1	3	63	2	11	2	0	0
天日茶碗		1				4	5				9	1	1		
碗					2	16					21	1	2		
盤類	1	1		1	16	6			2	14		1	2		
盤類	2		1	1	19	6				8					
脚透類					3					2					
脚透類															
蓋・瓶類	1	1		1	21	4			1	5		7			
蓋・瓶類					2	1		1		3					
神仏具類															
鏡類															
小壺・小瓶					1										
その他						1									
不明										1					
貿易陶器	0	1	0	0	18	11	0	0	0	0	2	1	7	4	0
青磁	0	1	0	0	16	10	0	0	0	4	2	1	5	3	0
碗類		1			15	8				2	2	1	4	3	
盤類					2					1			1		
盤類															
壺類															
蓋類															
青白磁															
染付															
その他	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
馬助					1										
泉州系															
津州系															
志戸呂窯	0	1	0	0	3	0	0	0	1	2	0	0	0	0	1
天日茶碗															
盤類	1			1					1	1					
盤類										1					
脚透類															
脚透類					2										
その他															
初山窯	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1
天日茶碗								1							
盤類					1							1			
その他															1
合計	2	16	2	14	151	219	1	7	6	115	4	15	20	8	1

第25表 貿易陶磁集計表

種別	器種	系	型式		三新田 遺跡	東平遺跡 3地区	東平遺跡 28地区	淡閑林 遺跡	平在家 遺跡	萩館	玻璃射場 遺跡	水上遺跡
			A類	B類								
青磁	碗類	同安窯系			1							4
		龍泉窯系	A類	A1 (1-1)								
				A2 (1-2)			1					
				A3 (1-3)								
				A4 (1-4)				1				
			B類 (蓮瓣文)	A不明	1	2						1
				B0 (四)								
		C類 (雷文帶)	B1 (1-5)	6	4	2	1	1				1
			B2 (~葉)									
			B3 (W)									
			B4 (C)	1								
		D類 (雷文碗)	C類 (雷文帶)									
			D類 (雷文碗)									
			E類 (直口碗)									
			青釉碗不規									
			青釉碗不明		7							1
		皿類	同安窯系	柳葉文 (1類)			1					1
			柳葉文 (2類)									
			折線直					1				
			捲折直									
			內臂直									
			輪反直									
			捲花直									
			不規									
			盤類									
			蓋・瓶類									
		不明				1	1	1				
白磁	皿類	編類	II類 (玉縫)									1
			IV類 (玉縫)					1				
			V類 (縮版)								1	
			不明					1			1	
		皿類	II類									
			IV類									
			V類									
			IX類 (口卷)				1					
			B群 (快高台)									
			C群 (縮版)	C1		1						
		蓋	不明					1				
		四耳壺 (蓋か水注)										
		水注										
		合子										
青白磁	蓋付											
	施付	施付	天目茶碗			1						
	その他	泉州窯系										
		瀋州窯系										
		華南										
		合	計		1	18	11	7	2	1	7	4





第28表 常滑集計表

	産地名	器種名	常滑型式												年代 13～ 14C	不明	合計	
			1a	1b	2	3	4	5	6a	6b	7	8	9	10	11	12	12C	13C
三新田遺跡	常滑	甕			1											1	4	7
		片口鉢II																1
	合計																	8
柏原遺跡	常滑	片口鉢I				2												2
		合計																2
	合計																	8
善福寺跡・東宝院跡	常滑	甕									2			1	3	6		
		片口鉢II														1	1	
	合計													1			1	
東平遺跡 3地区 -伝法A地区-	常滑	甕				1		1				1				9	10	23
		片口鉢II									1							2
	合計																	25
東平遺跡 28地区	常滑	甕			1	4				1			1	1	12	27		51
		片口鉢I					1			1								1
	片口鉢II						2											7
	広口壺							1										1
	合計																	60
三日市麻生 -東平16地区-	常滑	片口鉢II										1						1
		合計																1
	出口遺跡	常滑	甕													1	1	
中庭遺跡 -伝法C・D地区-	常滑	甕																1
		片口鉢II																1
	合計																	1
浅間林遺跡	常滑	甕						1				11			3	7		22
		片口鉢I						3										3
	片口鉢II								1		1							2
	広口壺								2									2
	合計																	29
萩館	常滑	甕							1									1
		片口鉢II							1									1
	合計																	2
破魔射場遺跡	常滑	甕			1	1												2
		三筋壺			1													1
	広口壺				1	3									1		5	8
	合計																	
沢上遺跡	常滑	片口鉢I							1									2
		片口鉢II								1								1
	合計																	3

第29表 涼美集計表

	產地名	器種名	涼美・湖西年代					合計
			12C 中	12C 後半	12C 末～ 13C 初頭	13C 前半	不明	
善得寺跡・東象院跡	涼美・湖西	甕			1			1
	合計							1
東平遺跡3地区 伝法A地区	周文化・湖西	甕		4				4
	合計							4
東平遺跡2B地区	涼美・湖西	甕		5				5
	片口林				1			1
	合計							6
西門林遺跡	周文化・湖西	甕		1				1
	合計							1
破魔射場遺跡	周文化・湖西	甕				1		1
	合計							1
尺上寺跡	涼美・湖西	甕		1				1
	合計							1

第30表 山茶碗集計表

	產地名	器種名	山茶碗年代					合計
			12C 中	12C 後半	12C 末～ 13C 初頭	13C 前半	不明	
西門林遺跡	東達江	碗		2				2
		小盤			2			2
破魔射場遺跡	東達江	合計						4
		小盤			1			1
		鉢			1			1
		合計						2





写 真 図 版  
PLATE



## 東平遺跡 第87地区



1. 本調査区全体（北から）



2. SK205 セクション（南から）



4. 確認調査1Tr（南西から）



3. Pit207・SK208・Pit209・Pit210（北西から）



5. 確認調査2Tr（北西から）

## 中吉原宿遺跡 第11地区



1. 調査前全景 (南から)



2. 3Tr 西壁 (東から)



3. 2Tr 遺物出土状況 (南東から)



4. 4Tr 遺物出土状況 (北東から)



5. 2Tr 遺物出土状況 (北西から)



6. 4Tr 遺物出土状況 (東から)

## 中吉原宿遺跡 第11地区



1. 3工区 SX2011 木材検出状況（北西から）



2. 3工区 SX2011 木材検出状況（北西から）



3. 3工区 SX2011 漆椀 (73) 検出（北から）



4. 3工区 SX2011 下面検出（西から）



5. 3工区南壁 SX2010・SX2011 セクション（北東から）



6. 4工区 SX2008・Pit2002 検出（北西から）

## 中吉原宿遺跡 第11地区



1. 7工区Ⅲ層検出（南東から）



2. 10工区 SX2002 検出（東から）



3. 8工区 遺物出土状況（南東から）



4. 7工区 SX2005 検出（北東から）



5. 8工区 SX2003・SX2004・SX2006（東から）



6. 8工区 漆木材検出（南から）



7. 8工区 SX2006 遺物検出（南東から）

## 中吉原宿遺跡 第11地区



1. 10工区 SX2002 木材検出（南西から）



2. SX2002 漆椀（71）、曲物（76）検出（南東から）



3. 10工区 SX2002（南西から）



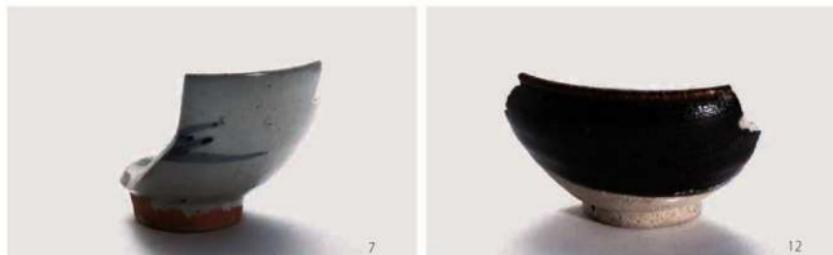
4. SX2002 漆椀（71）検出（南西から）



5. 10工区 SX2002 完掘（南東から）



7. 調査区全景（北西から）



## 中吉原宿遺跡 第11地区 出土遺物





## 中吉原宿遺跡 第11地区 出土遺物



PL.10

一色D·第35号墳



出土遺物集合

## 一色D - 第35号墳



1. 調査前の様子、奥の茶畑で石室を検出（南から）

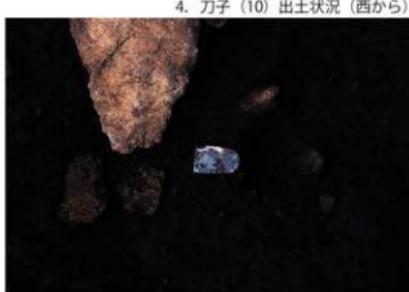


2. 石室検出（南から）



3. 石室全景（南から）

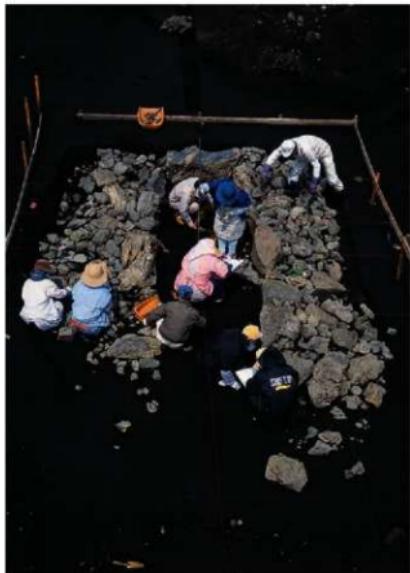
## 一色D・第35号墳



## 一色D - 第35号墳



1. 床面構築面（南から）



2. 調査の様子（南から）



3. 基底石（南から）



4. 墓坑・掘り方（南から）



浅間古墳



1. 墳丘全景（南から）



2. 墳丘全景（北東から）

## 浅間古墳



1. 後方部墳頂部（南から）



2. 後方部墳頂部（南西から）



3. 後方部西側斜面（南から）



4. 後方部南側斜面（西から）



5. 後方部後端墳裾（南から）



6. 後方部後端墳裾（北から）



7. 後方部北側斜面（東から）



8. 後方部北側周溝（東から）

## 浅間古墳





出土遺物集合

## 医王寺経塚 出土遺物



1



3



2



5



4



6



7

東平遺跡 3 地區 出土遺物



三日市廃寺跡（東平遺跡 16 地區）出土遺物



三新田遺跡 出土遺物



中原遺跡 出土遺物



荻館遺跡 出土遺物



出口遺跡 出土遺物



沢上遺跡 出土遺物



北松野屋敷 出土遺物



## 東平遺跡 28 地區 出土遺物





# 報告書抄録

ふりがな	ふじしないいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	富士市内道路発掘調査報告書
副書名	平成29年度
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第66集
編著者名	佐藤祐樹(編著) 池谷初恵・菱田哲郎・藤村翔・若林美希(著)
編集機関	富士市教育委員会(担当課:市民部 文化振興課)
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875
市町村コード	22210
発行年月日	平成31年3月31日

調査番号	所轄番号	所轄道路名		所在地		種別	遺構
		測量区名	測量面積	北緯	東経		
H29-101	第2章	東平塚路 第87地区C2次調査	35°29'55" N 138°40'20"E	主な時代	遺物	集落跡	土坑・ビット
		48.194 ml <sup>2</sup> 本調査	20170529 ~ 20170601	奈良・平安	土器類		
H29-103	第3章	古吉原塚跡 第11地区C2次調査	35°9'18"E	138°41'39"E	近畿	集落跡・ビット	不明遺構・ビット
		47.252 ml <sup>2</sup> 本調査	20170818 ~ 20170915	飛鳥・奈良製品・金製品・木製品	飛鳥・奈良製品・木製品		
H29-01	第1章 第2章 1	東平塚路 第86地区C1次調査	35°10'27"E	138°40'32"E	奈良・平安	集落跡	土坑・ビット
		35.624 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170406	奈良・平安	土器類		
H29-02	第1章 第2章 2	東平塚路 第19地区C2次調査	35°10'8"E	138°40'16"E	古墳・奈良	集落跡	ビット
		62.904 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170412 ~ 20170413	奈良・古墳	環濠・瓦		
H29-03	第2章	東平塚路 第87地区C2次調査	35°10'34"E	138°40'20"E	奈良	集落跡	土坑・ビット・遺物と思
		54.799 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170418	奈良	土器類		
H29-04	第3章	古吉原塚跡 第11地区C2次調査	35°9'18"E	138°41'39"E	近畿	集落跡	性格不明遺構
		73.904 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170420 ~ 20170425	飛鳥・奈良・金製品	飛鳥・奈良・金製品		
H29-06	第1章 第2章 3	古吉原塚跡 第1地区C2次調査	35°10'3" E	138°42'51"E	古墳	集落跡	なし
		6.547 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170515	古墳	なし		
H29-07	第1章 第2章 4	東平塚路 第3地区C1次調査	35°10'36"E	138°39'9"E	集落跡。その他の墓	集落跡。その他の墓	なし
		14.132 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170517	集落跡	なし		
H29-08	第1章 第2章 5	東平塚路 第88地区C1次調査	35°10'17"E	138°40'16"E	なし	集落跡	なし
		9.143 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170523	集落跡	なし		
H29-09	第1章 6	大黒沢遺跡 第46地区C1次調査	35°12'29"E	138°38'38"S	集落跡	集落跡	なし
		25.212 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170628 ~ 20170629	集落跡	なし		
H29-10	第1章 7	古吉原塚跡 第12地区C1次調査	35°9'20"E	138°41'30"E	集落跡	集落跡	なし
		15.373 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170613 ~ 20170614	集落跡	なし		
H29-11	第1章 8	古吉原塚跡 第137次調査地点C1次調査	35°9'46"E	138°41'41"E	その他の遺跡、その他の墓	その他の遺跡、その他の墓	なし
		61.259 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170727	その他の遺跡、その他の墓	なし		
H29-12	第1章 9	大黒沢遺跡 第47地区C1次調査	35°12'23"E	138°38'30"S	溝又	溝又	土器・漆器・漆塗石
		5.709 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170703	溝又	7		
H29-13	第1章 10	大黒沢遺跡 第1地区C3次調査・4次調査	35°8' ml <sup>2</sup>	138°42'8"E	近畿	其他の遺跡	土器
		23 ml <sup>2</sup> 確認調査	20151206 ~ 20160121・20170703 ~ 20170727	其他の遺跡	118		
H29-14	第1章 11	東平塚路 第89地区C1次調査	35°10'25"E	138°40'8"E	集落跡	集落跡	なし
		14.562 ml <sup>2</sup> 確認調査	20170804	集落跡	42		

調査番号	採取番号	所轄道路名・地区名		所在地	種別	遺構
		調査面積	調査原因			
H29 -15	12	大間沢道筋 第40地区1次調査	大間101-1, 101-4, 3011-5, 1045-5 の内 35 12' 33"	[38 38' 37"]	集落跡	ビット
H29 -16	13	大間沢道筋 第49地区1次調査	大間998-15 35 12' 39"	[38 38' 39"]	集落跡	ビット・塗・不明遺構 土器
H29 -17	14	東平道筋 第90地区1次調査	東平 3054-2, 5 35 10' 8"	[38 40' 20"]	集落跡 奈良・平安	壁穴建物跡・土坑・ビット 土器
H29 -18	15	古道跡	佐柳町 2129番1号 35 10' 52"	[38 36' 12"]	散在地、集落跡	なし
H29 -19	16	富士岡跡 第17地区1次調査	佐志 1713番の一部 35 10' 16"	[38 43' 30"]	古墳	ビット
H29 -20	17	東平道筋 第91地区1次調査	東平 2889-7, 9 35 10' 22"	[38 40' 35"]	集落跡 奈良・平安	不明遺構・溝状遺構・ビット 土器・散在地・灰陶陶器
H29 -21	18	東平道筋 第91地区1次調査	東平 3058-1 35 10' 22"	[38 40' 35"]	集落跡 奈良・平安	42
H29 -22	19	宇賀川跡 鍋屋跡(1区位)	今里町日 936 烈 35 10' 4"	[38 41' 59"]	集落跡	ビット・不明遺構 土器
H29 -23	20	苦舟寺跡 第4地区1次調査	今里 1856番 1 35 10' 11"	[38 41' 44"]	社寺跡	なし
H29 -24	21	福川(古)跡 鍋屋跡(第2地区1次調査)	今里 3259-1 烈 35 10' 44"	[38 41' 40"]	古墳	なし
H29 -25	22	福川(古)跡 鍋屋跡(第1地区1次調査)	今里 4138-3 烈 35 10' 26"	[38 41' 40"]	古墳	なし
H29 -26	23	東平道筋 第92地区1次調査	今里 2755-3, 2755-1 35 10' 17"	[38 40' 11"]	集落跡 奈良・平安	なし
H29 -27	24	東平道筋 第93地区1次調査	今里 3098-7, 9 35 10' 6"	[38 40' 18"]	集落跡 奈良・平安	土器・散在地・灰陶陶器
H29 -28	25	東平道筋 第15地区1次調査	今里 54-1 35 11' 3" 261ml	[38 40' 42"]	古墳	なし
H29 -29	26	東平道筋 第92地区1次調査	今里 2755-3, 2755-1 35 10' 17"	[38 40' 11"]	集落跡 奈良・平安	なし
H29 -30	27	東平道筋 第15地区1次調査	今里 4138-3 烈 35 10' 26"	[38 41' 2"]	集落跡 奈良・平安	土器・散在地
H29 -31	28	東平道筋 第2地区1次調査	今里 4138-3 烈 35 11' 53" 33,791ml	[38 40' 53"]	散在地 奈良・平安	なし
H29 -32	29	東平道筋 第6地区1次調査	今里 4138-3 烈 35 10' 12" 13,402ml	[38 41' 2"]	集落跡 奈良・平安	土器・散在地
H29 -33	30	東平道筋 第5地区1次調査	今里 4138-3 烈 35 10' 27" 30,987ml	[38 43' 56"]	集落跡	なし
H29 -34	31	東平道筋 第20次調査地点1次調査	今里 99-1 35 10' 54" 9,701ml	[38 38' 57"]	集落跡	不明
H29 -35	32	東平道筋 第45地区2次調査	今里 2806-3 烈 35 10' 10" 8,992ml	[38 40' 20"]	集落跡	ビット
H29 -36	33	東平道筋 第45地区2次調査	今里 2806-3 烈 35 10' 10" 45,996ml	[38 40' 20"]	集落跡	壁穴建物跡・ビット 土器
H29 -37	34	東平道筋 第45地区2次調査	今里 10-11 35 10' 6" 20,020ml	[38 40' 34"]	集落跡 奈良・平安	土器・散在地・灰陶陶器・瓦

調査番号	所取番号	所取遺物名・形・名		所在地	種別	遺物
		調査面積	調査原因			
H29-38	34	第1帯 第2帯 34	第4区4古墳群 第2地区1次調査 30.516 m <sup>2</sup>	原里 1997.5.17. 外 35° 10' 26" 138° 42' 43"	古墳	なし
						なし
H29-93-082	1	第1帯 第3帯 48	大室火道跡 第49地区	大室 1001-4, 1001-4, 1001-5, 1045-5 の内 35° 12' 33" 138° 38' 37"	集落跡 圓文	壁穴建物跡・集石土
						圓文土器
H29-93-147	2	第1帯 第3帯 2	大室火道跡 第49地区	大室 988-15 35° 12' 39" 138° 38' 39"	集落跡 圓文	なし
						圓文土器
H05	第4帯	色 D、第 35 号墳 色 2 古墳群 第1地区1次調査	86 m <sup>2</sup>	原里 2017.1.20. ~ 2018.9.25 100 m <sup>2</sup> 本堅調査	古墳 古墳	横穴式石室 横穴式石室
						搬番員・搬入金具・刀子・鉄錐・銀色器片・土師器片

富士市埋蔵文化財調査報告 第 66 集

富士市内遺跡発掘調査報告書  
－平成 29 年度－

発行年月日 平成 31 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 30-66)